学園戦記　無限学園！！

天城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園戦記　無限学園！！

【Ｎコード】
Ｎ５８２４Ｑ

【作者名】
天城

【あらすじ】
無限学園そこは無限の可能性を秘めた生徒が通う学園！
その学園に無理やり転校させられた不幸な主人公天堂恭介は、無限学園の学園長である謎の美少女、千堂由美と出会う！
二人はパートナーとなり、この学園の生徒の悩みや問題を解決していくのである！
これは不幸な主人公天堂恭介と無限学園の人達との不思議な出会いの物語であり、愛と感動の物語でもあるのだ！！……たぶん

……

（作者は文才はありませんが頑張っていこうと思っています…）

《現在登場している作品》

けいおん！　魔法少女リリカルなのは　ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！　バカとテストと召喚獣　灼眼のシャナ　銀魂　らき☆すた　ハヤテのごとく！　とある魔術禁書目録　コードギアス　涼宮ハルヒの憂鬱　そらのおとしもの　インフィニット・ストラトス　魔法少女まどか☆マギカ　リトルバスターズ！　とらドラ！

プロローグ（前書き）

作者の独り言

初心者ですがなにとぞよろしくお願いします。

プロローグ

ただいまの時間は朝の7時そろそろ起きないといけないな。

起きてまずやることは、歯を磨いて、顔を洗って、それから朝ご飯を食べる。

その後は制服に着替えて、学校に行くだけだ。

そう、ここまではいつもどうりだった……

「行ってきま～す。」

「行ってらっしゃい！」

あのポストに入っていた……

「ん？手紙か？」

手紙を見た瞬間……

『お知らせ！！天堂恭介さん、あなたは無限学園に転校することになりました！！おめでとうございます！！』

俺の平和な日常が崩壊した。

プロローグ（後書き）

次回から第一話です！

第一話　退学処分（前書き）

作者の独り言

高校はいい思い出はあったが、中学はいい思い出がない。

第一話　退学処分

《学校・職員室》

オッス！オラ恭介！なんてね♪

さて、何故俺が職員室にいるかというと、学校に来ていきなり校内放送で呼び出されたのだ。

そして俺の目の前にはハゲの教頭先生がいる。

かつて教頭に向かって「ハゲ！」と言ったことによって、ある生徒は退学処分になったことがあるので、教頭の前ではハゲは禁句である。

しかしこのハ……いやいや教頭はなんの用で呼び出したんだろう？特にこれといって思い当たる点がない。特に悪さもしてないし、かといって良いこともしてない。

そう考えていると教頭の重い口が開いて、そしてこう言った。

「天堂恭介君、君を退学処分とする。」

……はあ！！！？

「ちょ！　待ってください！！？」

「待たない」

黙れこのハゲ！！退学処分と聞いて黙っているわけないだろう！！

「なんで俺が退学処分なんですか！！　俺、特に悪いことなんてしてないのに！！」

すると教頭は言った。

「理由は言えない……」

フ・ザ・ケ・ル・ナ！！

「俺はまじめにやってたんたぞ！！　それをいきなり退学処分だなんて……」

そして自分の怒りを教頭にぶつけた！

「ふざけんじゃねえぞ！！　このクソハゲェェ！！！！！！！」

職員室が静寂に包まれた……。

……あ、やってしまった……。

校内報告
『教頭に対して「ハゲ！」と言ったので、天堂恭介を退学処分とする』

その日、俺の退学処分が決定した……

《自宅》

その日のことを両親に報告した。

「ふ～ん、あっそ。」

「それは大変ねえ（笑）」

なんだその反応？息子が退学処分なったんだぞ。
心配するどころか、親父はゴロゴロしながらテレビを見ているし、

母さんはせんべいを食いながらテレビを見ているし、誰も真剣に考えてくれない。

あんたらは息子の将来が心配じゃないのか？

「「だってわたしらには関係ないも～ん」」

聞いた？息子をまったく心配していない親の発言。読者のみんなは将来あんな親になっちゃダメだぞ！

「だいじょうぶよ！　ちゃんと学校には行けるわ。ほら今朝ポストにあった手紙の内容覚えている？」

ああ、そういえばそんな手紙があったなあ……。誰かのイタズラかと思って本気にしなかったけど…

「きっとこうなることが分かっていた人がいたんだよ！」

何を言うか。そんな予知能力みたいなことがあるか。

親父はこういったファンタジー系が好きなんだ。前に外国人の商人が

『コレハ、ドラゴンノタマゴデ～ス。ヒャクマンデウッテアゲル～ヨ』

と言われ買いそうになったことがある。まあ買う直前に止めたけど、ていうか騙されるなよ！？

とりあえず話を戻そう、そして今の俺の状況を確認しよう。退学となってしまいこのままでは進学どころか就職も難しいよな……。

かなりピンチだ！どうする……！？

……致し方ない……。

こうなったらその無限学園に転校するしかない！！かなり怪しいけど……。いやいや！弱気になってどうする！！気をしっかり持て！！

ガッツだ恭介！！がんばるんだ恭介！！俺なら必ずできる！！

父さん、母さん、俺はやるぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーー！！！！！！！！

「あっそ、まあがんばってきなさい（棒読み）」

『ヘルプミーー！！』

『欧米か！！』

「あはははははは（笑）タ○ト○おもしろ！！」

ねえ、俺はあなたたちの息子ですよね……（涙）

第一話　退学処分（後書き）

天城
「第一話がやっとできた……」
恭介
「あの親全然俺を子供として見てないよ……（涙）」
天城
「かわいそうだねぇ……（笑）」
恭介
「なぜ笑う！！？」
天城
「さて次回はいよいよ無限学園にむかいます！そこで恭介と出会う人物とは！？次回また会いましょう！！」
恭介
「無視して終わるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

第二話　無限学園（前書き）

作者の独り言

モンスターハンターでは太刀を使っています。

第二話　無限学園

《自宅》

さて無限学園へ行く為の準備をしなければならない。
あの親が手伝ってくれるわけがないので自分で何とかしよう。

まず今朝の手紙の中に入っていた資料を見ることにしよう。
資料には『無限学園は無限の可能性を秘めた生徒を教育する学園です。この手紙がと届いたということはあなたには無限の可能性があるということです。』と書いている。

無限の可能性？そんなものが俺にあるのか？

「だとしたら、俺ってもしかして大物になれるかもしれない……」

「「ないない、そんなわけないｗｗｗｗｗｗｗｗ（笑）」」

シャラップ！！そこのダメ夫婦は黙って黄〇伝説でも見ていろ！！
俺は選ばれたんだ！！そう……。

無限の可能性を秘めた生徒として！！！！

ハッハッハッハッハッハッハッハｗｗｗｗｗｗｗ！！！！！

ん？下のほうに何か書いてある？

『Ｐ．Ｓ　ちなみ天堂恭介さんは抽選で選ばれたので、無限の可能性を秘めているのかどうかは分かりません。たぶんないとおもいますね（笑）』

……さて荷物を整えるか……。

もう一枚の資料には準備物の内容が書いてあった。

「どれどれ……」

そこにはこう書いていた……。

『準備物』

・自分の肉体と自分の魂
・マンガはＯＫだがエロ本を持ってきたら極刑
・ＰＳＰはダメだが３ＤＳならＯＫ
・転校生は今週のジャンプを買ってくること
・後は特にいらん

ワ～～～イ♪ツッコミどころ満載だ～～～～♪

じゃねぇよ！！なにこれ！？ジャンプ買ってこいてか！？しかもＰＳＰはだめで、３ＤＳはＯＫって何で！！？しかもエロ本持ってきたら極刑ってコワ！？

なんか疲れた……。
そして資料の最後の部分を見てみると、そこにはこう書いていた。
『ちなみ今夜、誘か……じゃなかった、拉致しに行きます♪』

へ？

ピンポーーーン

チャイムが鳴った、誰か来たのか？

「恭介出て～」

「なんで俺が……」

「恭介は雑用係だからだよ～」

俺が雑用係て初耳なんだけど……。しかも自分の息子を雑用係に任命する親なんて聞いたことないんだけど……。

俺はとりあえず玄関の扉を開けた。

「はい、どちら……さ…ま…！？」

そこに居たのは、黒いスーツを着て、サングラスを掛けている、マフィアみたいな連中だった。はっきり言って怖い！！

「天堂恭介だな」

「は、はい…」

「学園長の命令により誘か……拉致しにきた」

「言い直した意味ないよ!?　誘拐と拉致って同じなんだよ!!」

「いいからとにかく来い!!」

腕を掴まれてしまった!力が強い!これはマジでピンチ!!

「父さん!!　母さん!!　助けて!!!」

父と母に助けを求めるが

「あら迎えが来たのね、行ってらっしゃい!（笑）」

「頑張ってくるんだぞ!（笑）」

助けを求めた俺がバカだった!

目の前にいる息子が誘拐されそうなんですよ!?あんたらは本当に俺の親か!?

「ええい!!　暴れるな!」

「嫌だ!!　放せ!!」

「くそ!　こうなったら…」

ボガッ!

マフィアみたいな男は、俺をぶん殴った。殴られた俺はそのまま床に倒れてしまった。

くそ…親父にもぶたれたことないのに……。薄れゆく意識の中……俺は……確かに聞こえた……。

『どうもお騒がせしました。あ、これ学園長から贈り物です』

『まあ、お父さん！　世界一周旅行券よ！』

『恭介は学校に行けるし、私たちは旅行に行ける！　今日は何て素晴らしい日なんだ（喜）』

あんたら……満足か？……俺は……こんな親……嫌だぜ……。

《？？？？》

「……て……きて……起きて……起きて！！」

「はっ！」

天堂恭介は目が覚めた

俺は寝ていたのか？あ、そうか確かマフィアみたいな男に殴られ

て気絶したんだ……。そして両親は何もしてくれなかった……。
周りを見てみると、どうやら道の真ん中で寝ていたようだ。

「ねえ？　君、大丈夫？」

ん？どうやら呼ばれているようだ。誰だろうと振り返ると……。
そこには……そこには……そこには……。

女神がいた！！！！

めちゃくちゃきれいな人がいた！長い金髪に、赤い瞳、さらにスタイルがかなりいい！！まさしく女神だ！！

「あの、大丈夫？　保健室に行こうか？」

「え？　あ、だだ大丈夫です！」

あわてて立ち上がった。

「そう？　大丈夫ならいいけど。こんなところで寝ていたら風邪ひくよ」

「あ、はい……」

「ん？」

いきなり顔を近づけてきた！そんなに近づけたら緊張するんですけど！！

「君、見かけない人だね？」

「え！　ああ、ええと……」

まずい……まさか俺を不審者と思っているんじゃ……。

「ああ！　もしかして君、噂の転校生？」

「へ？　まあ無限学園に転校する予定ですけど…」

「やっぱりそうだ！」

なぜ俺のことを知っているんだ？それに噂って？

「あの……どういう噂が流れているんですか？」

「え？それは……」

「フェイトちゃ～ん！！」

別の方向から突然声をかけられその方向を見てみると、茶髪の女の子が走ってきた。

こちらも美人だ！

「フェイトちゃんどうしたの？　その人は？」

「あ、なのは！　実はこの人は噂の転校生なの」

「え！　あの噂の転校生！？」

俺の転校はそんなに噂になるもんなのか？たかが転校だろ？

「あの……俺ってそんなに有名人？」

「うん、そうだよ！」

「なんたってあの学園長の奴隷になるかもしれないってすごい噂だよ！」

「……はあ！？」

なんじゃそりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？いったいどういうこと！？

「それよりも早く行かないと遅刻するよ」

「え？　でも無限学園の場所が分からないんですけど……」

「後ろだけど？」

「へ？」

後ろを振り返ると、とても大きな学校があった。よく見ると他の生徒もあの学校を目指して歩いている。

そしてその学校の校門にはこう書いてあった。

『無限学園』

俺は来てしまったのか……。

第二話　無限学園（後書き）

天城
「二話ができたぜ～」
恭介
「おつかれさん…と言いたいところだが、おい作者！」
天城
「なんだよ…」
恭介
「俺が奴隷になるかもしれないってどういうことだ！？」
天城
「それは君がいけないんだよ」
恭介
「何！？」
天城
「まあそれは後々語るとして、次回はアニメキャラをいろいろと出していこうと思います！今回はフェイトとなのはを出しましたが、次回はどんなキャラが出るのか！？また次回会いましょう！」
恭介
「なんだ？俺が一体何をした？」

第三話　女神と超電磁砲と不幸少年（前書き）

天堂恭介の独り言

毎回嫌な予感しかしない……

第三話　女神と超電磁砲と不幸少年

《無限学園・校門前》

俺は現在、無限学園の校門前に立っている。
俺が気絶している間にここまで移動したって言うのか？ていうか、これって完璧な拉致じゃん！

「無理やり連れてこられた！？　大変だったね……」

「ええ……まあ……」

「まあ、あの学園長ならやりそうだね」

フェイトさんが納得したように頷く。

「……学園長って、どんな人なんですか？」

そう聞くと、なのはさんが話し始めた。

「ん～～なんというか唯我独尊そのものというか、とにかくめちゃくちゃな人」

「なるほど……」

そういえば、俺を拉致するように命令したのも学園長だったな。
とてもまともそうではないな……。

「あ、でも生徒のことは真剣に考えてくれるんだよ！　前、不登校

だった生徒の家に訪問して『登校しなければ、お前の恥ずかしい過去を全校生徒にばらしま～す♪』と指導したら、次の日に涙を流しながら登校してきたんだよ！」

なのはさん…それは指導ではなく、脅迫ではないだろうか？

「私もストーカーの被害にあったときにね、学園長に相談したら、次の日にストーカーの犯人を捕まえて半殺しにしたんだって。おかげでそれ以降からストーカーの被害はなくなったんだよ！」

良かったですね！フェイトさん！！

え？半殺しについてはツッコマないのかって？フェイトさんをストーカーする奴なんて半殺しどころか死刑にするべきだ！！

「あ、フェイトちゃん！　そろそろ行かないと……」

「うん！そうだね。じゃあ……えっと……名前は……？」

「あ、天堂恭介です！」

「そう、じゃあ恭介君またね！」

そう言うとなのはさんといっしょに歩いて行った。

それにしても……フェイトさん、可愛かったなあ～。次に出会ったらメルアド交換しよう！

と、そう思っていたそのとき

「不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――！！！」

突然後ろから悲鳴のような叫び声が聞こえたので振り返ると、一人の少年が走ってきた。
少年は俺を見て。

「すまん！　ここに女の子が来ても、俺のことは知らないと言ってくれ！！」

「え！？　あ、ああ……」

そう返事をすると少年はすぐ近くにあったゴミ箱に隠れた。
今時、ゴミ箱に隠れるって……。
そして向こうから女の子がやってきた。姿からみるとだいたい中学生くらいかな？
女の子は俺を見て近づいてきた。

「ねえ、あんた！　ここら辺に変な男見なかった？　ツンツンな髪型で、不幸だぁぁぁぁーーー！と叫んでいた奴なんだけど」

ええ、見ましたよ。そこのゴミ箱に隠れていますよ。とは言えない……。

「さあ？　見なかったけど？」

「おかしいわねぇ……」

と、女の子は首を傾げた。すると……。

ガタガタ！ガタガタ！

「「ん？」」

ガタガタ！ガタガタ！

ゴミ箱が移動している！隠れる気あるのか！？

すると少女は、まるで獲物を見つけた獣のような目つきになって。

「み～つ～け～た～～！！」

そう言うと、ポケットからいきなりコインを取り出し、ゴミ箱に向けた。

そして……。

ドオォォォォォォォォン！！！！！

「ギャアアアアアアー！！！！」

何をするかと思いきや、コインを使って電撃によるレーザービームが発射してゴミ箱に命中した！まるでレールガンじゃないか！

いや！そんなことより！

「この人殺し！！」

「はあ？」

「はあ？　じゃねぇよ！！　あのゴミ箱には人が入ってたんだぞ！！　と、とにかく！こういう場合は警察！？　それとも救急車！？」

「ハア……大丈夫よ。ほら」

「何？」

女の子が指を指した方向を見てみると……。

先ほどの少年が右手を前に出して立っていた！

「え！？　マジで！？」

「ね？　大丈夫でしょう？」

「大丈夫じゃねぇよ！！」

少年が叫んだ。

「お前は俺を殺す気か！！　この右手が無かったら死んでいるぞ！！」

「あんたならその右手が無くても生き残れるんじゃない？　ていうかゴミ箱に隠れるなんてとうとう人間をやめる気になったの？」

「やめるか！！　他に隠れる場所が無かったんだよ！！」

「いろいろあるでしょうが！　ダンボールとか、ドラム缶とか」

「スネー○か！？　ス○ークになれってか！？　そんなスニーキングミッションできるか！！」

「だったらステルス迷彩でも用意しておきなさいよ！」

「無理だ！！　あれは入手困難なんだぞ！」

「おい、話の論点がずれてるぞ」

そうツッコミを入れると、二人がこっちを見て。

「「ていうか、あんた誰？」」

あ、名前言ってなかったな。

「今日からこの無限学園に転校することになった、天堂恭介だ」

「転校生！？」

「もしかしてあの……」

「「学園長の奴隷になるかもしれない奴！？」」

またか！なぜ俺が奴隷にならなきゃいけないんだ！学園長に会ったら詳しく聞かなければ！

「お前も大変だな……あ、俺上条当麻。で、こっちがビリビリ」

「ビリビリ言うな！私には御坂美琴ていう名前があるの！」

上条さんと御坂さんか、よく覚えておこう。

「それよりも上条さん…」

「あ、俺のことは上条でいいよ」

「じゃあ上条、お前なんで御坂さんに追われていたんだ？」

そう聞くと、いきなり御坂さんが大声で言った。

「こいつと決着をつけるためよ！」

「決着？」

「そうよ！」

「お前まだそんなことを言っているのか…」

上条はやれやれと首を振っていた。

「そんなことって、私にとっては重要なのよ！！」

「やれやれ……」

また言い争いが始まった。この二人実は仲がいいんじゃないのか？ケンカするほど仲がいいという言葉どうりに。

ん？もしかして……。

「もしかして、御坂さんって上条のことが好きなの？」

御坂さんにそう言ってみると、御坂さんの顔が真っ赤になった。

「な！？なななななわけないでしょ！！あたしが何でこんな奴と…／／／／／／」

あ、そうか……好きなんだね……おめでとう……お幸せに……。

「こいつが俺に？そんな恋愛イベント、不幸に愛されているこの上条さんにはありえないよ」

この鈍感男め！こんなに御坂さんに愛されているのに！

「お前なんて馬に蹴られて死んでしまえ！！」

「なんで！？」

「当たり前だ！！リア充爆発しろ！！」

「意味わかんねぇよ！！」

「おめぇら、なにやっているんだ」

突然後ろから声がかけられて振り向くと、そこには男が立っていた。

銀髪の天然パーマで、煙草をくわえていて、白衣を着ている。どっからどう見ても変人にしか見えない。

「こんなところで遊んでるんじゃねぇよバカヤロー。さっさと校舎に入れコラ」

さらに口が悪いときた。

「仕方がない……あんた！次に会った時は決着を……っていねぇ！！？」

いつのまにか上条は消えていた。いや、校舎の方に走って行ったのだ。しかも全速力で。

「無視すんなやコラァァァーーー！！！」

御坂さんも全速力で走って行った。

頑張れ……陰ながら応援している……。

「で、お前誰？」

さっきの白衣の男が話しかけてきた。

「えっと……転校生の天堂恭介です」

「ああ、お前か……学園長のペットになる予定の……」

待って！？ペット！？奴隷からペットになっているんだけど！！？

「お前も大変だな。あの学園長のペットはきついぞ」

「……そうですか……ところであなた誰ですか？」

「ん？俺？知らないの？みんな大好き銀八先生だよ？」

知るか、あんたの名前なんて。ここに来たのも初めてなんだぞ。

「それじゃ、行くか」

「はい？どこへ？」

「学園長室へ」

「はい！？」

「お前が来たら、学園長室に連れて来いって言われているんだよ」

「誰から？」

「学園長に決まっているだろう」

なに！？学園長だと！？ちょうどいい詳しい話も聞きたいし、文句も言わなければ気が済まん！！

第三話　女神と超電磁砲と不幸少年（後書き）

恭介
「やっと学園長に会えるのか！言いたいことはいっぱいあるんだ！」
天城
「はたして文句が言えるのだろうか…」
恭介
「どういうことだ？」
天城
「それは次回のお楽しみ！それよりも今回はゲストを呼びました！
とある魔術の禁書目録より、上条当麻と御坂美琴です！！」
上条・御坂
「「どうも～～」」
恭介
「フェイトさんじゃないのか！？」
天城・上条・御坂
「「はあ？」」
恭介
「ここはフェイトさんだろ！！空気読め！！」
天城
「だまれ！この変態主人公！」
恭介
「誰が変態だ！！」
天城
「お前、フェイトの胸と足しか見てないだろう！」
恭介
「な、なんのことやら…（汗）」
天城・上条・御坂
「「図星か…」」

上条
「まあそんなことより、三話完成おつかれさん！」
御坂
「やっと私たちの出番ね！」
天城
「ですが、次の話は主に学園長が主役なんで二人は登場しないよ」
上条・御坂
「「マジで！？」」
天城
「また出演する時がくるよ。その時はよろしく！！」
上条・御坂
「「なんか、納得いかない……」」
天城
「さて、次回は！いよいよ学園長登場です！ちなみにオリキャラです！恭介とどんな話をするのか！？それではまた次回お会いしましょう！！！」
恭介
「……いいじゃん、胸とか足とか見て何が悪いんだよ……胸は大きかったし……足も綺麗だからつい見ちゃうじゃないか……何か悪いのかコノヤロー……」
天城
「うるせぇよ！！この変態ダメ主人公！！」

第四話　無限学園の学園長（前書き）

変態恭介の独り言

おい！！作者！名前間違えているぞ！！俺の名前は天堂恭介だ！！
なんだよ！？変態恭介って！！？

第四話　無限学園の学園長

《学園長室前》

「着いたぞ」

銀八先生に案内されて、着いたのは学園長室である。
ここに学園長が居るのか……。会って直接文句を言わなければ！
言いたいことは山ほどある！

銀八先生がドアをノックする。

コンコン！

「学園長、転校生を連れてきました」

『は～い♪どうぞ～～♪』

そう返事がくると、銀八先生は扉を開け、俺は中に入る。

「失礼します」

いよいよ学園長とご対面か……。

中に入り学園長の姿を見てみると、びっくりした。
衝撃だった。そんな馬鹿なと思った。信じられなかった。
みんなは学園長とはどんな人物か想像つくか？大概はおっさん、
おばさん、もしくは爺さん、婆さんが学園長を務めているが……。

目の前の大きな椅子に座っているのは……。

女の子だった！！！

「ようこそ～♪無限学園へ♪」

そう元気よく言った。

想像していたのとは違うじゃないか！

歳はだいたい俺と近いくらいで、肩まで伸ばした茶髪に、明るい笑顔が印象的だった。

はっきり言おう……愛すぎるやろーーーー！！！

「立っているのもなんだから、座って♪」

「は、はい！」

俺は部屋に置いてあるソファーに座った。

この人があの噂の学園長？　俺を拉致するように命令したり、生徒を脅迫したり、ストーカー犯を半殺しにしたりと噂があったが、全然そうは見えない。やはり所詮は噂か。

「それじゃ、初対面だし互いに自己紹介でもしようか！」

ん？この人は俺の名前を知っているんじゃないのか？疑問が浮かんだが、彼女の可愛い笑顔のせいで、そんなことはどうでもいいと思った。

「私の名前は、千堂由美（せんどうゆみ）！生徒のみんなからは由美ちゃんと呼ばれ

ています♪」

学園長がそんな呼ばれ方でいいのか、とツッコミを入れたかったが、これまた笑顔が可愛いから、どうでもいいやと思った。

おっと俺も自己紹介せねばいけないな。

「どうも初めまして、俺……僕の名前は、天ど…」

「はい♪これからよろしくね♪クソ犬♪」

「え!?い、いや!あの僕の名前は天…」

「それじゃ、これからのことについて説明するね♪クソ犬♪」

「おい、聞けよ!!俺の名前はて…」

「うっせぇな!!!!人が話をしているときは喋るんじゃねぇよ!!!ママに教わらなかったのか、このクソ変態犬!!!!」

「……はい……すいません……」

「よろしい♪」

この時、なのはさんの言葉を思い出した。

『ん～～なんというか唯我独尊そのものというか、とにかくめちゃくちゃな人』

謎はすべて解けたぞ！！
この人だ！間違いない！俺を拉致するように命令したのも、生徒を脅迫したのも、ストーカー犯を半殺しにしたのも、絶対この人だ！！！

「どうしたの？顔が怖いよ…」

「いえ、なんでもないです…」

「そう♪じゃあ、続けるね♪」

そう言う彼女は笑顔だったが、さっきのやりとりのせいで、可愛いとは思えなかった。

「その前に言っておきたいんですが、俺の名前は天堂恭介ですから」

「これからクソ犬君はこの学園で勉強していくんだけど、その前に言っておかないといけないなことがあるの」

おい、人の話を聞いていたのか。

「言いたいことって何ですか？それから俺の名前は天堂恭介なんですけど」

「このままじゃ、クソ犬君は退学処分になるかもしれないの…」

「だから人の話を……はあ！？退学処分！？何でですか！？理由は！？」

「君、転校についての資料見た？」

「ええ……見ましたけど……」

手紙といっしょに入っていた、資料だろ。ちゃんと見たぜ。

「準備物についてちゃんと見た？」

あの準備物か……。

俺は準備物の内容を思い出してみた。

『準備物』

・自分の肉体と自分の魂

・マンガはＯＫだがエロ本を持ってきたら極刑

・ＰＳＰはダメだが３ＤＳならＯＫ

・転校生は今週のジャンプを買ってくること

・後は特にいらん

確かこんな感じだったな。

「確か、『転校生は今週のジャンプを買ってくること』って書いてあったはずだけど、君、どうやらジャンプを買ってきてないらしいね？」

「……まさか、買ってきてないから、退学処分？」

「正解♪」

正解♪じゃねーよ！！ジャンプを買ってきてないから退学処分っ

て、どんなルールだよ!!

「転校生がジャンプを買ってくる。君、こんな常識も知らないの?」

そんな常識あるか!!

何だこの女!?めちゃくちゃどころか、常識がいかれている!

「冗談じゃない!そんな理由で退学処分って納得いかないよ!!」

「持ってこなかった君が悪いのに、逆ギレってなんですか!」

「やかましい!!納得いかないものは、納得いかないんだよ!!だいたいなんでジャンプを買って来ないといけないんだ!?」

「そんなの決まっているじゃない!!私が見たいからだよ!!」

「単にてめぇが見たいだけじゃねーか!!!」

独裁者っていうのは、まさしくこの女のことを言うんだな!

するといきなり学園長は黙って、何かを考え始めた。

そして、ため息をついて話し始めた。

「……仕方ないですね……ならばこうしましょう!」

学園長は立ち上がり、俺に言った。

「クソ犬君!この私の奴隷になりなさい!!」

「はあ！！？」

いきなり何を言ってんだこの女！？

「私の奴隷になったら、退学処分は無しとします♪」

「ちょっと！何を言っているんですか！？ていうか、奴隷っていったい何をするんですか！？」

奴隷ってまさか、ロウソクとか、鞭とかを使用するのか！？

「そんなに難しいことじゃないよ♪私の仕事の手伝いをしたり、生徒の悩みを解決したりするの♪」

「え！？そんだけ？」

「何？まさか変な想像をしていたの？」

そ、そんなわけあるか！！と、言えばウソになる……。だがここはあえてなにも言わない……。

「とにかく、君には私の目となってもらいたいの」

「目？」

「そう！目となって生徒の気持ちや様子を見て、報告してもらいたいの、そして必要とあらばその生徒が抱えている悩みを解決するの！」

「何で…そんなことを…」

すると学園長の顔が、笑顔から真面目な顔になった。

「……私の夢は、この無限学園の生徒が後悔せず、笑って卒業してもらうことなの…その為にも生徒のことをもっと知りたいの！　…でも、私は学園長の立場上忙しから、生徒とのふれあいがあまり無いの……時々すきを見て、生徒たちと話したりするけど……それだけじゃ全ての生徒を理解できるわけがないの。だから私には目がいるの！　生徒たちの様子が分かる目が！！」

……俺は学園長の話を黙って聞いていた。そして思った。

こいつはバカだ。

何で自分一人で解決しようとするのか、何で他の先生と協力しないのか、一人で全ての生徒たちを救えるとでも思っているのか？

こいつは正真正銘の大バカだ。

何でもかんでも一人で抱え込んで、一人で解決しようとする大バカだ。

自分一人では限界があるんだと、やっと気付いた大バカだ。

そして、その目の役割を転校生である俺に任せようとする大バカだ。

そして、彼女の目はこう言っているようだった。

助けてくれと……。

まったく、本当に……大バカな女だよ……。

「…わかりました。引き受けますよ…」

「え!?本当!!」

そしてこんなことを引き受ける俺も充分大バカか……。

「引き受けないと退学処分ですからね。べ、別に学園長の為じゃないですからね!!」

「ツンデレキモイ」

黙れ!引き受けてやるんだから感謝しやがれ!!

「でも……ありがとう!!!」

学園長はいきなり抱きついてきた!!

ちょっ!心臓バクバクなんですけど!!しかも彼女の胸が当たっている!!さらに髪からは良い匂いがしてきた!!

やばい頭が変な感じになってきた!!このままじゃ犯罪に走りそうだ!!

「本当に…ありがとう…」

涙目で見つめてきた。やばい!可愛い!

まさかこのままラブラブモードに突入か!!?これギャグ小説だろ!!いつのまに恋愛小説になった!?

このまま…キ、キスの展開か!?やばい!ドキドキしてきた!

そして……彼女は言った……。

「君を退学処分にさせるように仕向けた甲斐があったよ！！本当にありがとう！！！！」

……

……ちょっと待て……。

「今何て言った……？」

「うん？本当にありがとう！！！！」

「いや、その前」

「退学処分にさせるように仕向けたこと？」

「そう、それどういうこと？」

「君が前にいた学校の教頭に退学処分をさせるように頼んだの♪」

「てめぇの仕業かぁぁぁぁぁぁぁーーーー！！！！！（怒）」

なんてこった！あの退学処分の黒幕がこいつか！！許せん！！

「お前と教頭はグルか！？」

「グルとういうか、教頭に『おまえの浮気を奥さんにばらされたくなければ、天堂恭介を退学処分にしろ！』と言ったんだよ♪ちゃん

と退学処分にしてくれたから安心したよ♪」

こいつ、あの教頭を脅迫しやがったのか！しかも教頭は自分の為に生徒を売りやがったのか！あのハゲめ！！

「まあ後でちゃんと奥さんに、教頭の浮気を報告しておいたから♪隠し事はいけないよね～♪」

悪魔だよこの人……ただし教頭には同情しない！！

「お前のせいで、俺の人生は滅茶苦茶だ！！責任取れ！！」

「責任って／／／／／クソ犬君いったい私をどうする気／／／／／／／」

「いったい何を想像している！？それと俺はクソ犬じゃない！！」

「じゃあ君の名前は何なの！！！（怒）」

「さっきから言っているだろう！！俺には天堂恭介って名前があるんだ！！」

「変な名前ｗｗ（笑）」

「やかましい！！！！（怒）」

その後二人の言い争いが続いた……。

《二時間後》

「「ハア…ハア…ハア…ハア……」」

「とにかく君は…私の手伝いを…する…ＯＫ…？」

「…ＯＫ…」

これ以上言い争いしても先に進まない、ここはＯＫとしよう。

「それじゃ、契約書を出すからサインしてね♪」

「契約書？」

彼女は机の引き出しの中から一枚の紙を出し、俺に渡した。

「ここにサインをお願いします♪」

……なんか怪しいな……念の為、契約書の内容を確認しよう。

『契約書』

“私、クソ犬は千堂由美のために奴隷になることを誓います”

「サインできるかーー！！」

「あ、ごめん！間違えた！書き直すね！」

彼女は契約書を書き直した。そして書き直した内容がこうだ。

『契約書』
“私、変態クソ犬は千堂由美のためにペットとなって、一生死ぬ気で働くことを誓います”

「これで、ＯＫ？」

「ＯＫじゃねぇよ！！なんでお前のペットになって一生働かないといけないんだ！！さっきより酷くなっているぞ！！！」

「あれもダメ、これもダメって、君って本当にわがままだね！！」

「黙れ！！お前にだけは言われたくない！！！」

言い争いをして三十分後、一枚の契約書が完成した。

『契約書』
“私、天堂恭介は千堂由美と共に、無限学園の生徒の悩みを解決していき、無限学園を盛り上げていくことを誓います”

そしてこの契約書こそが二人の絆の証となり、二人はこれから先に待っている困難に立ち向かっていくことになるのだった！

「死ね！！この変態クソ犬！！！」

「誰が変態クソ犬だ！！このアホ女！！」

……たぶん……。

第四話　無限学園の学園長（後書き）

由美
「どうも～みんなのアイドル、千堂由美で～す♪」
恭介
「なんで後書きに出るんだよ！」
由美
「いけないの？」
恭介
「おい！作者どういうことだ！」
天城
「だって仕方ないじゃん、彼女はこの小説のヒロインだぞ」
恭介
「……何だって……？」
天城
「だから、ヒロインだって」
恭介
「嘘だ！！！（ひぐらしのレナ風）」
天城
「嘘じゃないよ」
恭介
「この小説のヒロインはフェイトさんじゃないのか！！」
天城
「違うよ」
恭介
「なんてこった……」
由美
「天城さん、これからよろしくお願いしますね♪」
天城

「お前によろしくされたくない」

《しばらくお待ちください》

由美
「はい♪次回もいろいろなアニメキャラが出演予定です！作者のお気に入りキャラも出演します！それではまた次回お会いしましょう！！」

恭介
「ま、また会いましょう…（作者大丈夫か……後で救急車を呼ぼう……）」

第五話　学生寮を探せ！（前書き）

千堂由美の独り言

校則違反をした生徒は、グランド千周です♪

第五話　学生寮を探せ！

《学園長室》

契約書が完成したことによって、俺と学園長は共に無限学園を盛り上げていくパートナーとなった。

「それじゃ、もう君に言うことはないね♪　帰っていいよ♪」

「え？　授業は？」

「今日は午前授業しかないから、もうみんな下校しているよ♪」

窓の外を見てみると、確かに生徒達は下校している。学園長と出会って三時間くらいたったのか。

「せっかくだから学生寮に行ってみる？　君の荷物は、部屋に届いているから♪」

学生寮ということは、寮生活になるのか。授業が無いのなら、部屋の荷物を片付ける時間は十分あるな。

「そうだな。そうしよう」

「じゃあ、寮に行ったら寮長に挨拶するんだよ♪」

「はいはい」

「話は終わったか？」

銀八先生が話に割り込んできた。

……ていうか……。

「「先生居たんだ……」」

「居たよ!!　さっきからずっと居たんだよ!!　忘れていたのか!?」

「律儀に三時間も待っていたの!?」

「何か一言、言えば良かったのに…」

学園長はやれやれと首を振る。

銀八先生はすごい不満そうだ。

「…そうだ、学園長。こいつのクラスについては?」

「あ、忘れていた!」

学園長は何かを思い出したようで、俺に話し始めた。

「君のクラスについてなんだけど、君のクラスは二年Z組だから忘れないように♪」

「Z組!?」

ということは、A～Zまでクラスがあるということか……。ていうか、どんだけクラスがあるんだよ!?

「ちなみに担任の先生はそこに居る銀八先生だからね♪」

「え！？　マジで！？」

「なんだよ……文句あんのか？」

「不安要素がいっぱいなんですけど……」

「お前、俺をどういう目で見ている？」

「変な天然パーマのおっさん」

ボガッ！

銀八先生に殴られた！酷いや！正直に言ったのに！生徒に対する暴力行為だ！！

「こら！！　銀八先生、恭介君を殴るのはダメです！！！」

学園長が銀八先生を注意する。

学園長……あんたって奴は……嫌な女と思っていたが、やはり根はいい子なんだな！

俺の為に……。

「恭介君を殴っていいのは、私なんだから！！　あと苛めるんなら、精神的苛めをしなさい！！」

「サーセン」

「よろしい♪」

……前言撤回、やっぱり最低だこの女！！

「……それじゃ、もう行きますね……」

これ以上ここにいたら、精神的にきつい……。早くここから出たいよ……。

「あ、待って！　これ♪」

学園長から渡されたのは携帯電話だった。

「君の仕事が来たら、その携帯にメールするから♪」

なるほど、これで連絡を取ろうというのか。

俺は携帯をポケットの中に入れた。

「じゃあ、色々ありがとうございました、学園長」

「……由美……」

「へ？」

「……由美って呼んで…／／／／」

もじもじしながら言う彼女はとても可愛かった。惚れてまうやろーーーーー！！！と、叫んでしまいそうだ。

「…じゃあ、俺のことは恭介って呼んで」

「え？　いいの？」

「俺たち、これからパートナーだろ？」

そう言うと彼女はとても可愛い笑顔になった。

俺は学園長……いや、由美と握手を交わした。

「これからよろしくな！　由美！」

「うん！　これからよろしくね！　変態クソ犬！」

……いや、恭介って呼べよ……。

《無限学園・敷地内》

さて、由美と別れて、学生寮を目指す俺であったが……。

はっきり言おう……。

広すぎてわかるかーーーーーー！！！

そう、無限学園は広すぎる！東京ドーム何個分！？あまりの広さに、どこに学生寮があるのかわからない！

由美に聞こうか……いや、あの女に聞いたら……。

『学生寮がわからない？　君はバカですか？　まあ土下座して、お

願いします由美様！　このできそこないの変態クソ犬めに教えてください！　と言えば教えるけど♪（笑）』

……と、言うに違いない！あのアホ女、顔は可愛いのに中身は最悪だからな！

仕方がない…ここの生徒に聞くか。

問題は誰に聞くかだ……。

周りを見てみると、色々な生徒が居るが、聞く人によっては変な展開になることもあるかもしれない。

今朝会った上条や御坂さんみたいにいきなりバトルに突入みたいなことにはなりたくないからな。そのことに注意しながら声をかけよう。

あそこにいる二人組はどうだろう……？

『悠二遅い！！　もっと速く走る！！！」

『ま、待ってよシャナ！　は、速すぎるよ！！』

部活の練習か……邪魔するのも悪いな……。

あそこで走っている人たちはどうかな？

『吉井、坂本！　待たんか！！　補習室から脱走しよって！！！』

『鉄人が来た！　明久逃げるぞ！！』

『わかった！　雄二！』

……忙しそうだな……。

あそこでハルバートを振り回している男は……？

『貴様！！　ゆりっぺを変態のような目つきで見ていたな！！！』

『いや！　見てねーよ！！』

……やめておこう……。

しかしこの学園は変人が多いな。もっとまともな子はいないのか！普通の学生はいないのか！

そう思っていた時。居ました！発見しました！！

いかにもまともそうな女子高生を発見！

俺は五人組の女の子たちに話しかける。

「ちょっとごめん！　学生寮の場所わかるかな？」

「ん？　あんただれ？」

「あ、そうだなまずは自己紹介が先だな、転校生の天堂恭介だ」

「ああ！　あの噂の！」

「そうなんだ！　あ、私たちも自己紹介しなきゃ！　私は平沢唯！」

「あたしは田井中律！」

元気よく二人が自己紹介する。

「私は秋山澪、よろしくね！」

「琴吹紬です、みんなからムギって呼ばれています！　よろしくお願いします！」

美人な二人も自己紹介をしてくれた。

あとはツインテールの女子だけか。

「初めまして！　私は……」

「この子はあずにゃん！」

「…ってあだ名で呼ばないでください！　私は中野梓です！」

なんか、ネコ耳が似合いそうな子だな。

全員の自己紹介が終わった。それにしてもこの学園は美女、美人が多いな。目の前にいるこの子たちも可愛いし、俺としては嬉しい！

「学生寮が分からないんだっけ？」

「ああ、ここは結構広いからどこに何があるのかわからなくて……」

「そうなんだ……あ、そうだ！　一緒に行く？」

「いいの？　迷惑じゃないかな……」

「いいよ、困った時はお互い様だからね」

澪さんがそう言ってくれて、みんなで行くことになった。

なんていい人たちなんだ……どこぞのアホ女とは大違いだ！

歩きながら、俺は今までのことをみんなに話した。
前の学校でハゲの教頭によって退学処分になったこと、実はその退学処分はここの学園長、千堂由美によって仕組まれたこと、無理やり拉致されたこと、そして由美に会って喧嘩して、契約書を書いて由美のパートナーとなったこと、色々話した。

「……大変だったんだね」

「うん……大変だった」

「しかし、お前も物好きだな。そんな役目を引き受けるなんて」

「断れば、退学処分だったからな……」

「ふ～ん、あ、そうだ！　キョウ君！」

「キョウ君！？」

「そう！　恭介君だから、キョウ君！」

唯さんが俺のあだ名を言ってくれた。あだ名を呼ばれると特別な人と認められた感じで、ちょっと嬉しい。

「キョウ君のクラスはどこ？」

「二年Ｚ組だけど」

「私たちと同じクラスですね！」

ムギさんはそう言って喜ぶ。
この人たちと一緒か、なんだか嬉しいな！

「良かったね、キョウ君！　宿題忘れたら、澪ちゃんに写してもらえるよ！」

「マジで！？　よっしゃーー！！」

これで、宿題の問題は解決だ！！

「変なことを教えるな！！　あと宿題は自分でやれ！！」

ちっ！写してくれないのか！

「当たり前だ！！」

そうこう言っている間に学生寮が見えてきた。

《学生寮》

近くで見るとでかいな！寮というより、マンションじゃないのか！？

「おっきいでしょ～」

「みんなここで暮らしているの？」

「そうだよ」

唯さんたちもここで暮らしているのか……。

「一階に食堂とお風呂場、さらにゲームセンターまであるんだよ！」

なぜ学園内にゲームセンターがあるんだ？

「前、学園長が『ゲームセンターがあったほうがおもしろいじゃないですか♪』と言ってゲームセンターの設置を認めたらしいよ」

……あのアホ女やりたい放題だな。学園にゲームセンターを設置するなんて前代未聞だぞ。

と、そう思っていた時

「あれ？　恭介君？」

「あ、恭介君だ！」

どこかで聞いたことのある声が聞こえて、声のするほうを見てみると。

「なのはさんに、フェイトさん！」

今朝、出会ったなのはさんとフェイトさんじゃないか！こんなとこで会えるなんて幸運だ！！

「もしかして、この寮で生活するの？」

「はい！そうなんです！」

「そうなんだ、これからよろしくね！」

フェイトさんと一緒の寮に暮らせるなんて……。

俺はなんて幸せ者なんだ！！！もしかして！俺とフェイトさんは結ばれる運命なのか！！？

赤い糸で結ばれているのか！？

キターーーー！！！俺の時代キターーーーーーーー！！！！

「どうしたの彼？　いきなり黙ってガッツポーズをとっているけど……？」

「さあ？」

「フェイトさん！！！」

「は、はい？」

「俺が必ず幸せにしてみせますね！！！」

「はい！！？」

「お～い……恭介戻ってこ～い……」

「そ、それよりも恭介君はこれからどうするの？」

なのはさんがそう聞いてきた。

おっといかんいかんすっかり目的を忘れていた。

「部屋に荷物が届いているから、片付けようと思っているんですよ」

「そうなんだ…」

すると、なのはさんは考え込んで言った。

「一人は大変そうだから、私たちも手伝うね！」

「え！？　いいんですか！？」

「いいよ、いいよ！　ねえ、フェイトちゃん！」

「うん、恭介君も遠慮しなくていいよ」

フェイトさん……なのはさん……。

「私たちも手伝うよ！！」

唯さん！？

「よーし！放課後ティータイムは恭介に全面協力だ！！」

律さん……。

「人数が多い方が早く終わるからな」

澪さん……。

「がんばろーう！」

ムギさん……。

「恭介先輩、頑張りましょう！！」

あずにゃん……。

「私は梓です！！」

どっちでもいいだろう！！

それにしても、あんたらええ子やーーーーー！！！！こんないい人たちに出会えて俺は幸せ者だ！！どこぞのアホ女とは全く違う！！

「じゃあ私たち、他の友達を呼んでくるね。人数は多い方がいいし」

「またあとでね！」

そう言って、なのはさんとフェイトさんは走って行った。

「じゃあ私たちは部屋に荷物を置いてくるね！」

唯さんたちは自分の部屋へ向かった。

さて、俺は自分の部屋に行こうと思うが、おそらく鍵が必要だろう。鍵はおそらく寮長が預かっているだろうから、まず寮長に会いに行くとしよう。

そして俺は寮長室へと向かうのだった。

第五話　学生寮を探せ！（後書き）

天城
「けいおん！　復活おめでとう！！」
恭介
「いきなり何？」
由美
「けいおん！の原作が再連載されるんだって♪」
恭介
「ああ……それで…」
天城
「そう！けいおん！ファンの俺としては、とても嬉しい！！またあずにゃんに会える！！！」
恭介
（それでテンション高いのか…）
由美
「もしかして、アニメ化されるかもしれないね♪」
恭介
「そうか？もう映画で終了するかもしれないぞ」
天城
「夢のない話をする恭介なんて、死んでしまえ！！！」
恭介
「なんで！？」
由美
「それではまた次回お会いしましょう！！」
天城・恭介
（（勝手に終わりやがった……））

第六話　部屋は綺麗にしましょう（前書き）

千堂由美の好きなゲーム

バイオハザードが一番好きで～す♪

第六話　部屋は綺麗にしましょう

《寮長室》

コン！コン！

「失礼します」

俺はノックをして寮長室に入った。

「すいません、鍵を取りに来たんですけど…」

俺が寮長室に入って思ったことそれは……部屋が汚い！！
服は脱ぎ捨ててあるし、お菓子の袋は散乱しているし、ゴミがいっぱいあるし、とにかく汚い！！

「ん？　何だお前は？」

一人の女性が、ピザを食いながら寝転がっていた。
顔は美人で、緑色の長い髪で、なぜか知らないけど拘束服を着ていた。何で拘束服？

「あの…転校生の天堂恭介なんですが、寮長ですか？」

「いや、違うぞ」

彼女は立ち上がり、胸を張って言った。

「私はここで、居候している美人だ！」

胸を張って言うことじゃないだろう。

「C．C．（シーツー）だ、よろしくな変態クソ犬」

C．C．？変わった名前だな。いや、それよりも！

「なんでその名前を知っているんだ！？」

「学園長から連絡が来てな、変態クソ犬君がそちらの寮に住むことになったからと」

あのアホ女！ちゃんと名前で呼べ！！

「……で、寮長はどこにいるんだ？」

「それが人に聞く態度か？」

「はい？」

「ちゃんと頭を下げ、C．C．様どうかこのできそこないの変態クソ犬めに寮長の居場所を教えてくだい！　と言え」

この女！！あのアホ女並にむかつく！！ニヤニヤと嫌な笑顔がさらにむかつかせる！！

「誰が、そんなこと言うか！！」

「仕方ない……土下座で勘弁してやろう」

「いや！　そういうことじゃなくて！！」

「黙れ、喋るな、この変態」

「変態じゃねぇ！！」

なんて嫌な女だ！と、思っていた時。

「C．C．！！」

突然声が聞こえてきて、声の方向を向いてみると、青年が立っていた。

黒い髪で、顔はかなりイケメンだ。

「C．C．！　あれほど部屋を汚すなと言ったじゃないか！！」

「そんなこと言ったか？」

「１０分前に言ったぞ！！　どうしたら１０分でこうなる！！」

「知らん！　私はただお菓子を食べたり、漫画を読んだり、ピザを食べたり、ゴロゴロしたりしただけだ」

「そんなだらしない生活をしているから、部屋が汚れるんだ！　このポンコツ女！！」

「この私に文句を言うなど百年早いわ！！　このシスコン！！！」

「俺はシスコンじゃない！！　俺はただナナリーを…妹を愛しているだけだ！！！」

世間一般じゃそれをシスコンと言うんだけど。

「あの、聞きたいんだけど、寮長を知らない？」

「お前は？」

「転校生の天堂恭介だ」

「ああ、なるほどお前が転校生か、俺はルルーシュ、生徒兼寮長だ」

「寮長！？　君が！？」

「信じられないだろうが本当だ、このシスコンが寮長だ」

「ピザ女は黙っていろ、ところで要件はなんだ？」

「俺の部屋へ行きたいんだけど、鍵を持っているかな？」

「ああ、それなら俺が持っている」

そう言うと、ルルーシュはポケットから鍵を取り出した。

「これが鍵だ、部屋は三階にあるから」

「うん！　ありがとう！」

もう用はなくなったので寮長室から出ることにした。

扉を閉めた時、ルルーシュの声が聞こえてきた。

『C．C．！　いいからさっさとこの部屋を片付けろ！！』

『嫌だ、断る、めんどくさい』

『このピザ女め！　そこまで言うならこっちだって考えがあるぞ、今後ピザの注文は一切しない！！』

『なに！？　そんな横暴にでるなんて、許さん！！　勝負だ、ルルーシュ！　私が勝ったらピザ一年分用意しろ！！』

『いいだろう！　で、勝負のルールは？』

『モンハンでイビルジョーを先に狩った方が勝ちというのはどうだ？』

『望む所だ！！　貴様に力の差を思い知らせてやる！！！』

変なバトルが始まったが、俺は関係ないので、さっさと立ち去ることにした。

《自室》

鍵を開けて、中に入ってみると、けっこう広い！一人部屋だが、あと一人、二人いっしょに暮らせそうだ。

さて…部屋に置いてある、ダンボールの中身は俺の私物がほとんどだ。フェイトさん達が片付けの手伝いに来てくれるけど、まだ来てないので、来るまでの間少しでも片付けておこう。

「まず、このダンボールを片付けますか」

ガムテープをはがして、中の私物を次々と取り出した。

食器に、勉強道具に、服や、漫画、ゲームなどを取り出していく。

これは夕方までかかりそうだ。

作業をしている最中、奇妙なダンボールを見つけた。ダンボールには『父より』と書いてあった。

「親父から？　何だろう？　……なんか嫌な予感がするな…」

ダンボールを開けようとしたが、添えてあった手紙が目に入った。

「手紙？」

俺は手紙を読むことにした。

『恭介、元気か？　父さん、母さんは元気だぞ！　今父さんたちは、世界一周旅行でオーストラリアに来ているぞ！　すごいぞオーストラリアは、コアラにカンガルーにパンダもいるんだぞ！』

いやいや、パンダは中国だろ。

俺がこんなに苦労しているのに、あの親は……。旅行を楽しんでいる親の顔を想像したら、腹立たしくなってきた。

『ちなみにそっちに役に立つ資料を送ったので、それを見て勉強しろ！』

役に立つ資料？俺は気になったのでダンボールを開けてみた。
中に入っていたのは……。

大量のエロ本だった……

「あの、クソ親父ーーーーーーー！！！！！（怒）」

なんてものを送ってきたんだ！！あいかわらず意味がわからない！これを見て何を勉強しろというんだ！？
こんなもの見るわけ……い、いや将来役に立つ時がくるかもしれないから、一応持っておこう……。
決して！決して見たいとか思ってないからね！！あくまで将来の為だ！！
エロ本が入っているダンボールを押入れの奥に隠すとしよう。

ピンポーン！

ん？誰か来たのか？

『恭介君、来たよ～』

あの声はなのはさんだ。手伝いに来てくれたのか。

「今開けま～す！」

俺は玄関に行き扉を開けた。
そこには、なのはさん、フェイトさん、唯さん、律さん、澪さん、ムギさん、あずにゃんと優しそうな女性と小さい女の子が居た。

「キョウ君手伝いに来たよ！」

「あたしらが来たからには、もう大丈夫だぜ！」

唯さんと律さんが元気よく言った。本当にこの人たちは元気がいいな。

「それと紹介するね。私の友達の八神はやてちゃんと、ヴィータちゃん」

なのはさんは二人の紹介をしてくれた。

「どうも、転校生の天堂恭介です」

「ご丁寧にどうも！　八神はやてです。これからよろしくな♪」

はやてさんはとても優しい人だな。しかも美人だし。

「で、こちらの子は小学生かな？」

ボガッ！

いきなり殴られた！！なんで！？

「あたしは小学生じゃねぇ！！　なのは達と同じ高校三年生だ！！」

「え！？　マジで！？」

こんな小さい子が三年生！？俺の先輩！？全然信じられない！

「本当だよ。私が小学生のころからずっと一緒だったんだ」

なのはさんがそう言うなら本当なんだろうな……しかし、納得がいかない……。

「ほな、さっそく片付けをしようか？早くしないと、日が暮れてしまうで」

「うん、そうだね」

「みんな頑張ろう！！」

全員

『オーーーーーーーーーーーーーー！！！！』

気合を入れて頑張るぞ！！

《１０分後》

「恭介君、これはどこに置けばいいの？」

「それはそっちに」

「フェイトちゃん落とさないように気をつけてな」

「うん、分かっているよはやて」

「恭介先輩！　ここに置いておきますね」

「うん！　分かった！」

「恭介、これはこっちでいいのか？」

「ああ、いいよ」

「キョウ君！　この漫画面白いね！　後で借りてもいい？」

「ハイハイ後でね……」

「恭介！　モンハンやろうぜ！」

「お前ら仕事しろ！！！！」

みんなが協力（遊んでいる人がいたが）してくれたから、荷物がどんどん片付いていく。このままのペースで行けば、夕方までには終わりそうだ。

《２０分後》

「もう疲れた……」

「残りは明日にしようぜ……」

「いや、今日中に終わらないと困るんだけど……明日から学校に行かないといけないし……」

唯さんと律さんがだらけ始めた。そんな二人を見た澪さんが叫んだ。

「おい！　だらけるな！　なのは先輩はまだ頑張っているんだぞ！」

「あ、私のことはいいから、みんな休んでいいよ！」

「いや…そういうわけには……」

なのはさんは平気だと言うが、顔は明らかに疲れている。

「じゃあ、ちょっと休憩するか」

俺がそう提案した。

「やったーーー！！　休憩♪休憩♪」

「なのはさんも少し休みましょう」

「え、でも……」

「なのは、少し休もう」

「フェイトちゃんがそう言うなら」

というわけで少し休憩をとり、その後に片付けを再開しよう。

「私、お茶とお菓子を用意しま～す！」

そう言って、ムギさんは持ってきた鞄からお菓子を取り出した。

ナイスだ！ムギさん！
そして数分後お茶とお菓子持ってきた。

「どうぞ～♪」

お菓子がおいしそうだ！俺はお菓子を一つ口の中に入れた。

「……うまい……うまいよムギさん！！」

「本当においしいね！」

なのはさんも絶賛だ！

「これってもしかして高いお菓子ちゃうん？」

はやてさんがそう質問した。確かにこれだけうまいと、値段が高いお菓子なのかな？

「いいえ、そんなに高くないですよ」

「そうなんか……」

「せいぜい十万円位のお菓子ですよ♪」

俺はお茶を吹きそうになった！十万！？そんなに高いの！？

「そんなに高いもの私達が食べていいの！？」

「いいですよ♪親戚からもらった物なので、遠慮しなくていいですよ」

いや、そんなこと聞かれたら遠慮してしまうわ！！
俺は澪さんに聞いた。

「澪さん、もしかしてムギさんって……」

「ああ…大金持ちだ…」

「……」

俺はそんな大金持ちと友達になったのか……。この学園はほんと、いろんな種類の人たちがいるもんだな……。

俺達はお菓子を食べた後、片付けを再開した。

さっきと違い、唯さんや律さんはやる気を出し、片付けはスムーズにいき。夕方には全ての荷物が片付いた。

第六話　部屋は綺麗にしましょう（後書き）

由美
「今回私の出番がないんだけど…」
天城
「出るときと出ないときがあるんだって」
由美
「ぶ～～～～！つまんない！恭介を苛めたいのに…」
恭介
「お前は二度と出るな…」
天城
「残念ながら、次回出演予定だ！」
恭介
「なに！？」
由美
「やったーーーーー！！」
天城
「というわけで、次回また会いましょう！！」
恭介
「嫌だーーーー！！また苛められる！！！」

第七話　チャーハンと麻婆豆腐、あなたはどちらを選びますか？（前書き）

上条当麻の独り言

不幸だぁ……

第七話　チャーハンと麻婆豆腐、あなたはどちらを選びますか？

《自室》

やっと荷物が片付いた！唯さんや律さんが遊んでいたり、長く休憩したから、夕方までかかってしまった。

「やっと終わったね～」

「みんなお疲れ様！」

「本当に今日はありがとうございました！」

俺は改めてお礼を言った。

「この借りは高くつくぜ！」

「はは…」

律さんまた冗談を……。

「言っておくが、冗談じゃないぞ」

「え！？マジで！？」

「今度、アイスをおごってもらうぜ！」

……まあアイス程度ならいいか……みんなにはお世話になったんだし。

そう思っていた時

ピンポーンパンポーン♪

ん？校内放送か？

『偉大なるC．C．様から大切なお知らせがある！　飯の準備が出来たから、さっさと食堂に来い！』

『何故そんな上から目線で言うんだ！？　マイクを貸せ、このポンコツ女！！』

『あ、返せ！！　それは私の仕事だ！！』

『貴様に任せられるか！！』

『いいから返せ！！　このシスコンが！！！』

『誰がシスコンだ！！　俺はただナナリーを……』

ピンポーンパンポーン♪

何やってんだあの二人……ずっと喧嘩してるじゃないか……。

「ワーイ♪　ご飯♪ご飯♪」

唯さんがとても嬉しそうだ。そうか、もうこんな時間か…俺もご飯を食べるとしよう。今日は色々あってとても腹が減った。

「それじゃあ、私達はもう行くね」

なのはさん達はご飯を食べに行く為に、食堂へ向かうようだ。

「じゃあね！　恭介君！」

「なのはさん、今日はありがとうございました！」

「困ったことがあったら、また相談に乗るからね！」

「ほな、さいなら！」

「またな！」

なのはさん、フェイトさん、はやてさん、ヴィータさんは食堂に向かって行った。

さて、残ったのは俺と唯さん達だけだ。

「唯さん達は食堂に行くの？」

「うん、行くけど……キョウ君、私たちのことさんずけで呼んでいるけど、普通に唯って呼んでもいいんだよ」

「いいの？」

「うん！私たち同じクラスになるんだから」

そうか……そうだよな。友達になったんだからな。改めてみんなの名前を呼ぼう。

「よろしくな……唯！」

「うん！」

「よろしくな、律！」

「おう！」

「よろしくな、澪！」

「ああ、こちらこそよろしく！」

「よろしくな、ムギ！」

「はい！よろしくね！」

「そして……」

「はい！よろしくお願いしますね！恭介先輩！」

「ああ！　よろしくな、あずにゃん！！」

「……私は梓でいいんですけど…」

「あずにゃんの方が可愛いじゃないか！！」

「だよね！　キョウ君わかってる♪」

「ハア……もういいです…」

こうして俺は人生初の女の友達を作った。人生初だぞ！！

「じゃあ食堂に行こうか！」

「お腹すいたよ～」

俺は唯たちと一緒に食堂に行くことにした。

《食堂》

「うわっ！　結構人いるな……」

食堂はたくさんの生徒でいっぱいだった。全校生徒がここでご飯を食べるんだな。

「ここでは、食券を販売機で買って、その食券でご飯がもらえるんだ」

初めての俺に澪はわかりやすく説明してくれた。なるほど、まずは食券を買わねばならないな。

俺は食券の販売機に行くが、長い行列ができていた。

「うわ……こりゃあ時間がかかりそうだな…」

「待たないといけないの～～」

唯はがっかりしていたが、文句を言っても仕方ないので、俺達も並ぶことにした。

それにしても……腹減った……。
それから待つこと10分、ようやく販売機にたどりついた。
さて、あとはお金を入れて食券を買うだけだが、沢山ありすぎてどれにしようか迷う。どれにしようか……カレーにするか？いや、うどんもいいかも…とんかつ定食もいいかも……くそ！どれにしようか迷うじゃないか！！
しかし、いつまでも迷っているわけにはいかない。俺の後ろには沢山の生徒が並んで待っている。ここで時間をかけるわけにはいかない。
いったい……どれにしよう……。

「なにしているの？　早くしないと、後ろの人たち待っているよ」

いきなり後ろから女の子の声が聞こえて振り返ると、背の低い、銀髪の少女がいた。
とても可愛い女の子だ、抱きしめてやりたい……はっ！いかんいかん！俺はいったい何を言っているんだ！これじゃあ変態発言じゃないか！最近、由美やC．C．や作者がやたらと変態、変態と言っているが、俺は変態じゃない！変態じゃない、変態じゃないんだ！！

「なに頭を抱えながら、考え込んでいるの？」

いかん！少女が変質者を見るような目つきで俺を見ていた。

「い、いや……メニューがいっぱいあるから、どれにしようか迷っちゃって……」

「じゃあ、私が先に買ってもいい？」

少女は早く買いたいようだ、ここは譲ってあげよう。

「いいよ、先に買いなよ」

「ありがとう」

そう言って、彼女は販売機にお金を入れメニューが書かれているボタンを押した。

彼女が注文したのは、オムライス、ラーメン、麻婆豆腐だった。

「そんなに食べるの？」

「友達の分」

「彼氏か？」

そう言ったら、彼女の頬が少し赤くなった。当たりのようだ。

彼女は食券を持って。

「じゃあね」

と一言言って、向こうにいる友達らしき人たちのところに行った。

『かなでちゃん買えた？』

『うん、買えたよ』

『じゃあ行きましょう、音無君が向こうで席取ってあるから』

『うん、行こう』

『…ん？　日向君の分は？』

『……忘れていた…』

……さて、俺もさっさと選ぶとしよう。彼女は麻婆豆腐を選んでいたから俺もそれにしよう。

麻婆豆腐の食券を購入し、食堂のおばちゃんに食券を渡して、麻婆豆腐をもらった。

その後、唯たちと合流し空いている席を探すがなかなか見つからない。まさか、床に座って食べないといけないのか……と思っていた時。

「あ！　ありました！！　ちょうど六人分席が空いています！！」

あずにゃんが空いている席を見つけた！グッジョブ！あずにゃん！！これで床に座らずに済む！

空いている席の隣には四人の女の子が居たので話しかけることにした。

「すいません、隣いいですか？」

「うん！　いいよ！」

返事をしてくれたのは、青い髪の背が低い少女だった。小学生かな？と思っていたが……。

「あ、こなた先輩！こんにちは！」

「お～唯ちゃんじゃないか！」

先輩！？この小さい子が！？もう…なんでもありだな……。
俺達はとりあえず空いている席に座ることにした。

「おや？　君は見かけない人だね？」

「あ、初めまして転校生の天堂恭介です」

「ああ！　君が噂の転校生なんだね！　ならば私たちも自己紹介しなければ、私は泉こなた！　で、こっちに居るみんなは私の友達で、みゆきさん、かがみん、つかさだよ！」

こなた先輩は友達を紹介してくれた。

「どうも初めまして、みゆきです」

「柊かがみよ！　よろしくね！　で、こっちが妹のつかさ」

「初めまして、柊つかさです！」

良い人たちばかりじゃないか！あのアホ女に見習わせたいよ。

「転校したばかりなんで色々とご迷惑をかけるかもしれませんが、よろしくお願いします！」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「みゆきは親切よね、ほら！　こなたもなんか一言言いなさいよ！」

「うむ、では一言……かがみんはツンデレだけどそこが萌ポイントだからね！」

「そんなこと教えんでいいわ！！！」

こなた先輩は面白い人だな。かがみ先輩の方は、ツインテールでいかにもツンデレキャラのようだな。

「……今、失礼なことを考えなかった……？」

「いえ、そんなことはありませんよｗｗｗ」

「なぜ笑う！？」

「かがみんの顔が面白いからだよｗｗｗ」

「やかましい！！！！」

面白い人たちだｗｗｗ

「ところでこなた先輩、その空いている席は誰か座るんですかね？」

こなた先輩の隣の席が空いていたので、気になって聞いてみた。

誰かの為に空けてあるのかな？

「うん？ああ、この席は友達の為に取ってあるんだよ」

友達か……こなた先輩の友達だから良い人なんだろうな。

「その人は良い友達なんですか？」

「うん！良い人だよ、由美ちゃんは！」

……なんだって！？

「……その由美ちゃんって、学園長の千堂由美？」

「うん、そうだけどどうしたの？」

「失礼します！」

俺はそう言って、その席から立ち去ろうとした。

「あれ？キョウ君どこ行くの？」

「向こうで食べる！」

「でも向こうには席が無いわよ！」

「なら床に座って食べる！！」

もうじきここに由美がやってくるということを聞いて、すぐに離れようと思った。由美と鉢合わせになったらややこしいことになるだけでなく、絶対に苛めてくるに違いない！とにかく逃げよう！！

だが、時すでに遅し。

『こなちゃ～ん♪　おまたせ～♪』

振り向くと、悪魔の女、由美がやってきた！！チャーハンを持って、手を振っている！これはマズイ！！俺はすぐに逃げようとしたが、由美が音速の速さで近づき俺の腕をつかんだ。速い！？こいつソニックか！？

「恭介発見♪」

捕まってしまった……。

「ね♪　一緒に食べよ♪　こなちゃんが席を取ってくれたから♪」

笑顔でそんなことを言うが、俺はもちろん嫌だ！こんな悪魔みたいな女と一緒にご飯なんて食べられるか！

「嫌だ！！」

俺ははっきり断った。

「そんなこと言わずに♪」

「嫌だ！！」

「ねえ、一緒に……」

「絶対嫌だ！！」

「お・ね・が・い♪」

「そんな声出しても無駄だぞ！！」

「貴様は黙って私と一緒にご飯を食べればいいんだよ、絞め殺すぞコラ」

「……ごめんなさい」

俺は土下座で謝った……。なに？男として情けないだって？バカヤロー！！由美はヤンデレのような目つきで言ったんだぞ！怖いんだよ！！

結局、俺と由美とこなた先輩達と唯達と一緒にご飯を食べることになった。

「こなちゃん遅くなってごめんね！」

「いいよいいよ、仕事終わったの？」

「まだ残っていたけど、あとはさわ子先生に全部押しつけちゃった♪」

あいかわらずの悪魔っぷり、さわ子先生が可哀そうだ……。

「そういえば恭介、学園はどうだった？良い学園でしょう♪」

「美女、美人が多い良い学園だ」

俺はありのままを答えた。すると由美は何かを期待しているような感じで。

「そう！　そうでしょう！！　で……あの……私のことは……どう？」

「お前は顔は可愛いが、中身は最悪だ」

そう答えると、由美の顔が真っ赤になり

「い、いやだなぁ／／／／／／か、可愛いだなんて／／／／／／もう！恭介ったら！！／／／／／／」

由美は持っていた熱いお茶を俺にかけた。

「ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーー！！！！！！！！　熱い！熱い！！！」

誰か！！助けて！！！

「あ～由美ちゃん顔が真っ赤だ～♪」

「もう！　からかわないでよ！！」

お前らそんな会話してないで助けろ！！

「もう、何してんのよ！　ほら、恭介君タオル」

「ありがとう…かがみさん……」

かがみさんはやっぱり優しいよ……。

「キョウ君と学園長って仲良いんだね」

「何言っているの唯！？　俺とこのアホ女が仲良いわけない……」

「恭介、はい♪あ～ん♪」

……え？由美さん何やっているんだい？由美は自分のスプーンを使って俺の麻婆豆腐を食べさせようとしていた。

「なに…？　これ…？」

「さっき……お茶をこぼして……恭介に悪いことしたから…そのお詫び／／／」

と、もじもじして言う由美は超可愛かった！！惚れてまうやろーーーーーー！！！と言いたいくらいの可愛さだった！！

「で、でも……いいの？」

「うん……いいよ……」

恥ずかしいがこんな申し出を断る奴なんて男じゃない！！唯達がガン見している。

「ハイ♪あ～ん♪」

「あ、あ～ん…」

パクリと食べた。

「おいしい？」

由美が感想を聞いてきた。

「うん！　おいし……ぎゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁーーーー！！！！！！！！　辛い！！　辛い！！」

なんじゃこの辛さは！！？辛すぎるだろう！！！！唐辛子を大量に入れているのか！？

「ここの麻婆豆腐は、とても辛いの♪」

「てめぇ！！　知っていて食わせたのか！？」

「うん♪」

この女はほんとに最低な悪魔だ！！可愛いと思っていた過去の自分を殴ってやりたい気分だ！！

「こなちゃん、大成功だね♪イエーイ♪」

「イエーイ♪」

もう嫌だこの人たち……。

「キョウ君大変だねぇ……」

「まあ…がんばれ…」

「わ、私たちも応援するから…」

「ファイト！恭介君！」

「が、頑張ってください…」

唯、律、澪、ムギ、あずにゃん、ありがとう……君たちが唯一の味方だよ…。

その後、由美とこなた先輩の精神攻撃続き、食事が終わった頃には俺の心と体はボロボロになった。

みんなと別れて一人部屋に戻ろうとしていた時、由美に呼び止められた。

「……なんだよ…」

「今日はお疲れ様♪」

「……それを言う為に来たのか…」

さっさと部屋に戻りたい……。

「明日、君の教室まで銀八先生が案内してくれるから」

「…あっそ」

もう由美はほっといて行こうと思っていた時。

「……ごめんなさい…」

あの由美が謝った!?

「…え?」

「恭介を楽しませようと思って色々したけど……やっぱり駄目だね、私…」

由美の顔が悲しい顔になった……こんな顔をするんだなこいつ……。今まで悪魔のような女と思っていたが、やっぱりこいつは根がいい奴なんだな……。

こいつはもしかして、俺が傷ついているんじゃないかと思っているのか…?

「転校生の君にこの学園は楽しいよって思わせようと思っていたけど……駄目だね、私…」

「……やめろ…」

「え?」

「そんな顔をするな」

とても嫌だった、この女の子がこんな顔をするなんて……俺には耐えられない……!

「ぜ、全然可愛くないんだよ／／／／とにかく、お前は笑っていろ！その顔の方が、お、俺は、好きだ……／／／／／」

そう言うと由美の顔は真っ赤になって俯いた。

そして、すぐに可愛い笑顔になった。

「恭介……ありがとう！！私もそんな優しい恭介が好きだよ！！」

「え！？」

「じゃあ、おやすみ！」

由美はそのまま走って行った。

「……え？す、好きってま、まさか…」

い、いや、あの女に限ってそんなことはないだろう……。

俺は赤面のまま部屋に戻ることにした。

こうして、慌ただしかった転校初日が終わったのであった。

第七話　チャーハンと麻婆豆腐、あなたはどちらを選びますか？（後書き）

恭介
「なんだ…？この気持ちは？由美のことを考えると胸がドキドキする…この気持ちっていったい…？」
天城
「何やっているんだ？」
恭介
「…なあ、作者…この小説はギャグ小説だよな！恋愛小説じゃないよな！！」
天城
「いきなり何言って…」
恭介
「いいから答えろ！！！」
天城
「……ギャグ小説だよ」
恭介
「だ、だよな…」
天城
「しかし、今後の展開次第で君と由美の関係が変わるかも」
恭介
「え！？どういうこと…」
天城
「さ～て、次回の無限学園は！！いよいよ二年Z組に突入だ！！そこで恭介が出会う生徒とはいったい誰！？では、また次回会いましょう！！！」
恭介
「あの…さっきの話はどういうこと？」

第八話　2年Z組～♪銀八先生～♪（前書き）

上条当麻の名ゼリフ

その幻想をぶち殺す！！

第八話　2年Z組～♪銀八先生～♪

「由美……君のことが好きだ！」

「恭介……」

「俺と付き合ってくれないか！！」

「……ごめんなさい…」

「ど、どうして！？」

「だって……私……」

「スーパードMロリコンKY変態クソ犬恭介なんて、興味ないもん♪」

《恭介の部屋》

「名前が長くなっている！！？　……って夢か…」

おはよう皆さん。天堂恭介です。最悪な夢を見ました……。俺が由美に告白するという夢です。まったく昨日由美があんなことを言うから、変な夢を見るんだ……。

“恭介……ありがとう！！私もそんな優しい恭介が好きだよ！！”

……好きだって、恋愛とかそういう意味で言ったんじゃないよな……？好きだと思っているなら、俺をここまで精神的に追い詰めるわけないし……。いや、好きな子ほど苛めたくなるという言葉どうり、俺が好きだから苛めているかもしれない……。由美は俺のことをどう思っているんだろ？とても気になってしまう……。

と、俺が考え込んでいる時。

『みっみっみらくる　みっくるんるん　みっみっみらくる　みっくるんるん♪』

突然、携帯の着信音が鳴った。

ていうか、なんだこの着信音……？

誤解のないように言っておくが、この着信音は俺が設定したものではない。この携帯は昨日由美からもらった物で、一切設定などしていない、つまりこの着信音は最初から設定してあったものだ。決して俺の趣味ではない。

携帯を開いて確認すると、メールが届いていた。

宛先人は……由美！？

メールの内容は……。

『恭介おはよう♪　いい天気だね♪　今日から学校だね♪　昨日も言ったけど、君のクラス二年Ｚ組までの道のりは銀八先生が案内してくれるから。それと……昨日はよく眠れたかな？私は……よく眠

れなかったんだ……君のことをずっと考えて、目をつぶっても君のことを考えてしまって……全然眠れなかったんだ……』

え!?由美がずっと俺のことを……？やばい!ドキドキしてきた!!もしかして……由美…お前…俺のことが……。

『何を考えてたかって？　それは……その……言ってもいいかな……？　恭介は、スーパードMロリコン変態クソ犬恭介とハイパーアホバカロリコン変態クソ虫恭介、どっちの名前がいい?』

なるほど、夜中俺のあだ名を考えて眠れなかったということか……ってあのアホ女!!!!何考えているんだ!!?っていうか、ロリコンと変態という言葉は共通しているんだな!!俺はロリコンでも変態でもない!!いい加減覚えろ!!

『そうだ♪　読者に聞いてみよう!　というわけで読者のみなさん!　スーパードMロリコン変態クソ犬恭介とハイパーアホバカロリコン変態クソ虫恭介どちらがいいか、意見をお願いしま～す!』

そんなことを読者に頼むなぁぁぁぁぁぁーーーーー!!!感想で『それよりもこんなあだ名はどうですか?』という意見が来たらどうするつもりだ!!?また変なあだ名に改名されちゃうじゃないか!!!

『じゃあ恭介!　良い一日を!!』

てめぇもせいで朝から最悪な気分だよ!!こんな奴がヒロインだなんてもう嫌だ!!!!

《無限学園・校門前》

『おはよー』

『おはようございます！』

『ごきげんよう』

『おはようございます！　西村先生！』

『うむ！　おはよう！」

『待ちなさい！！　今日こそ決着をつけてやるんだから！！』

『不幸だぁぁぁぁーーーー！！！』

『こらぁーー！！！　上条、御坂！　走るんじゃない！！』

『先生！　怒るところが違います！！　俺、御坂に殺されそうなんですけど！！』

『貴様が悪いんだから仕方がないだろう！』

『あんたそれでも教師か！？』

みんながさわやかな挨拶（一部不幸な出来事に巻き込まれているが）をしている中、俺のテンションは最悪だった……。

原因は言うまでもない、先ほどのメールだ。

これから自分のクラスに行くのだから、さわやかに行こうと思っていたのに……。
トボトボ歩いていると。

「おはよう、恭介君♪」

「ん……？　あ、麗しの女神！！」

「え！？　め、女神！？」

「すいません……おはようございます！！　フェイトさん！！」

愛しい女神、フェイトさんが居た！
フェイトさんと出会ったことにより、俺のテンションゲージはグ～ンと上がっていく！

「こんなところで会うなんて奇遇ですね！」

「そうだね♪」

フェイトさんの笑顔がまぶしすぎて直視できない！優しくて、スタイルもいいし、いい匂いがしそうだな……。
は！ここで出会えたということは、フェイトさんルートのフラグが立ったということか！！
ヨッシャーーーーーー！！！俺の時代が来たーーーーーーー！！！
俺は勝ち組だーーーーーーー！！！

「なに自分の世界に入っているんだお前は……」

「銀八先生!?　いつの間に!?」

「おはようございます!　銀八先生!」

「おはようさん、なのはが向こうで待っていたぞ」

「え!?　そうですか!?　ありがとうございます、銀八先生!じゃあね、恭介君!」

「あ…フェイトさん…」

フェイトさんがさっさと行ってしまう。俺よりもなのはさんの方が大事か……。

せっかくフェイトさんに会えたのに……おのれ!銀八!!

「銀八先生のせいで、フェイトさん行っちゃったじゃないですか!!」

「知るか、そんなことよりも…」

「そんなこと!?　銀八先生にとってはそんなことでも、俺にとっては重要なことなんですよ!!」

「めんどくせぇなこいつ……」

銀八先生呆れたようにため息をつく。

「とにかく、クラスに行くぞ」

「…わかりました」

山ほど文句があるが、ここで一つ一つ言っては遅刻してしまう。
俺は仕方なく銀八先生と一緒に二年Z組に行くことにした。

《二年Z組教室前》

「ここか……」

二年Z組も教室前までやってきた。教室自体は普通の教室だ。

「てめぇはここで待っていろ」

銀八先生がそう言うと教室に入っていき、俺は外で待つことになった。

しかしどんなクラスか気になる……。今のところ分かっているのは、唯、律、澪、ムギが居るということぐらいしか知らない。

俺は気になって扉に耳を当て、中の様子をうかがうことにした。

『おい、おめぇら！　席座れ！　……野田なにやっているんだ…？』

『この野郎がゆりっぺにセクハラしようとしていたからぶっ殺してやろうと思っているんだよ！！』

『いやいや！　僕はただゆりさんにこの前借りたノートを返そうと思って…』

『なんだと！？　よくもゆりっぺのノートを借りやがったな！！！』

『野田君！！　いい加減にしなさい！！』

『ヒナギクさん！？』

『止めるんじゃねぇ！！　生徒会長の分際で！！　怪我したいのか！！』

『とりあえずハルバートを下ろしなさい！』

『断る！！！』

『野田君下ろしなさい』

『ゆりっぺがそう言うなら…』

『従うんかい！！？』

……なんだろう……ものすごく家に帰りたくなってきた……。仮病使って帰ろうかなぁ……？

『それじゃあ坂本号令をかけろ』

『へ～い、起立！　れ…』

『ちょっと待て！　今日から、起立、礼、３ＤＳ発売おめでとう！　って言うぞ』

生徒全員

『……』

なんでやねん…いくら3DSが発売したからといって、その挨拶はないだろう……。

『よしやるぞ！　坂本号令！』

『……起立！　礼！…』

生徒全員

『3DS発売おめでとう！！』

『……よし！　つまらんから明日から元に戻そう』

生徒全員

『だったらやるなよ！！！！』

まったくそのとうりだ。

『連絡事項だ、今日からこのクラスに転校生がくる』

『あ！　キョウ君だ！！　キョウ君が来たんだ！！』

『キョウ君？』

『転校生のキョウ君だよ！！』

唯…ばらすなよ……。

『…先生、質問です！』

『なんだ？　ツンデレガンナー』

『…あの先生、私にはティアナっていう名前があるんですけど…』

『あっそ、で、なんだ』

『……あ、あのその転校生はどんな人なんですか？　噂だと学園長の奴隷になったって聞いたんですけど……』

まだそんな噂が広まっていたのか！？変な誤解を生まないためにも銀八先生、フォローを頼む！

『…ティアナそれは違うぞ』

『え！？　そうなんですか！？』

『ああ、なぜなら奴は…』

『ただの変態クソ犬だからだ』

「違うわボケェェェェェェェーーーーー！！！！！！！　なに変なことを教えているんだ、このバカ教師！！！　っていうか、俺は変態じゃねぇぇぇぇぇぇ――――！！！！」

俺は思いっきりドアを開いて、大声で言った！

あ……しまった……。

「やっほーーー！！　キョウ君！！」

「…や、やあ、唯……」

とりあえず唯に挨拶をした。しかし他の人達から冷たい視線が浴びせられた。何だこいつ……という目で……。

「おい、外で待っていろと言っただろう？　仕方ない奴だな…ほら、こっちに来い」

銀八先生がそう言うので、黒板の前まで行くことにした。

みんなが俺を見て。

『あれが転校生？』

『思っていたより普通だな…』

『あの人会ったことある…』

『奏（かなで）、会ったことあるのか？』

『食堂で会った……』

『何なんだ？　あのバカそうな男は？』

『お嬢様、失礼ですよ！』

『ティア、どんな人だろうね？』

『……』

『ティア？』

『雄二！　転校生だよ！』

『お前と似てバカそうな面だな』

『……女の子ではない…』

『ああ……３ＤＳ欲しい……』

などなど好き勝手に言っていた。

「それじゃあ、自分の自己紹介をしろ」

あからさまに面倒くさいから自分でやれと言っているように聞こえた。仕方なく黒板に自分の名前を書き、みんなに向かって言った。

「どうも初めまして、天堂恭介です！　皆さんよろしくお願いします！」

元気良く言った。第一印象は大事だからな。

「それじゃあ、このクラス全員の名前を恭介に覚えてもらう為に一人ずつ自己紹介してもらう。まずは新八から」

そう銀八先生が言うと、眼鏡を掛けた青年が立った。

「初めまして！　僕は志村新八！　よろしくね、恭介君！」

丁寧に自己紹介をしてくれた。良い人だな。

「それだけか新八？　他に無いのか？」

「いえ特には……」

「駄目だな、それだからいつまでたってもダメ眼鏡のまんまなんだよ」

「ダメ眼鏡ってなに！？　あんたずっと僕をそういう風に見てきたのか！！？」

なんか可哀相な人だな……。

「次は私のターンアルよ！　私は神楽アルよ！　よろしくな、変態小僧！」

「俺は変態小僧じゃねぇよ！！！」

チャイナ娘の子がそう言うが、俺は変態ではない！！

「気安く話しかけてくるな！！　変態野郎！！！」

「うるさい！！」

この子とは仲良くなれそうにない！

「次、桂！」

「先生！　このクラスには桂さんが二人も居るんですけど……」

「じゃあ、ヅラ！　自己紹介」

「だそうだ、ヒナギク君」

「君のことだよ！！」

「俺はヅラではない桂だ！」

「いいから、自己紹介しろ……」

銀八先生が急かすように言うと、長髪の男が渋々立ち上がり自己紹介をした。

「俺は桂小太郎だ。言っておくがヅラではなく桂だからな！　か・つ・ら！！！」

わかったから……しつこいな…相当名前のことを気にしているようだ……。

そして俺は一つ気になることを聞いてみた。

「桂君、君の隣いる地球外生命体はなに？」

「地球外生命体ではないエリザベスだ！」

どっからどう見ても地球外生命体にしか見えない。桂と同じくらいの背で、目は大きく、ペンギンみたいな姿をしている。

気のせいか……おっさんの足みたいな物が見えるんだけど……。

「よし、次」

銀八先生がそう言うと、今度は青い髪の女の子が立ち上がって自己紹介を始めた。

「スバル・ナカジマです！！　なのはさんから君のことを聞いていました！　でも変態なのは聞いていなかったな……あとでなのはさんに教えておきますね！！」

「教えんでもいい！！！　あと俺は変態ではない！！！！」

冗談ではない！なのはさんやフェイトさんに『恭介さんって実は…変態だったんですよ！』なんてことを教えたら、明日から俺に対する扱いが変わってしまうじゃないか！！

「ほら、ティアも！」

「わ、分かっているわよ！！」

スバルの後ろの生徒も自己紹介をするつもりだ。よし！ここは笑顔で接してみるか！何事も第一印象は大事だからな！

「ティアナ・ランスターです。よろしく…」

「うん！よろしくね、ティアナ♪」

「よ、よよよろしく……／／／／／／／／」

俺は笑顔で言ったが、ティアナが顔を真っ赤にしながら席に座っ

た。風邪でも引いているのか？
そして次に、執事の格好をしたさわやかな青年が立って自己紹介を始めた。

「どうも初めまして、恭介さん♪　綾崎ハヤテです。ナギお嬢様の執事をしています。あ、ナギお嬢様はこちらの可愛い女の子ですよ」

「ハ、ハヤテ／／／／／可愛いだなんて、人前で言うと恥ずかしいじゃないか／／／／／／／／」

なにこれ？ラブラブオーラみたいなものがナギから出ている。二人はまさか付き合っているのか？

「で、こちらの綺麗な女性が桂ヒナギクさんです！」

「ハヤテ君……自己紹介くらい私一人でできるから」

「しかも生徒会長ですよ！！　すごいでしょう！！」

「あの……ハヤテ君聞いてる……？」

「おい、ハヤテ！　ずいぶんとヒナギクを高評価するんだな……」

「なにを言っているんですか、ヒナギクさんは勉強も出来て、スポーツも抜群、剣道部の部長をしていて、しかも生徒会長ですよ！これだけ素晴らしい人は滅多にいないですよ！　お嬢様も見習ってもらいたいものなんですけど……ぐばっ！！！！」

ハヤテがナギに殴られた！？

「バーカ！　バーカ！　ハヤテのバーカ！！」

「おーい、済んだか？　じゃあ次」

ハヤテとナギの痴話喧嘩は放っといて、次の人が立ち上がり自己紹介を始めた。

「仲村ゆりよ、恭介君よろしくね♪」

声からにして、先ほどハルバートを振り回していた男に対し下ろすように言った人みたいだ。とても良い人なんだろうな。

「こちらこそ、よろし…オワァァァ！！？」

いきなりハルバートが俺に向かって飛んできたので、しゃがんで回避する！ハルバートは黒板に刺さった！

「危ないだろう！！　誰だ投げた奴！！！」

すると、目つきの悪い男が立ち上がって言った。

「貴様、ゆりっぺを好きになったなぁ！！」

はあ！？こいつはいったい何言ってんの！？

「いや、別に好きというわけじゃ…」

「なに！？　貴様、ゆりっぺに魅力がないとでも言いたいのか！！？　絶対許さん！！！　殺す！！！！」

めんどくさいなこいつ！！好きでも嫌いでも文句を言うのか！？

「まあまあ、野田落ち着け！　悪いな、いきなり驚かせて」

いきなり、別の男が割り込んできた。

「時間がないから、俺が説明するな、こいつは野田で、そこにいる二人は音無結弦と立華奏だ」

二人とも俺に向かってお辞儀をした。奏ちゃんと呼ばれた少女はどこかで見たことあるなと思っていたら、昨日食堂で会った子じゃないか。

「昨日会ったよね　？奏ちゃん」

「うん、会ったよ」

「ああ、じゃあ昨日言ってた順番を変わってくれた人ってお前のことだったのか…おかげで早くご飯が食べれることができたよ！　ありがとな！　俺は音無、よろしくな！！」

「ああ！　よろしくな！！」

音無は良い人そうだな。仲良くなれそうだ！

「おいおい！　俺を忘れるなよ！！　俺は日向だ、よろしくな！！分からないところがあったら遠慮なく言えよ、優しく教えてやるからな！」

優しく……？はっ！まさか！！

「お前……そっち系なのか……」

「ちげーよ！！！　なんでそうなるんだよ！！？」

「俺はそっち系の趣味はないからな！！」

「だから話を聞けよ！！！」

「おい、おめぇら！！　いつまで話をしているんだ！！　全然話が進まねえぞコラ！！！」

銀八先生が怒りだした。いや、放ったらかしにしていたから怒ったのかな？

「次は俺だな、坂本雄二だ。このクラスの学級委員を務めている」

体格のいい男が自己紹介を終える。

とその時、俺は不思議な光景を目撃した。

「よろしく、坂本！　ところで……澪の席の下に居る男は誰だ！？」

「へ？　……きゃあ！！」

澪が悲鳴を上げた！そりゃそうだ、澪の席の下でカメラを持った男が撮影をしていたのだ！まさか…あいつ！澪のスカートの中を撮影していたのか！？だとしたら、盗撮という立派な犯罪だぞ！！

「ああ、こいつのことを言ってなかったな、こいつは土屋康太、みんなからムッツリー二と言われている」

「そんな説明よりも、おい、お前！　なに澪のスカートの中身を盗撮しているんだ！！」

「……盗撮はしていない」

「嘘つけ！！　今、堂々と盗撮していただろう！！」

後で由美に報告しなければ！

「……学園長には内密に！　この写真、千円で売ってあげるから！」

「よし、買った！！！」

これで澪のパンツが拝めるぜ！！

「なに買っているんだ！！！」

澪にげんこつされ、写真は没収されてしまった！せっかく千円出したのに……。

「次はわしの番じゃの。わしは木下秀吉じゃ、よろしく頼むぞい！」

「よろしく！　君みたいな可愛い女の子がクラスメイトだと嬉しいな！」

「恭介よ、勘違いしているようだから言っておくぞ……わしは男じゃ！！！」

嘘つけ！君みたいな可愛い子が男であってたまるか！！

「そうだよ、恭介！　秀吉は女の子じゃないよ！」

え！？そうなの！？

「明久……おぬし…やっと分かってくれたか…」

「秀吉の性別は『女』じゃなくて、『秀吉』なんだよ！」

「意味がわからんわ！！　わしは男じゃ！！！」

なるほど…『秀吉』という性別なのか…よく覚えておこう。

「次は私ですね。初めまして♪　姫路瑞希です！　よろしくお願いします！」

可愛くて、優しい子だなぁ…基本的にこのクラス可愛い子が多いと思う。

そして次はポニーテイルの女の子が立ち上がって自己紹介を始めた。

「はろはろ～♪　ウチは島田美波よ！　趣味は吉井明久を殴ることです♪　よろしくね！」

その趣味は直した方がいいと思う……男にもてないよ……。

「なんか、失礼なことを考えなかった？」

「い、いやそんなわけないじゃないか！」

「さて、次は僕の番だね」

そう言って、アホそうな青年が立ち上がり自己紹介をした。

「よろしく！　僕の名前は…」

「こいつはバカだ」

「雄二！！　僕には吉井明久っていう名前があるんだよ！！」

「バカは事実だろ」

「ちょっと黙ってよ！！　えっとね…恭介、僕の名前は…」

「言わなくてもわかるよ、バカの吉井明久だろ、覚えたから」

「違う！！！　バカじゃないもん！！」

バカだろ。

「…で、私たちは…」

「唯たちは知っているからいいよ」

「えーーーーーーー！！！」

唯はがっかりしていたが、なぜか澪は安心していた。みんなの前で自己紹介するのは嫌だったみたいだ。

とにかく、これでこの二年Z組の生徒の名前を覚えることができ

た。キャラが濃いせいか、すぐに覚えたぞ。

「よし、これで自己紹介を終わる！　というわけで、恭介、席に座れ」

「席が分からないんだけど……」

「ティアナの隣が空いているから、そこに座れ」

「え！？　私の隣ですか！？」

ティアナがすごく驚いていた。俺が隣に座るのは嫌なのか…？

「もしかして嫌？」

「い、いや！　そういうわけじゃないけど……私としては……その……嬉しいというか……なんていうか……／／／／／／／／」

ん？よく聞こえないな……まあいっか、文句は言ってはいないことだし。

「じゃあ、授業始めるぞ！」

これからこのクラスで勉強をするんだな……。

これからの学園生活が楽しい生活になるんじゃないかと、この時はそう思っていた。

第八話　2年Z組～♪銀八先生～♪（後書き）

天城
「今回は長く書いてしまった…」
恭介
「この2年Z組の生徒達といっしょに勉強していくんだな」
由美
「どんな授業になるんだろう……楽しみ！」恭介
「楽しい授業になればいいんだけど……」
天城
「あの銀八先生が授業するんだぞ……」
恭介・由美
「「……」」
天城
「……さて、次回どんな授業になるんでしょうか！？また次回お会いしましょう！！」

第九話　おい、授業をしろよ（前書き）

御坂美琴の独り言

ねえ？超電磁砲（レールガン）って知っている？

第九話　おい、授業をしろよ

《二年Ｚ組教室》

朝の朝礼が終わり、さっそく一時間目の授業が始まる。しかし、俺は不安だった。これから始まる授業がまともに始まるのか気になっていた。

そしてその不安は的中した……。

《一時間目・国語　担当教員・銀八先生》

「おめぇら、授業を始めるぞ。教科書の４５ページを開けコラ」

乱暴な言い方で、教科書を開くように指示する銀八先生。

こんな先生で授業が進むのか……？そんなことを俺は思っていた。

「よし、スバル！　一行目から読んでいけ」

「はい！」

スバルが元気良く返事をして、席から立ち、読み上げようとする。

「えっと…わ…吾輩（わがはい）は…ね…猫である。名前はまだ無い。どこで生れたかとんと……み？……み…み…？ねえティア、これ何て読むの？」

「見当（けんとう）」

「見当がつかぬ。な…何でも…う…薄暗いじめじめした所でニャーニャー…な…泣いていた事だけは記憶している。…わ…吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番……一番……一番……？ねえティア、これ何て読むの？」

「獰悪」

「一番獰悪な…しゅ…種族であったそうだ。この書生というのは時々…わ…我々を捕えて煮て食うという話である……ねえティア！　猫って食べれるの！？」

「うっさいスバル！！　いちいち私に聞くな！！！」

「お前ら、うっせぇよ！！」

大声を上げたティアナに対し、注意する銀八先生。

「す、すいません……」

「それとスバル、あとで漢字のドリルを渡すから、それを見て勉強をしろ」

「はい……」

二人ともしょんぼりしていた。

「じゃあ、スバルの代わりに……野田読め」

指名された野田は、黙って立ちあがり、読み上げようとした。

「……吾輩はゆりっぺである…」

「はい、ストップ」

読み上げている最中に、銀八先生に止められて、キョトンとする野田。止められた理由は言うまでもない。

「なんかおかしいところがあったか？」

「おかしすぎるわ。なんでゆりっぺの名前が出てくるんだ？」

「先生知らないのか？　これは『吾輩はゆりっぺである』というゆりっぺの素晴らしさを書いた作品だぜ。あの夏目漱石が書いた作品だろ？」

「そんな作品、夏目漱石は書いてないわ」

とりあえず野田、夏目漱石に謝りなさい。

銀八先生はやれやれと首を振り。

「……もういい、野田座れ」

野田は納得のいかない表情で座った。

「仕方ない、ムギ、代わりに読め」

「はい！　先生！」

元気よく返事をして、立ち上がって読み上げる。
ムギなら大丈夫だろう……。俺はそう思った。

「この事件を解決するには、この密室トリックを解かなければならない！　だけど必ず解いてみせるぜ！！　じっちゃんの名にかけて！！！！」

「おーーい！！！！　なに読んでんだ、てめぇ！！！！」

「夏目漱石の代表作『吾輩は金田一少年である』です！」

「そんな作品ねーよ！！　お前ら、『吾輩は猫である』を見たことないのか！！！？」

野田・ムギ
「「ありません！！」」

「胸張って言うな！！」

全然授業が進まねぇよ……。

《二時間目・数学　担当教員・西村先生（鉄人）》

「……であるから、この計算式の出し方は…」

数学担当の先生は西村先生だった。顔は怖く、みんなからは鉄人と言われ、恐れられている。だが、授業についてはまともだった。
説明は分かりやすく、テストに出る重要なポイントを教えてくれたりと、まったく問題はなかった。

これでまともな授業を受けられるな……そう思っていた俺だったが……。

ふと横を見てみると、明久と雄二がゆっくりゆっくりと、教室から出ようとしていた。あいつら何やっているんだ？と、思っていたその時。

「吉井、坂本！　動くな！！」

西村先生が振り返らずに言った。

まさか、気配だけで分かったというのか！？だとしたらこの先生はある意味すごいかもしれない。

「ば、ばれた！？」

「この俺の授業から逃げ出そうとはいい度胸じゃないか！！」

西村先生が鬼のような顔になった。あまりの怖さに後ろの席にいた澪がガタガタ震えていた。

「貴様ら、補習室へ連行だ！」

補習室とは、その名のとおり、補習を受ける為の部屋である。西村先生の補習授業は地獄らしい。

「冗談じゃない！　雄二逃げよう！」

「おう！」

二人は教室から出て、逃げ出した。

「待たんか貴様らぁぁぁ！！　他の生徒はここで自習するように！吉井、坂本！　待たんかぁぁぁぁぁ！！」

西村先生は逃げた明久と雄二を追いかけに行った。

授業時間、たったの１０分。残りの時間は自習。

全然進まねぇ……。

《三時間目・理科　担当教員・木山春生先生》

「では、今から実験を行うので、各班のものは、実験の準備をするように」

理科の授業では、理科室で行い、担当の先生は木山先生だ。
今度こそまともな授業になりますように！俺はそう祈った。

実験行う為、各班の生徒は実験道具を取りだした。ちなみに俺の班には唯がいて、実験道具は唯が取りに行くことになった。

「落とすんじゃねーぞ」

「大丈夫！」

唯が持っているのは、薬品なので落として割ったら大変だ。唯は慎重に運んでいた。これなら大丈夫……と思っていたが。

「俺が持っていくって言ってんだろうが!!　さては貴様、ゆりっぺに良いところを見せて惚れさせようとしているのか!?　冗談じゃない!　離せヅラ!!」

「ヅラではない桂だ!!　これを持っていくのは俺だ!!　ストーカー男はひっこんでいろ!!」

唯の横で、ヅラと野田が実験道具の取り合いという、まったくくだらない争いをしていた。おい、そんなところで喧嘩して唯にぶつかったら……。

「離せ!!　コラ!!」

「のわ!?」

「きゃあ!!」

野田がヅラを突き飛ばし、ヅラが唯にぶつかり、唯の持っていた薬品が木山先生の服にかかった。

「おい唯、大丈夫か!?」

俺は唯に駆けつけ、体を起こした。

「うん、大丈夫」

「よかった」

どうやら怪我はないようだ。そして俺は野田とヅラの二人に向かって。

「お前ら何やっているんだよ！！」

「「だってこいつが…」」

「お前らは小学生か！！？」

そう言ったあと、唯が木山先生に駆けつけ。

「大丈夫ですか！？　先生！！」

「ああ、大丈夫だよ」

と、木山先生は言ったが、服は薬品によってびちゃびちゃだった。

「でも、薬品ですよ？　大丈夫なんですか？」

もし人体に影響が出る薬品だったらやばいなと思い、先生に聞いてみると。

「この薬品は、人体に影響はないから心配することはない」

そう言ったので安心した。

「でも服が…」

「ああ、それも心配ない、今日はいい天気だから、洗って外に干せば乾くだろう」

へ？洗って、乾かす？

木山先生はいきなり服を脱いで、ブラジャー姿になった！

「ちょ！？なにやっているんですか！！？」

俺は木山先生にそう尋ねると。

「いや、だから洗わないといけないから、脱がないといけないじゃないか？君はなにを言っているんだい？」

君はバカかね？といった感じで言ったが、男子の目の前で脱ぐ行為が俺には理解ができなかった！

「……ブ、ブラジャー……！！？　ブシャァァァァァァァァ！！！」

いきなりムッツリーニが大量の鼻血を出し倒れた！！？

「おい！　大丈夫か、ムッツリーニ！？」

「……だい…大…丈夫…」

いやいや！この鼻血の量、致死レベルじゃないか！？止まらないんだけど！！全然大丈夫じゃないぞ！！！

『きゃあぁぁぁぁぁ！！　土屋君！！』

『おい！　大丈夫なのか！？』

『明久君！　すぐに保健室に行って、土屋君の輸血パックを持ってきて！！』

『わかったよ、ゆりさん！！　死ぬんじゃないぞ、ムッツリーニ！！！』

『病院に連絡しろーーー！！』

『先生を！！　シャマル先生を呼んでこーい！！！』

『血が、鼻血が止まらないよーー！！』

『……大…丈夫だ…！』

『動くな！！　明久はまだか！！！？』

『ヅラ！　お前のパンツをよこせ！！』

『なにするつもりだよ！？』

『ヅラではない、桂だ！！』

『ティアーーーー！！！　どうしようーーーーー！！！！』

『落ち着きなさい、バカスバル！！　とりあえず警察…いや、自衛隊…？いや、タイムマシンを探すのよ！！！』

『お前が一番落ち着け！！！！』

『血が怖い』

『澪ーーー！！！　しっかりしろーーーー！！！』

『明久はまだかーーーー！！！！』

教室は大パニックになった！あまりにも混乱が酷く、ヅラのパンツを取ろうとする人が現れただけでなく、澪まで壊れたようだ！！

しかし、事の発端となったこの人は……。

「君たち、少しは落ち着きたまえ。まったく…なぜそんなに騒いでいるんだ？」

全員
『あんたのせいだろうが！！！！！』

この人、自覚がないのか！？

その後、ムッツリーニはなんとか一命を取り留めた。

全く授業が進んでいない……。

そして……。

その後の授業では……。

《四時間目・音楽　担当教員・さわ子先生》

音楽では、さわ子先生がギターを持つと、豹変してしまい……。

「オマエラガクルノヲマッテイタゼーーーーー！！！！！」

全然授業にならず……。

《五時間目・歴史　担当教員・桂雪路先生》

歴史の授業では、ヒナギクの姉、桂雪路先生が担当したが、いきなり酒を飲み始めてべろんべろんの状態で授業を始めた……。

「ヒック、じゃあ授業を始めるぞーーーー！！！　ヒナ、とりあえず本能寺の変についての感想を原稿用紙五枚ぐらいに書いてｗｗｗ」

「ちょっと、お姉ちゃん！！　ちゃんと授業をしてよ！！」

結局、全然授業をしなかった……。

《六時間目・再び国語　担当教員・もちろん銀八先生》

「またやるのかよ……めんどくせーよ……よし、この時間は自習だ」

「おい!!　授業しろよ!!!」

「うるせーな、恭介は……仕方ねーな……じゃあ、モンハンのリオレウスの倒し方についての授業をする」

「国語の授業をしろ!!!!」

「先生!　それよりもイビルジョーの倒し方についての授業をしてください!!」

「先生!　『これはゾンビですか?』について語り合いましょう!」

「バーカ、そんなことより四月から放送するアニメ銀魂について語り合うぞ、てめぇら!!!」

「授業をしろーーーーーーーーーーーー!!!!!!」

結論から言うと……。

今日はまったく授業をしていない……。

大丈夫なのか……このクラス……？

第九話　おい、授業をしろよ（後書き）

天城
「カオスだ…」
由美
「カオスだね…」
恭介
「カオスだよ…」
天城
「今回はいろんな先生が出てきたけど、どうだった？」
恭介
「とりあえず、授業が進まないんだけど……」
天城
「まあ気にするなｗｗｗ」
由美
「木山先生が初登場だったね♪」
天城
「あの人は絶対出そうと思っていたからね！個人的に面白いです。あの脱ぎ女はｗｗｗ」
由美
「あっそ……」
天城
「さて、次回は！恭介のもとに由美からの仕事がきます！いったいどんな仕事なのか！？では、また会いましょう！！」
由美
「恭介♪次回は覚悟してね♪」
恭介
「え！？」

第十話　恋も部活も青春だぜ！（前書き）

作者の独り言

今回、東日本大震災にて被害がかなり酷いです。犠牲者は万人単位になるんではないかということも聞きました。国や各地域では節電の呼びかけや、募金活動など行っていますが、この小説を読んでいる皆さんも協力しませんか？ちょっとだけでもいいので募金をしてみませんか？ちりも積もれば山となるという言葉があるように、少しのお金でもいずれ被災者を助ける大金になるかもしれませんよ？僕もできるだけ協力して行こうと思っています。皆さんもどうかご協力をお願いします！

独り言コーナーでこんな勝手なことを言ってすいません。

第十話　恋も部活も青春だぜ！

《放課後・二年Ｚ組教室》

「……んじゃ、これでホームルームを終わる。坂本！　号令」

「はい。起立！　れ…」

「おっと、待て。今度は起立！　礼！　アニメ銀魂よろしく！　と言うぞ」

生徒全員

『……』

たぶん、みんなが思っていることは俺と同じだろう……。

なんでやねん！！

この人はよほど４月から放送のアニメ銀魂を宣伝したのか！！しかし逆らったところでこの人の意見が変わるわけでもないので、俺達は仕方なく。

「起立！礼！」

生徒全員

『アニメ銀魂よろしく！』

どうだ！ちゃんとやったぞ！これで文句は言えまい！

銀八先生の反応をみると。

「なにお前らマジになってやっているの。バカじゃねーか。先生の言うことなんでもかんでも鵜呑みにしてんじゃねーよ。少しは、『先生ふざけないでください！』とか言えねーのか？　まったく情けない生徒だなぁ……。ともかくこれにてホームルーム終了だ。じゃあ解散！」

先生じゃなかったら殴り飛ばしプロレス技をかけてやるところだ。

とにかく、これで今日の授業は終わりだ。

「恭介！　帰ろうぜ！」

日向と音無が近づいてそう言ったので、俺は荷物をまとめ、いっしょに帰ろうとした。

その時だった。

『俺が結婚してやんよー！　俺が結婚してやんよー！』

いきなり俺の携帯（由美から貰ったものだが）の着信音が鳴った。それにしても、なんだこの着信音？今朝のとは違うじゃないか。まさかこの携帯、着信するたびに着信音が変わるのか！？だとしたら、なんて高性能な携帯だ！

しかし、気になることが一つ。今の着信音、日向の声だったような……？

「おい！　今の着信音なんだよ！？」

いきなり日向がすごい勢いで俺に問い詰めてきた。

「いや、これ…由美からもらった携帯で、なんか着信するたびに着信音が変わるらしい。だから俺はなにも設定してないぞ…」

そう日向に説明したが、当の本人は。

「あのクソ学園長！！！　俺の告白を録音していたな！！！　なんてこった……。恭介！！　今すぐ設定を変えるんだ！！！　ていうか今の着信音を消去しろ！！！！」

必死の形相で俺の頼み込む日向に対し、俺は携帯の設定を変えようとするが。

『着信音の設定は変えられません』

というメッセージが出るだけで、設定が変えられない。
ならば着信音を消去しようとするが。

『消去するにはパスワードが必要です』

というメッセージが出てきた。もちろんパスワードなんて知らない。

「日向、無理だ……」

「ちくしょーーーーーー！！！！」

日向の絶叫が教室に響いた。

ん？ていうか……。

「日向、告白ってどういうことだ？」

「え！？そ、それは……」

こいつ……まさか！？

「お前、彼女でもできたのか？おめでとう幸せに！」

内心、リア充爆発しろと思っていたが、友達に彼女ができたんだからとりあえずお祝いの言葉を送らないとな。

「で、式はいつ挙げるんだ？」

「話が飛びすぎるんだよ！！　それとこのクラスでそんなことを言うんじゃない！！！！」

なんでだよ？彼女ができたんだからよかったじゃないか？

そう思っていた時。

「日向……」

突然後ろから日向を呼ぶ声がしたので、俺と日向は振り返ってみると……。

謎の覆面集団が現れた！！？

覆面をかぶり、黒いマントで体を隠し、手には鎌やロウソクや鞭などを持っている。覆面集団は素早い動きで日向を囲んだ。

「な!?　異端審問会か!!?」

日向は驚愕な表情で彼らを見た。

そして、集団の中からリーダーらしき人物が現れた。

「日向、貴様、彼女ができたとは本当か?」

「え、ええっと……あの……」

「明久!　今すぐ異端裁判の準備だ!!」

「イエッサー!」

覆面をかぶった明久は、すぐに異端裁判の準備にかっかた。明久が用意していたのは、ライターと油だった。

「おい!!　いったい何の準備をしているんだ!?　死刑か!?死刑の準備をしているのか!!?　だいたい俺は無実だ!!　彼女なんていない!!!」

「だが今の着信音は…」

「あれは学園長の陰謀だ!!」

あくまで彼女はいないと言う日向であったが。

「大変です、須川会長！！　さきほどC班からの連絡で、一年生のユイさんが日向に告白されたという噂が一年生の間で広まっているらしいです！！」

「裁判中止！！！　裁判なしで日向を死刑確定とする！！　火あぶりの準備をしろ！！！」

「待て！！！　あれはユイを元気づけてやろうと思って、俺が言った冗談だ！！　告白ではない！！！」

「ということは日向、お前冗談で好きでもない人に告白したのか？」

「え！？　いや……その…あの……好きではないけど……ちょと気になっているというか…」

「死刑決定！！！！　連れて行け！！！！」

「ちょと待て！！　やめろ！！　おい、音無、恭介！！　助けてくれーーーーー！！！！」

こうして日向は連れて行かれた……。とりあえず俺と音無は日向が連れて行かれた方向に向けて、合掌することにした。日向お元気で……君のことは忘れないよ……たぶん……。

「ところでお前なにか着信が来たんじゃないか？」

音無にそう言われ、俺は携帯を確認した。メールだ。しかも宛先人は由美だった。

『恭介、授業お疲れ様♪疲れているところ悪いんだけど、さっそく

君に仕事があります。学園長室に来るように♪』

前に言っていた、由美のお仕事の手伝いか…。断ると面倒だから、行くか。

「悪い音無、先に帰ってくれ」

「ああ。じゃあな！」

音無は教室から出て行き、俺は荷物を持って学園長室に向かう。ゆっくり行こうと思っていたが、メールの内容をよく見ると続きがあった。

『ちなみに時間がないので、五分以内に来ること。五分以内に来なかったら、君の部屋に大量のエロ本が置いてあるって、フェイトさんにばらすよ♪』

俺は全力疾走で学園長室に向かった！

《学園長室》

「いらっしゃーい♪　早かったね」

「フェイトさんに知らせるわけにはいかないからね……」

フェイトさんにばれたら二度と会話ができないかもしれないからな。

「で、仕事って何だ？」

さっそく仕事内容について確認する。

「はいこれ♪」

由美は二枚の紙を俺にくれた。一枚はメモ用紙で、もう一枚は部活表と書かれた紙である。部活表には様々な部活の名前と活動内容が書かれていた。

「これでいったい何をしろと？」

「今日の君の仕事は、部活をやっている人たちと会って、その部活の悩み事や不満なこと、こうしてほしいことなどを聞いて、メモ用紙にその内容を書いてほしいの♪」

「つまり、所属している部活について、みんなの意見を聞いて来いってことか？」

「そのとうり♪」

部活の悩みを聞いて、その悩みを解決しようってことか。まあそれぐらいの内容なら引き受けるか。

「わかった。引き受けるよ」

「ありがとう♪」

いきなり由美が抱きついてきた！だから恥ずかしいって！！！

「おい、やめろ！　こんなところを異端審問会っていう連中に見つかったら、俺火あぶりになるんだぞ！」

「それなら大丈夫だよ♪」

え？なんで？

「異端審問会には前もって言っているんだもん。私と恭介の仲を引き裂こうとしたら、ブ・チ・コ・ロ・ス♪って言っておいたんだよ♪だからこんなところを見られえても大丈夫♪」

異端審問会でも逆らえないなんて、よっぽど学園内で恐れられているんだな、由美は……。抱きついている由美を離し、部屋を出ようとした。

「じゃあ行ってくるから」

「うん♪　いってらしゃい、あ・な・た♪」

冗談でもやめろ、恥ずかしいだろ……。

《部室棟》

ここ部室棟ではその名のとうり、部屋のほとんどは部室である。まずはここに居る部活から聞いていこうと思う。

まず最初に向かおうと思っている部活は。『ＳＯＳ団』である。

しかしＳＯＳ団って、いったい何をする部活なんだ？ＳＯＳということは、誰かを助けたりするボランティアみたいな部活かな？
俺は気になって、部活表に書かれているＳＯＳ団の内容をよく見てみると……。

『ＳＯＳ団とは、世界を、大いに盛り上げる、涼宮ハルヒの団！！略して……ＳＯＳ団である！！』

いやいやおかしいだろ……。何だこの部活……。世界をどう盛り上げるつもりだ？涼宮ハルヒの団と書いてあるということは、この涼宮ハルヒという奴がボスなのか？まあそういった細かいところは、会ってみればわかるだろう。

そして俺は来た。目の前には『ＳＯＳ団部室』と書かれているドアがある。とにかく入るとしよう。

コンコン！

『は～い。どうぞ』

ノックをして中の住人に来訪を知らせると、返事が返ってきたので、部屋に入った。

「失礼します」

その部屋にいたのは、四人の男女だった。

真ん中のテーブルに二人の男子がいて、一人はいたって普通の青年、もう一人はさわやかな笑顔が特徴の青年だった。窓際の方には女の子が一人本を読んでおり、こちらを見ていない。そしてもう一

人の女の子はなぜかメイド服を着ていた。なんでメイド服？ここはＳＯＳ団の部室だよな？メイド喫茶じゃないよな？
ますますこの部活が分からなくなってしまった。

「あの……どちらさま？」

メイド服の女の子はそう聞いてきた。まずはこちらの自己紹介をしなければな。

「えっと…どうも。俺は天堂きょ…」

「ハルヒキック！！！」

「ぐばっ！！」

いきなり横から女の子が俺の頭にドロップキックくらわせてきた！！俺はそのまま廊下に吹っ飛ばされた！

「いてて……。いきなり何しやがる！！」

俺は痛む頭をさすりながらキックをしてきた女の子に文句を言う。

「あんた何者！？　さてはＳＯＳ団を乗っ取りに来た悪の組織ね！！」

んなわけあるか！！

「おい、ハルヒ。いきなりキックをするもんじゃない」

「キョン、分かってないわね！　戦いにおいて先制攻撃は重要なの

よ！　先手を打った方が有利なのよ！」

「あっそ……」

俺はとりあえず立ち上がり、その場の状況を分析した。

えっと…この男がキョンって名前で、いきなり俺にドロップキックをしてきた女の子はハルヒって名前か。

……え!?ハルヒ!?まさかこの子が涼宮ハルヒ!?

俺は確認の為に聞いてみた。

「もしかして、君が涼宮ハルヒ？」

「ん?そうだけど……。なんであたしの名前知っているの？」

あ、そうか事情を話していなかったな。

「えっと、俺の名前は天堂恭介。実は…」

「まさか!?　私のストーカー!?　嫌！　近寄らないで!!」

なんでだ!!俺はストーカーではない!!そんな最低な男にはならないと俺は決めているんだ!!!

「誰かーー!!!!　来てーーー!!!!　ここにストーカーがいるわよ!!!!!」

「おい、話を聞け!!!　俺はストーカーじゃない!!　くそっ！めんどくさい女だな!!!」

「すいません……。そんな奴ですが、一応ＳＯＳ団の団長です……」

キョンと呼ばれた男はそう説明した。

そして部室内にて、俺は事情を説明した。

「なんだ学園長のお手伝いさんか、それならそうと早く言えばよかったのに」

いや、あんた俺の話を聞こうとしなかっただろう！

「ハルヒ、とりあえず自己紹介をしておいたほうがいいんじゃないか？」

「キョン、あんたにしてはなかなかいいことを言うじゃない！　確かにこの男に私の偉大さを理解してもらう必要がありそうね！」

お前のどこが偉大だ！？

そしてハルヒはイスから立ち上がり、腰に手を当てて、どや顔で自己紹介を始めた。

「私の名前は涼宮ハルヒ！　この偉大なＳＯＳ団の団長よ！　で、そこに座っているのは副団長の小泉君！　あっちで本を読んでいるのは有希！　このメイド服を着ているのは、みくるちゃん！　そして雑用係のキョン！　どう？　このＳＯＳ団の素晴らしさがわかったでしょう？」

いやいや、自己紹介しただけじゃあ偉大さとか、素晴らしさとかわからないよ……。

「とりあえず、この部活がなんなのか、そこから説明しろ」

「仕方ないわね…。小泉君！　説明しちゃって！」

「分かりました」

すぐさま小泉が立ち上がり、説明し始めた。

「我々ＳＯＳ団は宇宙人、未来人、超能力者などといった人達と友達になって、世界を大いに盛り上げることを目的としています」

「分かったかしら？」

うん……さっぱりわかんないね。とりあえずわかったことはこの女は由美みたいなめちゃくちゃな人だということだけ。

「宇宙人や未来人、超能力者、異世界人、魔法使い、未来のネコ型ロボット、幽霊、ゾンビ、ネクロマンサー、スーパーサイヤ人、魔王、ポケモンなどと友達になったら面白いじゃない！　世界が盛り上がるじゃない！！」

一部友達になっちゃいけない奴がいたぞ！　ていうかとんでもない野望を持っている女だな！

「ちゃんと分かったの！？　分かったなら返事をする！！」

「ハイハイ」

俺は適当に返事をする。ああ……もう帰りたい……。さっさと仕事を終えて帰ろう……。

「とりあえず、この紙に今部活で悩んでいることとかを書いてくれ」

メモ用紙をハルヒ渡し、ハルヒはさっそく書き始めようとする。

「悩み事ね……ねえキョン！　なんか悩みとかない」

「横暴な団長にいつも困っていますと書いてくれ」

なるほど、真っ当な意見だ。この人は毎度毎度、このハルヒの横暴に苦しんでいたということとか……。その気持ちわかるぞ！俺も似たような上司（由美）に苦しんでいるよ！

「キョン！　君とは仲良くなれそうだ！！」

「はい？　なんのことですか？　ていうかそのキョンという名前はあだ名で…」

「あだ名か！！　では俺も君のことをキョンと呼んでもいいかね！？」

「はあ…。別にいいですけど……」

キョンと友達になった！

良い友達ができた！同じ苦しみを味わっている同士と友達になれてとても嬉しいよ！安心しろキョン！その悩み、必ず由美に伝えて……。

「却下！　とてつもない詰らない意見ね！　学園長に伝える価値もないわ！！」

おいコラ！！！重要な悩みだろ！！なにてめぇが勝手に却下してんだ！！！

「小泉君は？　なんか悩みはない？」

「いえ、僕は特に悩みや不満もありませんよ」

本当か！？目の前にいる女とか不満じゃないのか！？こき使われているとかないのか！？

「有希は…」

「ない」

即答かよ！？

「じゃあ、みくるちゃんは？」

「えっと、私は…」

「メイド服だけじゃなく、チャイナ服やナース服も着てみたいので、用意してくださいっと…。ちゃんとみくるちゃんの悩みを書いておいたわよ！」

「そ、そんな悩みありません！！　か、書き直してください！！！」

「勝手にお前が決めるな！！　ちゃんと真面目にやれ！！！」

まったく！これじゃあ終わらないじゃないか！俺は早く帰りのに

……。

「じゃあ私の悩みね！　とりあえずこの学園にいる超能力者や魔法使いはつまらないわ！！　片手で世界を滅ぼす魔王とか、百万艦隊を持っている宇宙人とか、そういう奴を入学するべきだわ！！」

そんな奴がこの学園に来てたまるか！！！この意見はあとで却下しておこう！！

とりあえず……これでこのＳＯＳ団の悩みや意見を聞けたな…。まだ他の部活も回らないといけないのに……結構時間がかかってしまった。

「じゃあ、もう俺行くな…」

俺はさっさと行こうと思ったが、いきなりハルヒが俺の腕を掴んできた。

「あんた、転校生ということは、まだ部活に入っていないよね？」

「そ、そうだけど……」

するとハルヒはニヤと笑顔になった。嫌な予感がする……。

「あんた、ＳＯＳ団に入りなさい！」

「はあ！？」

いきなり何を言っているんだこの女！？

「今、部員募集中なの！あんた入りなさい！！これは命令よ！！！」

ふざけんな！！なんでお前に命令されなきゃいけないんだ！！どこに入るかは俺が決めるんだから！！

「お断りだ！！部活だったら自分で決める！！なんでお前に命令されて入らないといけ…」

「ちなみに入ってくれたらこれあげる♪」

そう言うと、ハルヒは鞄からなにかを取りだそうとした。まさか…賄賂か！？ふん！金を出して俺を勧誘しようたってそうはいかないぞ！！絶対に入るもんか！！！

「はいこれ！」

「なにを出されても俺の気持ちは変わらな…」

ハルヒが取りだしたの写真集で、タイトルは……。

『フェイトさんの秘密の写真集』（R－18指定）

な……な……な…な、なななななななな、なんだこれはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！

フェ、フェイトさんのひ、秘密の写真集！！？しかもR－18指定！！？と、ということは……フェイトさんのあんな姿や、こんな

姿が見られるのか!!?

「入らないの？　じゃあこれはいらない…」

「ま、待て!!」

「なに？」

「よ、よく考えてみれば、ＳＯＳ団って面白そうじゃないか！　宇宙人や未来人や超能力者と友達になるなんて素晴らしいじゃないか!!」

「じゃあ入るの？」

「え、えっとだな……。今は仕事中だからあとで考える。けしてその写真集を捨てるなよ!!」

「うん！　わかった！　待っているわよ!!」

読者のみんなに言っておくが！俺は別に『フェイトさんの秘密の写真集』が欲しいから、ＳＯＳ団に入るんじゃない!!そう！興味を持ったからだ!!ＳＯＳ団は面白そうじゃないか!!!けしていやらしい考えなんてない!!絶対にないからな!!!

さあ次の部活へ行こう！次はどんな部活かな？

ていうか今日中に終わるのか……？

第十話　恋も部活も青春だぜ！（後書き）

由美
「作者あまり元気がないね……」
天城
「こう毎日、犠牲者の数のニュースを見ていると鬱になってしまう……」
恭介
「確かにな…」
天城
「俺にもできることはないのかと思ってしまうことがあるんだよね…。とりあえず俺ができることは募金活動に協力することしかない」
由美
「それでもいいと思うよ……。そのお金で人が救われるかもしれないからね」
天城
「そうだな…」
恭介
「ほら！暗い顔をするな！元気よく次回について言えよ！！」
天城
「ああ、そうだな！！さて次回は色々な部活、部員が登場！！誰が出るだって？ヒントは『うるさい！うるさい！！うるさい！！！』『じゃあ先輩、私と結婚してくれますか？』というセリフを言った人達が出るよ！わかるかな？それでは次回また会いましょう！！」

第十一話　ネコ耳とメイド服は最高の発明品だ！　ｂｙ恭介（前書き）

作者の謝罪と注意事項

今回更新が遅れてすいませんでした！！調子に乗ってしまい長文になってしまいました……。そして今回、恭介が暴走し、あずにゃんファンの皆さんにとっては殺意を抱いてしまう内容があります。ご注意ください！

第十一話　ネコ耳とメイド服は最高の発明品だ！　ｂｙ恭介

《剣道場》

前回のハルヒのせいでかなり時間がかかってしまった。急がなければ！

やってきたのは剣道場、ここの剣道部を訪ねるとしよう。次こそまともな部活であってくれよ！

剣道場の扉を開けようとすると。

バシィ！！

もの凄い竹刀で叩く音が聞こえてきた。扉をそ～っと開け中の様子を見てみると。

『悠仁！　今の一撃くらい避けなさいよ！』

『無理だよ、あんなの避けれるわけないじゃないか！！』

中にいたのは、背の低い、長髪の女の子と、弱々しい男だった。あれ？あの二人、どっかで見たような……。どこで見たっけ？思い出せない……まあいっか。

俺は二人に話しかける為に、二人に近づいていく。

「そこのお二人さん！部活中悪いんだけどさ、ちょっといいかな？」

二人にそう言うと、女の子の方は俺をギロっと睨みつけてきた。

「誰？　あんた？」

「えっと……俺は……」

「……まさか！」

いきなり彼女は竹刀を構えた。

「はあぁぁ！！」

竹刀を振って俺を叩こうとした！寸前のところで避けたが、当たったら大怪我だぞ！

「のわぁぁ！！？」

「いきなり何しやがる！！」

「シャナ！？」

「悠仁！　こいつは道場破りよ！！」

「本当！？」

違うわ！！なんで俺が道場破りなんだよ！

「おい、話を聞け！！　俺は道場破りじゃない！！」

「うるさい！　うるさい！！　うるさい！！！　黙って私にやられろ！！」

そんな無茶苦茶な！俺はただ君らの悩みを聞きに来ただけなのに……！

「とにかく聞け！　俺は……」

「あらみんなどうしたの？」

「あ！　恭介君」

今度は誰だ！？今俺は忙しいのに！道場の入口の方に二人組が立っていた。って！新八じゃないか！隣に綺麗な人がいるが誰だろう？とにかくこれで助かった！俺はすぐさま二人に駆けつけ助けを求めようとした。

「恭介君どうしたの？」

「あら？　新ちゃんの知り合い？」

「はい、クラスメイトです。それよりどうしたの？」

「新八、いいところに来た！　聞いてくれ、この女が…」

「お妙先輩！　そいつ道場破りです！」

女の子がそう言うが、俺は道場破りじゃない！

「だから、言っているだろう！　俺は……」

「道場破りですって！！」

いきなり新八の隣にいた綺麗な人が大声で言い、薙刀を取りだした。ていうかどこから出した!?

「父上から受け継いだ道場を渡すもんか!!　このクソ野郎!!!」

そう言って、薙刀をぶんぶん振り回し、斬りかかってきた!

「うわぁぁぁぁぁぁ!!!!　な、なんでーーーー!!!!?」

寸前のところで避けたが、これは先ほどの竹刀と違い、当たったら死んでしまう!

「お、落ち着いて!　俺の話を……!」

「死ねぇぇぇぇぇ!!!」

全然聞く気ねーよ!!まずい!恭介最大のピンチ!!だが諦めるわけにはいかない!まだ彼女もできてないのに死ねるか!

「待て!　この道場破り!!」

「死ねやぁぁぁぁぁぁ!!」

二人の攻撃を避けながら逃げるが、とうとう壁に追い込まれてしまった。

やばい!このままでは……!そう思った時。

「おい!　なにをしている!!」

道場に大声が響きわたる。道場の入口に大声の主は立っていた。

ピンク色のポニーテイルに、鋭い眼光が特徴的な女性だった。

「「シグナム先輩!?」」

あの人はシグナムというのか……。シグナムさんは二人に近づいた。

「何の騒ぎだ?」

「こいつ道場破りです!」

「いや!だから違うって!!」

「……」

シグナムさんはこっちをずっと見ていた。な、何なんだ……?

「…一つ聞くが、お前は天堂恭介か?」

「そ、そうですけど……。なんで俺のことを?」

彼女には、俺の名前を教えていないはずだけど……。

「テスタロッサから、天堂恭介という奴が転校してきたという話を聞いたのでな、君は見かけない生徒だからもしかしてと思ったが……なるほど君が天堂恭介か……」

「テスタロッサって……?」

「フェイトのことだが…」

「フェイトさんが！？」

ではこの人はフェイトさんの知り合いということか……。

「とにかくみんな聞け！　こいつは道場破りではない！」

シグナムさんはそう言って、二人を落ち着かせようとした。

「あら、そうなんですか？　だったら早めに言ってくれれば良かったのに……」

俺の話全然聞いてくれなかったでしょう！

「まったくよ！　無駄な体力を使ったじゃない！」

「もともとは君の勘違いで始まったことだろう！」

「う、うるさい、うるさい、うるさい！！！あんたみたいな怪しい人物が来たら、道場破りだと思っちゃうじゃない！！」

俺って、人から見たら怪しい人物なのかな……。

「こらこらシャナ！　そんなことを言っちゃいけないだろ！　すいません…ご迷惑をおかけしました」

「いや……もういいよ……。君の優しい気持ちだけで充分だよ…」

女の子といっしょにいた少年は女の子の代わりに謝った。思ったがここの学園は由美といい、ハルヒといい滅茶苦茶な女が多いのに、

男の方はしっかりしている人が多い気がする……。

「それで、君はなんでここに来たの？」

新八がここに来た理由を聞いてきた。

「ここに来たのは……」

「いや待て」

俺が説明をしようと思ったが、シグナムさんに止められた。シグナムさんは腕を組んで言った。

「口で説明しなくてもいい」

え！？まさか俺がここに来た理由を知っているというのか？それだったら話は早い！さっそく悩みを聞こう……。

と思ったがシグナムさんは、そこら辺に置いてあった竹刀を二本持って、一本を俺に渡した。

「あの……これはなんですか？」

「お前は竹刀も知らないのか？」

「いやそういうことじゃなくて……」

わけがわからない……。いったいシグナムさんはなにがやりたいんだ？

そう思っていたら、シグナムさん竹刀を構えた。

「さあ来い！」

え？なに？シグナムさん？いったい何の真似ですか？

「口で語るより、これ（剣）で語ったほうがわかるだろう！」

「いやいやいやいや！！　ちゃんと説明しますから……」

「来ないならこちらから行くぞ！！」

話を聞いてーーーーーーーーーー！！！！！この学園の女性はなんで話を聞かない人が多いの！！？

シグナムさんは竹刀を振りかざして襲ってきた！

え？その後どうなったって？わかるでしょう？俺は剣道はおろか、竹刀に触れたこともないんだぜ。

もちろん結果は……。

「ぎゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！」

徹底的にボコボコにされた……。

ボコボコにされた後、正座をしていたシグナムさんが話し始めた。

「なるほど、つまりお前は学園長の依頼で、各部活の生徒の悩みや相談したいことを聞きに来たということか……」

「そうです……。ご理解いただけてなによりです……」

先ほどの剣による語り合い（一方的に俺がボコボコにされたが）によってだいたいの事情を分かってもらえたようだ。ていうかあんなことで理解できるのか……？

「あの……大丈夫ですか…？」

親切な少年が俺の手当てをしてくれた。

「ああ、ありがとう。えっと君は……？」

「自己紹介がまだでしたね」

そう言うと少年は姿勢を正して自己紹介を始めた。

「僕は一年の坂井悠仁です。それと、あそこにいる女の子は僕のクラスメイトのシャナです」

先ほど襲って来た女の子はシャナというのか…。なんか変わった名前だな。

そう思ったときシャナは自分の鞄から何かを取り出した。あれは……メロンパンか？彼女はそのメロンパンを俺に差し出した。

「え？　なに？」

「……あげる」

「はい？」

さっきはいきなり襲って来たのにどういう心境の変化だ？

「いきなり襲って……ごめん……これあげるから」

これで許してくれってことか？なんだ……凶暴な女の子かと思えば、素直でいい子じゃないか。もらったメロンパンを鞄の中に入れた。あとで食べよう。

「まあ！　シャナちゃんが謝ったわ！　素直でいい子ね♪」

薙刀で襲ってきた女性が驚きつつ、シャナの頭をなでた。

「い、いちいちなでるな！」

「もうシャナちゃんたら♪　あ、ごめんなさいね、私も謝らないと。先ほどは失礼しました。つい道場破りかと思ってしまいまして」

「いえいえ、そんな……。名乗りもしなかった俺が悪いですから…。ところで、あなたは？」

この人の名前は聞いていなかったな。

「私は志村妙です。皆からはお妙と呼ばれています。あなたのクラスメイト、志村新八の姉です。いつも新ちゃんがお世話になっています」

新八にこんな綺麗なお姉さんがいたなんて……。しかも礼儀正しいし、いいお姉さんじゃないか。先ほどの凶暴な性格がなければ完璧だけど……。

「あ、そうだ！　先ほどのお詫びと言ってはなんですが、今日卵焼

きを作ってきたんでよかったらどうぞお♪」

「え！？　マジッすか！？」

こんな綺麗な人が作った卵焼きだ、きっとうまいに違いない！お妙さんは鞄から弁当箱を取り出し、ふたを開けた。

「さあ、どうぞ♪」

気なる中身は！？

「……あの、お妙さん？　これはなんですか？」

「卵焼きですけど？」

中に入っていたのは、真っ黒な物体だった。まさか炭か！？とても卵焼きには見えない……。

「ええっと……あの……」

どうする……。ここでいりませんときっぱり言うか？いや、そんなことをしたらたぶんこの人はぶち切れるだろうな……。だったら、やるべきことは一つ！

「今は仕事中なんで、あとで食べますね」

緊急回避である！こんなものを食べたらお腹を壊してしまう。あとで、野田のご飯に混ぜよう。あいつだったら、「ゆりが作ったご飯だぜ！」と言えば迷わず食ってくれるだろう。

「ちなみに今はここにはいないが、桂ヒナギクがこの剣道部の部長だ」

ああ……その話しだったらハヤテが言っていたな、生徒会長と部長をやっているらしいな。二つの仕事をやるだなんてすごいよな……。

「あれ？　でも、シグナムさんってフェイトさんの知り合いですよね？　てことは，シグナムさんは三年生？」

「ああそうだが」

「三年生なのに、二年生のヒナギクが部長なんですか？」

気になったので聞いてみた。

「確かに、最初はヒナギクは私に部長をやるように勧められたが、私は部長という人の上に立つ役目は苦手なのでな、ヒナギクなら人望があるし、あいつなら剣道部をうまくまとめることが出来るだろうと思い、あいつに部長を任せることにしたんだ」

なるほど……。シグナムさんが認めるほど、ヒナギクはすごい奴なんだな。

「ところでお前の仕事についてだが、我々の悩みや相談を聞くんだったな？」

「あ、はい」

シグナムさんは腕を組んで考え始めた。

「う〜む、特に我々には困っていることはないが……」

「は〜い、私今悩んでいることがあるんだけど」

お妙さんが手を挙げて言った。

「お妙さんにも悩みがあるんですか？　悩みなんてないかと思っていたんですけど……」

「私だって悩む時ぐらいあるわよ。実は、最近ストーカーが現れて困っているのよ……」

ストーカー！？まあ確かにこんなに綺麗な人なんだから、ストーカーに狙われても不思議じゃないな。とにかく、困っているんだし、なんとかしよう！それに俺もストーカーをする奴なんて許せないからな！

「なるほど……このことは由美…学園長は知っているんですか？」

「まだ言っていないけど……」

ならば後で由美に報告しておこう。対策も考えないといけないな……。

「それにしてもお妙さんをストーカーするなんて最低な奴ですね！」

「まったくだ！　お妙さんがいくら綺麗だからといってストーカーをするなんて許せないな！！！」

うんうん……ん？今のは誰の声だ？どこからか、男の声がする。

「お妙さん、安心してください！！　この近藤勲（こんどういさお）が、二十四時間お妙さんの護衛します！！　これでストーカー犯も恐れて近づけないでしょう！ハッハッハッハッハッｗｗｗｗ」

誰だ？なんかおっさんみたいな声で高笑いしている奴は？俺は周りをきょろきょろと見回すが誰もいない。

「時にそこの男よ！　貴様が一番怪しいな！　さては貴様がストーカー犯か？」

んなわけあるか！誰だいったい！？ん？天井の方から声がするような……。

俺は気になって天井を見てみると、変な男が天井に張り付いていた。なんかゴリラみたいなやつだな……。

「あの……シグナムさん？　あれは誰ですか？」

「ん？」

シグナムさんだけでなく、皆が天井に張り付いている男を見た。

「ああ、あれか。ゴリラだ」

「ゴリラよ」

「ゴリラです♪」

「「近藤さんです」」

シグナムさん、シャナ、お妙さんはゴリラと言ったが、新八と悠二は近藤と言った。それにしてもあいつ、いつからあそこにいるんだ……？

「ゴリラいるようだから、動物園に連絡するとしよう。妙、連絡してくれるか？」

「はい♪　射殺してもらえるように頼んでみますね♪」

「ちょっと、お妙さん！？　俺はゴリラじゃなくて近藤なんですけど！！　しかも射殺って！？」

「汚いゴリラは射殺して、ゴミに出さないとね♪」

「ゴミって！？　ちょっと、お妙さん！？」

さっきからうるさいゴリラだな……。由美にお願いして本当に射殺してもらおうかな？

「ゴリラ、お前はまた妙をストーカーしているのか？　いい加減にしないか……。お前のせいで剣道部に変な噂が流れているぞ、あの剣道部にはストーカーがいるという噂が」

呆れながらシグナムさんが言った。ていうか剣道部にそんな噂が流れていたのか……。

「ん？　ていうかシグナムさんストーカーって？」

「ああ、こいつは妙を２０回もストーカーをしているんだ。まさか

ゴリラ、今回またお前が犯人か？」

「何を言うか！！　俺が犯人だという証拠でもあるというのか！？
過去に２１回ストーカーしたとはいえ、今回は俺じゃないぞ！！」

「なるほど、今回で２１回目になるんだな」

「え？……あ……」

バカだよ、このゴリラ。自分で自白しているし。

「ち、違いますよ、お妙さん！！　俺はけしてストーカーなんてやっていませ……あ！」

ゴリラの服から写真が落ちてきた。なんだろう？と思い、写真を拾って見てみると。

お妙さんの盗撮写真だった。

あ～あ、ストーカー犯決定だな。

「お、お妙さん……？」

ゴリラは恐る恐るお妙さんを呼んでみた。お妙さんは笑顔だ。とびっきりの笑顔だ！
……目は笑っていなかったけど。

「もう近藤さんったら♪　……あれだけストーカーすんなって学園長に言われたのに、またしやがったなこのクソゴリラがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

お妙さんは薙刀を持ってゴリラのケツに突き刺した！

「ぎゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！」

ゴリラがケツを押さえながら天井から落ちてきた。うわぁ……。これは痛い……。俺もついケツを押さえてしまった……。猿が木から落ちるならぬ、ゴリラが天井から落ちるだな。

悶え苦しんでいるゴリラに対し、お妙さんはサソリ固めを決めた！

「このクソゴリラが！！　死ねーー！！」

「ぎゃあああぁぁーー！！　痛い痛い痛い痛い！！！　お妙さんごめんなさい！！　すいませんでした！！　許して……ぐわぁぁぁぁぁぁーーーーー！！！」

哀れなゴリラだ……。まあとにかくこれでストーカー事件は解決だな！後で由美に報告して、二度とストーカーできないようにしてもらおう。

さて、ここでの仕事は終わったことだし、次の部活に行くとしよう。

「じゃあ俺は行くね」

そう言って剣道部のメンバーに別れを告げたがシグナムさんが俺を止めて言った。

「恭介待て、お前剣道部に入らないか？」

「え？」

いきなりそんなことを言ったが、俺なんて入っても足を引っ張るだけだと思うんだが……。さっきだってボコボコにされたんだけどな……。

「さっきほどのお前の太刀筋は悪くなかった。鍛えれば優秀な騎士になれるかもしれないぞ！」

「騎士……ですか……？」

騎士っておいおい……。ここはせめて侍にしようぜ。

「すぐに決めろとは言わない、だが興味が湧いたらまた来てくれ」

「まあ考えておきます」

俺はそう言って剣道場を後にした。

『死ねぇぇぇぇぇぇ！！！』

『ぎゃあああぁぁぁぁぁぁーーー！！！』

『姉上、そこまでにしましょう。近藤さんの腕が曲がっちゃいけない方向に曲がっていますよ……』

それから俺は様々な部活を回った、野球部、テニス部、バレー部、バスケット部、柔道部、陸上部などなど、文化系の部活も回った。

そしてとうとう最後の部活にたどり着いた。

《音楽室》

最後の部活は『軽音楽部』である。音楽系の活動をしているんじゃないかなと思い、この音楽室にやってきたのだ。

そして俺の予想は当たった。中からギターやドラムなどのバンドでよく聞く音が聞こえてきた。

俺は邪魔にならないようにそ～っと、扉を開けた。中では女の子達が楽器を持って演奏をしていた。

中央でギターを弾きながら歌っている赤い髪の女性がいた。彼女の歌声はとても良く、聴き入ってしまった。

しばらく俺はドアの隅っこで、彼女の歌を最後まで聴き続けた。曲が終わり、彼女達、バンドメンバーは弾くのを止めた。

『岩沢さんマジスゴイっすよ～♪　これならバンドコンクールでは優勝間違いないですね！』

『ああそうだな、岩沢さんがボーカルなら優勝できるな』

『澪だって歌がうまいんだから、ボーカルやればいいのに』

『わ、私は無理だ！！　恥ずかしいし……』

軽音楽部のメンバーの中に澪がいた。しかも唯も律もムギもあずにゃんもいた。あいつら、軽音楽部の部員だったのか……。

そう思ったとき、唯がこっちに気付いた。

「あ！　キョウ君だ♪　いらっしゃい♪」

唯はニコニコしながら近づいてきた。

「やあ、唯」

「今日はどうしたの？」

唯に今日来た理由を説明しないといけないな。

「実はな……」

「待って！　当ててあげる！　う～ん……」

唯は考え始めた。説明してあげるのに……まあいっか。

「……はっ！　入部しに来たんだね！」

「へ！？」

いやいや、違うんだけど！？誤解を解こうと思ったが…。

「りっちゃん！　キョウ君が入部してくれるって！」

「なに！？」

勝手に話が進んでいるし！？少しは俺の話を聞け！！

「恭介入ってくれるのか!?　とりあえずこっちで詳しい話をしようぜ!ムギ!お茶の用意!」

「は～い♪」

俺は律に引っ張られ、部屋のテーブルに座らされた。

「あ、あのさ……。俺は…」

「まずは軽音楽部の説明とメンバーを紹介するぜ!」

おい!話を聞けよ!

俺の話を聞かず、勝手に説明していく律。

「軽音楽部は私達放課後ティータイムと岩沢のロックバンド、ガールズデットモンスターの二つのバンドで構成されているんだ。岩沢っていうのは、さっき歌っていたガルデモのリーダー兼ボーカルだ」

律がそう言った後、先ほど歌っていた岩沢が前に出てきた。岩沢は手を出して握手を求めていた。

「岩沢だ、よろしくな」

俺は岩沢と握手を交わした。

「よろしくな。さっきの歌、聴いていたよ。とても良かった」

「ありがとう」

岩沢は笑顔でお礼を言った。とても爽やかな笑顔だった。

「そうだ、私達のメンバーを紹介しておくな。リードギターのひさ子とドラムの入江、ベースの関根だ」

「よろしくな！」

「よろしくね♪」

ガルデモは可愛い女の子達で構成されているようだ。俺としてはとても嬉しい限りだ。やはり美人が多い学園だなここは（笑）何人かはまったく話を聞かない人もいるけど……。

「そしてもう一人…」

「はい、は～い♪　どうも恭介先輩♪　ガルデモにてボーカルの修行中のユイにゃんです♪」

背の低い可愛い女の子が出てきた。しかしユイにゃんって……あずにゃんみたいだな。

「ボーカルの修行中ってことは…」

「はい♪　いつかガルデモのメンバーの皆さんといっしょにライブをすることがわたしの夢なんですよ♪　ガルデモ最高ですよね♪　作詞、作曲も岩沢さんが書くんですよ！　歌もめっちゃ最高なんですよ♪　出だしとかサビとか最高なんですよ♪　あとあと……」

この子は自分の世界に入ったようだ、さっきからガルデモのすごいところや最高なところしか言っていない……。話を変えようか…。

「ユイはどんな楽器を使っているんだ？」

「おお！　いい質問をしましたね！　ですけど簡単には教えられません。当ててみてください♪」

「え？　……う～～ん…」

この子が使う楽器……。何だろうな…？……はっ！もしかして！

「和太鼓か？」

「そうそう！　こうドンドンドンって祭りとかでね活躍するんですよ♪　ドンドンドン！　あらよっと！　…って違うわーーーー！！！　お前バンドを何だと思っているんだ！！！？　和太鼓を使うバンドなんて聞いたことねーよ！！！　あまり調子に乗っているとぶち殺して鯉の餌にするぞコラーーー！！！！」

いきなりキレた！可愛い子かと思っていたのに、裏の顔があったのか！？ていうか俺を殺しても鯉の餌にはならないと思うぞ……。とにかく謝ろう！

「ごめん！　冗談だから！　えっと……。ギターとか？」

「ピンポーン♪　正解です♪　さすが恭介先輩♪」

この子には気をつけよう……。

「じゃあキョウ君！　私は何の楽器を使っているでしょうか？」

「え？　唯の楽器？」

う～～ん……。唯の使っている楽器か……。ん？ていうか…。

「唯、楽器弾けたのか？」

「弾けるよ！！　私だって軽音部の一員なんだよ！！　酷いよ、キョウ君！！」

「ごめんごめんｗｗ　えっと……カスタネットか？」

「そうそう♪　カスタネットをこう使ってね、うんたん♪　うんたん♪　うんたん♪　……って違うよキョウ君！！！　ギターだよ、ギター！！！！」

なんかこの軽音部、おもしろいな（笑）それと唯、さっきのうんたん♪はとても可愛かったぞ！

「ちなみに澪ちゃんはベース、りっちゃんはドラム、ムギちゃんはキーボード、あずにゃんはギターだよ♪　そして私達五人合わせて、放課後ティータイムなんだよ！！」

「へえ……」

なんかすごいインパクトがあるな、このバンドチームは……。そう思っている時、ムギがお茶を持ってきてくれた。紅茶のいい香りがしてくる……。

「紅茶と入部届けです♪」

「ありが…え！？　入部届け！？」

ムギが置いたのは紅茶と一枚の紙だった。紙には大きい文字で『入部届け』と書いてあった。律が目の前に立って俺に言った。

「さあ恭介！　説明も大体終わったし、この入部届けにサインをするんだ！」

軽音部全員

『ようこそ！軽音部へ！！』

「ちょっと待てーーーー！！！！！」

俺は大声で皆に言った。律はめんどくさそうな顔をしているが、とにかく言おう！

「なんだよ恭介……？」

「俺は入部しに来たんじゃない！！」

軽音部全員

『……ええええええええええぇぇぇぇぇぇーーーーーー！！！！！！！！』

俺は全ての事情を話した。すると皆の態度が一変した。

「なんだよ……学園長の依頼かよ……」

「つまんな～～～～い」

「まぎらわしい……」

「帰れ！　帰れ！！」

「そんな言い方ないだろう！！！」

酷いや……。さっきまであんなにやさしかったのに……入部じゃないとわかったらこんな仕打ちかよ……。

「皆さんそんなに言わなくてもいいでしょう！！！」

俺が落ち込んでいる時、あずにゃんが怒鳴った。

「恭介先輩はただお仕事に来たのに、そんな言い方はないでしょう！　だいたいもとはと言えば唯先輩の勘違いから始まったことじゃないですか！！」

「うっ！　そ、そうだよね……」

「あずにゃん、もういいよ……」

俺はあずにゃんの肩に手を置いて、落ち着かせようとした。

「よくありません！　恭介先輩にご迷惑をかけたのに……」

「俺のことはいいよ、あのときちゃんと言わなかった俺も悪いんだしさ」

あずにゃんの優しい気持ちだけで十分だよ！

「恭介先輩……」

「でもやっぱりキョウ君には入部してもらいたいよ～」

「悪いな、唯」

俺はＳＯＳ団に入部する予定なんだ。フェイトさんの秘密の写真集がどうしても欲しいからな。

「こうなったら仕方ない！　軽音部の最終兵器を出すしかない！！」

律がいきなり立ち上がって、そんなことを言い出した。ていうか、軽音部の最終兵器って何？

「りっちゃん隊長！　とうとうあれを出すんですか！？」

「うむ！　恭介を攻略するにはそれしかないぞ！！　唯隊員！」

お前ら楽しそうだな……。

「よし！　ではさっそく、梓こっちに来い！！」

「え！？　り、律先輩！？」

律に無理やり引っ張られ、あずにゃんは隣の部屋に行った。最終兵器って結局いったい何だろう？

「律先輩の言っていた最終兵器って……まさかあれですか！？」

「そうだよ！　あれさえあればキョウ君はイチコロだよ！」

「とうとうあれ使うのね……」

「あれを使うのか……」

「あれを使うんすか……」

軽音部の部員の何人かがそんなことを言い始めた。おいおい、あれってなんだよ……？澪に聞いてみるか……。

「おい、澪！　あれってなんだよ？」

「……律が考えた最終兵器だ…」

澪が呆れた口調で言った。なんだよ、結局……？

更に聞こうかと思った時、隣の部屋のドアが開き中から律が出てきた。

「待たせたな恭介！！　これを見てもまだ軽音部に入らないと言えるのかな！！？　さあ、梓！　出てこい！！」

『り、律先輩！　やっぱり恥ずかしいですよ／／／／／／／／』

「何言っているんだ！！　さあ行くぞ！！」

「ちょっと待って……にゃう！！？」

律に続きあずにゃんが出てきた。そして俺はあずにゃんの服装を見て目を見開いた！

あずにゃんはメイド服を着て、ネコ耳を付けていた！！

「ぐばぁぁぁ！！」

恭介のハートにダイレクトアタック！！５０００ポイントのダメージ！！

「キョウ君大丈夫！？」

「大丈夫だ……唯。律！　そんな手で来るなんて卑怯だぞ！」

まさかあずにゃんにそんな服を着させるなんて予想外だ！こんなにメイド服とネコ耳が似合う女の子がいるだなんて！

ああ……それにしても……めっさ可愛いじゃないか！！！！

今すぐ抱きしめて頭をなでなでしてやりたい！！抱っこしてやりたい！！！出来ればペロペロしてやりたい！！！！

「な、何か恭介先輩の目が怖いんですけど……」

「う、うん…確かに……なんか変質者の目になっているような……」

「今日のキョウ君、なんか怖い……」

「恭介先輩ってバカで変態なんですね♪」

ふん！なんとでも言え！どうせ世の中には『あずにゃんペロペロ』とか言っている奴らが多いんだからな！

「とにかく、ほれ！　梓！　さっきのセリフを言うんだ！！」

「や、やですよ！！」

「恭介が軽音部に入れるかもしれないぞ……」

「う～～～～～。こ、今回だけですよ！！」

そうあずにゃんが言うと、いきなりあずにゃんはネコのポーズを取って俺に言った。

「きょ、恭介先輩！！　軽音部に入ってほしい……にゃ、にゃん／／／／／／／／／／／／／」

「ぎゃああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーー！！！！！」

恭介のハートにダイレクトアタック！！！９９９９９９９９９ダメージを受けた！！！こうかはばつぐんだ！！

俺はその言葉によって吹っ飛び、壁に激突した！（なぜ吹っ飛んだのかについては、深く考えないでください。この小説は基本なんでもありな小説です）

「だ、大丈夫ですか！？」

あずにゃんが心配して、床に倒れた俺に駆けつけ、体を起こしてくれた。

「あ………あずにゃん……」

「なんですか！？」

ああ………近くで見るとさらに可愛い…。可愛いよ！！！！

「可愛いよ！！　あずにゃん！！」

俺はあずにゃんを思いっきり強く抱きしめた！

「にゃ、にゃにゃにゃにゃにゃにゃ、にゃにをするんですか！！！／／／／／／／／／／／」

猫語で話すあずにゃんはさらに可愛い！！

「可愛いくていい子だ！！　いい子いい子してやろう！！」

俺はあずにゃんの頭を撫でてやった！髪の触り心地がいい！しかもいい匂いがする！

「や、やめてください！！　恭介先輩！！／／／／／／／／」

ああ可愛い！！可愛いよあずにゃん！！

「キョウ君……」

「変態だ……」

「変態だな……」

「ああ、変態だ……」

「変態です……」

「変態だったのか……」

「バカで変態ですね……」

「恭介君！　この光景をビデオで取っていいかな！？」

「ムギ！？　それ本気で言ってるの！？」

「と、とにかく恭介先輩離してください！！！／／／／／／／／／／」

あずにゃんは俺の腕の中で暴れているが、そんなあずにゃんも可愛い！！今日なんて素晴らしい日なんだろ！！今日この日をあずにゃん記念日と名付ける！！グヘヘヘヘwwww

ん？なんか後ろの方で殺気を感じるが……まあいっかｗｗｗｗ
ああ、あずにゃん可愛いよ！俺は幸せだよ！！

「恭介先輩離して……はっ！」

「キョ、キョウ君！！　う、後ろ！！」

何だよ……うるさいな！俺は至福の時間を味わっているんだぞ！

「恭介！　後ろ後ろ！」

「うるさいな！　いったいなんだよ！？」

「恭介♪　楽しそうだね♪」

……え？今の声って？俺は恐る恐る後ろを振りかえると。

そこには千堂由美が笑顔で立っていた！

「え？……あの由美……？いつの間に？」

「仕事をさぼって、こんなところで梓ちゃんといいことをしているなんて♪　本当にクズ野郎だね♪」

由美は笑顔だが、さっきから黒いオーラが消えない！まずい！完

壁に怒っている！！

「し、仕事ならここで終わりだよ！　みんな、何か悩んでいることはないかな？！？」

「……とりあえず離してください…」

俺はあずにゃんを解放した。そして俺は気づいた……。この行動によって俺は皆から変態のレッテルが貼られたことを……。

「……ごめん…あずにゃん…」

「もういいです……」

もう終わりだ…俺、あずにゃんに嫌われたかもしれない……。

「他には……」

「と、特にないよ……」

あっそ……これにて本日の仕事終了～～～。

「……ほれ、由美」

俺は由美にこれまでの部活のレポート用紙を渡した。

「お疲れ様♪」

「じゃあ俺は帰るからな…」

「待って♪」

由美が呼び止めた。何だよ……？

「頑張ってくれたご褒美をあげないとね♪」

「え？　ご褒美！？」

なんだよそのご褒美って！？俺は少し期待した！

「今日ね、とてもよく斬れる包丁を買ったの♪これでご褒美をあげるから♪軽音部の皆は外に出てくれるかな？」

ああ……なるほど……その包丁で俺を殺すと……ってマジでやばいじゃん！！？

「そ、そうだな！　みんな外へ出よう！！」

軽音部部員

『お、おーーー！！！』

皆は駆け足で外へ出ようとする。

待って！置いてかないで！！俺ピンチなんだけど！！！

「あずにゃん助けて！！！」

あずにゃんに助けを求めるが。

「……少しは反省してください！！」

そしてそのまま外に出ていく……。怒っているよ絶対……。ていうか本当に誰か助けて！！このアホ女、包丁を研ぎ始めたんだけど！！

「ではごゆっくり～～♪」

「恭介♪　楽しもうか♪」

「待って助けて！！　あずにゃん、いや！　梓様助けてください！！　みんな！　唯！　岩沢！　俺を見捨てないで！！助け……」

バタン！

『ぎゃああああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！』

第十一話　ネコ耳とメイド服は最高の発明品だ！　ｂｙ恭介（後書き）

天城
「今回は更新が遅れてすいません！次からは気をつけますので！」

由美
「梓ちゃんのファンにとって許せない内容があったわね…」
天城
「ああ、俺も書いている際、殺意を抱いたよ……」
由美
「まあ恭介は処分してゴミ箱に捨てておいたから♪」
天城
「恭介の始末お疲れ様です！」
由美
「どうも♪」
天城
「さて、次回は再び不幸少年が登場です！さらにあの腹ペコシスターも登場だ！では、次回また会いましょう！！」

第十二話　深く考えるな！ありのままを受け入れるんだ！！（前書き）

インデックスの独り言

お腹すいた～～～ホットドック食べた～～～い

第十二話　深く考えるな！ありのままを受け入れるんだ！！

《学生寮・ゴミ置き場》

「おい、起きろ。恭介！」

「ゴミ置き場で寝るとは……。寝るところがなくなって、ホームレスになったかｗｗｗ」

ん？誰か俺をよんでいるのか……？

ん？なんで俺はゴミ置き場で寝ているんだ……？

確か俺は……ああ、思い出した……。軽音部に行って唯や岩沢に会って、そして……。

あずにゃんに抱きついたんだった……。

そしてなでなでもした。いやあ、可愛いかったな、あずにゃんｗｗ

そして嫌われたんだよな……ｏｒｚ

しかも軽音部のみんなから、変態のレッテルを貼られたんだよな……。

最悪だ、きっと明日から『あ、おはよー！変態君！』『よう！変態！』『元気か？変態』『変態先輩、死んでください♪』とか言われるんだろうな……。チキショーーーーー！！！

「おい！　返事をしろって言っているだろうが！」

ていうか、さっきから俺を呼んでいるのは誰だ？呼んでいる奴の

顔を見てみると、ルルーシュとC，C，だった。何だよお前等か…
……。

「聞こえているよ。シスコン男にバカピザ女」

「「そのまま燃えるゴミとして、焼却処分するぞ！」」

「…ごめんなさい…。今出ますんで…」

俺はとりあえず、ゴミ置き場から出ることにした。

「それにしても、何でゴミ置き場で寝ていたんだ？」

「ヤンデレ化した学園長に後ろから襲われて、ゴミ捨て置き場に捨てられたんだ……」

「ほう…（笑）」

「何故襲われたんだ？」

「……」

言えない……。あずにゃんが可愛いくて、抱きついたり、なでなでしたりして、由美に見つかり、襲われたなんて言えない……！

「理由は聞かないでくれ……」

「お前のことだ、どうせメイド服を着た可愛い女の子を抱きしめて、なでなでしたりしているところを学園長に見つかって、襲われたんじゃないのか？ｗｗｗ」

「おいおいC，C，ｗｗそんな気持ち悪い変態がこの学園に居るのか？ｗｗｗ」

そう言って、ルルーシュは笑った。

まさか目の前にいる俺がその変態だとは気付いていないようだ……。

「だが、その変態の気持ちが分からないという訳ではない。もしナナリーがネコ耳を付けて、メイド服を着ていたら、あまりの可愛いさに、抱きしめて、なでなでもして、チュッチュッもしてやりたい気分になってしまうよ！」

目の前に居る男はどうやら重症のシスコンらしい……。妹のナナリーさんが聞いたら、絶対引くだろうな……。

「やれやれ……。この学園の男共は、変態とシスコンが多いようだな……」

「黙れ、おばあちゃん！！！！」

「なっ！？　お、おおおおお、おばあちゃんだと！！？　き、き～さ～ま～～！！　その禁句を私の前で言うとは、覚悟は出来ているんだろうな！！！！！」

ルルーシュの一言によって、C，C，は激怒したようだ。しかし、おばあちゃんって……。こいつはまだ若い方だと思うが……。

「無論、覚悟なら出来ているさ！　悪口を言っていいのは、悪口を言われる覚悟のある奴だけだ！！」

「格好良く言ったつもりだろうがな、先ほどの発言は完璧に自分はシスコンです♪って言っているようなもんだぞ！！　第一、私に悪口を言えば、全国にいる私のファンが黙っていないぞ！！　きっと感想で『ルルーシュうざい！』『消え失せろ！　このシスコンが！』という書き込みがあるに違いない！　ざまあみろｗｗｗ（笑）」

感想とかそういうメタ発言をするな！！！

「……こうなったら、決着をつけるしかない！　モンハンで勝負だ！！」

「いいだろう！　叩き潰してやる！！」

……またモンハンかよ、お前らモンハン好きだな。

くだらない勝負に巻き込まれたくないので、さっさとその場を立ち去ることにした。

学生寮の階段を上がり、部屋へと向かう際、俺が考えていたのは、あずにゃんのことだ。あまりの可愛いさに我を忘れたとはいえ、あれは確かに酷かったな……。あずにゃんに悪いことをしてしまった……。

「……明日、あずにゃんに謝ろう…」

そう呟いた時だった、廊下の先にある自分の部屋の前に、シスター服を着ていた女の子が倒れていた。

「なっ！？　マジかよ！？」

俺は急いで女の子に駆けつけた。

「おい！　大丈夫か！？　しっかりしろ！！」

女の子はぐったりとしている。これはやばい！

俺はすぐに携帯を取り出し、保健室のシャマル先生に連絡をしようとしたが

「う～～～～……」

女の子が反応した！俺はすかさず、女の子の身体を揺らしながら話しかけた。

「おい、大丈夫か！？　どこか痛いか？」

「う～～～～～お腹が……」

「お腹？　お腹が痛いのか！？」

「……お腹……減った……」

へ……？

「お腹減ったよ～～」

《食堂》

バクバクバクバクバクバクバクバク！

「おいしい！　これ全部おいしいよ！」

バクバクバクバクバクバクバクバク！

女の子は出されたご飯を次々と胃袋の中に入れていく。

バクバクバクバクバクバクバク！

ご飯がどんどん無くなっていく。そして俺の財布の中のお金も無くなっていく……。この子、まだ食べるの……？

「あ～～～～おいしかった♪」

女の子はあれだけあった料理を完食した。結構食ったな！！

「ありがとうね♪あのままだったら餓死するところだったよ。」

女の子は笑顔でお礼を言った。

「餓死寸前ってどれくらい食べてないんだ？」

「朝ご飯は食べたけど、お昼ごはんは全く食べてないんだよ」

昼ごはんを抜いたからって餓死にはならないと思うけど……。

「当麻は全然お昼ごはんを用意してくれなかったから、ご飯を求めて学園内を彷徨っていたんだけどご飯が見つからなくて、寮に戻ったらめまいがして倒れたんだよ。あのときはもうダメかと思ったけど、神は私を見捨てはしなかった！　君と出会えたことによって私は救われたんだよ！　もしかして、君って神の使い！？」

いえ、違います。私は普通の高校生です。

「あ、自己紹介がまだだったね。私はインデックス！　で、この子はスフィンクス！」

インデックスの服の中からネコが出てきた。てか、名前がスフィンクスって……。

「俺は天堂恭介、よろしくなインデックス」

「うん、よろしくね♪それよりも当麻はどこに行ったんだろう？まったく！　この私を放っておいてどこで遊んでいるやら！」

確かに、女の子を放ったらかしにするとは感心しないな。

ん？そういえば、当麻って名前、どっかで聞いたような……？

“お前は俺を殺す気か！！　この右手が無かったら死んでいるぞ！

！
”

あ！思い出した！転校初日に出会った、不幸少年！確か名前は上条当麻だったな。この子が言っている当麻って、上条のことか？

「ねえ、当麻って、上条当麻のこと？」

「うん、そうだよ！　当麻に会ったの？」

「転校初日に会ったよ。不幸に愛されている男だったな」

しかも朴念仁な奴だった。

「不幸に愛されているというか、幸運を消しているんだよ。あの右腕、幻想殺し（イマジンブレイカー）はそういう能力（ちから）なんだよ」

口の周りの汚れをふきながらインデックスは言った。

「幻想殺し？」

気になる単語が出てきたので、俺はインデックスに説明を求めた。

「当麻の右腕に宿っている能力だよ。当麻の右腕に触れたものが異能の力だったら、その力を消し去ることができるんだよ。神の奇跡さえも消し去ってしまうらしいんだって。まあそのせいで当麻に降りかかる幸運も消し去っているんだけどね」

「ちょ、ちょっと待て！　異能の力とか、触れたら消えるとか、神の奇跡とか、そういうファンタジーみたいなことが起きるわけないだろう！？」

「現に君だって見ているんじゃないかな？　たとえばあの短髪、御坂美琴って人がいるんだけどね？　あの人は超能力者なの。みんなはあの電撃の力を超電磁砲（レールガン）って言っているけどね」

幻想殺しに超電磁砲……転校初日に見たあれか……。御坂さんが放ったレーザ砲みたいな力が超電磁砲。そして超電磁砲を右腕一つで消し飛ばした力が幻想殺し。確かにこの二つの力は俺は見た。そんな奇跡な瞬間を俺は見たんだよな。そんなファンタジーに俺はもう遭遇しているじゃないかと思うと、なんだか笑えてきた。

「そんな力があるんなら、あいつらはこの学園ではかなりの有名人なんだなｗｗ」

俺は笑いながら言ったが、インデックスは笑っておらず、話を続けた。

「そうでもないよ。この学園では当麻や短髪みたいな能力者がいっぱいいるんだもん」

「え！？」

あの二人以外にも能力者が、この学園にいる！？

「この学園は無限の可能性を秘めた生徒達がやってくる場所なんだ。当麻や短髪みたいな能力はこの学園では珍しくない」

「無限の可能性？」

転校初日に届いた手紙にも書いていたが、無限の可能性って結局

何なんだ?

「無限の可能性って?」

「この学園では無限の可能性はいろんな意味があってね、無限の力、無限の能力、無限の未来、無限の人種、無限にある可能性を持った生徒達がここにいて、そして普通はありえない可能性を持った生徒達もいるんだ」

そしてインデックスは食堂をキョロキョロ見渡し、何かを見つけたのか、指を指した。

「ほら、あの人!見える?」

指を指した方向を見てみると、ルルーシュとC,C,がモンハンをしていた。あいつら居たのか?ていうかまだやっていたのか……。

「あの緑色の髪の女の人がいるでしょう?」

「ああ、C,C,だろ? それがどうし…」

「あの人は魔女なんだよ。千年以上も生きている魔女」

「えぇ!?」

C,C,が魔女!?

「それとあの寮長にはギアスって言う能力があるの、人の目を見ながら命令すると、その人はその命令に従う、絶対遵守の能力」

あのルルーシュにそんな能力があったなんて、ただのシスコンかと思っていたけど……。

「無限の人種の一つである魔女、無限の能力の一つであるギアス。これらも無限の可能性の一つなんだよ」

「だったら、なのはさんやフェイトさんは？」

「あの人たちは魔導師だよ。なのはといえばこの学園が誇るエース・オブ・エースって呼ばれるほどすごい魔導師なんだよ」

「信じられない……じゃあまさか、唯達も!?　あいつらも変な能力を使うんじゃないんだろうな!?」

まさか火を吐いたり、影分身をしたり、ネコに変身したりとかはないだろうな!?

「その人たちはたぶん普通の人たちだと思うよ。でもその人たちの未来についても無限の可能性があるかもしれないんだ。例えば、音楽業界で有名になったり、将来偉大な発明をしたり、今は力が弱いけど、いずれ魔王と戦う勇者になっちゃう未来になったりと、いろいろな無限の未来がある生徒もいるんだよ」

つまりインデックスの話ではこの学園では普通ではありえない可能性を持った生徒達がいる。すごい能力持っていたり、めずらしい人種がいたり、将来偉業を成し遂げる人達もいる。

ただの学園かと思っていたら、とんでもない学園なんだなここは。

「……ここでは普通の生徒はいないのか？」

「そんなにはいないね」

あっさり言いやがったよこの子は……。俺はついため息をつくが、インデックスは俺を見て言った。

「でも、君はこの話を聞いて、今まで会った人たちを化け物って呼べる？」

唯達や、なのはさん達、ＳＯＳ団の皆やクラスの皆のことを化け物！？

「そんなわけないだろう！！」

そう怒鳴るとインデックスは笑顔で言った。

「だったらよかった♪少し変わっているけど、君と同じただの普通の生徒に見えるでしょう？」

「まあ、そうだけど……」

「いろんな人たちもいるけど、仲良くやっていけると思うよ♪それにこう考えていけば？自分は今すごい人たちがいる学園に来てとても面白い出会いが待っているんだって考えれば楽しくなると思うよ♪」

「……」

……そうだよな。俺はとんでもない学園に転校したけど、この学園で由美、なのはさん、フェイトさん、唯達、二年Ｚ組のみんな、そしてこの学園にいるいろんな生徒、彼らと出会って俺は後悔した

か？

いや、むしろ彼らと出会えて楽しかった。

そしてこれからも彼らみたいな生徒の出会いが待っているかもしれないと思うと、なんだかこの学園生活が楽しくなっていくような感じだ。そう思うと、この学園に転校するようにしてくれた由美には感謝しないといけないような気がする。

「それにしても、これじゃインデックスが俺の先輩みたいだな、色々なことを教えてくれて」

「ふふ～ん♪私はいろんなことを知っているからね♪」

俺達は笑い合った。こんな会話でも俺は楽しい気分だ。

『お～い！　インデックス！　どこだ～？』

食堂に大声が響いた。あの声は確か……。

「あ、当麻だ！！　じゃあ私、もう行くね！！」

「ああ、またな！！」

インデックスは俺に手を振りながら上条の方に走っていく。

「……また、ご飯おごってやるよ…」

俺はそう言ったが、おそらく彼女には聞こえていないだろう。

でもいつか、彼女に出会ったら、またご飯を一緒に食べよう。

楽しい話をしながら……。

『当麻！！　全然お昼ごはん用意してなかった……その弁当はなに？』

『え！？　ああ……その……御坂が弁当あげるとか言って……その……食べたんだよ……』

『……つまり、私は空腹で苦しんでいた時、当麻はお弁当を食べていたんだね…」

『あの……？　インデックスさん……？』

『と〜〜〜う〜〜〜〜〜ま〜〜〜〜〜〜！！！！！（怒）』

ガブ！

『ぎゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！！！　不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！』

第十二話　深く考えるな！ありのままを受け入れるんだ！！（後書き）

天城
「今回の話はどうかな？難しかったかな？」
恭介
「つまりいろんな生徒がいるんだよな？無限学園には？」
天城
「そう！そしてどんな生徒が出てきてもいちいち驚くなよ！」
恭介
「なんだよそれ……」
天城
「さて、次回はけいおん！のメンバーがまた出演！今度はライブを行うが、そこで大事件！？なにが起こるのか！？次回もお楽しみに！！」

第十三話　あなたはガルデモ派？それとも放課後ティータイム派？（前書き）

平沢唯の独り言

うんたん♪うんたん♪うんたん♪

第十三話　あなたはガルデモ派？それとも放課後ティータイム派？

《音楽室》

俺は今、音楽室の前に立っている。何故ここに来たかって？

俺がここで何をしたのか、覚えているだろう？

“可愛いくていい子だ！！いい子いい子してやろう！！”

“や、やめてください！！恭介先輩！！／／／／／／／／”

そう、ここで俺はあずにゃんに対し、セクハラ行為をしたのだ！

あずにゃんのネコ耳＆メイド服姿を見た俺は、精神が崩壊し、我を忘れあずにゃんに抱きつき、なでなでをしてしまったのである。

（でも本当に可愛かったよ、あずにゃん……）

しかし、後からになってよく考えてみると、あれはいくらなんでもやりすぎだよな……と思い、軽音部のあずにゃんに謝りに来たというわけだ。ドアノブに手をかけて開けようと思った時、俺は思った。

なんて言って謝ろう？

あれだけ酷いことをしたんだ、誠意を込めて謝らなければいけないだろうな……。

『すまなかった、梓！！　腹を切って詫びよう！！』

……これはやりすぎだな……。

『あずにゃ～ん♪ごめんね、ごめんね～♪』

……ふざけているな……。

『アイムソ～リ♪ヒゲソ～リ♪ナイカクソ～リ♪』

……絶対嫌われる！

だとしたら……もうこれしかない！俺はある結論にたどり着いた！

そして、さっそくそれを実行する！

バン！

俺はドアを開け、すぐさま土下座をした！土下座、これこそが日本人の謝り方である！

「あずにゃん！　昨日はゴメン！　君が可愛かったとはいえ、あれはさすがにやりすぎた！　許してくれ！　頼む！　このまま俺を踏みつけてもいいから！　俺はあずにゃんに踏まれても大丈夫だし、あずにゃんに踏まれるのなら、本望だよ！！」

「キョウ君なにやっているの？」

「ていうか、さりげなく問題発言をしたな……」

俺は頭を上げ、目の前の人物を見た。目の前に居たのは岩沢と唯だけだった。

「あれ？　唯と岩沢だけ？　あずにゃんは？　他のみんなは？」

周りを見渡すも、他の軽音部のメンバーの姿が見えない。どこに行った？

「他のみんなは明日の準備があって、先に帰ったよ」

「明日の準備？」

「これだよ～♪」

唯が手に持っていた、紙を渡した。その紙にはこう書いていた。

『第１０回　ライブコンサート大会！！』

参加自由！　優勝者には賞金五十万円！！

あなたの参加を待つ！！

「これに出るのか？」

「そうだよ～」

「このコンサートに優勝したら……賞金五十万！？」

大金じゃないか！？これだけのお金を手に入れたら……。

いろんな物が買えるじゃないか！？

「私達が優勝したら、このお金を学園長に寄付しようと思っている

んだ」

「えぇ！？」

なんてもったいないことを！！あのアホ女に渡したらロクなことにしか使わないぞ！どうせだったらそのお金を俺に渡せ！！

「キョウ君、今、邪なことを考えていなかった？」

「い、いや！　そんなこと思っている訳ないだろ！　それよりも、なんで学園長に寄付するんだ？」

話をすり替えて、気になる話題を聞いてみた。岩沢は音楽室のイスに座って、話し始めた。

「……恩を返そうと思ってな」

「恩？」

「……私は音楽と歌が好きなんだ。音楽を聞いていると別世界にいるような感じがして、歌を歌っている時は、とても熱くなれる感じがしたんだ。私にとって音楽と歌は生きがいだった。そして、この無限学園に入学した時、私は軽音部に入部したんだ。この部活なら毎日のように歌っていられるから、とても楽しい日常になれると思っていたから。だけど、当時軽音部の人数は少なかったから廃部寸前だったんだ。このまま廃部すれば、私の生きがいが無くなってしまう。私も努力はしたけど、あまり人数は集まらなかった。もう駄目だ……そう思っていた時、学園長が言ってくれたんだ…」

『この軽音部を廃部すれば、音楽を楽しんでいる生徒、歌を生きが

いにしている生徒の希望を壊すことになります！　絶対に廃部はさせません！！』

「学園長はその後、私達の為にいろんなことをしてくれたんだ。部活の勧誘を手伝ったり、必要な道具も用意してくれたり、さわ子先生を顧問の先生にしてくれたり、自分の給料を削って部費を足してくれたりしたんだ。おかげで、軽音部は廃部にならずに済んだんだ。だから、今度は私達が恩返しをしなくちゃならないんだ。このコンサートで優勝して、賞金を学園に寄付して、学園長の役に立ちたいんだ」

「……そうだったんだ」

岩沢の話を聞いて由美がこれまでいろんな生徒の悩みに対して、自分でできることをやってきたんだなと改めて思った。

そして岩沢はその時の恩を返そうと思っている。由美は生徒から絶大な信頼を得ているんだな。

「岩沢なら、絶対に優勝できるよ！　応援しているからな！」

「ああ、ありがとう！」

「キョウ君！　私には？」

え？……まさか……。

「お前も出るのか？」

「酷いよ！　私も出るんだよ！！　ボーカルなんだよ、私！！」

「ごめんごめん！　頑張れよ！」

「うん！　頑張るよ！！　私もギー太も晴れ舞台なんだからね！！」

「ギー太？」

唯は自分の持っていたギターを俺に見せた。

「この子がギー太だよ♪私の相棒なんだよ！」

「ギターのことかよ……」

「失礼だよキョウ君！」

そんなことを言われてもなぁ……。

「そのギターは唯が軽音部に入った時、学園長が買ってくれたんだよ。かなり高かったけど、学園長は店員を脅してタダで買ったらしい」

岩沢がそう説明してくれた。

「学園長っていい人だよね～♪」

「あ、ああ……そう…だな……」

脅された店員が可愛そうだが……。まあ、仕方ないよな。相手があの由美だし……。

「キョウ君、明日応援に来てくれる？」

「当たり前だろ！　絶対に行く！」

あずにゃんに謝らないといけないし。

「よかった♪私達、頑張るからね！」

「応援よろしくな！」

「おう！任せとけ！」

俺は力強く答えた。

二人と別れて、俺はそのまま寮に戻ることとした。

明日、放課後ティータイムとガルデモのライブか……。

「楽しみだな…！」

俺は今、唯と岩沢の歌が聴けることが楽しみで、ワクワク気分だった。

だが、この時の俺は知らなかった。

まさか、ライブコンサート大会で……あんなことが起きるなんて……。

今の俺には、想像もしていなかった……。

《翌朝・恭介の部屋》

「うん……？　朝……か……」

朝日の光が眩しくて目が覚めた。時計を見ると7時だった。

「いけねぇ……着替えないと……」

今日は軽音部のライブの日じゃないか。急いで準備しないと。
ベッドから起き上がり、朝ごはんの準備をしようとした時。

「おはよう、恭介♪」

ん？誰だ？声がした方向に目を向けると……。

「なんだ、由美か……って、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！　なななななななな、なんでここにいるんだ！！！！？？？」

あまりの衝撃に、外にも聞こえるほどの大声で言った！
そりゃあびっくりするだろう！鍵を掛けた自分の部屋に女の子がいるんだぜ！ていうかこれ、不法侵入じゃね！？

「そんなにびっくりしなくてもいいじゃない！」

「びっくりするわ！！！　どこから入った！？　鍵は掛けたはずだ

ぞ！！」

「私は学園長だよ♪学生寮の合い鍵くらい持って当然なんだよ♪それよりも、恭介♪寝顔可愛かったよ♪」

「やかましいわ！！（怒）　ていうか、何しに来た！？」

由美は部屋に置いてあるソファーに座って、お茶を飲みながら話し始めた。ていうか人の部屋でお茶を飲むな！

「今日、軽音部のライブコンサート大会に行くんでしょ？だったら伝言を頼んでもいいかな？」

「伝言って、由美は行かないのか？」

「私も行きたかったけど、仕事が溜まっていて行けれないの……」

「そうか……残念だな…。で、なんて伝えるんだ？」

由美は笑顔で言った。

「みんな頑張ってね♪って」

由美もやっぱり、みんなのことを応援しているんだな。

「分かった、必ず伝えるよ」

「ありがとう♪」

由美はソファーから立ち上がり、部屋を出ようと玄関に向かうが、

俺に振り返って言った。

「あ、それからさ！　押し入れに置いてあったエロ本は捨てておいたからね♪」

「ああ、ありが……じゃねー！！　なに勝手なことをしてんだ、てめー！！！（怒）」

「じゃあね♪」

そのまま由美は出て行った。あのアホ女！余計なことをしやがって！

エロ本が！！俺の楽しみがーーーー！！！

《ライブコンサート会場》

「デカいな……」

会場の建物の感想はたった一言、大きい。ステージも広く、観客席も多くて、約千人は入れるんじゃないのかってほどの広さである。

「こんなところでみんなはライブをするのか……」

周りを見てみる、このコンサートを見にきた観客や、出場するバンドチームでいっぱいだった。

さて、唯達はどこだろう？

キョロキョロ周りを見渡し唯達を探していたが、こう人が多いと見つけにくいものだ。

だが探し人は意外にも向こうからやって来た。

「あ！キョウ君だ！！オーイ！こっちこっち！！」

唯発見！

他のメンバーもいっしょのようだ。俺は彼女達の所に向かい合流した。

「おはよう！　いよいよだな！」

「うん！」

「よう、恭介！　応援に来てくれたのか？」

律や岩沢など他の軽音部のメンバーが全員いた。もちろんあずにゃんもいる。

俺はあずにゃんに近づいて、頭を下げた。

「あのさ、あずにゃん……。ごめん！　この間は本当にごめん！」

「え？……ああ、あの事ですか。もういいですよ。過ぎたことを今更言っても仕方ないですし、だから……頭を上げてください」

俺は頭を上げ、あずにゃんの顔を見た。

あずにゃんは笑顔で言った。

「今日は私達の応援お願いします♪」

「あずにゃん……大好きだーー！！」

俺はすぐさまあずにゃんに抱き付こうとしたが

「そのかわり、次抱き付こうとしたら、警察を呼びますからね♪」

「あの……それだけは勘弁してください……」

警察にお世話になるのは嫌だな……。

「ん？　ところで澪は？」

澪の姿がさっきから見当たらないけど、あいつどこに行ったんだ？

「澪ちゃんなら、あそこだよ」

唯が指を差した方向を見てみると、澪が手のひらに文字を書いてそれを飲み込んでいる。あいつまさか、人って書いて飲み込んでいるんじゃ……。気になって近づいてみると。

「人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人……」

なんだか呪いの言葉を唱えているような感じだ……。緊張をしているようだ。まあ無理はないだろな……。これだけの観客の前で演奏するんだからな。

「澪、大丈夫か……？」

「キョウスケカ、コンバンワ」

駄目だこりゃ……。完全にカチコチだ。

「おい、緊張するとは言え、もう少し肩の力を抜いて……」

「キョウ君！　百円落ちていた！！」

「唯はもう少し緊張しなさい」

あいかわらず緊張感がない唯であった。まあ、緊張している唯なんて想像できないけど。

「みんな聞いて！」

岩沢がメンバー全員に聞こえるように言った。

「このコンサートは私達の力を試す機会でもあるけど、私達の目的は優勝だということを忘れないでほしい。そして、優勝賞金を手に入れて、その賞金を学園に寄付するぞ！　これまでの恩を今こそ返すぞ！」

「軽音部ファイト！！」

全員

『オオォォォーーーーーー！！！』

唯の掛け声で軽音部が一致団結して、気合い十分なようだ。これ

なら優勝できそうだな。

そう思っていた時だった。

『おい、見ろよ。あいつら、無限学園の連中だぜ』

『ホントだ！　おいおい、まさか出場するのか……』

『おい、お前ら！無限学園の連中だろ？』

いきなり誰かに呼ばれたので、俺達は声がした方向へ顔を向けてみると。紫色の制服を着ている男女がいた。

どこかの学生かな？ギターケースを持っているようだから、唯達と同じ出場者のようだな。

「おい！　聞こえていないのか！？　お前らは無限学園の学生かって聞いているだろうが！！」

なんだコイツ……！随分と口が悪い！

「……そう…ですけど…？」

唯がそう答えると男は笑いながら言った。

「ハハハハハｗｗｗやっぱりそうか！　変人みたいな集団だからそうかなと思っていたが、やっぱり無限学園の生徒かｗｗｗ」

「変人だと！？」

あまりにも失礼な言い方だった。男は俺の言葉を聞いてさらに続

けた。

「そうだよ、変人さ！　知っているぜ！　無限学園ではかなりおかしな生徒がいっぱいいるんだってなｗｗお前らコンサートに出場するのか？　やめておけ、恥をかくだけだぞｗｗ」

その男が笑うと、他の連中も笑い出した。

なんてムカつく連中だ！と思った俺はそいつらに文句を言おうとした時、他の奴が動いた。

ユイだった。男の言動に耐えられなくなったようだ。

ユイは男の胸ぐらをつかんで言った。

「おい、てめぇ！　岩沢さんを舐めるんじゃねーよ！！　優勝は私達、無限学園の軽音部が貰うんだよ！！」

女の子としてその言い方はどうかと思うが、まあ良しとしよう。

「汚い手で触るんじゃねーよ！！　この変人が！！」

「きゃあ！！」

男はユイを突き飛ばし、ユイはそのまま床に倒れてしまった。

「ユイ！？」

「大丈夫！？」

みんながユイに駆けつけ体を起してあげた。傷がないか確認してみると、膝を擦り剥いており、少し血が出ていた。

「いたた……」

「ユイ！　大丈夫か！？　……てめぇ！！　よくもユイを…！！」

こんなことをされてはさすがの俺でも我慢の限界だった…！俺はそいつに一発殴ってやろうかと思って、拳に力を込めようとしたが、誰かが俺の腕を掴んで止めようとした。

岩沢だった。岩沢が俺の腕を掴んでいた。

「岩沢！？　なんで……！？」

「恭介やめろ！！　こいつらとは関わるな！！」

「でも、こいつらが…！！」

「いいから！！　頼むから……」

「岩沢……」

仕方なく俺は拳を収めた。岩沢はユイに近づいて、擦り剥いた傷に持っていた絆創膏を貼った。

「ユイ、立てるか？」

「はい…」

ユイを立たせて、みんなに言った。

「みんな行こう！」

俺達はすぐさま控室の方へと進んで行った。後ろではさっきの連中が俺達を笑いながら言った。

「アハハハハハハｗｗｗ逃げた逃げたｗｗ」

「恥をかく前にさっさと帰れよ！」

ムカつく奴らだ！今すぐ行って殴りたかったが、岩沢が構うなと言ったので俺達はなにもせずに控室に向かった。

《控室》

「岩沢なんで止めたんだよ！！　あんなに言われて悔しくないのか！！！！」

控室に到着してすぐさま俺は岩沢に文句を言った。先ほどの岩沢の行動が理解できなかった。

「悔しいに決まっているだろう！！！！」

ドン！

岩沢は机を叩いて怒鳴った。どうやら本人も悔しかったようだ……。

澪や唯は岩沢の怒鳴り声にびっくりしている。

「ユイが突き飛ばされて、あんなことを言われて悔しいわけがないだろう！！　私だって本当はあいつらを殴りたかったさ！！　でも……相手が悪い……」

「相手が悪い？　岩沢はあいつらのことを知っているのか？」

岩沢はイスに座り、一呼吸ついて話し始めた。

「……あいつらは、帝英学園（ていえい）の連中だ…」

「帝英学園？」

「金持ち、政治家、貴族の子供が通う学園で、エリートを育てる学園、それが帝英学園。あの学園とトラブルを起こすとロクなことがない。権力を盾にしてな。だからさっきお前があいつらを殴っていたら、あいつらの親が何をしでかすかわからないんだ。最悪、学園長にも迷惑が掛かるかもしれないんだ。それだけは絶対避けないといけないんだ……」

そうだったのか……。あのとき俺があいつらを殴っていたらどうなっていたことか……。岩沢は由美や俺達のことを考えて止めてくれたのか……。自分も悔しかったのに……。

「でもそれでも悔しいよ！」

ムギが涙目で言った。ムギも悔しかったんだな……。

「学園にいるみんなは確かにちょっと変わっているけど、あんな言い方をするなんて酷いよ！！」

そのとうりだ。学園の皆はいい奴ばかりなんだ、変人という言い方はあんまりだ！

すると岩沢が立ち上がり、ギターを構えて言った。

「だったらここで証明しよう！　このライブで、無限学園の実力を帝英学園の連中に見せつけてやるんだ！」

「そうだよ！！　私もギー太も頑張るから！！！」

岩沢と唯の言葉によって、さっきまで暗い顔をしていたみんなの顔が明るくなった。

「そうだな！　よーし！！　目指すは優勝！！」

『オォォォーーーー！！！』

「帰ったらケーキを食べよう！！」

『オォ……へ？』

あいかわらずだな唯……。

「あ、そうだ。学園長から伝言を預かっているぞ。頑張ってだってさ」

「そうか……。学園長がそこまで期待しているんなら、なおさら優勝しないとな！」

みんな気合十分だ！これならいけそうだな。

「じゃあ、俺は客席の方に行くな。みんな頑張れよ！！」

「頑張るよーーー！！！」

唯はすごいテンションだな……。

《会場・客席》

さて、空いている席があるかな？こんなに観客がいると、座る席がないかもしれないけど、とりあえず探してみよう。

「あ、恭介！　こっちこっち！」

誰かが呼んでいる？どこだ？周りを見渡してみると、明久を発見した。しかも明久だけではない。二年Z組の皆が来ていたのだ。

「みんな来ていたのか！？」

「うん！　だって唯さん達のライブがあるんだから、応援しなくちゃ！」

どうやら、みんなも応援に来たらしい。音無もゆりも神楽も新八もハヤテもみんな来ていた。まったく……いいクラスだぜ！

「ところで、俺の席って空いてない？」

「ああ、それならちょうど、ティアナさんの隣が空いているよ」

「そうか！　ありがとう！」

俺は早速、ティアナの席に向かった。確かに隣の席が空いているな。

「ティアナ、隣いいか？」

「えぇ！？　きょ、恭介君！？　い、いいよ！！」

なんでこいつは俺が話しかけるとテンパっているんだ？俺が何かしたか？

「ティアどうしたの？　顔が赤いよ？」

「う、うっさい！　スバル！！　話しかけないで！！／／／／／／／／／／」

「おいおい、そんな言い方はないだろう」

「うっ！　ご、ごめん……」

どうしたんだこいつ……？

しばらくたって、ライブコンサート大会が開始された。次々とバンドチームが出てきて演奏を始めた。

どのバンドもなかなかいい曲を演奏した。

そして、いよいよ出番が来た。

『次は無限学園、ガルデモです！』

観客の拍手と共に、岩沢率いるガルデモメンバーが出てきた。

「岩沢ーーー！！！　頑張れよーーー！！！」

俺は精一杯応援した。

演奏が始まり、みんなのテンションが上がった！さすが岩沢だ！

見事な歌唱力で観客を魅了していく！

『キャアァァァーーー！！！！　岩沢さーん！！！！』

『ガルデモ最高ーーー！！！』

『岩沢さーーーん！！！　こっち向いてーーー！！！』

『ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！』

『関根たーーん！！！　結婚してーーー！！！』

『入江ちゃん可愛いーーー！！！』

『ひさ子さーーーん！！！　俺を罵ってーーー！！！』

『関根たんは俺の嫁ーーーー！！！』

『入江たん……ハァ…ハァ…ハァ…』

『今の発言者を異端審問会に連行しろ！！！』

『イエス！マイロード！！！』

……一部変な奴らがいたが、ガルデモの人気はウナギ登りだ！これは優勝いけるんじゃないのか！！？

演奏が終わると、観客から盛大な拍手がした。とてもよかったよ！！

岩沢達はそのままステージから降りて行った。

「次は唯達か…」

俺は唯達の様子を見ようと、その場から離れて唯達の控室へと向かった。

《控室前通路》

あれ？放課後ティータイムの控室ってどこだっけ？

迷ってしまった……。だってここ広いんだぜ！！分かるわけねーだろうが！！

「えっと確か…こっちだっけ？」

俺は勘を頼りに通路を歩いて行った。

その時だった。

「おい、急げ!!　もたもたするな!!」

前からガラの悪い不良達がやってきた。なんか慌てているようだが……。

「邪魔だ!!　どけ!」

「のわっ!!」

俺を突き飛ばして、不良たちは走って行った。

「なんだあいつら…?」

よく見ると、不良の一人はギターケースを持っていたが、まさかあいつらも出場者なのか!?

「そんなわけないか……」

「なにしているんだ恭介?」

岩沢が立っていた。

「岩沢か……。あ、さっきのライブよかったぞ!みんな大興奮だったぞ!」

一部変態がいたけど……。

「そうか、ありがとう！ところで恭介は何をしているんだ？」

「唯達の控室に行こうと思っていたんだけど、道に迷ってしまった！」

「迷うか普通……」

だっておっきいんだぜここ！！迷ってしまうわ！！

「仕方ないな、ちょうど私も唯達の様子を見に行こうと思っていたところだから、一緒に行こう」

「おう！　サンキュー！」

結局岩沢と一緒に唯達の控室に行くことにした。岩沢は控室の場所を知っているので、迷うことなくいけるだろう。

「唯達、何しているんだろうな？　練習していたりして」

「意外にも紅茶を飲んでいるかもしれないなｗｗ」

そんな予想をしながら、放課後ティータイムの控室へと向かったのである。

《放課後ティータイムの控室》

控室に到着したが、そこで唯達は予想外なことをしていた。

練習でもなく、紅茶を飲んでいるのでもなく、必死に何かを探していたのであった。

「澪、あったか!?」

「駄目だ、ここにもない!」

「ここに置いていたんですか!?」

「間違いないよ!」

「どこだろう!?」

何をしているだこいつら?もうすぐ出番なのに…。

「唯、何があった?」

「岩沢さん!　キョウ君!」

唯が慌てて俺達のところに来た。顔はかなり焦っている。

「どうした?」

「どうしよう!?　ギー太が無いよ!!」

「なんだって!!?」

唯のギー太(ギター)がない!?どういうことなんだ!?

「本当にないのか!?」

「うん……。岩沢さんのライブを見ようと思って一回この部屋から出たんだけど、戻ってきたときにはもう無くなっていたんだよ！」

そんな……じゃあ唯達の…放課後ティータイムおライブはどうなってしまうんだ！？時計を見てみると、あと二十分で出番が来てしまう！

「よく探したのか！？」

「うん、よく探したんだけど……うっ……無いよ……」

唯の目から涙が出てきた。今まで一緒だった相棒が無くなってしまったんだ。悲しんだろうな……。

「澪が岩沢のライブを見に行こうっていうからこんなことになったんじゃないか！！」

「私のせいにするつもりか！？　そういう律だって、大賛成だったんじゃないか！！」

律と澪が喧嘩し始めてしまった。その光景を見ていた、ムギとあずにゃんはどうしたらいいのか分からず困惑していた。

「律、澪！　やめろ！！　今は喧嘩している場合じゃないだろう！！！」

岩沢は二人の喧嘩を止めたが、状況は変わらない。唯のギターがないのではライブができない。結果彼女達は失格となってしまう。

どうすればいい！！こんな時、由美がいてくれれば……！！

「何を言い争っているんだ？」

突然声がして、声がする方向を見てみるとルルーシュとC，C，が居た。

「ルルーシュにC，C，！？　なにやっているの！？」

「差し入れだ、俺とナナリーで一緒に作った弁当だ。食べて次のライブに備えておけ」

それは嬉しいことだが、今はそれどころではない！

「悪いけど今は…」

「何かあったか？　よかったら相談に乗るぞ」

「……実は…」

ルルーシュとC，C，に全てを話した。するとルルーシュは何かを思い出したのか俺達に話し始めた。

「…そういえば、さっきガラの悪い不良共がギターケースを持っていたがケースにギー太と名前があったような…」

「記憶能力に疎い男だなお前は、私ははっきり覚えているぞ。ギー太と確かに書いていた」

「本当に！？　それだよ！！　ギー太のギターケースだよ！！」

「マジか！？」

さっき会った不良共が盗んだのか！？しかしなんで唯のギー太を盗む必要があるんだ？いや、今はそんなことはどうでもいいことだ。重要なのは、そいつらがギー太を盗んだってことだ！

だとしたらやるべきことは決まった！

「まだ、遠くには行ってないよな……。俺、探してくる！」

「キョウ君！？」

「待て、恭介！　危険だ！　警察を呼ぼう！」

「それじゃあ時間がない！　ライブに間に合わなくなる！」

これまで唯は、この日の為に必死に練習してきたんだ。それをこんなことで無駄にはさせたくはない…！！

「キョウ君！！」

唯が不安な顔で俺を見ていた。そんな唯に対し俺は精一杯の笑顔で答えた。

「大丈夫だ！！　唯！！　絶対に間に合わすからな！！」

絶対に間に合わす！！そう誓って、俺は部屋から出て行った。

「キョウ君……」

それにしてもあいつら……。

“うん！　頑張るよ！！　私もギー太も晴れ舞台なんだからね！！”

よくも俺の友達の大事な相棒を……。

“この子がギー太だよ♪私の相棒なんだよ！”

あいつら……。

“私もギー太も頑張るから！！！”

ぶち殺す……！！！！

第十三話　あなたはガルデモ派？それとも放課後ティータイム派？（後書き）

恭介
「許せない！！唯のギー太を盗みやがって！ぶっ殺してやる！！」
天城
「ライブも間に合うのか？」
恭介
「ライブも間に合わせる！！絶対に！！」
天城
「恭介が熱血主人公になったな。前まで変態だったのにｗｗ」
恭介
「何か言った！？」
天城
「いえ、何も……。さて、恭介は無事ギー太を取り返せるのか！？
そしてライブは間に合うのか！？次回に続きます！！」

第十四話　君の笑顔を守りたい（前書き）

岩沢の独り言

軽音部は負けない…！どんな困難にあっても、歌をやめない……！！

第十四話　君の笑顔を守りたい

《コンサート会場》

「あの不良共はどこに行った！？」

さっき出会ったからそんなに遠くには行ってないはずなんだが、周りを見渡しても不良共は見つからない。

「くそ！　あの時、唯のギターと気づいていれば……！」

不良共とすれ違った時、何故俺はあのギターが唯のギターだって気付けなかったんだろうかと後悔していた。

しかしいくら後悔しても唯のギターが戻ってくるわけじゃない、急いであの不良共を見つけ出して、ギターを取り返さないと！

「ライブまでには間に合わせるからな、唯……！」

絶対に間に合わせる。唯と約束した以上、約束を破るわけにもいかない。

俺は必死に辺りを見渡した。

「どこにいるんだよ、あいつら……！」

「誰を探しているの？」

「そりゃあ、あの不良……って御坂さん！」

そこにいたのは、御坂さんだった。

「なんでここに!?」

「わざわざ理由を言わないといけない？　それとさん付けはいらないわ。一応あんたの方が年上だし。ていうか誰を探しているの？」

「えっとさ……ギターケースを持った、柄の悪い不良共を見なかった？」

そう聞くと、御坂さん…じゃなかった、御坂は会場の出口を指差した。

「ギターケースを持った連中なら、外へ出て行ったわよ」

外へ!?今からいけば間に合うかな……？とにかく手がかりを見つけた。

「ありがとう、御坂！」

「え？　ちょっと!?」

俺は御坂に礼を言って、会場の外へ出た。

あいつらは外へ逃げたようだが、絶対に逃がさない！

「何なの？あいつ……？」

御坂美琴は不思議そうな表情で、走っていく恭介の後ろ姿を見つめ

ていた。

『ゲコゲコ！　ゲコゲコ！』

「ん？メール？」

読者の皆さんに念の為言っておくが、今のゲコゲコはカエルの声ではなく御坂の携帯の着信音である。

御坂はカエルの顔のような形をした携帯を開き、メールの内容を確認した。

「……ふ～ん……なるほどね……」

御坂は携帯を閉じ、納得した表情で、恭介が出て行った出口を見つめていた。

「あいつも、お人好しのバカということか……」

《コンサート会場の外》

会場から出て、あいつらを探したが、見渡す限り人が多く見つけられなかった。

「まさか……もう遠くに行ったんじゃないだろうな……」

不安だった。もし取り返せなかったら、唯が出場できなくなってしまう。

この日の為に練習してきたのに、全てが無駄になってしまう。

「絶対見つけないと……！」

そんなとき、見たことのある紫の制服の男達を見つけた。

今朝出会った、帝英学園の連中じゃないか。

「あいつら、どこに行くんだ？」

あいつらの出番はもう終わったと思うが、優勝結果を見ずに帰るわけがないし……。

「もしかして…！」

俺は一つの可能性を考えた。確証を得るために帝英学園の連中の後を追うことにした。

後を追ってたどり着いたのは、会場から少し離れた所にある古びた建物だった。

帝英学園の連中は建物の中へ入っていく。俺は見つからないように建物の入り口付近に隠れて、中の様子を伺った。中には何人か男達がいた。しかもその男達には見覚えがある。

「あの時の不良…！」

控室前の廊下ですれ違った、あの時の不良達だ！不良たちのリーダーらしき男が前に出て、帝英学園の男にある物を差し出した。ギ

ターケースだ。男はギターケースからギターを取り出した。そのギターをよく見ると、間違いない、唯のギターだ！やはり、あいつらが盗んだんだな。

「これでいいんだな？」

「ああ、間違いない。あの変人共の女が持っていたギターだ。ご苦労だった、これは礼だ」

そう言って、帝英学園の男は不良のリーダに封筒を渡した。

不良のリーダーは封筒の中身を確認する。中身に入っていたのは札束だった。

「へへ、まいどあり！今回の仕事は楽だったな！ところでなんであいつらのギターを盗むんだ？」

不良のリーダーは疑問に思っていることを聞いてみた。

「…ちょっと、予想外なことになってな。俺の知り合いの審査委員に聞いてみたんだが、今回のライブコンサート大会の優勝は無限学園のガルデモになりそうなんだ。あいつら…大したことないと思っていたが、かなりできる連中みたいだ。まあ、俺達が優勝することには変わらないが、念には念を入れて、放課後ティータイムには出場できないように、ギターを盗んでこいとお前らに頼んだわけなのさ」

「ふ～ん…でもさ、ガルデモが優勝しそうなら、お前らが優勝できないんじゃないのか？」

「そこは権力を使うのさ。審査委員に金を渡せば、俺達が優勝でき

るってことさ」

「なるほど、お前悪だな！ハハハハハハハハｗｗｗ」

「バーカ、頭を使った戦略なんだよ。権力に勝てる奴なんていないんだよｗｗ」

男達は笑い合った。あいつらにとっては楽しい会話なんだろうが、聞いてるこっちにしては、胸糞悪い話だ。

こいつらは絶対に許さない……！！

このコンサートに出場している人たちはみんな優勝の為に努力している人たちばかりだ。もちろん、軽音部の皆も同じだ。

だが、こいつらはそんな努力もせず、権力を使って優勝しようとしている。

こんな最低な奴らに優勝はさせない！！！

「隙を見つけて、ギターを取り返さないと…！」

だがのんびりしていたら、唯達のライブの時間に間に合わなくなってしまう。どうすれば…！

「ところで、このあとは…？」

「ああ、次の仕事はコンサートが終わってからだ。あの無限学園の軽音部の連中を襲ってくれ。あいつらは調子に乗りすぎだ。権力に逆らえばどうなるかを教えてやれ」

「じゃあその女達はその後、俺達の好きにしてもいいんだな！！」

「ああ、好きしてもいいぞｗｗ」

「ヒャホーー！！　俺あの岩沢って女いただき！！」

「じゃあ、俺はあの入江って女な！！」

「だったら俺は澪って女をいただきだ！　胸でかいし！」

「ゲヘヘヘヘｗｗｗ」

下種な笑い声を聞くたびに俺の怒りはどんどん大きくなっていく。

「まったくバカな連中だよあいつらは、優勝できるわけないのにｗｗ」

ブチ

俺の頭の中で何かが切れた……。

こいつら……。

ぶっ殺す……！！！！

ドカーーーン！！！！

俺は建物のドアを思いっきり蹴り飛ばした。

「な、ドアが！？」

「何者だ！！」

俺はゆっくりと奴らに近づいた。

もう許さない！こいつらをぶん殴ってからギー太を取り返すとしよう！

「てめぇ！？　あの時の無限学園の生徒！！」

「てめぇの仕業だったんだな……！！　唯のギー太を盗みやがって……！！」

「ギー太？」

「そのギターだよ！！！」

「おいおい、無限学園では楽器に名前を付けるのか！　これは傑作だ！！　やっぱり変人なんだなお前らｗｗで、他の楽器はなんて名前なんだ？エリザベスか？　マルチーズか？　それとも、太郎か？」

「黙れ！！！」

唯達を侮辱する奴は許さない！！俺はそいつらに向かって突撃した。

「調子に乗るんじゃねーーー！！！」

不良の一人が前に立ちふさがり、俺に殴りかかってきた。
だが俺は、そのパンチを避けて、そいつの腹に蹴りを入れた。

「ぐはっ！！」

「まず一人！」

「てめぇ！！！」

次に来る奴は体格が大きかったが、動きが遅い。そいつの攻撃を避け、顔面を一発殴った。

「がはっ！！！」

「次はどいつだ！！？　一人残らずぶっ飛ばしてやる！！！」

俺の怒りは頂点になっているから、誰にも負ける気がしない！！
由美には勝てないけど……。
とにかく、一人ずつ倒していけば問題ない！そう思っていたが……。

「動くな！！　これが見えないか！？」

帝英学園の男は唯のギターを持ち片手にハンマーを持っていた。

「何をする気だ！！？」

「お前が余計な事をすれば、このギターをぶっ壊す！！」

「なっ！？」

これじゃあ戦えない……！唯のギターを取り返すために来たのに、壊されては意味がない！

何もすることができない俺が、唯一できるのは、拳を収めることだった。

だが、その時。

「隙やり！！」

「がっ！！」

後ろから不良のリーダーが鉄パイプで殴ってきた。

俺は床に倒れてしまった。痛む頭をさすってみると、ヌルっとした感触がした。手を見てみると、手は血で真っ赤だった。

おいおい、マジかよ……。血が出ているじゃねーか……。

「好き放題やりやがって！！　お前らやっちまえ！！」

床に倒れてなにもできない俺に対して、不良たちは殴る蹴るなどの暴行を加えた。

「がっ！！　……ぐっ！！　……ぐはっ！！！」

「この野郎！！！」

「がはっ！！！！」

何もできない……。唯のギー太があいつらの手にある限り、俺ができることはなにもない。

悔しい……！なぜ俺にはなにも力がないんだ……！
御坂や上条やルルーシュみたいな力は俺にはないのか……！

俺には……！

一人の女の子の笑顔も守れないのかよ……！！

「いやはや、お前も相当なバカだな！　こんな安もんのギターごときの為に俺達に喧嘩を売るなんてさ、本当のバカだよ、オラ！！！」

「がはっ！！！！」

帝英学園の男は、俺の腹を思いっきり蹴ってきた。そして男は話を続けた。

「そもそも俺達、帝英学園に喧嘩を売った時点でお前らの負けなんだよ！　どんなに頑張ろうと、審査委員に金を渡せば、俺達は優勝できるんだからな！　ハハハハハハハハ！！！！」

男は、大笑いした。もはや自分が優勝できると確信しているようだ。

「金を渡して優勝するだと……！？　お前ら、そんな卑怯なやり方を使って恥ずかしくないのか！！？　何がエリートだ！！！　この卑怯者！！！」

「うるせーよ！！！！」

「がっ！！！！」

男は俺の頭を踏みつけた。頭に激痛が走る。

「だいたい、ここの審査委員はおかしいんだよ!!　俺達エリートの帝英学園じゃなくて、変人共の無限学園が優勝するような評価をしやがって!!　あんな変人共の歌の何がいいんだ!!?　おかしいだろうが!!　だから金や権力を使って優勝して何が悪い!!!」

こいつらは自分達が優勝できないことを審査委員のせいにしているのか。

何がエリートだよ……こいつらバカじゃねえのか?

どうして優勝できないのかって?そんなの決まっているじゃないか。

「お前らじゃ軽音部に勝てないさ…」

「なんだと?」

「ガルデモの岩沢は確かに歌も音楽もうまいさ。でもあいつだって最初から上手かったわけじゃない、必死に練習して、頑張って、努力したからこそ岩沢は上手いんだ。いや、岩沢だけじゃない、ひさ子もユイも入江も関根も唯も澪も律もムギもあずにゃんもみんな頑張っていたんだ!　学園長の由美に恩返しをするために頑張ったんだ!　だけどお前らはどうだ?　努力もせず、頑張りもせず、いざとなれば金や権力に頼っているじゃないか!　そんなお前らが……必死に努力しているあいつらに勝てるわけないだろう!!」

「てめぇ……!!」

帝英学園の男は怒りの表情を浮かべた。俺の言葉が癇に障ったようだ。

「好き放題言いやがって……！！　俺たちじゃああの変人共に勝てないだと！？　ふざけんじゃねー！！！　世の中はな、権力を持っている奴が勝者なんだよ！！　今からそれを証明してやる……！！」

男は置いてあった金属バットを持って俺に近づいた。

「こいつでお前の頭をかち割ってやるぜ！！　俺を恨むなよ！　恨むんなら自分の無力を恨むんだな！！」

そう言って男はバットを構えてきた。俺の頭を本気でかち割る気だ。

俺はここまでなのか……。

唯……。

岩沢……。

由美……。

ごめん……。

男がバットを振り下ろす瞬間、俺は覚悟を決め目をつぶった。

しかし、いつまでたっても痛みが来ない。そして代わりに。

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー!!!!」

先程の男の悲鳴が聞こえた。

なんだ?何が起こった?

「バットはボールを打つ為の物であって、人の頭をかち割るようなことに使っちゃあ駄目ですよ?」

聞いたことのある声が聞こえた。この声は……。

俺は目を開け、目の前の人物を見た。

そこにいたのは……

「大丈夫ですか?恭介さん?」

「ハヤテ！？」

水色の髪に執事服を着た、ナギの執事にして、俺のクラスメイト、綾崎ハヤテだった。

「うわぁ……頭に血が出ていますよ……」

「なんでお前がここに！？」

「僕だけじゃありませんよ♪」

ハヤテは笑顔でそう言った。

僕だけじゃない……？

『ディバイン……』

どこからか、声が聞こえる。この声は俺は知っている。転校初日に出会った、優しいあの人の声だ。

『バスターーーーーー！！！！！』

ドカーーーーン！！！！！！

建物の壁が崩壊し、高町なのはさんが現れた。

「恭介君！　大丈夫！？」

「なのはさんまで！？」

いったいどうなっているんだ!?ハヤテやなのはさんまでくるなんて……。

「てめぇら!　いったい何者だ!?」

「通りすがりの執事ですけど?」

「ふざけやがって!!　おいお前等!　やっちま…」

しかし不良の言葉は最後まで言えなかった。

「アチョーーーー!!!」

「ぎゃあああああーーーー!!!」

突然現れた神楽のキックによって、不良は１０メートルも飛ばされた。

「変態野郎!　助けに来てやったアルよ!」

「神楽!?」

「俺達もいるぜ!!」

別の方向には坂本雄二と吉井明久がいた。しかもいつの間にか、雄二は不良の一人を踏みつけていた。

「恭介!　もう大丈夫だよ!」

「俺達に喧嘩を売るなんて、百年早いぜ！　覚悟しろよ…生まれてきたことを後悔させてやるぜ！！」

そう言って、雄二は不良の群れの中に突っ込んで行く。

危ない！と思ったが、いらぬ心配だった。

雄二は不良共を次から次へと、ぶっ飛ばしていく。どうやら、喧嘩は強いようだ。

「こうなったら、後ろから……ぐわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

雄二の後ろから襲おうと思っていた不良の一人が吹っ飛ばされた。

「あんた達、なにしようとしてんの？」

御坂まで現れた。先程不良を吹っ飛ばしたのは、御坂のようだ。

「恭介君！　大丈夫！？」

「酷い怪我だな…」

さらにゆりと音無と日向までも来た。いや、二年Z組のみんなが来たのだ。

「みんなどうしてここに……？」

俺は一番の疑問を聞いてみた。

「このメールを見て来たのよ」

御坂が近づいて、自分の携帯のメール画面を見せてくれた。

メールの内容は……。

『唯のギターが盗まれた。恭介が犯人を追っているから、手伝ってやってくれ。あと犯人は会場から少し離れた建物にいる』

いったい誰がこのメールを……？差出人の名前を見てみると、名前はルルーシュだった。

「ルルーシュ！？　あいつがこのメールを！？　てかあいつ、御坂のメールアドレス知っているの！？」

「当然だ！！　俺は学生寮の寮長だぞ！　寮に住んでいる生徒全員のメールアドレス知らなくてどうする？」

「な、なるほど……ってルルーシュ！？　いつの間に！？」

俺の後ろに、いつの間にかルルーシュがいた。もう全員集合じゃないか！

「まったく……無茶しよって…。俺達が来なかったらどうなっていたことか……」

「す、すまない……」

今回はルルーシュに助けられた。ただのシスコンかと思っていたが意外とやるじゃないか。

「てめぇら……！！　調子に乗るんじゃねー！！」

帝英学園の男は、唯のギターを俺達に見せつけた。

「こっちにはあの女の大事なギターがあるんだぞ！！　壊されたくなかったら大人しくしろ！！」

しまった！まだあいつらには唯のギターがある。せっかく逆転できるかと思っていたのに……。

これでは反撃できない！

「いくら大人数で来ようとも、最後に勝利するのは俺達なんだよ！ハハハハハｗｗｗ」

悔しい……！また何もできないのか……！？

他のみんなも唯のギターがあいつらの手にあるから、手出しできない…！

だが、一人だけ反応がみんなと違っていた。

「…フッハハハハハ、フハハハハハｗｗｗ」

突然、ルルーシュが笑い出した。

「な、なにがおかしい！？」

「勝利だと？　違うな……間違っているぞ！！　貴様がギターを取り出した時点で、勝利の条件は揃ったのだ！！」

「な、なんだと！？」

ルルーシュはいったい何を言っているんだ？この状況で俺達が勝てる方法があるのか？

「ルルーシュ・ランペルージが命じる…」

そうルルーシュが言った時、ルルーシュの左目に奇妙な紋章が浮かび上がった。

「そのギターを恭介に渡せ！」

ルルーシュは帝英学園の男にそう命令したが、素直にあいつが渡してくれるのか？

と思っていたが、予想外なことが起こった。

「…ああ、分かった」

男は唯のギターを俺に渡した。なぜ素直に渡したんだ？と俺は疑問に思ったが、つい最近のインデックスの言葉を思い出した。

“それとあの寮長にはギアスって言う能力があるの、人の目を見ながら命令すると、その人はその命令に従う、絶対遵守の能力”

これがルルーシュの能力、ギアスの力なんだな。

インデックスの言うとうり、あいつに命令したことによって、その命令に従った。

「おいお前！　何渡しているんだよ！？」

「……え！？　お、俺、なんで渡したんだ！？　おい、返せ！！」

何言っているんだ？これはもともと唯の物だぞ。誰がお前に渡すか。

「恭介！　そいつを持って、急いで唯達のもとへ向かえ！　急がないと間に合わなくなるぞ！」

ルルーシュの言うとうり、ここでかなりの時間ロスをしてしまった。急いで唯達のもとへ向かおう！

「恭介、肩貸してやる」

「立てるか？」

日向と音無の支えによって立ち上がり、そのまま会場へ向かおうとしたが。

「行かせるか！！　お前ら！！」

男の合図で隠れていた不良達が出てきた。
大人数出てきて、バットや鉄パイプなどの武器を持っていた。

「会場に行かせるものか！！　ここでぶっ殺す！！」

「くそっ！　このままでは……」

ライブに間に合わない……！

「恭介君、ここは任せて先に行って」

「なのはさん！？」

いきなりそんなことを言いだしたが、相手は大人数、しかも武器

を持っている、こんな状況をなのはさん一人でなんとかできわけがない。

「危険ですよ！！」

「ライブに間に合わなくてもいいの？　あの子たちの約束を守らなくてもいいの？」

「そ、それは……！」

「私なら大丈夫！　だから行って！」

そんなことを言っても、女性を一人置いていくことなんてできないよ！

「恭介君、行きましょう！」

「ゆり！？　でも…」

「なのはさんなら大丈夫。それよりも急がないと！」

確かに時間がない。ここはゆりに従うしかない。

「すいません！　なのはさん、お願いします！！」

「ＯＫ♪」

なのはさんが笑顔で言ってくれた。

なのはさんの思いを無駄にしないように、俺達はギターを持って会場に向かった。

「女！　てめぇ、一人で俺達とやりあえると思っているのか！？」

「後悔させてやるぜ！！」

「……よくも…」

「はあ？」

「よくも恭介君にあんなことをしてくれたね…」

「な、なんだこの女……！？」

高町なのはから、どす黒いオーラが出てきた。

高町なのは、いや、魔王なのははお怒りなのだ！

「ちょ、ちょっとやばくね……！？」

「お、おい！　ビビっているのか！？」

「君達……」

「へ？」

高町なのはは杖を構え、帝英学園の男ならびに不良たちに言った。

「少し、頭冷やそうか……？」

『ぎゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーー！！！！！』

『た、助けてくれーーーーーー！！！！』

『ご、ごめんなさーーーーい！！！！』

『マ、ママァァァァァァーーーーーーーーー！！！！』

『魔王だ、魔王が降臨したーーーーーーーーー！！！！』

『誰が魔王ですって？』

『ヒィィィィィィーーーーーーーーー！！！！』

『す、すいませんでしたーーーーーー！！！！！』

『あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！！！』

建物から断末魔の声が聞こえるが大丈夫なのか？いったい中で何が起こっているんだ？

「なあ、なのはさんは……」

「知らない方がいい…」

ルルーシュはそう言った。気のせいか、ルルーシュは震えているみたいだけど。

いや、他の皆も震えているのか？いったい何なんだ？

気なる謎を残しつつ、俺達は会場に向かった。

《コンサート会場》

会場に到着した。後は唯にこのギターを届ければいいが、先ほどの

不良たちに受けた傷が悪化し始めた。

「うっ……！　痛っ……！」

「大丈夫か、恭介！？」

「だ、大丈夫だ……！」

本当は大丈夫じゃないが、こんなところで立ち止まるわけにはいかない。このギターを唯のもとへ届けないとあいつらはライブができなくなってしまう。

あいつらの努力を無駄にはしたくはない……！！

傷の痛みを我慢して歩き出そうとした時、前から人が走ってきた。唯と岩沢だ。

「恭介！？」

「キョウ君！？　その怪我どうしたの！？」

「唯…約束を守ったぞ……お前のギターだ……！」

俺はギターを唯に渡した。

「早く行け……！　間に合わなくなるぞ……！」

「で、でもキョウ君！　怪我が…」

「行くんだ！！」

唯は俺の怪我を気にしていたが、俺を気にしていたらライブに間に合わなくなってしまう。

「わ、わかった！　ごめんね、キョウ君！」

まったく、なにがごめんだよ……。ここはありがとうって言ってくればいいのに……。

唯はギターを持って走って行った。ここまで頑張ったんだから、優勝してくれよと心から思った。

「まったく、なに無茶してんだ！　こんなに酷い怪我をして……。すぐに手当てをしよう！」

「悪いな……」

岩沢やみんなに支えられて、会場の医務室まで行こうとしたが

「あ…れ……？」

「恭介？」

足元がふらつき、体から力が抜けていく感じがした。そしてそのまま俺は床に倒れて、意識を失った。

『恭介！？』

『恭介君！？』

『おい、大丈夫か！？』

『医者！　医者を呼んできて！！』

《会場・医務室》

「……あれ…？　……ここは……？」

「キョウ君！　目が覚めたんだね！！」

「唯……？」

目が覚めると、俺は医務室のベットで寝ていた。

頭には包帯が巻かれて、顔には絆創膏が貼られていた。そして、俺のベットの周りには軽音部のみんなが心配そうな顔で見ていた。

「唯…岩沢……みんな……ライブは？」

「キョウ君のおかげで間に合ったよ！　キョウ君にも見せたかったなぁ…」

「そうそう！　澪のゴスロリ衣装とかさ！」

「余計なことを言うな！！」

そうか、間に合ったか。それを聞いて安心した。
しかし……澪のゴスロリ衣装……見たかったなぁ……。

「それで結果は？」

俺は一番気になることを聞いてみた。

「それがね……ガルデモが一位になったんだよ！　私達放課後ティータイムは二位だけどね」

「岩沢達が一位で、唯達が二位……。やったじゃないかお前ら！！」

ガルデモが優勝したってことは、帝英学園からの妨害はなかったのか？

「帝英学園の連中からは妨害とかはなかったのか？」

「それがね、結果発表の前に私達のところに来たんだよ」

「なんだって！？　大丈夫だったのか！？」

まさかあいつら、唯達に八つ当たりでもしようと……。

「いや、私達は大丈夫だったんだけど、逆にあいつらの方が大丈夫か？って言いたいくらいだったよ」

「へ？」

岩沢の言っている意味が分からない。どういうこと？
するとユイが説明してくれた。

「えっとですね…。私達の所に来た帝英学園連中と不良共なんですけど、なぜか全員ボロボロだったんですよ！　ミイラみたいな人もいましたし、腕とか足とかも骨折している状態だった人もいました。それでその人達は私達の目の前で土下座して『すいませんでした！！　もう二度とこんなことはしないので、どうか許してください！！　あの魔王にもよろしく伝えておいてください！！』って言ったんですよ」

「なんのことやらさっぱり分からなかったけど、スカッとしたよ！　なあユイ！」

「そうですよね～♪ざまぁｗｗｗ死ね！　って感じですよね～♪」

あいつらが土下座して謝るなんてどういう風の吹き回しだ？ていうかあの建物であいつらなにがあったんだ？ボロボロだったて言うけど……。

まさかなのはさんが！？

……なわけないか。なのはさんがボロボロにするまで酷いことをするわけないし。
でも魔王ってどういう意味何だろう？

まあいっか、深く考えるのはもうよそう。

「とにかく優勝おめでとう！！　さすが岩沢と唯だな！」

「……キョウ君のおかげだよ…」

「え？」

「キョウ君がギー太を取り返してくれたから、私達は出場できたんだよ。私、演奏している時思ったんだ。このギー太はキョウ君がボロボロになってまで取り返してくれたから、キョウ君の期待にこたえようって思ったんだ。だから私が一生懸命歌えたのも、とても楽しい気持ちにさせてくれたのもキョウ君のおかげなんだよ！　本当にありがとうね！　キョウ君！」

「私からも礼を言わせてくれ、本当にありがとう！」

岩沢と唯が笑顔で言ってくれた。とても良い笑顔で。他の軽音部のみんなもいい笑顔だ。よほど今回のライブが楽しかったんだろうな。

そして俺はあることに気がついた。

「俺は……守れたんだな……」

「え？」

「お前らの笑顔を守れたんだな……」

「キョウ君……うん！　キョウ君は私達の笑顔を守ったんだよ！！」

嬉しかった。こんな俺でも誰かの笑顔を守れたんだな。

そう納得した時

バン！

「恭介！！」

ドアが勢い良く開き、由美が現れた。

「由美！？　お前仕事は…」

「恭介！！　大怪我したって本当！？　腕は折れてない！？　頭は割れてない！？　魂抜かれていない！？　死んでいない！？　ねえ！恭介！！」

「と、とりあえず落ち着け！！」

由美はいきなり俺の体を隅々まで触り、怪我の確認をした。

俺は由美を落ち着かせようとしたが。

「……恭介の…」

「へ？」

「バカ野郎ーーーーーー！！！！！」

「ぶべぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーー！！！！！」

いきなり由美に殴られた！なんで！？俺が何をした！？あまりの事態に軽音部のみんなも困惑している。

「恭介のバカ！！！　アホ！　マヌケ！　ドジ！　変態！　ロリータ！　このスーパーハイパードＭＫＹロリータエロティックファンタジックキモオタク変態アホクソバカ犬恭介！！！！！！！」

「名前がバージョンアップしてない！！？　長くて読者も読みにくいよ！！」

「うるさい！　うるさい！！！　うるさい！！！！　うるさーーーい！！！！！！」

由美は俺をポコポコ殴りながら騒いでいた。わけがわからない！いったい何がやりたいんだこいつは！！？

「お前いい加減に……え！？」

由美の表情を見たとき、俺は驚いた。

由美は泣いていたのだ。

「心配したんだから……恭介が大怪我したって聞いて……私、居ても立ってもいられなくて……仕事をさわ子先生に押しつけて……急いで駆けつけたんだよ……なに無茶してんよ……もしものことがあったらどうするつもりよ……恭介のバカ、アホ、死んじゃえ……うっ……うぅぅ……うわあああああああああああん！！！！」

由美が突然泣きだした。突然のことで俺も唯達もパニックになった。

「お、おい！　な、泣くなよ！！」

信じられなかった。あの由美が泣き出すなんて……。よっぽど俺のことが心配だったんだな……。

俺は由美の頭を撫でて落ち着かせようとした。

「由美、俺は大丈夫だから、泣くなよ。大丈夫だからさ……」

「……うん…」

やっと泣き止んだ。まったく世話のかかる学園長だぜ……。

「本当に大丈夫？」

「大丈夫！」

「よかった……！」

ドキッ！

か、可愛い……！

由美は可愛い笑顔を見せた。不覚にもときめいてしまったよ……。

「す、すまないな。心配かけて…」

「もういいよ…恭介が大丈夫なら…」

由美は安心したようだ。すると突然岩沢が由美の前に来た。

「あの学園長！」

「ん？」

岩沢は由美に札束が入っている封筒を渡した。優勝賞金五十万円のようだ。

「このお金、学園長に寄付します！　いつか、私達軽音部を救ってくれたお礼です！」

「いらないよ。そのお金は軽音部で使って」

「え！？　でも……」

由美は岩沢の肩を掴んで話し始めた。

「私はね、岩沢さんの歌が好きなんだ♪聞いていると力が湧いてきてなんでもできそうな気がするんだよ！　もちろん唯ちゃんの歌も

好き！　軽音部が大好き！！　だからこれからもいい歌を作る為にもそのお金は大事にしなさい♪いいね♪」

「学園長……。はい！　頑張ります！！」

「私達も頑張ります！！」

唯も笑顔で返事をした。他の軽音部のみんなも笑顔だ。

「うん♪いい返事だよ！」

由美……やっぱりお前ははすごいよ……。

最高の学園長だよ……！

岩沢や唯達に希望を与えてくれる、いい学園長だよ……！

「さあ恭介！　みんな！　帰ろうか！！　私達の学園へ！！」

ああ、帰ろう……！

俺達の学園…無限学園へ……！！

第十四話　君の笑顔を守りたい（後書き）

天城
「優勝できてよかったじゃないか！」
恭介
「ああ、本当に良かった！でも気なることが一つあるんだよな……。あの建物で帝英学園の連中と不良共に何があったんだろう？」
なのは
「恭介君♪なにも知らないことが一番の幸せなんだよ♪」
恭介
「なのはさん！？いつの間に！？」
天城
「さて、こいつらは放っといて……。今回のライブ大会編はいかかでしょうか？シリアスな展開になってしまいましたが、次回からはいつもどうりギャグな話になります！ちなみに次回はゆりっぺと愉快な仲間達が登場します！では、次回また会いましょう！！」

第十五話　鬼ごっこだよ♪全員集合～♪（前書き）

ゆりの独り言

死んだ世界戦線……万歳！！！！

第十五話　鬼ごっこだよ♪全員集合～♪

《恭介の部屋》

「あ～～～～日曜日ってなんて素晴らしい日なんだろう♪」

そう言って、部屋でゴロゴロする俺であった。

そう、今日は日曜日！日曜日といえば、学校は休みである！つまり今日は由美からの変な依頼はないってことだ！日曜日はこんなに素晴らしい日だったんだなと、改めて実感した俺であった。

「さて、せっかくの休みだからどうしよっかな～♪　日中ゲーム三昧しよっかな～♪　それとも日中寝よっかな～♪　どうしよっかな～♪」

休みということで俺のテンションはＭＡＸである！由美に邪魔されることはないしな！

「まあとりあえず…仮面ライダーオー〇でも見るとするか」

俺は側に置いていたリモコンを取って、テレビをつけた。

『変身！』

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ　ト　バ！　タトバ！　タトバ！』

これを見ているといかにも今日は日曜日であるということを感じる。

「あ～～～～♪　平和だな～～♪　今日は何も起こらず平和な一日になってほしいな♪　よし決めた！　今日は部屋から一歩も出ないからな！　絶対に出ないぞ！」

完璧な引きこもり宣言をした俺であったが、そんな平和な一日はとある来訪者によって、崩壊したのである……。

バン！！

いきなり玄関のドアが開き、数人の男達が入ってきた。　しかも男達は刀や拳銃やマシンガンなどの重火器を持っていたのだ。

「うわぁぁ！！？　な、なんだ！？　何なんだお前らは！！？」

俺の質問に対し、男達は何も言わない。そんな時、男達の中に見覚えのある男がいた。
日向と野田であった。

「おい！　日向！　野田！　これはいったいどういうことだ！？説明しろ！」

日向と野田に説明を求めたが、野田がいきなりハルバートを俺の首筋にあてた。

「うるせぇんだよ！！　変態野郎！！　てめぇは黙っていろ！！」

「野田言いすぎだ。わりぃ、しばらくここに匿わせてくれないか？」

はあ！？匿わせてくれだと！？誰かに追われているのか！？

「恭介君には悪いけど、匿わせてちょうだい」

「ゆり！？」

ゆりが玄関から現れた。彼女の手にはトランシーバーが握っており、先ほど誰かと連絡を取っていたみたいだ。

「遊佐さんから連絡が来たわ。敵がこの学生寮に向かっているみたい。あと五分でここに到着するわ」

「マジかゆりっぺ！？」

「とうとうここまで来たか……」

ゆりの言ったことに対し、男達がざわめき始めた。ていうか敵って、こいつら何と戦っているんだ？

「落ち着いてみんな！　いつもの訓練どおりにやれば問題ないわ。とにかくみんなは気配を消してここで彼等が立ち去るのを待ちましょう」

「わかったぜ、ゆりっぺ！」

「あのさ、盛り上がっているところで悪いんだけどさ……。俺は関係ないから、あっちで仮面ライダーオー◯でも見て…」

「てめぇもここにいろ！！　敵に情報を売るかもしれないからな！」

そんなことをするか！！第一、お前らの敵が分からないんじゃ、

情報を売ることもできないじゃないか！！

「とにかく恭介君、なにもせずに静かにして。敵をやり過ごしたら私達は出て行くから」

「本当だろうな？」

「貴様！　ゆりっぺを疑うのか！？　ゆりっぺが出て行くと言ったら、出て行くんだよ！　少しは静かにしやがれ！！　この変態野郎！！！」

「野田君、あなたが一番うるさい！」

ゆりに注意されたのがショックだったんだろうか、野田は部屋の隅っこで小さくなって落ち込んでいる。本当にめんどくさい奴だ……。

「…ところでさ、ゆり？お前らの敵って誰だよ？」

「扉の隙間から覗いてみて、そこにいる男女よ」

俺は言われるまま扉の隙間から覗いてみた。

そしてそこにいたのは……。

音無と奏ちゃんだった。

「……あいつらが……敵…？」

「そう、鬼よ」

鬼？

「見つかったら私達の負けだからね。恭介君もう十分見たでしょう？　さっさと扉を閉めてちょうだい、早く！」

鬼？見つかったら負け？てことは……まさか……。

「……お前ら…かくれんぼしてるのか…？」

「そうよ！　だから早く！　見つかっちゃう！」

ふ～ん、かくれんぼ……ね……。

俺は玄関の扉を開け、音無と奏ちゃんに言った。

「音無、奏ちゃん、ゆり達はここにいるぞ」

「おーーーーい！！！！　なにばらしてるのよ！！」

「あ、ゆり発見」

「おいおい…恭介の部屋に隠れていたのかよ…。恭介が言ってくれなかったら見つけられなかったよ」

まったくだな。まさか人の部屋で隠れていたとは思うまい。

とにかく、これでこいつらのかくれんぼは終わりだ。さっさとこ

いつらを部屋から追い出して、仮面ライダーオー◯の続きを見るとしよう。

……と思ったが。

「ちょと恭介君！　あなたのせいで見つかって、私達の負けになったじゃない！」

ゆりがいきなり、俺の胸ぐらをつかんできた。たのむからもう帰ってくれ……面倒事には巻き込まれたくない……。

「私達が負けになったから、音無君と奏ちゃんにジュースを奢ることになったのよ！！　どうしてくれるのよ！！？」

「知るかそんなこと！　お前らの問題であって俺には関係ないだろう！　だいたい俺の部屋に隠れんじゃねえよ！！」

「仕方がないじゃない！　ここしか隠れる場所がなかったから！」

「なんでだ！？　隠れる場所ならいっぱいあるだろう！！？」

「最初は学園に隠れようと思っていたんだけど、なぜか他のみんながついてきたのよ！　かくれんぼだと言うのに、集団で隠れたら意味ないだろうが！　……って言ってその場で解散さんさせたんだけど、しばらくしてまたみんなついてきたのよ。なんでついてくるんだって言ったら、『俺達はゆりっぺのことが大好きだから、隠れるときは一緒だぜ！』って言ったのよ。まったく……もてる女って辛いわよね……。で、結局みんなで一緒に隠れることになったんだけど、はっきり言って、みんなで隠れるところって少ないのよね。それでもあきらめずに探していて学生寮に来たんだけど、日向君が『

恭介の部屋に隠れようぜ！』というナイスアイディアを出したことによって私達は恭介君の部屋に隠れることになったわけ、納得した？」

「ああ、納得……できるかぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！！！（怒）　なにがナイスアイディアだ！！　なんで俺の部屋に隠れることがいいアイディアと思ったんだよ！！！！」

「あなたの部屋広いし、隠れても問題ないじゃない」

「俺にとっては問題あるんだよ！！！　貴重な日曜日をてめぇらのかくれんぼで潰されてたまるか！！！！！」

「まあまあ、恭介。ゆりっぺだって悪気があったわけじゃないからさ、ここは俺に免じて許してやってくれよ♪」

「なに自分は悪くないって顔で言ってんだよ！！　お前らにも怒っているんだよ！！！　ていうかもともとはお前が変なアイディアを出すからこうなったんだろうが！！！！！」

あ～～～もう嫌だ……。今日は貴重な日曜日なのに、なんで俺はこいつらを怒鳴らないといけないんだろう……。

この時点でもう今日は平和な一日にならないかもしれないとひそかに思う俺であった。

「おいお前！　さっきからゆりっぺに文句ばっかり言いやがって！あまり調子に乗っていると八つ裂きにするぞ！！」

「藤巻君、落ち着きなさい。ここで恭介君を八つ裂きにしたら、学園長に怒られるじゃない」

そうだよな。いくら由美でも生徒一人が八つ裂きにされたら黙っているわけがないよな。サディストだが、生徒のこと大切に思っているいい学園長だもんな！

「前に学園長が言っていたわ、『恭介を苛めるのもぶち殺すのも私の仕事だから邪魔しないでね♪』って」

前言撤回、最低だあのアホ女……。

「とにかくさ、もうお前ら帰ってくれ……。今日はゆっくり休みたいんだ……」

俺は部屋に戻ろうとしたが、ゆりがいきなり俺の服を掴んで離さなかった。

「……なに？」

「待ちなさい恭介君。あなたみんなに迷惑をかけたのになにもせずに帰る気？」

「迷惑って何？　俺が何をした？」

「あなたのせいで見つかったのよ、責任を取りなさい！　これから鬼ごっこをやるから参加しなさい！」

「じゃあね、バイバイ」

バタン！

玄関の扉に鍵を掛け籠城をすることにした。
鬼ごっこに参加しろ？冗談じゃない！こちとら休みたいんだよ！
なんで日曜日に鬼ごっこをしなくちゃいけないんだ！？
絶対に行かない！絶対にここから出ないからな！！

「さて、仮面ライダーオー○はあいつらのせいで見逃したから、この後始まるプリ○ュアでも見ますか」

え？高校生がいい年こいてプリ○ュア見ていて恥ずかしくないのかって？別に見たっていいだろう！！俺は日曜日は仮○ライダーとプリ○ュアを見るって決めてあるんだ！

「さ～て♪　テレビテレビ♪」

テレビの電源を入れようとした時、玄関の外で声が聞こえた。あいつらまだ帰ってなかったのか……。やれやれと思った時ゆりの声が聞こえた。

『よし、Ｃ４爆弾をドアに仕掛けたわ　！みんな離れて！』

はい？今、爆弾って言葉が聞こえたんだけど？
え？う、嘘だよね……？まさか友達の部屋のドアに爆弾なんて仕掛けてないよね……？や、やだな……ゆり？冗談だよね……？

『総員、避難完了です！』

『じゃあ爆弾を爆発するね。３……２……』

「待て待て待て待て待て待てーーーーーーーーーー！！！！！！
！　やめろーーー！！！！　お前らはどこのテロリストだ！！？　人

の部屋のドアを爆破しようとするなんて！！　俺達は友達じゃないのか！！？」

『何言っているの？　友達だと思っていたのはあなただけよ』

いやあああああぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！

ゆりを良い人だなって言ってた自分がバカだった！！この人も同じだ！由美と同じだ！滅茶苦茶な女だ！！

なんでこの学園の女性ってこんな人ばっかりなの！！？もうダメだ！！このままじゃ女性恐怖症になりそうだよ！！

そんなことを思っていた時。

『おいお前ら！　一体何をやっている！？』

この声はルルーシュ！？

『Ｃ４爆弾じゃないか！？　こんなものを使ったらドアが壊れるぞ！！』

ルルーシュがゆりを止めようとしている！

さすがルルーシュ！！やはりただのシスコンじゃなかったんだな！

『大丈夫、ドアの修理代は恭介君が払ってくれるから♪』

『そうか、なら問題ないな』

問題あるわボケ！！止めろよ！ゆりを止めてくれよ！！俺が修理代を払うということで納得してんじゃねーよ！このシスコン野郎！！

『さあ恭介君！　爆破されたくなかったら、さっさと部屋から出て

きなさい！　もう逃げられないわよ！！』

ああ……最悪だ……なんでこうなるんだ……。

選択の余地はなく、俺は結局ゆり達の鬼ごっこに付き合うことになった。

《グランド》

俺とゆり達はグランドに集まった。内心めんどくさいと思ったが、逆らうとなにされるかわからないからな……。

「さ～て♪　みんな鬼ごっこをやるわよー！　エイエイオーー！！」

『オーーーーー！！』

「お～～……」

他のみんなは元気のある声だったけど、俺の声だけやる気のない声だった……。それもそのはずだ、なんで休みの日に鬼ごっこをしないといけないんだ……。

「恭介君？　元気が無いわよ？　大丈夫？」

「……帰っても…」

「ダメ」

俺の意見は却下された……。

「そうだ！　鬼ごっこをやる前に私達の仲間を紹介しておく必要があるわね」

そう言ってゆりは他の人の紹介を始めた。

「まずは彼、高松君！　私達の参謀のような人」

「よろしくお願いします」

高松と言われた男はメガネを掛けている、知的な感じの男だった。なるほど、参謀といわれても不思議じゃない。

「言っておくけど、彼はバカよ」

バカなの!?バカなのに参謀!?ちょっとおかしくない!?

「次は彼、藤巻君よ！」

長いドスを持ち、目つきが悪い男だ。

「彼はただのかませ犬よ」

「そういうことだ、よろしくな小僧！」

いや、お前かませ犬って言われているけどいいのか?まさか自分でも自覚しているのか!?

「次は松下君！　みんなからは親しみをこめて松下五段って言われているから」

松下はとても強そうな体格をしている。松下五段て言われているけど、柔道が好きなのかな？

「よろしくな！　肉うどんは好きか？」

「え！？　ああ…まあ…」

なんでここで肉うどんの話を？

「そして彼は大山君！」

「どうもよろしく！」

うわぁ……なんていうか……その……はっきり言うと……。

特徴がない。

『少年A』という名前が似合いそうな少年だ。特徴がなく、影が薄い、彼はそんな人だ……。

「Ｗｏｗ！！」

「な、なんだ！？」

いきなり外人のような男が踊りだした！こいつはなにがやりたいんだ？

「彼はＴＫよ、本名は誰にも知らないわ」

「知らないの！？」

そんな奴をよく仲間にしようと考えたな！

「Ｗｏｗ！Ｓｈａｋｅ！Ｍｙ　Ｓｏｕｌ！」

……ていうかこいつ鬱陶しいんですけど……。

「そして、あそこの木にいる彼女は椎名さんよ」

「あさはかなり……」

木に縋っているくノ一の女の子を発見した。見た目からにして、クールな女の子みたいだな。

「それと彼も紹介しておくわ」

ゆりがそう言うと、メガネを掛けた少年が出てきた。

「彼は天才ハッカー、ハンドルネーム『竹山君』よ！」

「どうも、僕のことはクライストっとお呼び下さい」

いやいや、クライストって何？ていうかハンドルネームの竹山って本名だろ？

「それからゆりさん、いい加減僕のことをクライストと…」

「あとここにはいないけど、オペレーターの遊佐さんがいるからね」

『…どうも、よろしくお願いします』

ゆりの持っているトランシーバーから女の子の声がする。この声の主が遊佐さんらしい。

しかし、ゆりの仲間は個性豊かな人が多いな。野田みたいなアホもいれば、大山みたいな特徴がない人もいれば、ＴＫみたいな外人もいれば、椎名さんみたいなくノ一もいる。

さすが無限学園、いろんな人がいるもんだ。

「じゃあ鬼ごっこをやる前にルールを言っておくわね。鬼ごっこの範囲はこの学園の中、学園の外には出てはいけない。鬼は逃げる人を半殺しにして捕まえること。使用武器はなんでもあり、アサルトライフルでもロケットランチャーでも核兵器でも使用ＯＫよ♪　何か質問はある？」

「……あのさ、鬼ごっこって逃げる人を捕まえればいいわけで、別に半殺しにしなくてもいいんじゃないかな……？」

ていうか普通鬼ごっこの会話で半殺しという言葉は出ないと思うけど……。

「恭介君、一つ質問するけど、あなたは万が一テロリストに捕まった時、殺されるのをじっと待つ？　待たないでしょう？　隙を見て逃げるでしょう？　鬼ごっこだって同じよ。捕まえたとしても、逃げ出す可能性だってある、だから逃げないように半殺しにする必要があるんでしょうが」

駄目だ、もうこいつとは話にはならないよ……。常識がいかれているんじゃないのか…？

「それとロケットランチャーとか重火器とかは無しにしよう。危ないよ」

「別に使ったところで問題はないわよ。この学園の生徒の中にはロケットランチャーよりも恐ろしい武器を持っている人もいるんだから、問題なし♪」

「いやそれ以前に、鬼ごっこで重火器を使う必要が……」

「文句ばっかり言っている恭介君は放っといて、鬼を決めるわよ！」

話を聞けよ！！もうゆり達がやろうとしているのは鬼ごっこじゃないよ！鬼ごっこという名のバトルロワイヤルだよ！！

「まあ恭介、諦めろ。こうなったゆりは誰にも止められないよ」

日向は俺を憐れむような目で言った。ていうかもともとはお前のせいでこうなったみたいなもんなんだぞ！！

「とりあえず、あみだくじで決めましょう」

あみだで鬼を決めるんかい……。もう呆れて物が言えないよ……。

ゆりはさっそくあみだの準備をしようと動き出した。

だがその時だった……。

あいつが来たのだ……。

「あれ～？　恭介なにやっているの？」

この声は！？後ろ振り返ると……。

出ました、この小説の問題人物…

無限学園学園長　千堂由美！！

「こんにちは、学園長♪」

ゆりが笑顔で挨拶をした。その笑顔に対し、由美も笑顔を作って挨拶をした。

「こんにちは♪　ゆりちゃん♪」

この女は笑顔は可愛いが、腹の中は真っ黒！俺の精神が毎日ズタボロにされるのはこいつのせいである！

由美が登場したことにより、俺の心の中では不安でいっぱいである。

嫌な予感がする……。

「みんなして何していたの？」

「これから鬼ごっこをしようと思って……」

ゆりがそんな話をすると、由美の目がキラキラ輝き始めた。

「え！？　鬼ごっこ！？　マジで！？　私もやるやる！！！」

喰いついたようだ……。

しかしこの時、俺の直感がこう告げている。

この女が参加したら、鬼ごっこという名のバトルロワイヤルが、鬼ごっこという名の最終戦争になってしまう！

この女が参加するのは危険だ！！

「ゆ、由美！　仕事は！？　仕事はどうしたんだよ！？」

俺はすかさず、由美の仕事の状況を聞いた。仕事が終わっていなかったら、参加できない良い理由になれる！お願いだ！！仕事が終わっていませんように！！

「……」

なにも言わない！？ということは終わっていないのか！！

やったーーーー！！！

これで由美が参加できない！！

「由美いけないぞ！　学園長ともあろうものが、仕事をしていないなんて！」

こう言っておけばこいつは仕事に戻ってくれるはず！！

頼む！！仕事に戻ってくれ！！

だが、由美は携帯を取り出し誰かと連絡を取ろうとした。いった

い誰と？

「……あ！　もしもし？　銀八先生？　由美でーす♪　私今からゆりちゃん達と鬼ごっこするから、残っている仕事をさわ子先生に押し付けといてくれますか？　……は？……めんどくさい……？給料減らすぞこの天パー！　……うん、うん♪　分かってくれたらいいんだよ♪　じゃあね♪」

由美は携帯を切り笑顔で皆に言った。

「問題ないよ♪　じゃあみんなで鬼ごっこをやろう！！」

「おいコラ！！！　なに自分の仕事をさわ子先生に押し付けてんだよ！！！　お前学園長だろ！？　自分の仕事はちゃんとやれよ！！！　ていうか思ったけど、なんで毎回さわ子先生に仕事を押し付けてんだよ！！？」

「だって、銀八先生に押し付けても絶対やらないし、西村先生は顔が怖いし、雪路先生は酒臭いし、小萌先生はロリロリだし、木山先生はすぐ脱ぐし、スカリエッティ先生は変態だし、黒井先生は独り身だし、だからさわ子先生に押し付けたってこと♪　過去の恥ずかしい写真をばら撒かれてくなかったら、仕事をやれって言ったら、素直にやってくれたんだよ♪」

「最低だなお前！！！！　先生を脅すか！？　さわ子先生が可哀そうと思ったことはないのか！！？」

「もちろんその分給料は上げているよ♪　百円程度で♪」

「少ないな！！！！」

先生に対しても容赦ないな……。さわ子先生……ドンマイ……。

「じゃあ鬼は私でいいかな？」

由美が鬼！？冗談じゃない！！なにされるかわかったもんじゃないぞ！！

ゆり！ここは断ったほうが……。

「いいですよ！　負けませんから！」

いやあああああぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！！

この時点で俺の死亡フラグが立ったような気がした……。

「それよりもゆりちゃん。この鬼ごっこ、あの時のリベンジ戦になるね♪」

ゆりは何かを思い出したような表情になった。

そして笑いながら言った。

「……そうですね……。ですが、あの時とは状況が違いますからね！　今度は負けませんよ！！」

あの時？リベンジ戦？二人はなにを言っているんだろう？

「じゃあ学園長、私達は逃げますので、百数えたら追ってくださいね！」

「は～い♪…い～ち♪…に～い♪…さ～ん♪…」

百まで数えれるのか？五十で追ってこないでくれよ……。
そしてゆりは武器を構えて言った。

「さあ、私達は逃げるわよ！　絶対に捕まらないでね！　相手は学園長なんだから、捕まったら死ぬと思いなさい！！」

「おいおいゆりっぺ大袈裟すぎるぞｗｗｗ」

笑いながら言う日向であったが、俺はゆりの言っていることが冗談ではないとわかる。
あいつに捕まったら半殺しでは済まないかもしれないからな……。

「それではみんな、オペレーション……スタート！！！！」

ゆりの掛け声で鬼ごっこが始まった！
みんなはバラバラに散っていく。

相手は由美だ、捕まったら絶対殺される！！捕まらないように逃げなくては……！

そして俺の予想どうり、由美の参戦によって、鬼ごっこは地獄のゲームになってしまったのである……。

第十五話　鬼ごっこだよ♪全員集合～♪（後書き）

銀八
「さて、さわ子先生。お仕事の時間です」
さわ子
「仕事って後書きコーナーのこと！？」
天城
「そうですよ！今回はあなた方がゲストです！」
銀八
「ていうか作者、俺の出番が少ないような気がするんだけど……」
天城
「気のせいだ♪」
さわ子
「私の出番の方がもっと少ないわよ！！」
天城
「気のせいだ♪」
銀八・さわ子
「「……」」
天城
「さて、次回予告だ！由美の参戦によって地獄のゲームとなった鬼ごっこで恭介は生き残れるのか！？そして次回明かされる由美とゆりの過去のできごととは！？さらに！！次回オリキャラの登場だ！！いったいどんな奴が出てくるのかは次回のお楽しみということで！！では次回またお会いしましょう！！」

さわ子
「終わったわ！！さて帰ろう…」
銀八

「何言っているの?これから書類の整理があるんだぞ?」

さわ子

「……」

ダッ!!

銀八

「あ!逃げた!?待てコラ!!あんたがやらないと俺の給料が減らされるんだぞ!!」

第十六話　これは鬼ごっこですか？いえ、戦争です（前書き）

？？？？の独り言

大丈夫だ、不老不死だから問題ない。

第十六話　これは鬼ごっこですか？いえ、戦争です

《学生寮》

由美参戦の地獄の鬼ごっこがまもなく開幕されようとしている。
俺達は学生寮にて戦いの準備をしていた。
藤巻と野田はそれぞれの得意武器である、刀やハルバード研いでいる最中。その他のメンバーは重火器に弾を詰め込んでいる。
俺の方ではゆりからもらった拳銃の弾を詰め込んでいる最中であった。
普通であればここで、『これ鬼ごっこじゃねぇよ！！！戦争じゃねぇか！！！』と俺がツッコミを入れるところだが、今回ばかりはこいつらの行動は正しい。
なんたって相手はあの由美だ。どんな攻撃を仕掛けてくるかはわからない。
念には念をいれて準備しておく必要がある。
準備している最中にゆりがみんなに対して言った。

「みんな聞いて！！　相手はあの学園長だから殺す気で行きなさい！　じゃないと私達が逆にやられるわよ！！」

『オオォォォォォォーーーー！！！！』

みんなの気合いは充分あるようだ！この勢いに乗って由美を撃破するぞ！！

だが二人だけやる気がない表情になっていた。音無と奏ちゃんである。

「……あのさ、別にそこまで気合い入れなくても…」

「何言っているの音無君？　相手はあの学園長よ！！　これだけの武器を用意しているけど……これでも足りないくらいなのよ！！足りない部分は気合いで補うの！！　いい？　わかった！？」

「あ、ああ……」

「わかった……」

ゆりにこれ以上言っても無駄だと判断したらしく、音無と奏ちゃんは仕方なく納得することにした。

「まあ大丈夫だって♪　相手は一人だから袋叩きにすりゃあ勝てるって」

「甘いぞ日向！！」

余裕ぶっこいている日向に対し、俺は言った。

「な、なにが甘いんだよ……？」

「俺の直感が告げているんだ！　油断していると逆にやられると！だから真剣にやるんだ！！」

「わ、わかったよ……」

日向は渋々頷いて持っていた武器を構えた。日向には厳しく言ってしまったが仕方がない。相手はあの由美なんだから、油断すると殺されてしまう。気を引き締めねば……！

『ゆりっぺさん、連絡があります』

ゆりのトランシーバーから遊佐さんの声が聞こえてきた。

「状況は？」

『学園長が百数え終えて、行動開始しました。まもなくそちらに到着すると思います』

「そう、わかったわ。引き続き監視をお願い」

『了解』

ゆりはトランシーバーをポケットの中に入れ、俺達の方を見て言った。

「もうすぐ学園長がここに来るわ。気を引き締めてね！　それと大山君、藤巻君、悪いけど偵察に行ってきてくれない？」

「うん！　わかった！」

「任せろゆりっぺ！」

偵察を命じられた二人は、由美がいる場所へと向かって行った。

あの二人で大丈夫か？と俺は不安に思った。相手は由美だし、もしかして待ち伏せしているかもしれない。

「藤巻と大山だけで大丈夫なのか？」

「大丈夫よ、藤巻君はかませ犬だし、大山君は影が薄くて特徴がないから、大丈夫！」

「なにが大丈夫だ？　それを聞いてますます不安なんだが……」

俺がそう言った時。

バン！バン！

「！？」

「今のは！？」

今の音は銃声だ！しかも音は藤巻と大山が向かった方向から聞こえた。ということは由美と接触した！？もしくは由美に見つかってしまい応戦しているのか！？

ゆりは持っていたトランシーバーで藤巻と大山に連絡を取ろうとした。

「藤巻君？　大山君？　どうしたの？　学園長が居たの？　応戦しているの？」

『こ、こちら藤巻！　やばいぞゆりっぺ！！　学園長本気だ！！まさかあんなものを用意するなんて反則だろう！？　だ、大至急救援を！！』

藤巻の様子からにしてかなりピンチみたいだ。由美の奴いったい何を用意したんだ？

ゆりは更に詳しい情報を聞き出そうとしたが。

ドォォォォォォォォーーーーーーン！！！！！！！！

『ぎゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！！！』

ブツン！

「藤巻君！？　藤巻君！！？」

遠くの方で巨大な爆発音が聞こえた瞬間、藤巻の悲鳴と共に通信が途絶えた。

「大山君！！　大山君聞こえる！？」

『も、もうだめ！！　あ、あんなの勝てるわけ…う、うわぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！！！！！！』

ブツン！

大山の通信も途絶えた……。いったい何が起こっているんだ！？

「まずいわね……。藤巻君と大山君がやられたわ…。いったい学園長はどんな兵器で藤巻君達を…？」

「おいおい…まずくないか……？」

日向の言うとうり、かなりまずい状況だ。

藤巻と大山がやられて人数は減ってしまったし、相手がどんな状況なのかもわからない。

これはやばい……。

「そうだ！　遊佐は！？　遊佐に状況を教えてもらおう！」

ナイスアイディアだ音無！遊佐さんに連絡して状況を教えてもらおう！

ゆりはさっそくトランシーバーを取り出し、遊佐さんと連絡を取ってみることにした。

「遊佐さん！？　聞こえる！？」

『はい、遊佐です。なんでしょうかゆりっぺさん？』

「学園長の居場所は！？　どこにいるの！？」

『……大変申し上げにくいのですが……。ゆりっぺさん達の目の前にいます…』

「へ？」

俺達は前の方を見てみると……。なんだか巨大な物体が動いていて、こっちに近づいている。その物体は頑丈な装甲でキャタピラが付いており、さらには機関銃と巨大な砲台も付いていた。

いや……ていうか……あれ……戦車じゃね？

え……？戦車…？戦……車……？

戦車！？

全員

『ウソオオオオオォォォォォォォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！！！』

由美の奴、戦車で来やがったぁぁぁぁぁぁーーーーー！！！！！ていうかなんで戦車がここにあるの！？ここは学園だろ！？軍事基地じゃないよな！？ていうかこんなものを用意したらもはや鬼ごっこじゃねぇよ！！ただの戦争じゃねぇか！！！

『あ♪　恭介発見♪』

戦車についていたスピーカーから由美の声がする。

「おいコラァァァァ！！！！　なんで戦車を用意してんだぁぁぁぁ！！！！」

『だってロケットランチャーでも核兵器でもＯＫなんでしょ♪　だったら戦車もＯＫじゃない？　ルール的には問題ないと思うけど♪』

「問題あるわぁぁぁぁぁ！！！！！（怒）　戦車を使う鬼ごっこなんて聞いたことないわ！！！！　それに、そんなものを使うなんて反則だぞ！！！！！」

『ムカ！　恭介のくせに生意気な！！　これでもくらえ！！』

戦車の主砲が俺達を方へと向く。

そして

『発射♪』

悪魔の一声と共に、主砲から砲弾が発射された。

ドォォォォォォォン！！！！！

砲弾は俺達に当たらず、運良く外れたが倉庫に命中し、倉庫は粉々になった。

その破壊力は凄まじく、俺達はしばらく開いた口が塞がらなかった。

おいおい……マジかよ……！砲弾が当たったら一溜まりも無いぞ……！

『ちっ！　外したか！！　恭介♪　そこから動かないでね♪』

「無茶言うな！！　むしろあんな光景を目の当たりにしたら逃げたくなるよ！！」

『文句を言うんじゃねーーー！！！！　いいからそこを動くなーーー！！！！』

冗談じゃねーよ！！！とにかくここから逃げなければ！！！このままでは殺される！！

「ゆり逃げよう！！」

「え、ええ！！」

俺達は戦車の砲撃から逃げる為に走った。だが由美は逃すつもりはないみたいだ。主砲を俺達に向けドカドカ撃ってきた。

「あの女俺達を殺す気か！！？」

「いや、待って下さい！！」

いきなり高松がメガネをクイッと上げて走りながら言った。

「学園長は単に恭介さんをぶち殺したいだけじゃないでしょうか？我々を撃っているのも、恭介さんが一緒にいるから撃っているわけで、恭介さんと別れたら学園長は恭介さんを追って行くんじゃないでしょうか？」

そんな馬鹿な……由美が俺だけをターゲットにしているわけ……いや待てよ！？もしかしたらそうなのかも！？

「なるほど……」

高松の説明にゆりは納得したみたいだ。そして俺を見てニヤと笑う。

嫌な予感がする……。

「恭介君！　いい作戦を思いついたわ！　聞いてくれる？」

「……嫌な予感がするが、一応聞こう」

そしてゆりは走りながら俺に説明した。

「ここから先に別れ道があるから、恭介君は右の道に進みなさい！」

「……それで？」

「私達は左の道に行くから、ここまで言えばなにをするか分かるで

しょう？」

えっと……由美は俺をぶち殺そうとしている。そしてここから先に別れ道がある……俺は右の道に行く……ゆりたちは左の道に行く……。由美はもちろん俺が通る右の道に行く……で、結果的にゆり達は逃げて助かり、俺は由美と一緒に鬼ごっこをするってことか……。

あぁ…なるほど、俺がおとりになるって作戦か……って！

「ふざけんな！！！！　ただのエスケープじゃねぇか！！　なんでお前らだけ助かって俺が地獄行きにならないといけないんだ！！！」

「恭介君がいるから私達が追われているのよ！！　責任もって地獄に行きない！！」

友達に対して地獄に行けって、酷いよこの女！！もう許さねえ！！！こいつらと一緒にいてやる！！

地獄の道連れだ！！

俺はゆりの作戦を無視して、右の道には行かず、左の道に進んだ。

「ちょっと恭介君！？　なにこっちに来ているのよ！？　あなたは右の道でしょ！？」

「うるせぇ！！　お前らも道連れだ！！！」

『待てーーー♪』

由美の戦車のスピードが上がっていき、このままでは追い付かれてしまう！なにか打開策を考えなければ……！

すると突然、走っていた野田が立ち止まった。

「野田！？　どうした！？」

野田はゆっくり振り返り、俺達に向かって言った。

「ゆりっぺ！！　そのまま逃げろ！！　俺は……こいつ食い止める！！！」

そう言って野田は戦車の方に向き、ハルバードを構えた。まさか一人で由美に立ち向かう気か！？無茶だ！！ていうか無理！！！

「止めろ野田！！　危険だぞ！！」

「うるせぇ！！　変態野郎は黙ってゆりっぺに従いやがれ！！！」

野田……お前……ゆりの為に……盾になる気か…？

「ゆりっぺ……お前に言っておきたいことがある……」

野田はハルバードの刃の先を由美の戦車に向ける。

今の野田の顔はいつものアホな顔ではなく、戦場に行く戦士の顔だ！！

「ゆりっぺ……愛しているぜ……！」

野田ァァァァァーーーー！！！！今のお前ムチャカッコいいぞ！！！！

「行くぞ学園長！！！　うおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーー！！！！！！！」

野田は由美の戦車に突撃をした。

だが。

『発射♪』

ドオオオオォォォォォォォォン！！！！

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！」

「野田ァァァァァァァァァァーーーー！！！！」

野田が砲撃の爆風に巻き込まれ吹っ飛ばされた！まずい救助しなければ！

俺は野田に近づこうとしたが。

「来るな！！！　この変態野郎！！」

野田が大声で俺に言った。

野田……なにがなんでも食い止めるつもりか……！

そして野田はゆりを見て言った。

「ゆりっぺ……生きてくれ……俺の……分まで……」

野田……！！お前は素晴らしい戦士だよ！！バカだけど！！

ゆりも感動したに違いな……。

「あっそ、じゃあみんな野田君をおとりにして逃げるわよ♪」

血も涙もねーな！！！！！

こうして俺達は野田を置いてけぼりにして逃げ切ったのである。

「ところでさ…ゆり？　先程の野田の言葉は…」

「野田君の言葉？　さあ？　戦車の音でよく聞こえなかったけど？」

「……」

野田…その…なんだ……すまん……そして頑張れ……いつかゆりは振り向いてくれる……かも……。

《校舎》

俺達は校舎まで逃げ切ることに成功した。

これまでに藤巻、大山、野田が犠牲になったが（ちなみに彼らは死んではいません♪）これ以上犠牲者を出すわけにはいかないな。

「野田君の犠牲によって私達は生き延びることに成功したわ……。彼の犠牲は無駄にはしない……」

見捨てたけどな。あと死んでるような言い方をするな。

「とにかくここまで来れば大丈夫…」

「それはどうかな？」

どこからか男の声が聞こえた！？いったいどこから！？

「上だ！！　校舎の屋上！！」

音無が謎の声の男性を見つけ、屋上に指を指した。

屋上を見てみると、一人の青年が立っていた。髪は銀髪のざんばら頭でクールな瞳、さらにはほどよく引き締まった体格で顔立ちはややワイルド系美男子、着崩した制服を着ていたが、なぜか彼にはよく似合っていた。

ゆりは彼を見て言った。

「何者！？」

「フッ…」

青年はゆりの質問に対し、鼻で笑って返した。

そして青年はいきなり屋上から飛び降りた。

この校舎は三階建てになっており、屋上から落ちたら大怪我どころか死んでしまう。

「あ、危ない！！！」

ゆりが悲鳴を上げたが、青年は余裕の表情で、

「大丈夫だ、問題ない」

と言った。

もしかして華麗に着地を決めるのか！？

この学園ではいろんな能力を持っている生徒が多いからな、高い所から落ちても平気な能力を持っている奴が居てもおかしくない。

そして彼は……華麗に着地……

「ぐべぇぇ！！！」

グシャ！！

できなかった……。

華麗に着地することができず、無様に落ちてしまった。うつぶせに倒れてしまい顔がよく見えないが、今の状況では逆に顔を見たくない。

顔が酷いことになっているかもしれないからな。

「おい……あのさ……これって…俺達のせい？」

よく見たら頭から血が出ている。どんどん出てきて止まらない……。

「ていうか大丈夫って言っていたじゃん！？　問題ないって言っていたじゃん！？　グシャっていったぞ！！　これ死んでいるんじゃないのか！！？」

「落ち着きなさい恭介君！！　取り乱してどうするの！！？」

そ、そうだよな……。ゆりはどうやら落ち着いているようだ、この状況でよく落ち着いていられるな……。

「とにかく病院に連絡よ！！　竹山君！　救急車を！！」

「わかりました。ですがその前に言っておきますが僕の名前はクライスト…」

「…その必要はない」

！？

倒れていた青年が喋った！？あれだけの大怪我をしておきながら喋っている！？皆の驚いているのをよそに青年が立ち上がった。

そして俺は信じられない光景を目撃した。

立ち上がった青年はボロボロで、顔には酷い怪我をしていたが見る見るうちに治っていき、美男子の顔に戻ったのである。

「ま、マジかよ……！？」

「言っただろう？　問題ないって。俺は不老不死だからな」

不老不死！？つまり死なないってことか！？だから校舎の屋上から落ちても平気なわけだ……。

「不老不死……。まさか！？あなたが不動永人（ふどうながと）！？」

ゆりは驚愕の表情で言った。

「ゆり、知っているのか？」

「不老不死の肉体を持っているって噂の男よ……」

「その子の言うとうり、俺の名前は不動永人。無限の可能性の一つ、不老不死の体を持つ男だ。以後よろしく」

不動永人は自分の自己紹介を終えると、華麗にお辞儀をした。

とりあえず俺達もお辞儀で返すことにした。

「さて、話は変わるが、由美学園長の命令によってお前たちを捕まえる」

「え！？　マジで！？」

「マジだ」

由美の手先だったのか！？ていうか仲間を使うなんて卑怯じゃないか！？

「卑怯だと思っているかもしれないが、由美学園長の命令は絶対だからな」

「完璧に由美の奴隷かよ！？」

「奴隷……？　違う……俺だって好きでこんなことをしているわけじゃない……。逆らったらなにされるか分からないからな……」

不動はとてもつらそうな顔になった…。
だがこの人の気持ちは分かる。俺も不動の立場だったら絶対逆らえない……。

「だから、俺の為に死ね恭介…！」

「死ねって！？　俺を捕まえるんじゃないのか！？」

「由美学園長から半殺しにするか、殺しておけって言われているからな。大丈夫、お前は主人公だから主人公補正で何とか生き残れると思うぞ……たぶん……だから問題ない」

「何が大丈夫だ！！？　問題大有りだよ！！　俺を生かして捕らえるっていう選択肢はないのか！？　あと、たぶんって言われるとすごく不安なんだが！！？」

「はいはい無視無視、さっさと捕まれ」

そう言った不動は縄と拳銃を取り出した。
本当に俺を殺すつもりみたいだ！なんでこうも常識外れの生徒が多いんだこの学園は！？
不動が俺達に近づいて来るが、その時奏ちゃんが前に出た。

「奏ちゃん！？　危ないぞ！！」

奏ちゃんは俺の制止を聞かず、不動に近づいていく。
すると、

「ガードスキル・ハンドソニック」

奏ちゃんが不思議な言葉を言った瞬間、奏ちゃんの片手に刀のような鋭利な刃物が現れた。突然のことで俺はびっくりした。

「おい！　奏ちゃんの腕から刃のような物が現れたぞ！？」

俺の疑問をゆりが答えてくれた。

「あれは奏ちゃんの能力、ガードスキルよ！　恭介君離れて！　巻き込まれるわよ！」

ゆりがそう警告したので、俺は奏ちゃんから離れることとした。
しかしそれでも、俺の不安は消えなかった。
女の子一人でなんとかできるのか…？

「なるほど……ガードスキルか……。ならばこちらも…ガードスキル・ハンドソニック！」

すると不動の方も腕から刃が現れた。奏ちゃんと同じ形の鋭利な刃物だ。

「なっ！？　奏ちゃんと同じ能力を！？」

「俺の能力は不老不死だけじゃない。さまざまな事象、能力を操ることができるのさ。もちろんガードスキルも例外じゃない」

つまりこの男はいろんな能力、力を自由に操れるってことか。
だとしたらかなり厄介な相手だな……。

「いくわよ……」

「来い……」

二人の目はもはや学生の目ではない、相手を倒すことのみ考えている獣の目だ。

今にもぶつかり合いそうな緊迫した状況である。

だがその時

ドカァァァァン！！！

突如、奏ちゃんと不動の場所が爆発した！砲弾による爆発のようだ。

砲弾ということは……。

俺は嫌な予感をしつつ、後ろを振り向いた。

俺の予感は的中した……。

由美の戦車がやってきたのである。しかもよく見ると、戦車の後ろで藤巻と大山と野田がボロボロの姿でズルズル縄で引っ張られていた。

由美に半殺しされたんだな……。ご愁傷様……お前達のことは忘れないよ……たぶん……。

「「「死んでいないわァァァァァァーーーーー！！！！！」」」

三人共、生きているようだ。
あれだけの大声が言えるようなら心配なさそうだ。

あ……そういえば……

「奏ちゃんは！？」

砲撃をまともにくらっていたが、大丈夫なのか？大怪我をしていないか？と心配する俺であったが、砲撃の煙の中から一人の女の子が姿を表した。
奏ちゃんである。どうやら無事だったみたいだ…。
すぐさま音無は奏ちゃんに駆け寄った。

「奏！！　無事だったか！？」

「……私は大丈夫…結弦は大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ……。奏が無事で良かった……」

「結弦……／／／／／／／／」

「奏……／／／／／／／／」

あれ……？なんかラブラブみたいな展開になってないか…？

俺達鬼ごっこ（鬼ごっこという名の戦争）をしていたんだよな…？

「結弦……！／／／／／／／／」

「奏……！／／／／／／／」

そして二人は互いに抱き合った。

おいおい……鬼ごっこ（何度もいうが鬼ごっこという名の戦争）中になにやっているんだ……？これじゃあまるで……。

「恋人同士みたいじゃないか……」

俺がそんなこと言っていると、ゆりがきょとんとした表情で言った。

「なに言っているの？　音無君と奏ちゃんは付き合っているのよ」

「……え！？　マジで！？」

あの二人付き合っていたの！？

しかし、よく異端審問会に粛正されずに済んだな。

「一回異端審問会に捕まったことがあるんだけど、奏ちゃんが派手に大暴れしたことがあって、異端審問会の全員を病院送りにしたんだって」

「……」

……そんな武勇伝があるんかい……。異端審問会が手を出せないわけだ……。

あ！そういえば……不動はどうしたんだ…？あいつのことをすっかり忘れていた……。

砲撃の煙の中に不動の姿が見えた。よく見ると、かなりボロボロ

だ……。砲弾が直撃したのか…？

「お～い！　大丈夫か？」

俺はとりあえず安否の確認の為に不動に話しかけてみた。

「大丈夫だ……不老不死だから……問題ない……」

確かに彼の言うとおり、砲撃によって傷ついた体が見る見るうちに治っていく。さすが不老不死だな。

「……しかし……」

ん？

「当たると痛い……」

……ですよね……。いくら不老不死でも、痛みは感じてしまいますね……。

『ごめ～ん♪　不動君♪　間違えちゃった♪　てへっ♪』

砲弾が当たったことを詫びている由美であったが、その口ぶりからにして全然詫びてないような気がする。

「…絶対俺を狙おうとしたんでしょう？　直撃コースでしたけど？」

『やだなぁ、不動君たら！　そんなわけないじゃん♪　人をそんなふに疑うなんて感心しないぞ♪』

「……そうですか…」

不動はもうこれ以上言っても意味がないなと判断したのか、溜息をついて黙ることにした。

どうやら不動はこいつの扱い方を心得ているようだ。

そしてゆりはこっそり俺に近づいて由美に聞こえない声で言った。

「恭介君今のうちに逃げましょう！」

「え！？　ああ…そうだな…」

不動と由美がそんなやりとりをしている隙を見計らって、俺とゆり達はその場から逃げようとしたが

『待ちなさい、恭介！！　逃げるなんて許さないわよ！！』

ちっ！見つかったか！！だがもう遅い！俺達はその場から逃げ去ることに成功した。

『くっそーーー！！！！　また逃げられた！！！　不動君のせいだからね！！！』

「いちいち人のせいにするなよな…」

《学生寮》

「なんでまたここに戻ってきたんだ？」

「ここで学園長を迎え撃つためよ！」

ゆりが自信たっぷりに言った。これだけ自信があるということは何か作戦を考えているかもしれない。

「いい？　学園長の戦車が来たらみんなはできるだけ時間を稼いでちょうだい。そしてその時に私がこれを戦車に打ち込むから」

そう言ってゆりが取りだしたのは大きなロケットランチャーであった。なんでこいつらはこんな物を持っているのか疑問に思うが、今はそんなことを考えるのはやめよう。いちいち考えると疲れる。

とにかくこれさえあれば由美に対抗できるかもしれない。

「遊佐さん？　学園長の戦車はどこにいるの？」

『まもなくそちらに到着すると思います』

トランシーバーで遊佐さんと連絡したゆりは皆に向かって言った。

「よし！　みんな配置について！　もうすぐ来るからね！」

全員

『了解！！』

みんな配置が完了し、あとは由美の戦車が来るのを待つだけとなった。しかしいつまでたっても由美がやってこないのでとても暇だった。

ゆりと何か話そうかと思ったが、なにを話そう？

あ、そういえば……。

“それよりもゆりちゃん。この鬼ごっこ、あの時のリベンジ戦になるね♪”

あの時の由美の言葉ってどういう意味だったんだろう？この際聞いてみるか。

「なあ、ゆり？　鬼ごっこが始まる前に由美が言っていたことってどういう意味なんだ？」

「え？　……ああ、あれね。私と学園長が鬼ごっこをするのはこれで二回目なのよ。前回は負けたから、今回はリベンジ戦になるってわけ」

「前もやったのか？　好きなんだな鬼ごっこ」

しかしゆりは首を横に振って否定した。

「いいえ、賭け試合をしようと思っていたんだけど学園長が『だったら鬼ごっこをしよう♪』って勝手に決めたのよ」

賭け試合って学生なのに何やっているんだ……。

しかしあの由美に賭け試合とはいったい何を賭けたんだろう？

「いったい何を賭けようとしたんだ？　お菓子か？　ゲームか？　まさか金じゃ…」

「この学園」

え……？今…なんて……？

「私が勝ったらこの学園をいただくって言ったのよ」

「えええええぇぇぇぇぇぇ！！？？　ま、マジで！？」

「マジよ」

一瞬冗談を言っているんじゃないのかと思っていたが、彼女の表情を見る限り、冗談を言っているようには見えなかった。

「でもなんでそんなことを……？」

するとゆりは俺を見つめながら話し始めた。

「……恭介君には言ってなかったわね……あれは一年前のことだった……。当時の私はある事件をきっかけに世界…神様という物がくだらないと思っていたの…。毎日がくだらない、友達がくだらない、人生がくだらない、未来なんてくそくらえだと思っていたのよ。中学を卒業する時に私の進路は決まっていなかったの……あ、違った…進路は決めていた。あの世へ行こうと思っていたのよ。こんなくだらない世界で生きるより死んだ方がマシだと思ってね。大量の

睡眠薬を用意して自殺を図ろうと思っていたけど、その時だったの…。いきなり手紙が来て手紙の内容はこう書いてあったの……」

『仲村ゆりさん！　あなたは無限学園に入学することが決まりました！！　自殺する前にお迎えに向かいますね♪』

ゆりに届いた手紙はなんだか、俺に届いた転校手続きの手紙と似ていた。ゆりにも無限の可能性があるから無限学園に選ばれたのか？

「最初は誰かのいたずらと思っていたわ、私は進路も何も決まっていなかったから。その手紙を無視して自殺を図ろうとしたんだけど、いきなり無限学園からの使いですって言っている黒服の男達が現れたのよ。そいつらによって私は気絶させられて、気がついたら無限学園に着いていたのよ。人生を終わらせようと思っていたのに、それを邪魔した学園長が許せなくてね、入学式の前に事件を起こしたのよ」

「事件？」

「入学式が始まる前に学園長室を占拠したのよ。私は隠し持っていた拳銃を学園長に突き付けたわ。脅して泣かせようと思っていたけど、学園長に対しては効果がなかったわ。むしろ学園長は笑顔でこんなことを言ったのよ…」

『その銃、どこで買ったの？』

「まったく緊張感ないなｗｗ」

由美らしい発言だ。銃を突きつけられても意味がないということかｗｗなんだか面白くてつい俺も笑ってしまった。

「でしょｗｗ私もまさかそんなことを言うとは思わなかったわｗｗで、さらにこんなことも言い始めたのよｗｗ」

『よし！　じゃあ入学式が始まるまで鬼ごっこをしよう！　私が鬼をやるからね♪私に勝ったら……そうだ！　この学園をあげるよ♪』

簡単に学園の運命を賭けるんだな……。万が一負けたりしたらどうするつもりだったんだ？

「で結局どうなったんだ？」

「さっき話したとうりよ。私は負けたわ。ていうか学園長卑怯なのよ！　いきなりガトリングを使ってくるわ、ミサイルを撃ってくるわ、空爆を仕掛けてくるわ、ガ〇ダムエク〇アを使ってくるわで大変だったのよ！」

「それでよく生きてられたな！！？」

ていうかガン〇ムってまさかソレ〇タンビーイングから盗んできたのか！？

「無茶苦茶だったけど……なんだか人生の中で一番楽しい時間だった…鬼ごっこがこんなに楽しいとは思っていなかったから……」

その時どんなに楽しんだのかというのが、ゆりの表情を見るだけで分かる。とても楽しかったんだろう……。

「中学の時はみんな私を避けていたんだけど、学園長だけは違って

いた。積極的に私に話しかけてくれて寂しくなかった。学園長のおかげで生きる喜びを知った、奏ちゃんや音無君や日向君とも友達になれた。毎日が楽しいと思えるようになったのも全て学園長のおかげなのよ」

ゆりも由美との出会いによって救われた生徒の一人なのかもしれない。

生きることがくだらないと思っていたゆりの考えを、鬼ごっこしたことによって生きることはとても楽しいことという考え方に変えることができた。

もしゆりが由美に出会えなかったら……いや、由美と鬼ごっこをしていなかったらどうなっていただろうか？

彼女は永遠に孤独になっていたかもしれない。あるいは人生の半分も生きておらず、途中で命を落としていたかもしれない。

生きていたとしても、生きる喜びも分からず、絶望の毎日を歩んでいたかもしれない。

だがそんな彼女を由美が救った。意外にも鬼ごっこという遊びによって。

「ねえ？　恭介君、あなたはこの学園に来てよかったと思う？」

いきなりゆりがそんなこと聞いてきた。ゆりは真剣な表情で俺を見ている。

ゆりの質問に対し俺はこう答えた。

「……まだここに来て日が浅いけど、ここにいる奴らは面白いし、由美は最悪だけどいい奴だし、飯はまずくない、なにより……ゆりみたいな可愛い女の子がいるからな。とても楽しくて来てよかったとは思っているよ」

「なっ……！！／／／／／／　可愛いって……！！／／／／／／」

ゆりの顔が真っ赤になった。あ、意外と可愛いじゃないかｗｗ

「わ、分かったわ／／／／／／　もういいわ！　もうお話はここでおしまい！！！」

「あ、そうだ」

俺はいいことを思いついた。ゆりのことをよく知ることができたから……。

「な、なによ？」

「今日からお前のことをゆりっぺって言ってもいいか？　みんな親しみをこめて言っているから俺もそう言おうかなって思って……。いいかな？」

ゆりは少し考えた、そして結論が決まったのか、笑いながら俺に言った。

「いいわよ♪　そう呼んでちょうだい♪」

「ありがとう！　ゆりっぺ！」

ゆりと…あ、違った、ゆりっぺと本当の友達になった気がしてとても嬉しかった。

これからも仲のいい友達でいようと心の中で誓った。

『ゆりっぺさん、学園長が来ました』

トランシーバーから遊佐さんの声が聞こえてきた。どうやら由美が来たみたいだ。

「よし……行くわよ！　恭介君！！」

「おう！　由美に一泡吹かせてやるぜ！！　ゆりっぺ！」

ゆりっぺはロケットランチャーを持ち、俺は拳銃を構えた。

そして俺達は由美のもとへ突撃した。

他のみんなも同時に突撃した。

しかし………俺達は目の前の光景に唖然としていた……

信じられるか……？

由美が…………戦車ではなく…………ストラ◯クフリーダムガン◯ムに乗っていたのだ……。

全員

『ウソオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーーーー！！！！！！』

『いやあ…アー○エンジェルから盗みだすのに苦労したよ……』

由美は一仕事終えた仕事人みたいに言いやがった。いや、仕事人じゃないか……盗人だな！！

「お前なにガンダ○を盗んできているんだ！！！！」

『いいじゃん♪　ちなみに手伝ってくれたのは不動君だよ♪』

「いやあ…一仕事を終えた後の牛乳はうまいな……」

「仕事を終えた職人みたいな顔をしながら牛乳飲んでんじゃねぇぇぇぇぇ！！！！　どうすんだこれ！！！？　向こうのキラが困っているんじゃないのか！！？」

「大丈夫だ、問題ない。代わりにザクを置いてきたから」

「代わりにザクを置くなぁぁぁぁぁぁ！！！！」

とんでもない展開になってしまった！ガ○ダムでは対抗手段がない！！

どうすれば！？

『ここで皆半殺しにするところだけど、恭介を差し出すんならみんなは助けてあげるよ♪』

由美がそんなことを言っていたが、そんなことをゆりっぺがするわけがない！！

俺達は仲間……友達なんだから！！

「じゃあどうぞ！　恭介君を煮るなり焼くなり好きにしてくださいな♪」

ゆりっぺぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーー！！！！！俺を見捨てやがった！！！！なんで俺達は友達じゃないのか！！？

「そう思っているのはあなただけよ♪」

「絶望だァァァァァーーーー！！！！」

「さて、みんなこれで鬼ごっこはおしまい♪　今回は学園長が勝っちゃたけど次は負けないわよ！！　じゃあ学園長！　お疲れ様でした！！！」

『お疲れ様♪』

あれ…？みんな帰るの…？ちょっとみんな…？ゆりっぺ……？音無……？奏ちゃん……？日向……？みんな！！？勝手に帰らないで！！！俺を一人にしないで！！！！遊佐さん！！遊佐さんだけが頼りだ！！

俺はトランシーバーを取り出し、遊佐さんに連絡するが…

『はい遊佐です、ただいま交信することができません。ピーと鳴ったらご用件を言ってください』

留守電かよ！！！！！ていうかトランシーバーに留守電機能ってあったか！！？

なんでみんな見捨てるの！！？なんで日曜日に俺だけこんな目に

あうの！！？

『恭介♪』

……後ろから不気味な声がする。由美がガン○ムから降りてきた。

「大丈夫だよ♪　優しくしてあげるから……ね？」

「ヒィ！！」

由美の手にはなぜか包丁があった！

「恭介……愛してる……♪」

「ま、また冗談を…愛しているなら手の包丁は、い、いらないだろう…ゆ、由美！！！　ま、待って…」

『いやあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーー!!!!!!!!』

その日結局恭介は日曜日の半分の時間を鬼ごっこ、もう半分の時間を保健室のベット上で過ごすことになった…………。

第十六話　これは鬼ごっこですか？いえ、戦争です（後書き）

天城
「今回登場した不動永人は月光閃火さんからの提案のオリキャラです！ではどうぞ！」
不動
「不動だ、これからもよろしくな！」
天城
「月光閃火さんオリキャラ案ありがとうございました！！不動はこれからも登場しますので応援よろしくお願いします！！」
不動
「てか今回も恭介は酷い目にあったな…」
天城
「恭介は不幸な主人公だからなｗｗ」
不動
「笑ってる場合かよ…」
天城
「さて、次回予告です！！次回はハルヒ達が再び登場します！恭介がＳＯＳ団に入部して最初にやる活動とは！？そして新たなるアニメキャラが主演予定です！ではまた次回お会いしましょう！！」

第十七話　隠し味は愛と〇〇〇〇です…と、ミサカは言ってみました。（前書き

涼宮ハルヒの独り言

一度でもいいから世界征服をやってみたいわ！！

キョン

「なにとんでもない独り言を言っているんだ！！？」

第十七話　隠し味は愛と〇〇〇〇です…と、ミサカは言ってみました。

《ＳＯＳ団部室》

「う～～～ん……」

俺の目の前には真剣な表情で入部届けを確認しているハルヒが居るのである。
何故俺がＳＯＳ団の部室に居るかというと、簡単に言えばＳＯＳ団に入部しに来たのである。
そろそろ俺も青春の思い出の一つである部活に参加しないとなあと思ったので、こうしてＳＯＳ団に入部しに来たというわけである。
いろんな部活がある中で、ＳＯＳ団を選んだのにはちゃんとしたわけがある。
まあ、その話は後にすることにしよう。
ちょうどハルヒが入部届けの確認が終わったみたいだ。

「入部届けに問題は無いわね……。じゃあ天堂恭介！ＳＯＳ団にようこそ！！」

ＳＯＳ団のみんなは笑顔と拍手で俺を迎えた。
なんかちょっと照れるな／／／／／／

「これからよろしくお願いしますね恭介先輩」

「ああ！こちらこそよろしくなキョン！」

「いや…だからそれ…あだ名…」

「ところでハルヒ！」

みんなの歓迎はありがたいが、その前に確認しておきたいことがあったのでハルヒに尋ねた。

「なに？」

「あのさ…初めて会った時のことを覚えているか？」

「あんたが私達ＳＯＳ団を乗っ取ろうした時のこと？」

「いや！そんな出会い方じゃなかったと思うぞ！？俺がＳＯＳ団に入ったら…その…例の物をあげるって約束をしただろう？」

「約束…？ああ！あれね！！」

どうやら思い出したようだな。

そうこの約束こそが俺がＳＯＳ団に入る理由である。

このＳＯＳ団に入ればハルヒが持っている、フェイトさんの秘密の写真集（Ｒ－１８指定）が貰えるのだ！

フェイトさんのあんな姿やこんな姿が見られるとあっては絶対に入手したい！

それにしても……どんな姿が写っているんだろう……。

水着姿かな…？メイド服かな…？ナース姿かな…？それとも……ま、まさか…風呂上がり姿なのか！？

とても楽しみだ……グへへへｗｗ

おっといかんいかん！

よだれと鼻血が出てしまった！

「……なんか恭介君が怖いんだけど…」

「た、確かに…ニヤニヤしながらよだれと鼻血が出ていますね…」

俺の顔を見たみくるさんとキョンは引いていたようだが、そんなこと気にしなーい！

さあハルヒよ！俺にフェイトさんの秘密の写真集（Ｒ―１８指定）を渡すんだ！！

「あれならもうないわよ♪」

「……え？」

今この子は何と言った？

フェイトさんの秘密の写真集（Ｒ―１８指定）が無いと言ったのか？

え……？……マジで！？

「な、なんで無いんだ！？」

「前、持ち物検査で鉄人に見つかっちゃって。没収されちゃった♪」

「な、なんてこった……ｏｒｚ」

とても…とても楽しみにしていたのに！！

おのれ鉄人！！この恨み、一生忘れんぞ！！

夜道には気をつけるんだな！！！

「じゃあさっそく！ＳＯＳ団の活動を開始するわよ！！」

……これから活動を始めるのか…。
なるほど……だが俺にはまずやるべきことができてしまったよ。

「ハルヒ？さっきの入部届けを返してくれるかな？」

「え？……はい…」

いったいなにする気？と言いたげな表情で俺に入部届けを渡した。
入部届けをどうするかって？こうするんだ……。

ビリビリ！

俺は入部届けを破り捨てた。

「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！何するのよあんた！！！？」

「じゃあお疲れ様でした」

フェイトさんの秘密の写真集（Ｒ―１８指定）が無い以上、このＳＯＳ団に留まる理由などない。
というわけで俺は帰る。
帰ってドラマの再放送でも見るとしますか。

「待ちなさい！！ＳＯＳ団に入った以上、団長の許可も無く勝手に抜けるなんて許さないわよ！！！」

いきなりハルヒは俺の体にしがみついてきた。
ちっ！しぶとい！さっさと諦めてくれればいいのに！

「おい！離せ！俺は帰るんだ！！」

「い～や～だ～！！絶対離さない！！このＳＯＳ団に入部しない！！」

「嫌だ！！フェイトさんの秘密の写真集（Ｒ－１８指定）が無い以上ここにいる理由が無いんだ！！」

ハルヒはまったく諦めてくれない！
むしろ腕の力を強め、俺を絶対離さないようにしていた。

「は～な～せ～！！」

「い～や～だ～！！」

俺とハルヒの格闘はしばらく続いた。
そしていきなり古泉が近づいてハルヒを抑えた。

「まあまあ、ハルヒさんも落ち着いてください。それから恭介先輩、部活を辞めるのは難しいと思いますよ？」

「なんだと！？」

得意の爽やかスマイルで言った、古泉の言葉は聞き捨てなら無かった。
部活を辞めるのは難しい？どういうことだ？

「部活を辞めるには学園長の許可が必要なんですよ。つまり由美学園長を説得しなければＳＯＳ団を抜けることはできません」

由美の許可がいるのかよ……。めんどくさいな……。
だが仕方ない。こうなったら由美を説得して部活を辞める許可をもらおう。

「無駄だと思うけど」

「うるせえ！！見てろよ！絶対にＳＯＳ団を辞めてやるぜ！！」

ハルヒにそう宣言した俺は部室から出て、学園長室に向かった。

そして……

《３０分後》

「……というわけで、本日よりＳＯＳ団の一員となりました。天堂恭介です…。皆さんよろしく……」

パチパチパチパチパチパチパチ！

ＳＯＳ団の歓迎の拍手が飛んできた。

結論を言うと結局、由美の説得は失敗したのである。
学園長室に行き、由美に事情を話すも…

『なんで辞めるの？』

と言われたのだが、その理由が言えなかった。
フェイトさんの秘密の写真集（Ｒ－１８指定）が欲しくてＳＯＳ団

に入部したけど、ハルヒのミスで鉄人に取られてしまい、フェイトさんの秘密の写真集（R－18指定）が無い以上ここにいる意味がないから辞めたいです。なんて言ったら……絶対殺される……。仕方なく俺はSOS団に留まることになった。

「さて、今日のSOS団の活動を発表するわよ！！」

「いったい今日は何をするんだ？」

キョンがハルヒにそう質問すると、ハルヒは笑顔で答えた。

「この学園の不思議な噂を調査するわよ！」

不思議な噂？学園の七不思議みたいなものがこの学園にあるのか？

「さあ！古泉君、有希、みくるちゃん、キョン、そして恭介！調査開始よ！」

ハルヒはみくるさんの腕を引っ張りながら部室から出て行った。

「ハ、ハルヒさん！ちょ、ちょっと待って下さい！！」

そして長門と古泉は黙ってついて行くのであった。

「……あの元気はどこから出るんだ…？」

「さあ……」

俺とキョンは仕方なくハルヒについて行くことになった。

《中等部校舎》

俺達がたどり着いた場所は中等部校舎。

「で、いったいどんな噂を調査するんだ？」

「いい質問をするわね恭介！私達が調査する噂はこれよ！」

“御坂美琴には双子の姉妹がいるらしい”

「双子の姉妹！？」

あの御坂に姉妹がいたのか？

「この噂の調査をするわよ！私とキョンは中等部校舎の一階を調べてみるから、有希とみくるちゃんと古泉君は二階と三階を調べてきて、恭介は外を調べてきなさい！いい？わかった？」

「はいはい…」

やる気のない返事をしたがハルヒは納得して、キョンと一緒に一階の捜索に向かった。

長門、みくるさん、古泉も二、三階の調査に向かうため階段を上って行った。

一人取り残された俺は、この隙に帰ろうと思っていたが、そんなことをすると後でハルヒからどんな仕返しがくるか分からない。

「ここは黙って従うか……」

俺は仕方なく、ハルヒの言われたとおり、中等部校舎の外を調査することにした。

中等部校舎の外を調査するも、噂に関する手がかりはまったく無かった。

諦めてハルヒ達と合流しようと思っていた時、俺はある人物を発見したのだ。

「あれ？御坂じゃないか…？」

御坂美琴が中等部中庭の所でなにかを探しているみたいだ。

「いちいち調べるより直接聞いた方が早いよな」

というわけで、俺は御坂に近づき話しかけることにした。

「よっ！なに探しているんだ？」

御坂は俺の存在に気づき、俺の顔を見て話した。

「ミサカのゴーグルが行方不明となっており、現在捜索中です…と、御坂は自分の状況を説明します」

ん？なんか喋り方がいつもと違うような……？

こんな喋り方だったけ？

「あ、ああ…そうか…お前も大変だな……」

「はい、大変なんです…と、ミサカは内心、同情するなら金をくれと呟きます」

「古い名言だな！？ていうかお前本当に御坂か！？」

だんだんこいつが御坂じゃないような気がしてきた。
姿は似ているがこの喋り方がおかしい。

「ま、まさか…！お前が御坂の双子の姉妹の…！？」

「双子の姉妹…？違います…と、ミサカはあなたの考えを否定します。ミサカはお姉様のクローンです。とある事情でここの学園長にお世話になっています…と、ミサカは自分の紹介をします」

ク、クローンだったのか……
本当にこの学園ではいろんな生徒がいるな。
本来であればこのことを聞いてビックリしているところだが、この学園生活に慣れてしまい大して驚かなかった。
まあ、クローンが居てもおかしくないな。

「ところであなたはもしかして天堂恭介ですか？…と、ミサカはあなたの名前を確認します」

「え？そうだけど……。俺の名前を知っているの？」

「はい、あなたは中等部でも人気ですよ…と、ミサカはあなたの評

価を報告します」

俺って人気者だったの!?
それは嬉しいな!!

「天下無双の変態でもあり、あの学園長の奴隷ということで中等部の男子があなたに憧れています…と、ミサカはあなたの評価について説明します」

先程の嬉しいという気持ちがきれいさっぱり消えてしまった……。
ていうかいつの間にか中等部にも噂が広まっていたのかよ…。
俺は変態じゃないのに……。

「ではミサカは引き続きゴーグルの捜索に入ります…と、ミサカはもう帰っていいですか?と確認します」

「…ああ……探している最中声かけてすまなかったな…」

ミサカはそのまま俺の前から去って行ったのであった。
しかし御坂美琴のクローンとはいえ、本人とは全然違うもんだな。

「恭介!!!双子の姉妹は見つかった!!?」

ハルヒ達がやってきた。

「……えっと…とりあえず見つかったかな…」

「え!?どこ!?どこに居るの!!?」

「もう行ったよ…」

そうハルヒに言うと、ハルヒは急に機嫌が悪くなった。

「なんですって!!?なんで引き止めてくれなかったの!?本当に使えない奴ね!!」

「知るかそんなこと……」

見つかったからいいじゃないかと俺は心底思った。
そしてハルヒはいきなり俺にレポート用紙を渡した。

「まあいいわ……だったらこのレポート用紙を報告書代わりに書いてちょうだい!いい?これは団長命令だからね!!」

「はいはい……」

報告すればいいんだろう…。
俺はレポート用紙に今回の報告を書くことにした。

『結果報告』
“双子の姉妹?というかそっくりさんが居ました。中身は似てなかったけど…”

《二年Z組》

「なんで俺の教室?」

「ここにも不思議な噂があるのよ!」

いったい何なんだ？
確かに俺のクラスは不思議だらけだけど。

「ここにはこんな噂があるのよ！」

“姫路瑞希の弁当は天国に昇る味である”

「天国に昇る味？」

「天国に昇るほど美味いってことじゃないでしょうか？」

ああ！そういうことかもしれないな。
あまりの美味さで天国に昇っちゃうかもしれないってことか。
まあ確かにあの成績優秀な姫路のことだ。
料理も得意なんだろうな。

「そうだとしたらぜひ食べてみたいな！」

「そうですね！」

みくるさんも同じ意見みたいだな。
長門も食べたいと思っているかもしれないな。

「長門も食べたいか？」

「わたしはいい」

食べたくないのか？
無口な奴だけど食には興味あるかなと思っていたが。

「とにかく姫路さんを見つけて弁当を盗むわよ！」

「人の弁当を盗むな！！」

「冗談よ♪」

お前が言うと冗談に聞こえない！！

「さて、肝心の姫路さんはいるかしら？」

二年Ｚ組の教室をのぞいてみると、明久と姫路さんが話をしている。
よく見ると姫路は弁当を持っているみたいだ。

「あの…明久君！この弁当、今朝作ったんですが……よ、よかったらどうぞ／／／／／」

「え……あ、ありが…とう……で、でも…い、今はお腹がいっぱいで……その……（汗）」

ちょうどいい！姫路が弁当を作ってきたからあれを食べれば噂の真実が分かるかもしれない。
ただ気になるのが明久の言動だ。
姫路の弁当を食べようとしない。
俺だったら遠慮せずに食べるんだがな。

「よし恭介！あの弁当を盗んできなさい！」

「だから盗むなって！！」

「姫路さんに話して分けてもらえばいいだろう」

キョンの言うとうりだ！
わざわざ盗む必要はないだろう。

「…仕方ないわね、恭介！あんたが交渉してきて！」

「はいはい……」

ハルヒの命令で交渉しに行くことになった。
あいつも人使い荒いな……。
俺は姫路に近づき交渉を始めた。

「よう、姫路。それお前の弁当か？」

「あ！恭介君！そうなんですよ！朝早く起きて明久君の為に作ってきたんですよ！」

明久ってモテモテなんだな。
こんな美少女に弁当を作ってきてもらえるなんて……。
羨ましい奴！！

「そうか、よかったな明久」

「…うん……そうなんだよね……」

明久は全然嬉しそうじゃない。
しかも明久の足は何かに恐怖しているのか、震えていたのである。

「それで姫路の弁当はどんな感じなんだ？」

「見てみます？」

姫路は弁当を包んでいた布を解き、弁当箱を開けた。
すると、なんてことでしょう！？
綺麗に握ってあるおにぎりに、唐揚げや出し巻き卵やプチトマトなどのおかずがあって、とても美味しそうな弁当だった。

「これ全部姫路が作ったの！？」

「はいそうですよ♪」

さすが姫路だな！と感心した。
するとハルヒ達も近づいてきた。

「美味そうじゃない！こんな弁当を食べたら本当に天国に行けそうね！」

「天国？」

「…姫路には関係ないよ。ていうかハルヒ！ちゃんと挨拶しろ、先輩なんだぞ！」

「うっさいわね！！そんなことあんたに言われなくてもわかっているわよ！」

「……前から言おうと思っていたが、俺はお前の先輩なんだけど…」

「そんなこと分かっているけど？」

「分かっているなら敬語を使え！」

「なんであんたに敬語を使わないといけないの？」

なんでそこを疑問に思うんだ？

ハルヒは俺を無視して、姫路に挨拶をした。

「初めまして！一年Ｚ組の涼宮ハルヒです！」

「涼宮ハルヒ…？あの一年で有名な涼宮ハルヒさんですか？」

「はいそうです！」

こいつ有名人なんだな…。

まあ奇行が目立つから有名人になってしまったんだろうな。

「で、あの涼宮ハルヒさんが私に何かご用でしょうか…？」

「あなたの弁当を食べさせて！」

直球だな……。

姫路はいきなり言ってきたハルヒの言葉に戸惑っていた。

「えっと…どういうことで……？」

「俺が代わりに説明するから、ハルヒは黙っていろ。あのな姫路悪いんだけどその弁当少し食べさせてもらってもいいかな？」

「え!?どうして!?」

「姫路の弁当美味しそうだから一回食べてみたいんだ!」

姫路は少し考え込んだ後、俺に言った。

「……そこまで言うんなら、少しだけですよ……明久君に食べさせたいから……」

「分かっているよ!ちょっとだけだ」

姫路の許可が下りたので食べるとしよう。

俺が弁当の中から食べようと思ったおかずは出し巻き卵である。

出し巻き卵は大好きだからな。

「じゃあいただきます!」

俺が出し巻き卵を食べようとした……

その時!

「恭介やめるんだ!!!」

いきなり明久が大声で俺を止めた。

そして俺の出し巻き卵を取り上げようとする。

「なんだよいきなり!?」

「恭介、君はこんなところで死にたいのか!?」

「はぁ!?」

なにを言っているんだこいつは?
死にたいのかってどういうことだ?
わけがわからないがどうやら明久は俺に出し巻き卵を食べてほしくないと言っているみたいだ。
しかも……

「恭介!死に急ぐでない!!」

「…死ねばこの写真が見れなくなるぞ…!!」

「そうだ!落ち着いて考え直せ!!」

「いくら前回の鬼ごっこで酷い目にあったとはいえ、自殺に走るのはよくないぞ!!」

「悩み事があるなら相談に乗るぞ!!!」

「絶対にダメだよ恭介君!!」

秀吉、ムッツリーニ、雄二、音無、日向、新八までも止めようとしている。

「お前らまでなんだよ!?」

「恭介、いくら由美学園長の苛めが酷いからって自殺はよくない!」

「なに言っているんだ?」

「いいからその出し巻き卵を弁当に戻せ！！」

なんでこいつら俺を止めようとしているんだ？

待てよ……！？もしかしてこいつら……

俺が姫路の弁当を食べるのを羨ましがっているのか！？

こんな美人の弁当を俺が食べることに対して嫉妬しているのか？

なんと醜い奴らだ！

別に俺が何を食べようと勝手じゃないか！

「悪いがこの出し巻き卵は俺のものだ！お前らにはやらないぞ！！」

「いや！そうじゃなくて！」

「とにかくこの出し巻き卵は俺の物だからな！」

俺はみんなの制止を無視し、出し巻き卵を口に入れる。

どんな味がするんだろう♪

「いただきます♪」

「駄目だ！！恭介ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

パクリ

モグモグ

「お味はどうですか？」

「どうなの恭介!?」

姫路とハルヒが弁当のおかずの味について聞いてきたので、俺は率直な感想を言った。

「……う～む、とても甘くて辛くて苦くて、そんでもって固いような柔らかいようなベトベトしているようで、化学薬品のような味が……」

バタン！（恭介が倒れる音）

「きょ、恭介!?」

「恭介君!?」

「ちょっと!?大丈夫!?」

「い、いかん!!明久!!すぐにシャマル先生を呼んでこい!!」

「わ、わかった!」

「恭介!しっかりするんじゃ!!」

「…死ねばフェイトさんの写真が手に入らないぞ……!!」

「どうかしたの?…ってキョウ君!?どうしたの!?」

「く、口から泡が出ているぞ！？」

「で、電気ショック！電気ショックが必要だ！！御坂美琴を呼べ！！」

「もしかして出し巻き卵が喉に詰まったんですか！？だったらお茶を飲ませましょう！！私お茶を持っているんで！」

「待つんじゃ姫路！そのお茶は…」

「はい恭介君！お茶です！」

ゴクゴク…

「ゴバァァァァァァァァァ！！！！」

「恭介が吐血したぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「いったい何を入れたんですか姫路さん！？」

「ひ、秘密です！」

「恭介！死ぬなぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「吐血怖い…」

「澪ちゃんが壊れた！！？」

「どうしようティア！！」

「落ち着きなさいスバル！！とにかく心臓マッサージと人工呼吸を……って待てよ人工呼吸って確か……キ、キス！？／／／／／／ちょ、ちょっと待って！！わ、私には…ま、まだ早い！！そ、そそそそこまでの関係じゃないし！！！／／／／／／／／／／／／」

「なにしているのティア！？人工呼吸を…」

「や、やっぱり無理！！わ、私にはできない！！！！／／／／／／／／／／」

「シャマル先生はまだかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！？」

「キョン！すごいわね！！弁当を食べただけで、こんな大騒ぎよ！！お祭りよ！お祭り！！」

「喜んでいる場合かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

恭介が倒れたことにより、二年Ｚ組は大パニックになった。

ちなみに恭介はなんとか一命を取り留めました。

『結果報告』

“出し巻き卵を食べた瞬間、昔死んだ爺ちゃんが現れました……。
噂どうり天国に昇れました。二度と食べたくないです……”

第十七話　隠し味は愛と〇〇〇〇です…と、ミサカは言ってみました。（後書き）

天城
「今回恭介は倒れてしまい、由美は用事があって来れないので、スペシャルゲストを呼びました！では登場しましょうか！！インフィニット・ストラトスより、織斑一夏と篠ノ之箒です！！」
一夏
「あの……俺達、小説に出てきてないんですが…こんなところで登場してもいいんでしょうか……？なあ箒…」
箒
「一夏と二人っきり……／／／／／／／い、いいんじゃないか！！スペシャルゲストだからな！」
一夏
「いいのかよ……」
天城
「で、今回の話はどうでしたか？」
一夏
「姫路の料理は……なんというか…すごいな……」
箒
「おい一夏！話は変わるが私の弁当を食べてみないか？」
一夏
「弁当あるのか？」
箒
「そ、そうだ！せっかくだから食べさせてやる！！ありがたく思え！！」
天城
「あ、あの……俺の話を……」
一夏
「あ、ごめん！後にしてくれ！」

天城
「え！？でも後書きコーナーで…」
箒
「邪魔をするな！！！」
天城
「ぐばぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
一夏
「おい！箒！天城さんが気絶したぞ！！次回予告はどうする！？」
箒
「お前がやればいいじゃないか！」
一夏
「俺かよ……。仕方ない……えっとこれが台本か…。では次回予告だ！次回もハルヒ達といっしょに不思議な噂を調査していくぞ！今度は喋るトラや羽が生えたエンジェロイドが出演するらしいな！では次回をお楽しみに！！」
箒
「うむ！上出来だ！では弁当を…」
一夏
「そうだ！他のみんなも呼ぼう！みんなで食べればもっと美味しいからな！」
箒
「な、なんだと！！」
一夏
「何か問題あるのか？」
箒
「大有りだ！！！」
一夏
「なんで！？」
箒
「とにかく呼ぶなァァァァァァァ！！！！！」

第十八話　噂はしょせん噂だ！（前書き）

イカロスの独り言

マスター、ご命令を……

第十八話　噂はしょせん噂だ！

《保健室》

「恭介君、保健室は確かに怪我人や病人を直すところです。あなたは一日に三回はここに来ていますよ？いくらなんでも来すぎではないですか？あなたはどこぞ不良ですか？」

「すいません……」

保健室にてシャマル先生にそう叱られたが、仕方ないじゃないか……。

毎回由美に殺されかけるし、今回にいたっては姫路の弁当を食べたことによって危うく三途の川をわたるところだったんだ。

何で俺ばっかりこんな目に会うんだ？

やっぱり不幸主人公だからか？

俺がそう疑問に思っていた時、突然保健室のドアが開いてハルヒが現れた。

ハルヒは俺の姿を確認するとドカドカ入って来た。

「恭介、元気そうじゃない！」

お前には死にかけてベッドで横になっている俺が元気そうに見えるのか？

「さあ！次の不思議な噂を調査するから、さっさと起きなさい！」

「嫌だ！拒否権を発動する！」

俺はベッドに潜り込んで籠城の構えをした。
絶対にベッドから出たくないからな。
しかしハルヒはそんな俺の姿を見て、ニヤニヤと嫌な笑みをしていた。

「あんたが籠城をするのは分かっていたわ！だからこっちもちゃんと対策はしてあるわ！」

そう言ったハルヒは何かを取り出した。
一冊の本だ。しかもタイトルは……

『ユキカゼの秘密の写真集』（R―18指定）

「なんだよこれ……」

「……大人気の女子生徒、ユキカゼの写真集。俺が作った最高傑作」

「へぇ……ってムッツリーニ！？いつからそこにいたんだ！？」

いつの間にかムッツリーニが俺のベッドの下に潜んでいた。

「とにかく読んでみなさい！絶対気に入ると思うから！」

ハルヒが自信満々に言うので、とりあえず読むことにしよう。
それにしてもユキカゼっていう女の子はいったいどんな子…

「……」

「どう恭介？」

1ページからユキカゼの写真があった。
しかしこの子は……この子は……

「なんて可愛い女の子なんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

その写真に写っていた女の子は狐の耳と尻尾が付いており、金髪で巨乳である。そして極めつけはくノ一姿である。
見事に俺のハートを撃ち抜いたのであった。

「これをあげるから私の調査に付き合いなさい！」

「イエス、マイロード！！」

交渉成立だ！！
こんな写真集を貰えるなら喜んで一緒に調査しよう！

《学生寮》

ハルヒに連れられてやって来たのは学生寮である。
ここでどんな不思議な噂があるんだろう？

「で、ハルヒ、次はどんな噂を調査をするんだ？」

俺がそう聞くと、ハルヒは振り返って、みんなに対して言った。

「ここからは別行動よ！」

「はぁ？」

いきなり別行動と言われても……。

「みんなには別々の調査をしてもらうわ。一つ一つ調べていったら日が暮れてしまからね。はい♪それぞれの調べる噂の内容よ！」

ハルヒはみんなに一枚の紙を渡した。
調査の内容が書いてあるみたいだ。
ちなみに俺には……

“学生寮の庭に喋るネコがいるらしい”

喋るネコねぇ……。
実在するならぜひ見てみたいな。

「それじゃあ調査開始よ！」

そう言ってハルヒはどこかに向かったのである。

「僕達も行きましょうか？」

「ああ、そうだな」

俺達はその場で分かれることにした。

さて、まずは聞き込みだな。
情報を入手しなければ喋るネコにはたどり着けないだろう。
どこかに人はいないか探していると

『フリード！ご飯だよ！』

『ほらフリード、いっぱいお食べ』

『キュクルー♪』

どこからか人の声がした。
声のする方向へ行ってみると、そこには女の子と男の子が居たのである。
女の子の方はピンクの髪型でとても可愛い女の子であり、男の子の方は赤い髪に活発そうな少年である。
二人とも見る限り小等部の生徒みたいだ。

「あの子達に聞いてみるか…」

俺は早速二人に近づいてみたが、よく見ると女の子は生き物に餌を与えているみたいだ。
最初は、もしかして喋るネコか！？と期待していたが……違っていた。
いや、がっかりな気持ちにはなっていないよ。
むしろその生物を見てびっくりした。

女の子は“小さなドラゴン”に餌を与えていたのだ。

この学園ではドラゴンも住んでいるみたいだ。

喋るネコにドラゴンってまさしくファンタジーだなと思ったよ。
まあとにかく話を聞くとしよう。

「やあ、こんにちは♪」

俺は二人に気軽に話しかけてみた。
二人は俺に気付き挨拶をした。

「「こんにちは♪」」

「あのさ一つ聞くんだけど、そのドラゴンって君のペット？」

「ペットというか友達です。ねえ、フリード♪」

「キュクルー♪」

ドラゴンはフリードという名前らしい。
彼女にかなり懐いている。

「あ、申し遅れました！キャロ・ル・ルシエです」

「僕はエリオ・モンディアルです！よろしくお願いします！」

二人ともいい子たちじゃないか♪
あ、俺も自己紹介しなければな。

「俺は高等部二年の天堂恭介っていうんだ、よろしくな！」

「天堂恭介さん…？」

「もしかしてフェイトさんが言っていた天堂さん？」

二人は俺の名前を聞いた途端、驚きの表情をしていた。
しかもフェイトさんの名前が出たということはこの二人はフェイトさんの知り合いなのか？

「フェイトさんを知っているのか？」

「はい♪フェイトさんが天堂さんの話をしていましたよ♪」

「フェイトさんが俺のことを話していただと……？」

「ええ、とても嬉しそうに話をしていました。恭介君はとても面白くて優しい人だと言っていました」

これはまさかフェイトさんルート進行中ということなのか……？
そしていずれフェイトさんは俺の嫁になるということなのか！！

天城
“それはないだろうｗｗ”

コラァァァァ！！！
作者出てくんな！！
話がややこしくなるだろうが！！！

「ところで天堂さんはこんなところでなにをやっているんですか？」

あ、そうだ。
この子達に喋るネコの話を聞こうと思っていたんだ。

「あのさ、ここら辺に喋るネコを見なかった？」

「喋るネコ？う～～ん……。私は見ていないんですけど…。エリオ君は？」

「僕も見たこと無いな……。あ！そういえば向こうの小屋に三千院ナギ先輩が飼っているネコのタマが居るんですけど。なにか手がかりがあるかもしれませんよ！」

なるほど、ナギが飼っているネコか……。
もしかしてその猫が喋るネコかもしれないな。
いい情報を手に入れた。二人には感謝しないとな。

「ありがとう！早速行ってみるよ！」

「見つかるといいですね！」

「それではまた！」

「ああ、フェイトさんによろしくな！」

二人に別れを告げ、俺はナギのペットのタマを探すことにした。

しばらく探しているとエリオの言っていた通り、小さな小屋が見つかった。
あそこにタマが居るのかな？
近づいてみると小屋の近くに何かいる。
もしかしてタマかな？

俺は近づき確認してみると……

トラだ……

トラがいる……

あれはトラじゃないか！！？

エリオの嘘つき！！
トラじゃないか！！！
あれはネコじゃない、トラだ！！！
ていうかあれをどうやって見たらネコに見えるんだ！？
誰がどう見てもトラだろう！！？

「ナギもナギだ！！　このトラをどうしてネコと言えるんだ！！？」

「正確にはホワイトタイガーだ変態野郎」

「ああ、そうかそうだよな。毛が白いからホワイトタイガーだよなｗｗ…………………………って、えええええええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！？ト、トラが喋ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

いきなりトラ、いやホワイトタイガーが喋ったのでビックリしてしまった。

「うるせえ野郎だ。おちおち居眠りもできねえじゃねぇか。ティガ〇ックスに喰われて死んでしまえ！」

しかも口が悪いトラときた。

「あのさ……一応確認するけどさ……噂の喋るネコってお前のことなのか？」

一応確認することにした。

「フッ……俺も有名になったもんだな……」

ビンゴ！

どうやらこのネコ、いやこのホワイトタイガーが噂の喋るネコ？みたいだ。

「俺が何故喋るネコという噂されているか気になるだろう？そう……お嬢との出会いが全ての始まりだった……」

よし！ミッション終了だ！

あとはハルヒに報告すれば終わりだな。

「あれはまだ…俺が子供の頃の話だ……」

これでユキカゼ写真集（R－18指定）は俺の物だな。

さてさて、どんな姿が写されているいるのかな……グヘヘヘｗｗ

おっといかんいかん！また鼻血とよだれが！

俺は鼻血とよだれを拭き取り、その場から去ろうとしていた。

「……そしてその時だった…！お嬢が俺を……っておい！！ちょっと待てやコラ！！！」

喋るうざいトラが二足歩行で走ってきて、去ろうとしていた俺の肩を掴んできた。

なるほど、二足歩行もできるのか。報告書に書かなければな。

『結果報告』

“喋るネコはいなかったが、喋るうざいトラが居た。二足歩行もできる珍しいトラなのでサーカスに売り飛ばそう”

これでよし。

「ちょっと待てやコラァァァァ!!!俺の話を聞けよ!しかも結果報告にサーカスに売り飛ばそうって書いてあるんだけど、どういうことだ!!?」

「勝手に人の報告書を見るな!」

カンニングをする生徒かお前は!?

サーカスに売り飛ばすぞ!!

「ほら!サーカスに売り飛ばそうって思っているじゃないか!!そんなことをしたら全国の俺様のファンを敵に回すことになるぞ!!」

お前のファンなんているのか?

「俺はピカ◯ュウよりも人気のあるマスコットキャラクターなんだぞ!!だから俺様のファンは全国にたくさんいるんだ!!どうだ参ったか!?」

いや…ピ◯チュウの方が人気があると思うぞ。

それとドヤ顔をするなうざい。

「だいたい俺の過去話を聞かないとはどういうことだ!?お前、他

の奴らの過去話はちゃんと聞いていたのになんで俺だけ無視なんだよ!!?」

「喋るトラの過去話なんて正直どうでもいいんだよ。どうせあれだろ?机の引き出しの中から出てきて、ナギの未来を変える為に22世紀の未来世界からやってきたトラ型ロボットとかそういう過去話なんだろ?タマえもん?」

「ド○えもん!?ド○えもんだろそれは!?なんだよ22世紀からやって来たトラ型ロボットって!?しかも俺はタマえもんじゃねぇ!タマだ!!」

「だからタマえもんだろ?」

「うるせえ!!喋るな!!」

二足歩行で激怒しているトラの姿はシュールな光景だ。
もうどうでもいい。
さっさと行こう。

「じゃあなタマえもん、元気に暮らせよ」

「ちょっと待てよ!!結局俺って無視なの!?せっかくの初登場なんだよ!!もうすこし出番を…」

「悪い、急いでいるからなまた今度!」

「今度っていつ?」

「三年後かな?」

「なげぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

もういいだろう、俺は早くユキカゼ写真集（R―18指定）を見たいんだ。

いちいちうざいトラに構っていられるか！

俺はトラを完全無視して行こうと思っていたが、また俺の肩を掴んできた。

「……今度はなに？遺言なら後にして」

「お前俺に対する態度酷くない？」

気のせいだ。

「……まあいいや、俺が言いたいのは俺が喋るということを他のみんなには言わないでくれ。借金執事はもう知っているけど」

「借金執事？」

誰のことだ？

借金……執事…？…執事ということは、まさか……

「ハヤテのことか…？」

「イエス！」

なぜ借金執事なんだ……？

まあそういったところは今度会ったときに聞けばいいか。

「とにかくだ！！」

タマえもんが俺の肩を両手（いや、前足と言った方がいいのか？）で掴んで、真剣な顔で言った。

「誰にも言うなよ！！特にお嬢と学園長には！！」

「なんで由美まで？」

「学園長にでも言ってみろ……想像がつくだろう……」

「……」

俺は想像してみた。もし由美にナギのペットのタマえもんが喋るトラだと言ったら……

“まあ！喋るトラなの！？だったらサーカスにでも売り飛ばそう♪”

「お前売られるな……まあ妥当な判断だな」

「お前やっぱり酷いや！！！！」

タマえもんは拗ねて小屋の中に入って行った。

少しいじりすぎたかな……？

俺はタマえもんが気になって小屋の中をのぞくと、タマえもんはノートパソコンを開いてキーボードをうっていた。

トラがパソコンをするのかよ……と心の中でツッコミを入れた。

「あの野郎ゆるせねぇ！こうなったらネット上で『恭介は変質者』と書きこんでやる！」

「……」

俺はすぐさまタマえもんのノートパソコンを取り上げ、床に落とし、ぶっ壊した。

「あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！！！俺のパソコンが！！！！てめぇ、なにしやがる！！！！？（怒）」

「うるせぇ！！！！！（怒）なに勝手にネット上で変な書き込みをしているんだ！！！！」

俺とタマえもんとの言い争いはしばらく続くのであった……。

《校舎》

タマえもんとの言い争いが３０分以上続いてしまい、遅くなってしまった。

俺は急いでハルヒ達の待ち合わせ場所の校舎へと向かった。

「ハルヒ達待ちくたびれているかな……？」

そう思っていたとき、ハルヒ達の姿を発見した。

俺はハルヒに声を掛ける

「おい！ハルヒ！すまない、遅くなって…」

「遅い！！遅すぎるわ！！！こんだけ団長を待たせるなんて信じら

んない！！罰金よ、罰金！！罰金百万円払ってもらうからね！！！」

なんで遅れたくらいで白万円も払わないといけないんだ……。
ギャーギャー騒いでいるハルヒは放っておいて、キョンやみくるさんに話しかけた。

「キョンとみくるさんはどうだった？」

「まあなんとか調べましたよ」

「私もです♪」

どんな内容だったんだろうと気になったので二人の報告書を見せてもらった。

キョンの調べる噂
“『僕と契約して魔法少女になってよ』と言うセールスみたいな小動物がいるらしい”

『結果報告』
“とある少女に『僕と契約して魔法少女になってよ』と言っていたところを発見。詳しく調べようとしたが、黒い長髪の少女が小動物を射殺してしまった”

みくるさんの調べる噂
“高町なのはには隠し子がいる”

『結果報告』
“本人に聞いてみると、『みくるさん…？少し頭冷やそうか……？』と言われ、身の危険を感じ、調査を打ち切りにした”

「……」

二人とも大変だったな……特にみくるさんが……。
ていうかなのはさんに隠し子!?
いや……本人が否定しているなら違うよな……。

「さあ！次の噂を調査するわよ！！」

「……まだあるのかよ」

「次でラストよ」

ラストと聞いて少しだけやる気が出た。
あともうちょっとでユキカゼの秘密の写真集（R―18指定）が拝めるからもう少し頑張ろう！

「次の噂はこれよ！！」

“スイカ畑にはスイカの守護神がいる”

「スイカ畑？」

そんな物がこの学園にあるのか？

「学生寮から少し離れたところにあるんですよ。あそこのスイカは天下一品と学園長が仰っていました」

いつの間にか現れた古泉が説明してくれた。

「もしかしてそのスイカ畑の世話をやっているのがスイカの守護神？」

「おそらくそうでしょう」

なるほど……しかし天下一品のスイカがあるならぜひ見てみたいな。

そしてそのスイカの守護神にも興味がある。

「さっそく行くわよ！！」

ハルヒを先頭に、俺達はスイカ畑へと向かうのであった。

《スイカ畑》

たどり着いた畑は、名前どうりスイカしかない。

他の食材などまったくない。

「どれもこれも見事なスイカですね」

「そうなのか？」

俺はスイカのことはよくわからないから、全部が同じに見えてしまう。

だが大きさについてはよく見ると、スーパーで売っているスイカより大きいのである。

「大きいスイカだな、なあ長門！」

コクリ

長門に話を振ってみたが、頷くだけ。

あいかわらず無口な奴だと思っていたら

「…食べたい？」

やっと長門が喋ったのである。

「ああ、食べてみたいな」

「…ならば交渉」

長門はとある方向に指を指した。

指した方向を見てみると一人の女子が農作業をしていた。

ピンク色の髪で背中に翼が生えてある女の子だ。

普通だったらここで『あれ！？あの子背中に翼が生えてあるけど！！？』とツッコムところだが、この天堂恭介、散々摩訶不思議な光景を目の当たりにしてきたので、翼が生えた少女を見ても、「あ、翼が生えている」と言うだけである。

「あの人って…」

「…あの人が守護神」

「へえ……って長門知っていたのか！？」

コクリと長門が頷いた。

「なんでハルヒに言わないんだ！？」

「…特に言われていないから」

言われてないからって……。

とにかくスイカ畑の守護神に出会えたので今回の仕事は終了だな。

俺はハルヒに報告をするのであった。

「おいハルヒ！あの人がスイカの守護神だってさ」

「ふ～ん……」

「見つけたんだからこれで終りょ…」

「恭介！あの人からスイカを貰ってきなさい！」

なんでだよ……

「天下一品のスイカが目の前にあるのよ！一個ぐらい持って帰りましょう！」

「あっそ……だったらお前が交渉をしてこい」

「なんで私が行くのよ？」

「お前、先輩をこき使うのか…？」

「あ、そういえばあんた私の先輩だったわね」

俺って先輩として見られていないんだろうか……？
そう思うと悲しくなってきた……。
すると長門が近づいて俺の肩に手を置いて言った。

「…大丈夫、変態であろうとスケベであろうとキモイと言われようとストーカーと言われようと、一応あなたは先輩だから」

「それは励ましているつもりか！？逆に今の言葉で凄い傷ついたんだが！！ていうか俺は変態でもないし、ストーカーでもない！！」

長門はいったい俺をどう見ているんだ？
今度二人っきりで話をした方がいいな……。
……言っておくが、二人っきりになったところで襲わねえぞ！！
全国の長門ファンを敵に回すことはしないからな！

「とにかく行くわよ！」

ハルヒは勝手にスイカ畑に入って行き、農作業をしていた天使のような女の子に話しかけた。

「ちょっといいかしら？」

「……はい？」

女の子が振り返り、俺達を見た。
近くで見るとなんて可愛い女の子だ。
無表情だがそれでも可愛い顔で、しかも胸が大きい……。
俺はスイカの交渉なんて忘れて、彼女の胸をしっかり見ていた。

「ほら恭介！交渉しなさい！」

「……え!?あ、ああ!そうだったな!!」

「あんたどこ見ていたの…？」

「え!?えっと……ス、スイカだよ!スイカ!!大きいな!!」

なんとか誤魔化した。

さすがに彼女の目の前で『あなたの胸を見ていました!!』と言えば、彼女は俺を変態として認識してしまうだろう。

とにかく俺は彼女と交渉することにした。

「えっと……俺の名前は天堂恭介。君は？」

「…私はイカロスです」

「イカロス…か……。いい胸だな♪」

全員

『……』

しまったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー!!!!!!!!!!

つい思ったことを口に出してしまった!!

本当なら『いい名前だな♪』って言おうと思っていたのに!!

これでは俺は変態じゃないか!!!

「あんたねぇ……」

ハルヒは呆れた目で俺を見ており、みくるさんなんて信じらんない

と言いたげな表情をしていた。
長門は無表情だが、古泉は苦笑いをしている。

「恭介先輩……」

キョンなにも言うな……
それにしてもやばいな、この子に対して失礼なことを言ってしまったからこのままじゃスイカは貰えないかもしれない。
とりあえず謝ろう……。

「あの……すいま…」

「…マスターからよく言われます」

「…はい？」

「…お前は相変わらず胸がでかいなと」

「マスターって？」

そう聞くとイカロスはスイカ畑の一角にあるかかしを指差したのである。

「かかし？」

しかしそのかかしをよく見ると形が変だ。
俺は気になってかかしに近づいてみると

「ん？あれ……？」

これはかかしじゃないぞ！？
人だ！ボロボロになった少年が裸で吊るされているぞ！！
そう、は・だ・か・だ！！
だから

「きゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

「な、なによこれぇぇぇぇぇぇぇ！！！！？」

もちろん女であるハルヒとみくるさんは手で目を隠しながら叫んだ。
だが長門は相変わらず無表情である。

「マスターです」

「この人がマスター！？」

ただの変態じゃないのか！？
ていうか生きてるのかコイツ！？
裸の少年をよく調べてみた。
動かない、ただの屍のようだ……。

「…って勝手に殺すなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

いきなり裸の少年は起き上がり叫んだ！

「生きてる！？」

「当たり前じゃボケェェェェェェ！！！！！」

「マスターおはようございます」

イカロスは裸の男に挨拶をした。

「おはようじゃねーよ!!!イカロスさっさとこの縄をほどけ!!」

「ですがそんなことをしてしまったら、そはらさんに怒られてしまいます…」

イカロスは困惑の表情で悩んでいた。
そして裸の少年は俺を見て言った。

「あのすいませんが、この縄を解いてくれませんか?」

申し訳なさそうに言ってきた。
なにがあったか知らないが、裸でいられるのも困るので、俺は少年の縄をほどこうとした。

「それにしてもなんで吊るされていたんだ?」

縄を解きながら少年に聞いてみた。
すると少年は笑いながら俺に言ったのである。

「いやぁ……高等部三年のフェイト先輩の入浴しているところ覗いていたら、そはらに見つかってボコボコニされた揚句ここに吊るされてしまったんですよｗｗ」

なんだと……?

「でもあなたに出会えて本当によか…」

俺は縄を解くのをやめて、そこら辺に置いてあった鍬を持った。
そして構えて

「死ねこのクソ野郎ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！」

「えええええええええええええええええええええええええええええええええ？」

俺は鍬を振り下ろしクソ野郎の頭を狙ったが、縄が緩くなっていたのでクソ野郎は自力で脱出し、間一髪のところで避けた。

「ちょ、ちょっと待って！！！な、なんで！！？」

「死ねやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

俺は再び鍬を振り下ろすが、みくるさんとキョンが俺の体を抑えてきた。

「お、落ち着いてください！恭介さん！」

「恭介先輩どうしたんですか！？」

「離せ！！キョン、みくるさん！！あいつはフェイトさんの裸を見たんだ！！万死に値する！！！俺だって見たかったのにいいいいいいいいーーーーーーー！！！！！」

フェイトさんの裸を見たということで、俺の怒りは頂点に達していた！

コイツを血祭りにして、生まれてきたことを後悔させてやる！！

「おい！イカロス！！助けてくれぇエエエエエエエ！！！」

クソ野郎がイカロスにそう言った。
するとイカロスは突然背中に生えていた翼を全開に広げた。
しかもよく見るとイカロスの目が赤くなったのである。

なんか嫌な予感がする……。

「了解、マスターを救出する為にアルテミスを発射します。ターゲットロック、発射」

彼女の一声と共に翼から小型のミサイルが一斉に発射した。
小型ミサイルは上空に上がりそして……

俺達に向かっている！

「あの……やばくない……」

「やばいですね……」

「はわわわわ……」

「なに！なに！なんなのあれ！？」

「おい！イカロス！！そんなことをしたら俺も巻き添え…」

そしてミサイルは俺達に命中し……

ドオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォーーーーーーーン！！！！！！

『ぎゃあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！！！』

俺達は全員吹き飛ばされたのである……。

『結果報告』

“スイカ畑の守護神はスイカを育てるのもうまいし、ミサイルも発射します”

「先程は失礼しました。お詫びにこれをどうぞ」

イカロスはボロボロになった俺達にこけしをプレゼントした。

なんでこけしなんだ？とツッコミが入るところだが、疲れていたのでツッコミは無しにすることにしよう。

イカロスは自分のマスターに近づいて声をかけた。

「マスター大丈夫でしょうか？」

「……」

動かない、まるで屍のようだ。

「だから屍じゃねぇぇぇぇぇーーーー！！！！」

まだ生きていたようだ、ゴキブリ並の生命力だな。
でもあのミサイルを受けて生きてる俺達もどうなんだろうな……。

「ところであんた名前なんて言うの？」

ハルヒが裸の少年にそんなことを聞いた。
ていうか確かにこいつの名前聞いてなかったな。

「俺か？俺の名前は桜井智樹って言うんだ」

「ああ……あんたが桜井……」

どうやらハルヒはこいつのことを知っているみたいだ。

「ハルヒは知っているのか？」

「噂のゴキブリ桜井よ。数々の伝説を持っているわ。女風呂を覗いたり、フェイト先輩の胸を触ろうとしたり、軽音部のみんなにセクハラ行為をしたりといろいろなことをしたわ」

「ふ～ん……イカロス、包丁ある？」

「ありますけど……」

「おい待って！！包丁を使う意味が分からないんですけど！？」

「ははははｗｗなにを言っているんだ。お前を刺し殺すに決まっているじゃないか♪フェイトさんに近づく害虫め！！」

刺し殺そうと思っていたが、ハルヒが止めに入った。

「待ちなさい！刺し殺しちゃだめよ！！死体の片づけがめんどくさいじゃない！」

「そういう問題かよ！！」

「まあこんな奴は放っておいて」

叫んでいるゴキブリ桜井を無視してハルヒが話を進める。

「とにかくこれで全ての不思議な噂はコンプリートよ！みんなお疲れ様！！どう？恭介？私達の部活内容は？」

ハルヒがそう聞いてきたので、俺は思ったこと口にした。

「とにかく疲れるとしか言いようがないが……まあ楽しかったよ」

「そうよかった♪」

ハルヒはニコッと笑顔になった。

本人もとても面白かったみたいだ。

最初はこんな部活辞めてやると思っていたが、意外に楽しかった。

こんな滅茶苦茶な部活だが……まあ悪くない。

しばらくここに居てもいいかもしれないな。

「さて、夕方になったことだし！帰りますか！」

ハルヒの言うとうり、時間は夕方五時になっていた。

部活終了である。

ハルヒは鞄を持って帰ろうとしたが

「待てハルヒ！」

俺はハルヒを呼びとめた。
なぜ呼び止めたかと言うと、あれを入手する為である。

「今度こそ約束を守れよ、ユキカゼの秘密の写真集（Ｒ―１８指定）は？」

「え？……ああ！あれね！」

ハルヒは思い出したようだ。
これでユキカゼの秘密の写真集（Ｒ―１８指定）が貰える！
さてさて、どんな姿が写っているのかな？
グヘヘｗｗおっと！また鼻血とよだれが！

「あれなら由美学園長が持っているわ！」

「え……？」

「さっきみんなと別れて別々で調査していたじゃない？その時に落としちゃって由美学園長に拾われちゃったのよ。で、学園長が『Ｒ―１８指定って書いてあるじゃない！ハルヒちゃんが読むには早すぎです！これは没収します！』と言って取られちゃったの」

「……な、なんてこった……ｏｒｚ」

由美の手に渡った以上、ユキカゼの秘密の写真集（Ｒ―１８指定）は取り返せないじゃないか！

せっかく楽しみにしていたのに……。
するとハルヒは俺の肩に手を置き言った。

「大丈夫よ恭介！」

「へ……？なにが……？」

「あんたの手に渡るようにちゃんと学園長に『それは恭介の物だからあとで返しておいてください！』と言っておいたから大丈夫よ！」

お前……なんてことを……！！
そんなことをしたら…

ピンポンパンポーン！

校内放送だ……嫌な予感……。

『二年Ｚ組、天堂恭介君。至急切腹の準備をして学園長室に来て下さい♪繰り返しお伝えします♪二年Ｚ組、天堂恭介君。至急火あぶりの準備をして学園長室に来て下さい♪』

なるほど……今回は切腹と火あぶりどちらか選べってことか……。

「ね？大丈夫でしょう？」

どこがだ……？

「哀れな人だなぁ…」

桜井智樹がやれやれと首を振りながら言ったが…

『あと、桜井智樹君。公開処刑の準備が整ったので学園長室に来て下さい♪』

「……」

哀れな奴だ……。

「さて、行くか……？」

「……はい」

俺と智樹は共に地獄の学園長室へと向かうのである。

「じゃあねー！！！」

後ろでハルヒが手を振っている。
これから俺に降りかかる不幸をどうやら分かっていないみたいだ。
キョンは俺に向かって合掌をした。
キョン心配するな俺は生きて帰ってくるぞ！
ユキカゼの秘密の写真集（R－18指定）を見るまでは死なないさ！

《学園長室》

「さて、恭介？呼びだされた理由が分かるかしら？」

「はい……」

「智樹君は……？」

「はい……」

「なら話は早いわ♪なら二人まとめて……少し頭冷やしましょうか……？」

「「いやああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！！！！！」」

第十八話　噂はしょせん噂だ！（後書き）

天城
「今回も酷い目にあったな恭介？」
恭介
「もう死ぬ……最悪……」
天城
「ところで今回の出来事でユキカゼが好きになったか？」
恭介
「うん！金髪で巨乳だし！」
天城
「あ……そう……」
恭介
「作者はどうなんだ？」
天城
「もちろん大好きだぞ！！」
恭介
「だよな！！」
天城
「さて、テンションも上がってきたことだし、次回予告だ！！次回はいよいよツンデレガンナー、ティアナが主役の話だ！どんな話かは次回のお楽しみで！とりあえず一言、リア充死ね！！恭介死ね！！」
恭介
「なんでだよ！！」
天城
「では次回またお会いしましょう！！」

第十九話　欲しい物？それは愛だ！！（前書き）

ティアナの独り言

べ、別に恭介のことなんて好きじゃないもん！！／／／／／／／ただカッコいいとは思うけど……／／／／／／／／

第十九話　欲しい物？それは愛だ！！

《二年Ｚ組教室》

「…では次の商品……フェイトさんの私服姿の写真……！五千円から……！」

「六千！」

「ならば七千！」

「一万円！」

「二万出す！！！」

「……恭介落札！」

「よっしゃぁぁぁぁぁ！！！！」

この日二年Ｚ組の教室では、ムッツリーニ主催の秘密の写真オークションが開催されていた。

そしてもちろん俺こと天堂恭介はフェイトさん関連の写真を次々に落札したのである。

どこからそんな金があるんだ？と思う人がいるんだと思うが、親の仕送りを使っているのである。

お金を計画的に使えだと？フェイトさんの写真が目の前にあるのにそんな心配してられるか！！

「……次の商品！アキちゃんのメイド服姿、一万円から…！」

アキちゃんとは、女装姿の明久のことである。

「ちょっとムッツリーニ！！なんてものをオークションに出しているんだ！！そんな物を出しても買う人なんて…」

「二万円出します！！！」

「ならウチは三万出すわ！！」

「負けません！！五万円で！！！」

「こうなったらへそくりの八万円を……！」

「美波！姫路さん！！お願いだからそんな物のために大金を使わないで！！！お金は計画的に使おうよ！！！」

ごもっとも……

さらに引き続き、秀吉の写真、ユキカゼの写真、澪の写真、なのはの写真など美女たちの写真を次々とオークションの商品にしていた。

そして最後の商品が出てきたのである。

「最後と言うと……ものすごい写真かな？」

「どんなものだろう？」

「楽しみだ！」

皆の期待が高まる中、最後の商品が姿を現した。

「……最後の商品……天堂恭介の写真!!百円から!!!」

『……』

…だれも反応しない……

先程までヒートアップしていた熱い空気が一気に冷めてしまったのである。

「おい……誰か買ってよ……百円だぞ……？」

安いぞ……百円で俺の写真が手に入るんだぞ……？

カッコいい俺の写真が手に入るんだぞ!?

誰か買えよ!!

すると周りからひそひそ話が聞こえてきた。

「おいお前、落札しろよ」

「嫌だよ、お前が金を出せよ…」

「あんなのタダでもいらんよ……」

「よりにもよって変態の写真かよ……」

「最後があんなのってどういうこと？」

「なんなんだよ!!俺の写真じゃ不服かよ!!?嫌だって言うのかよ!!?酷い!!酷すぎる!!!」

とうとう俺は自分の人気の無さを悲しんで泣いてしまったのである。

誰も俺の写真を買ってくれない……そう思っていたが……。

奇跡が起きた！

「……百十円…／／／／／／」

ボソッと誰かが小さい声で言った。
みんなが、誰が言った？と周りを見渡して探していると、一人の女性が手を上げていたのである。

ティアナ・ランスターだった。

彼女が百十円出して俺の写真を買おうと言ってきたのである。

「ティア！？」

そばに居たスバルが驚いていたのである。
しかし驚くのも無理がない、ティアナは基本このオークションには興味が無いのである。
そのティアナがオークションに参加したのは異例の事態である。
しかも俺の写真を買うと言っているのだから他のみんなもビックリしている。

「マジかよ……」

「で、でも違うのよ！！べ、別に恭介の写真だからいいって意味じゃなくて……その……あれよ！友達が欲しいって言っていたから私は仕方なく……」

「……落札」

彼女のは百十円で落札が決定したのである。
ティアナはムッツリーニから俺の写真を貰いさっさと自分の席に座ったのである。

「ティアナ……」

俺はティアナを感謝の目で見ていた。
そして俺と眼が合った時、顔真っ赤にしてそっぽを向いてしまったのである。

「おい……てめーら……」

するとどこからか怒りが籠った声が聞こえた。
教室の扉にて銀八先生が居たのである。
とても機嫌が悪そうだ。

「授業が始まらねーだろうが！！！！他のクラスの奴はさっさと自分の教室に戻れ！！そしてこのクラスの奴は席に座れボケェェェェエエエエエエ！！！！！」

銀八先生は怒鳴り声を上げて生徒に注意した。
そして他のクラスの生徒は急いで自分の教室に戻り、俺達は自分の席に戻ったのである。
そして俺は隣の席のティアナに感謝した。

「ありがとうなティアナ！俺の写真を買ってくれて！」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

その時のティアナは顔が真っ赤だった。
熱でもあるのかな？

《昼休み》

授業が終わり昼休みとなった。
この時間になると生徒はみんな昼ご飯を食べるのである。
食堂に行きご飯を食べる人もいれば、自分の弁当を作ってきて友達と食べる人もいる。
ティアナは食堂に行きご飯を食べる方なんだが、その日は授業が終わっても食堂には行かず、机に座ってあの写真を見ていた。
オークションで買った恭介の写真である。

「ふふ……／／／／／」

とても嬉しそうににやけて写真を見ていた。
だがその時

「ティア、なに一人で笑っているの？」

「へ？きゃああ！！」

突然スバルが話しかけてきたのでティアナはビックリしたのか、イスから転んでしまった。

「ティア！？大丈夫！？」

「だ、大丈夫よ！い、いきなりなんなの！？」

ティアナは持っていた恭介の写真をポケットの中にしまい込み、スバルに向き直った。

「一緒に食堂に行こうって言おうと思っていたんだよ。なのにティアが…」

「あ、そうなの……。だったらさっさと行くわよ！」

「ティアそんなに焦らなくても…」

「焦っていない！！」

いえ、焦っています。

スバルはティアナを立たせて、そのまま食堂の方へと向かったのである。

《食堂》

この時間の食堂は混み合っていた。

ほとんどの学生はここでご飯を食べるのでどうしても混み合ってしまうのである。

こんな状況になってしまうと座る席が無いという問題が発生するが、スバルとティアナにとってそれは大した問題ではなかった。

「スバル！ティアナ！こっちこっち！！」

事前に高町なのはが席を取ってあったからである。
なのはの席には他にもフェイト、はやて、シグナム、ヴィータが座っていた。
スバルとティアナは空いている席に座り、一緒に食事を取ることにした。

「いつもすいません。私達の為に席を取ってくれて…」

ティアナがそう謝るがなのははまったく気にしていない。

「いいよ別に、私達はスバル達と一緒にご飯が食べたいから♪」

「ところでどうやった？オークション会場は！？」

はやてがさっそく聞いてきたのはオークションについてである。

「すごかったですよ！特に恭介なんてフェイトさん関連の写真を全部買い占めちゃったんですよ！」

「そうか～♪フェイトちゃんは大人気やなぁ……」

「もうやめてよはやて／／／／／／／」

「確かに恭介君はフェイトちゃんが気に入っているからねｗｗ」

「もう！なのはまで……！！／／／／／／／」

なのはやはやてがフェイトをいじってきたが、これはもはや日常的風景になっている。

スバルはさらに話を続ける。

「あ、そういえば、ティアもなんか買ったよね？」

「えぇ！？」

突然自分の話が出てきたので、ビックリするティアナ。
その反応を見逃さなかったはやては、ニヤリと笑みを浮かべた。

「ほう……誰の写真を買ったんや？ティアナちゃん？」

「え！？えっと……そ、その……あの……／／／／／／」

なかなか喋ろうとしないティアナであったが、とっさにスバルが

「恭介の写真を買ったんですよ」

「バ、バカ！！／／／／／」

全員
『恭介（君）の！？』

なのは、はやて、フェイト、ヴィータ、シグナムは驚いていた。
まあ無理はないだろう、なんたってあの変態恭介君ですからね。
とんでもないことをバラされ、ティアナの顔は真っ赤になった。
そしてなのはは、何かを考えたのか、ティアナに質問をした。

「ねえ、ティアナ？もしかして……ティアナって恭介君のことが…」

その先を言おうと思っていたなのはだったが、その前にティアナが

叫んだ。

「べ、べべ別にきょ、恭介のことが好きとかは思っていませんよ！！／／／／／／／写真を貰って嬉しいとか思っていないし、ましてやその写真を見てよからぬ妄想なんてしていませんからね！！！／／／／／／」

全員

『……そこまでは聞いていない…』

これではティアナが自分から『私恭介のことが大好きなの♪恭介の写真を貰ってうれぴー♪しかもその写真を見てよからぬ妄想をしています♪』と暴露をしているようなものである。

だが、それでもティアナは否定し続ける。

「ほ、本当に違うんですよ！！私は恭介のことなんて好きじゃありませんから！！／／／／／」

「またまたそんなこと言っちゃってｗｗ本当は好きなんやろ？」

「違います！！」

「はっきり言ったらどうだ？」

はやてやシグナムもティアナをからかう。

「だ、だから違いますよ！！！あんな奴なんて好きじゃありません！！あんな変質者、むしろ消えろって言いたいくらいですよ！！」

「ティ、ティア！それはいくらなんでも言いすぎじゃあ…」

ティアナはスバルの言葉を無視しさらにこんなことを言い始めた。

「だ、だいたいあんな奴のどこに好きになる要因があるんですか！？いつもいつも学園長の尻に敷かれているし、変態だし、二言目にはフェイトさん、フェイトさん、フェイトさんって！お前はフェイトさんのストーカーかよ！？って言いたいくらいですよ！！マジキモいですよ！！ていうか本当に死んでくれって言いたいですよ！！！」

あまりにも言いすぎな発言であった。

変態であるというのは事実だけど……。

だがその時、フェイトがなにかを発見し、慌ててティアナに言った。

「ティ、ティアナ！も、もうそれぐらいにしよ！」

「いいえ！まだありますよ！この前ミニスカートの女子高生の足をじろじろ見ていたんですよ！まったく気持ち悪い！！警察に連絡しようかなって思ったくらいですよ！！しかも土屋君から梓ちゃんのネコ耳メイド服姿の写真を買っていたんですよ！？もう犯罪者ですよ！！死刑ですよ！死刑！！あんな奴捕まって死刑になればいいんですよ！！まったくあの変態は…」

パリーン！！

どこからか茶碗が割れる音が聞こえてきた。

ティアナ達は割れた音の方向を見てみると、そこには一人の男が立っていた。

しかもティアナはその人物を見て驚愕した。
我らが主人公天堂恭介が涙目で立っていた。

どうやら恭介が持っていたカツ丼を落としてしまったようだが、おそらく先程のティアナの発言を聞いて落としてしまったみたいだ。
ティアナはやばいと思った。

「あ、あの……恭介……？」

「気持ち悪い……？は、犯罪者……？ストーカー……？消えろ……？し、ししし死刑……？」

「きょ、恭介……！！ち、違うの！こ、これは…」

「ティアナなら…」

「へ？」

「ティアナなら分かってくれると思っていたのにいいいいいいいいいいいいいいいーーーーー！！！！！」

恭介は泣きながら食堂から出て行った。
女の子にあんなことを言われショックだったと思うが、いくらなんでも泣くことはないだろう？
ティアナは慌てて恭介に声をかける。

「きょ、恭介！？ま、待ってよ！！！」

しかし恭介にティアナの言葉は届いておらず、そのままどこかへ消えてしまったのである。

「あちゃ～……」

「これはやばいな……」

「ティアナ……」

フェイトは心配になってティアナに近づいたが、ティアナはガタガタ震えながらブツブツと小さい声で呟いていた。

「マズイマズイマズイ……ウソでしょう……？さっきの聞かれたの…？死刑とかキモイとか犯罪者とか……最悪だよぉ……恭介に聞かれたよ……冗談なのに……ウソなのに……どうしよう……これじゃあ嫌われちゃうよ……嫌だよ……ていうか私なんであんなことを言ったの……？馬鹿じゃないの私…？謝って許してくれるかな……？いや許してくれないかも……むしろ私とは永遠にさよなら……？もうあなたのことは知りませんルートに突入……？い、いやあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

とうとうティアナは暴走した！

頭を抱えながら、床にドン！ドン！と頭をぶつける。

自分はもう嫌われたと思いこんでいるみたいだ。

「ティアナ落ち着いて！！」

「ティア！！」

スバルとなのはが落ち着かせようと声をかけた。
そしてティアナの暴走は止まったが、ティアナは落ち込んでしまった。

「どうしよう、なのはさん……。恭介、私のことが嫌いになっちゃったかも……」

その声にいつもの元気さがまったく感じられなかった。

一方泣きながら飛び出していった恭介はというと……。

《学園長室》

「なるほど……そんなことがあったの……」

先程の出来事を由美に説明すると納得したという顔をした。
俺は現在落ち込んでいます……。
ティアナからあんなことを言われ、ショックを受けております。
そしてなぜかこの学園長室に来てしまったのである。

「ティアナ……あんなに俺に優しかったのに、何でいきなりあんなことを言い出したんだろう……？」

あいつはとても俺に優しかった、転校してきて右も左も分からない俺に色々教えてくれたこともあるし、
俺が困っている時助けてくれたこともある、ついこの間も、授業で使う教科書を忘れていた時

『はい……私の貸してあげる……。わ、私はスバルと一緒に見るから』

とても良い奴だったのに……なんでだ？
死刑とか犯罪者とかどうなの？酷くない？

「まあ仕方ないよね♪恭介は変態なんだからティアナちゃんに嫌われるのも無理ないよね！」

由美の発言で俺は絶望的な気分になった。

「あれ……？もしかして落ち込んだ……？」

「……うるさい…！お前に相談した俺がバカだったよ！」

「……はぁ…もう仕方ないな……」

溜め息混じりに、そう言った由美は突然…

「えい♪」

「！！！！？」

いきなり由美は俺を抱きしめたのである！
しかも俺の顔がちょうど由美の胸に当たっていた！

「どう恭介…？気分は……？」

「え？な、なにが……？」

「どんな……感じ……？」

どんな感じだって？それは……

「とても柔らかい……しかも、いい匂いがする……これが由美の匂い……？」

率直な感想を言ってみた。そうとても柔らかくそしていい匂いだ……。

そして由美は俺から離れ笑顔で言った。

「どう元気出た？」

「え？ま、まあな……」

まさか由美は俺を元気づけようと、あんなことを……？

「とにかく恭介はティアナちゃんと仲良くなりたいんだよね？」

「ああ、そうだけど……」

「だったら協力してあげる♪」

「え！？」

なんと珍しい！？

あの由美が、極悪非道で俺を苛めることしか考えていない由美が、俺に協力だと！？

どういう風の吹きまわしだ！？

天変地異の前触れか！？
あの由美がだぞ！？あの由美が！？

「なんか失礼なことを考えていない？」

「いえ！滅相もありません！！」

俺は全力で否定した。

「私は、恭介やみんなが笑顔で学園生活を楽しんでもらいたいの。だからティアナちゃんと恭介にはちゃんと仲良くしてもらいたいの、いい友達としてね♪」

やはり由美は生徒のことを一番に考えている奴だ。
……でも時々やりすぎることがあるけど……

「まず考えるのはティアナちゃんのことね。なぜ恭介に対してあんなひどいこと言ったのかよね？」

「ああ、どうしてだろうか……？」

「……もしかして恭介、ティアナちゃんにいやらしいことをしたんじゃないでしょうね？」

「するわけないだろう！！！」

「だったら単純に変態だからなのかな？」

俺は変態じゃないが、変態という噂が流れている以上、俺を変態と認識してしまうのか？

だとしたらどうすれば……？

「そうだいいことを思いついた！！」

由美がいきなり大声を出して言った。
なにかを閃いたみたいだ。

「なんだよ？」

「プレゼントよ！」

プレゼント……？

「恭介は変態っていうレッテルが貼られているからティアナが嫌がるのよ。だから変態じゃなくて、とても優しい、いい人というイメージを付けさせるのよ！ティアナちゃんの欲しい物をプレゼントすれば、ティアナちゃんはもう恭介のことを変態って言わないよ♪こんな感じで」

《由美の想像》

ティアナ
『これ私の欲しかった物……これを貰ってもいいの？』

恭介
『ああ、いいよ！』

ティアナ
『ありがとう恭介！！恭介のことを変態と思っていたけど違うのね！恭介は優しくていい人なのね！！これからも仲良くしていこうね

♪』

「なるほど……ってうまくいくのかそれ？」

「大丈夫♪」

ホントにうまくいくのか？

まあでも少なくともティアナの欲しい物プレゼントすれば、仲のいい友達という関係になれるかもしれないからな。

やれるだけやってみようか。

「それでティアナの欲しい物って？」

肝心なことを聞いてみた。

プレゼントしようにもなにが欲しいか分からなければ意味が無い。

「えっと確か…前、欲しい物のアンケートした時の調査結果の紙がここら辺に……あった！」

由美は引き出しから何枚かの紙を取り出した。

紙の内容は『あなたの欲しい物は何ですか？アンケート♪』と書かれている。

よく見るといろんな生徒の欲しい物が書かれている。

「えっとティアナ……ティアナ……ティアナ……」

由美はティアナのアンケートを探していたが、何百枚もあるので見つかるのが一苦労みたいだ。

仕方ない、手伝うか。

「俺も探すよ、ここら辺を見ていいか？」

「うん、いいよ」

由美のからアンケートの何枚かを貰い、ティアナのアンケート探しを手伝うことにした。

しかし、このアンケートには他の生徒の欲しい物が書いてあるんだよな…？

他の奴らはどんな物が欲しいんだろう？

俺は気になって他の奴らのアンケートを見てみた。

二年Ｚ組

平沢唯

“甘いお菓子が欲しいです！”

フッ……唯らしい……

二年Ｚ組

志村新八

“お通ちゃんの抱き枕！”

あれ？お前こんなキャラだっけ……？

二年Ｚ組

神楽

“酢昆布一年分！”

酢昆布好きなのか！？

二年Ｚ組
桂小太郎
“出番をください”

えっと……なんかごめん……

二年Ｚ組
吉井明久
“優しくて、常識ある姉”

お前の家族関係が気になるんだが……？

二年Ｚ組
姫路瑞希
“明久君／／／／／／／きゃ／／／／言っちゃた！／／／／／／”

爆弾発言だな……あとで異端諮問会に報告するか。

二年Ｚ組
立華奏
“麻婆豆腐”

本当に好きだな……。

二年Ｚ組
野田
“ゆりっぺ食べたい”

あとでゆりっぺに報告しておくか。

他のクラスも見てみるか。

二年Ａ組
ルルーシュ・ランペルージ
“ナナリーが欲しい物”

言うと思った。

二年Ａ組
霧島翔子
“雄二”

なんかこの人怖い……

二年Ａ組
真人
“筋肉”

鍛えて手に入れろ！

二年Ｂ組
沖田総悟
“土方の死”

二年Ｂ組
土方十四郎
“沖田の死”

お前らなにがあった……！？

一年Ａ組
織斑一夏
“平和な日常”

俺も欲しい……

一年Ａ組
篠ノ之箒
“織斑一夏”

また爆弾発言した奴がいるよ……。
ん？これは……？
俺はあることに気がついた。
このあと続く回答で

一年Ａ組
セシリア・オルコット
“織斑一夏さんですわ”

一年Ａ組
鈴音
“一夏！”

一年Ａ組
シャルロット・デュノア
“一夏です”

一年A組
ラウラ・ボーデヴィッヒ
“一夏（私の嫁）”

全員一致で織斑一夏！？
なんで！？織斑一夏がそんなにいいのか！？
この織斑一夏め……モテモテじゃないか！！
なんかムカつく！！

三年A組
フェイト・T・ハラウン
“なのは”

フェイトさん！？なんですかこれは！？
欲しい物がなのはさんって！？どういうことですか！？

三年D組
近藤勲
“お妙さん”

ストーカー自重しろ！

三年C組
志村妙
“ゴリラの死♪”

あなたならそう言うと思っていました♪

中等部
二年Ａ組
御坂美琴
“ゲコ太”

え……？ゲコ太……？

二年Ａ組
桜井智樹
“女の子の胸ｗｗ”

欲望に忠実だな……

二年Ｂ組
鹿目まどか
“大切な友達が居て満足しています”

特に欲しい物が無いってことか……

二年Ｂ組
暁美ほむら
“まどか”

なんでさっきからこんな回答の人が多いの！？

欲しいものだぞ!?なんで人の名前を書くんだよ!?

「あ、あったよ!ティアナちゃんのアンケートが!!」

由美がティアナのアンケート用紙を見つけたようだ。
俺は由美の持っていたアンケート用紙を取って内容を確認した。

「どれどれ…」

ティアナの欲しい物は……?

二年Z組
ティアナ・ランスター
“バイク”

バイク……?

「ティアナってバイクに乗れるのか?」

「乗れるよ♪」

「でも高校生じゃあバイクの免許は…」

「いちいち深く考えないの♪」

……だよな……

でもこれでティアナの欲しい物が判明した。
あとはこのバイクを手に入れてティアナにプレゼントすればいいのだが、一つ問題があるぞ。

いくらなんでもバイクを買うお金なんてないぞ……。

「バイクを買う金なんてないぞ」

「大丈夫♪私がお金を出してあげる♪」

マジで!?なんだ今日の由美は!?
なんでこんなに優しいんだ!?
いや、待てよ……もしかして……

「お前なにか企んでないか?」

「あれ!?ばれた!?」

やっぱりか!

「実は……頼まれている仕事があるんだけど……」

「なるほど、忙しいから代わりにやってくれないかってことか?」

「うん!そうなんだけど……やってくれる?」

正直言うとめんどくさい。
だが、これでバイクが買えてティアナにプレゼントしてティアナの機嫌が治るかもしれない。
隣の席でもあり、これまで親切にしてくれたティアナとはまた仲良くなりたい。

「わかったやるよ!」

「ありがとう！！恭介ならそう言ってくれると思っていたよ！！！」

そして由美はまた俺に抱きついてきた。

「だからいちいち抱きついてくるな！！／／／／／／／／／／」

「照れちゃって可愛い♪」

「うるさい！！！」

由美は俺から離れた。

相変わらずなんで俺にいちいち抱きついてくるんだ……。

内心ちょっと嬉しいけど／／／／／／／／

「で…？頼まれた仕事って？」

由美から仕事の内容を確認するとしよう。

いったいどんな仕事だろう？

「うん、その仕事はね……」

《二年Ｚ組教室》

「もう駄目だ……私は嫌われたんだ……もう恭介は私を見てくれない……嫌われたんだから……ふふふふふふふふふふ……もう駄目だ……」

「ティア……」

こちらではティアナが先程のショックで壊れていた。

どうなるティアナ!?立ち上がれるのか!?
そして恭介に与えられる仕事とは!?

次回に続く!!

第十九話　欲しい物？それは愛だ！！（後書き）

天城
「あの朴念仁め……全然気づいていないなんて……」
ティアナ
「もう駄目……恭介に嫌われたんだ私……もう駄目だ……死のうかな…？」
天城
「いやいや！！ダメだって！！死んじゃだめだって！！きっと恭介がなんとかして……おいコラ！！！縄と椅子を用意するな！！！」
ティアナ
「離して！！！もう駄目なの！！恭介に嫌われたから死ぬしかない！！！」
天城
「やめなさいって！！！おい誰か！！手を貸してくれ！！！なんで今回は恭介と由美がいないんだ！？あいつらどこに行った！？」
ティアナ
「死なせてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーーー！！！！！！！」
天城
「と、とりあえず次回に続きます！！……ってコラ！！姫路の弁当を食べようとするんじゃない！！！おい恭介！！早くなんとかしてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーー！！！！！！」

第二十話　主人公って鈍感が多いよな……（前書き）

桂小太郎の独り言

頼む！作者よ！！俺の出番をくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーー！！！！！！！！！

第二十話　主人公って鈍感が多いよな……

《二年Z組教室・ティアナ視点》

私、ティアナ・ランスターは溜息をつきながら登校してきた。
理由はもちろん昨日のことだ。
食堂で恭介に対しあんなことを言ってしまった。
キモイ、犯罪者、死刑……あんなことを言ってしまって、さらにそれを恭介に聞かれてしまった。
あのときはなのはさんが恭介は好きなのかって聞いてきたからついあんなことを言ってしまったけど、本当は……恭介が嫌だなんて思っていない。

むしろ変態であろうと、恭介のことは……好き……。

転校初日に出会ったとき、一目惚れをしてしまった。
カッコいいとも思ったし、色々話していくと、優しい人だなと思った。
恭介と話をしていると心臓の音がドクン！ドクン！と激しくなって、うまく話せないときもあった。
最初はこの感じがなんなのか分からなかったけど、あとからになって気づいた。

私……恭介に恋をしたんだ……。

それからは私は恭介に徹底的に優しくした。
教科書を忘れたら貸してあげたし、分からないところがあれば教えてあげたりした。
恭介が私を見てくれたらいいなと思っていた。

思っていたのに……。

私は恭介を傷つけてしまった。

恭介に酷いこと言ってしまった。

最低だ……私は最低だ……。

昨日の晩、私は一人部屋で泣いていた……。

このことで恭介が私のことを嫌いになったんじゃないかと思うと自然と目から涙が出てきた。

嫌われたくない……もっと仲良くなりたい……もっと話がしたい……！

だから……！

「恭介に謝ろう……あんなことを言ったんだから……」

私は教室の扉を開け、中に入った。

その時、私はあることに気付いた。

いつも早く来ている恭介がいない。

私は気になって唯に聞いてみた。

「あのさ唯、恭介は？」

「ん？キョウくん、今日は休みだって」

え……？恭介が休み……？

いつも元気な恭介が休み……？

「な、なんで！？」

「さあ？今朝メールが来たんだよ」

そう言った唯は携帯を取り出し、メール画面を見せた。
そこには恭介からのメールが届いていた。

『すまん。今日は休む』

「恭介……」

あんなに元気だったのに……どうしたんだろう……？
もしかして！？昨日の私の発言で……！？
恭介が学校に来るのが嫌になったの！？
そんな……私のせいで…恭介が……。

「おいてめぇらー。座れこの野郎」

教室に銀八先生が入ってきて、みんなは自分の席に座った。
私も自分の席に座ったが、何か物足りない。

隣にあの人がいない……。

あの人が座っていない……。

あの笑顔が見られない……！

「恭介……」

なんでだろう……心が苦しい……！
私のせいであの人がいないということを認識すると、胸が苦しくな

る……！

恭介……！

お願いだから……謝らせて……！！

“一方恭介は……”

《喫茶店・恭介視点》

ここは無限学園の近くにある、とある喫茶店である。

この喫茶店では無限学園が近いから、無限学園の生徒がよく来る場所である。

喫茶店に来ては、勉強しながらお茶を飲む生徒もいれば、友達と一緒に来てお話をしながらお茶を飲む生徒もいるので、店自体は繁盛している。

で、なんでここに俺がいるのかと言うと、この喫茶店のお手伝いに来たのである。

これがティアナのプレゼントのバイクを由美が買ってくれる条件。

一日働けばバイクが買えるのでもちろん俺は文句は言わなかった。

だがこの喫茶店に来て文句を言いたいことがあった。

「えっと……確か…名前は何て言うんだい？」

『……天堂恭介です…』

「天堂恭介……いい名前じゃないか」

『……ありがとうございます…』

現在俺は更衣室にてこの店の“制服”に着替えている最中だった。
そして更衣室の前で俺の名前を呼んだのは、この店の店長、お登勢（とせ）さんである。
五十代くらいのババア…あ、いや、おばさんである。
由美とは知り合いで、今回の依頼はお登勢さんからの依頼である。
今日は店員の一人が休みで人手が足りないということで由美に相談したらしい。
本来、由美が手伝うつもりだったがこうして俺がかわりに手伝うことになったということである。

「ところで、いつまで着替えているんだい！早くしないとお客さんが来ちまうよ！」

お登勢さんが急かすように言っていたが、実はもう“制服”に着替え終わっているのである。

……ただこの“制服”に問題があった……。

「あの……お登勢さん？一言言いたいことがあるんですけど……」

「なんだい？」

俺は更衣室の扉を開け、お登勢さんに俺の制服姿を見せた。

そして深呼吸をして一言。

「なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーー！！！！！！！！（怒）」

俺が着ている“制服”それは……

メイド服（しかもフリフリ付き）だった！！

「よく似合っているじゃないか」

「どこがですか！！ていうかなんでメイド服！？」

「今どきの男はそういう服が好きなんだろ？」

「確かにそうですよ！！俺も大好きですよ！！でも男である俺がメイド服を着る理由が分からないんですけど！！！！」

「服がそれだけしかないから仕方ないじゃないか」

だからってよりにもよってメイド服はないだろ……。

こんな姿を他の奴らに見られてしまったらマズい……。

ましてやフェイトさんに見られたら……。

“恭介君？これからは私に近づくのも、話しかけるのも、私を見ることも禁止だからね♪なんでかって？女装する恭介君なんてキモイから♪”

嫌だぁぁぁぁーーー！！！！

そんなことを言われたら、俺はもうお終いだよ！！

部屋に戻って自殺したくなっちゃうよ！！

「オイコラ新人！文句ヲ言ッテナイデ、サッサト働ケコラ！」

俺が絶望的想像をしているとき、カタコトの言葉で声をかけられた。

誰だ？と思って、声がした方向を見てみると……。

そこにはネコ耳が生えたおばさんがメイド服を着ていた……

それを見た俺は……

「オエェェェェェェェ！！！！」

思わず吐いてしまった……。

だって気持ち悪いんだもん！！

「オイコラ！何ダソノ態度ハ！？綺麗ナオ姉サンガ目ノ前ニ居ルノニ！」

「誰が綺麗なお姉さんだ！！？目の前にいるのは化け物じゃないか！！！！」

「ナンダト！コノクソガキ！！」

「あんた達、遊んでいるんじゃないよ！さっさと仕事をしな！！」

お登勢さんが俺達に対して注意してしてきた。

「それと天堂、そのキモイおばさんはあんたの先輩に当たるキャサリンだよ」

「オ登勢サン！！酷イヨ！！！」

お登勢さんの説明に納得がいかないらしく、キャサリンは店の隅で泣いていた。

「それともう一人紹介しておくよ。ほら、入っておいで」

お登勢さんがそう言うと、店の奥からメイド服を着た女……いや、男が現れた！
しかもよく見ると……ヅラ（桂小太郎）じゃないか！？

「なんだ？今日来たお手伝いさんは、恭介だったのか」

「ヅラ！？いったい何してんだお前！？ていうかなんでお前までメイド服を着てんだ！？」

「ヅラじゃない！ヅラ子だ！！」

ヅラ子！？なに言っているの！？
最近出番が無かったからって、女装をするという暴挙に出たか！？

「実は金が無くてな、いいアルバイトがあると聞いてここにやってきたんだ。別に女装趣味などない」

そうか？女装趣味が無いって言ったって、化粧はしてるわ、アクセサリーは付けているわ、女装が気に入っているんじゃないのか？

「お前本当に金が無いからこの仕事をしているのか？女装趣味に目覚めたんじゃないのか？」

「……実を言うと、作者に出番が欲しいと頼んだところ、『女装するけどいい？』と言われたんだが、出番が欲しかった俺はつい承諾してしまったんだ」

「あの……頼むから、作者とかメタ発言やめようぜ……」

ていうかヅラ……断われよ……。

「はいはい！みんな！もうすぐお客様来るんだ！さっさと迎える準備をするよ！キャサリン！！いつまで泣いているんだい……」

メイド服で仕事をするなんて屈辱だが、これもティアナにバイクをプレゼントする為だ！
頑張らなければ！！
早速俺はお客様を迎える準備に取りかかった。

《二年Ｚ組教室・昼休み・ティアナ視点》

授業が終わった……だけど私は授業に集中できてなかったので、どういったことを学んだのかよく覚えていない。
恭介がいないというだけでこんなに違うのか？
いや、私の気持ちがモヤモヤしているからだ。
恭介に謝りたい、恭介に会って謝りたい。
その気持ちでいっぱいだからだ。

「恭介……」

恭介の名前を呟いた時、突然後ろから

「ティア♪」

「え！？うわぁぁぁ！！？」

いきなりスバルが抱きついてきた。
後ろから来たので、私はビックリしてしまった。

「ちょ、ちょっとなによ！！？」

「恭介のことを考えていたんでしょ？」

「え！？」

さすがこれまで一緒にいた私の親友だ。
私の考えていることは丸わかりみたいだ。
スバルは私に抱きつきながら話し始めた。

「大丈夫だよ！恭介はティアのことを嫌いになったりしないよ！」

「あんたに分かるの……？」

「うん！だって……」

スバルは私から離れて私の前に立ち、人差し指を立てて言った。

「恭介は変態だから！」

「はい？」

スバルの言葉が一瞬理解できなかった。

恭介が変態だから、私のことを嫌いにならない？

どういうこと？

「恭介は女の子が好きだから、ティア見たいな美人を嫌いになったりしないよ！」

「び、美人って……／／／／／／」

スバルがそんなことを言ったので、私は恥ずかしくなって顔を赤らめてしまった。

いつもこの親友はとんでもないことをズバッと言ってくるもんだ。

「だからティアも元気出してよ！恭介はティアのこと嫌いにならないよ！！」

「スバル……」

このバカはもしかして私を元気づけようとしているの？

……まったく、このバカスバルは……。

だけど、少し元気が出たような気がする。

「あんたに元気づけられるなんて私もお終いね」

「え～～～！！それどういうこと！？」

「ふふふふふｗｗｗ」

バカスバルを見ていると、悩んでいる自分がバカらしくなってしまい、つい笑ってしまった。

そうだ、落ち込んでいる場合じゃない！

今日謝れなかったら明日謝ろう。明日も休みなら明後日謝ろう！

許してくれるまで謝ろう！それでもダメなら土下座してやる！！

とにかく私は恭介と仲良くなりたいんだ！その為ならなんでもしよう！！

決意を新たにしていると、お腹がすいてきた。

そういえばもうお昼なんだよね。

「スバル！！行きましょ！お昼ごはんを食べに行きましょう！！」

「ティア……うん！やっぱりティアは毎日元気じゃないとね！！」

「う、うるさい！！いいから行くの！！で、今日はどこで食べるの？食堂？」

だがスバルは首を振った。

「食堂もいいけど、たまには喫茶店にしない？あそこの料理美味しんだ！！」

喫茶店か……たまにはいいか。

「よし！今日は喫茶店に行くわよ！」

「おーー！」

《喫茶店・恭介視点》

まもなく開店時間だ。

テーブルも椅子も準備ＯＫだ！

唯一問題があるとしたら、この制服くらいだ……。

このメイド姿を無限学園の連中に見られるのは嫌だ。

知っている奴らとは接触したくない用に注意しなければ。

「オ客サンガ来タヨ！」

キャサリンの声が聞こえてた。

一人目の客が来たみたいだ。

早速お客様のもとへ向かうが、ここで注意しなければいけないことがある。

現在俺はメイド服を着ている。

つまり俺が男であるということはばれてはいけない。

ばれたら俺は女装趣味の変態野郎と言うレッテルが貼られる。

だから、不服だが、俺は女性という設定にしなければいけない。

声も少し変えねば。

そして俺はお客様のもとへ向かいとびっきりの笑顔で迎えた。

「いらっしいませ♪何名様でしょうか♪（裏声）」

完璧！！俺ってもしかして天才かも！！？
これなら俺が男と言うのはばれないだろう！！

だが……運命の女神という物は酷いものだ……。

「恭介……お前何やっているんだ……？」

目の前に現れたのは不動だった！！
しかもよく見るとガルデモのみんなもいるじゃないか！！？

最悪だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！！

「恭介お前……まさか女装趣味があったのか……？」

マズイ！！岩沢が俺をけだものを見るような目つきで見ているじゃないか！！
このままではマズイ！！
なんとかしなければ……！
どうする！？どうする！？どうする！？

こうなったら……！！

「おい恭介……？」

「恭介って誰ですか？わ・た・しは恭子ちゃんで～す♪（裏声）」

全員

『……はあぁ！？』

「ここで働くことになりました♪恭子で～す♪よろぴく♪（裏声）」

全員

『……』

この反応……。

よし！ばれてない！！

さすが俺！！天才じゃん！！

「ではお席の方へ案内しますね♪（裏声）」

「あ、ああ……」

不動とガルデモのみんなは俺の案内に従い席に座る。

「ご注文は♪（裏声）」

「え！？えっと……コーヒーで……」

「あたしも……」

「私も……」

「私もそれで……」

不動、岩沢、ひさ子、関根、入江、ユイはコーヒーか。

みんな一緒だな。

「それでは少しお待ちくださいね♪（裏声）」

今のところばれていない！

俺ってもしかして天才なのかもしれない！

『なあ…今の……恭介だよな……』

『ああ……間違いない……なにやっているんだ……？』

『ていうか……メイド服似合っていましたね……』

『うん……似合っていた……』

『バカでしたけど……似合っていましたね……』

おや？次の客が来たみたいだ。

よし今度も接客を……

と思ったが、俺はそのお客の顔を見て思わず隠れてしまった。

ティアナとスバルがやって来たのである！

なんであいつらがここに！？

《ティアナ視点》

「へえ……結構綺麗な店ね…」

「でしょ！前なのはさんと一緒に来たことがあるんだ！その時はアイスが美味しかったの！」

「はいはい…」

私はスバルの話を軽く流した。
無限学園の生徒がよくここに来ているって言うのは聞いていたが、
私がここに来たのは初めてだ。
店自体は何の問題も無い。
いたって普通の喫茶店だ。

「イラシャイマセ。何名様デショウカ？」

いや問題発見！！
やってきた店員はネコ耳が生えていて、メイド服を着た、キモイおばさんだ！
その醜悪な姿を見た私は思わず

「オェェェェェェェ！！」

吐いてしまった。
そしてスバルの手を掴みこの場から撤退しようとした。

「ティアどうしたの！？」

「スバル！ここは危険よ！！あんなキモババアが作った料理を食べたら食中毒になってしまうわ！」

「オイコラ！！キモババアッテナンダヨ！！？ソレトコノ店ノ料理デ、食中毒ニナッタコトナンテナイネ！」

「嘘だ！！」

「ティア落ち着いて！文句なら食べてからにしようよ！」

「……わ、わかったわよ…」

仕方なく私はキモババアに案内された席に座り、メニュー表を見て、注文する。

「じゃあ私、日替わりランチで！」

「……じゃあ私もそれで…」

注文をキモババアに言うと、キモババアはそのまま厨房へと向かった。

《恭介視点》

マズイマズイマズイ！！
ティアナとスバルが来るなんて計算外だ！！

なんでここに来たのかは知らないが、俺の姿を見せるわけにはいかない！
なんとかしなければ……！

「恭介なにをしているんだ？」

ヅラがコーヒーを持って俺に話しかけてきた。

「ヅラマズイ！ティアナとスバルが来ている！！」

「ヅラではない、ヅラ子だ。ティアナとスバルが来たからと言ってどうなのだ？」

「俺の姿を見られるわけにはいかないんだ！！」

「そんなことを言われても知らん。それよりも日替わりランチができたので、これをティアナとスバルに持って行ってくれ」

お前、俺の話を聞いていた！？
あいつらの前には出たくはないんだ！
俺には女装趣味があるんじゃないかと疑われてしまうじゃないか！！

「なにがなんでも嫌だ！！」

「しかしな……むっ？」

突然ヅラは目を細めなにかを見ていた。
何を見ているんだと思い、ヅラの見ている方を見てみると。
五、六人の柄の悪い不良が来店してきた。
しかも、その不良共の内、一人は紫の制服を着ている。
ていうか、あの紫の制服を着ている男はどこかで見たことがあるような気がする……。
どこで見たっけ…？

“世の中はな、権力を持っている奴が勝者なんだよ！！”

あ！思い出した！
コンサートの時、唯のギターを盗んだ帝英学園の男じゃないか！！
なんであの野郎がここにいるんだ！？

「よくここに来るんだ」

いつの間にかお登勢さんが後ろにいた。
お登勢さんは煙草を吸いながら、鬱陶しいと言いたげな表情で、帝英学園の男を見ていた。

「よくここに来て、無限学園の生徒の悪口ばかり言っているんだよ。はっきり言って商売の邪魔しかしない連中だよ」

お登勢さんにとって迷惑な客らしい。

そして帝英学園の男は周りをきょろきょろ見て席を探していたが、いきなりニヤっと笑い、ティアナの方に近づいて行った。

「ティアナのところへ行く！？まさか……！」

嫌な予感がする……！

《ティアナ視点》

私とスバルが席で日替わりランチを待っていた時

「君達可愛いね♪どこの子？」

いきなり柄の悪い男が近づいてきて、話しかけてきた。
なんだこいつ…？
しかも他の仲間達もやってきた。

「ホントだ可愛いね！」

「ねえ、俺達とどっかで遊びに行かない？」

「楽しいことしようぜ♪」

「な…なんですか……」

下品な笑いをしながら近づいてくる。
少し怖いと思った。
そして紫の制服を着た男は私の腕を掴んできた。

「行こうよ！俺達が面白いところに連れて行ってあげるからさｗｗ」

「や、やめてください！」

私は男の腕を払おうとするが、男の方が力が強く離れられない！

「やめてくださいだって♪可愛い声じゃないか♪」

「ちょっとやめてよ！」

スバルが止めに入るが、不良の一人がスバルを羽交い締めにした。

「おっと！お嬢ちゃんはこっちだ！」

「離してよ！！」

「スバル！？」

「君はこっちだよ♪」

紫の制服の男は私の腕を強く引っ張ろうとした。
私達をどこかに連れていこうとしているみたいだ！
力が強い！
このままじゃマズイ！

「いや！離して！！」

「声が可愛いな♪」

「これは楽しめそうだぜ！」

「ティア！！」

いや……！

誰か……！

助けて……！！

恭介助けて……！！！

「お客様♪チャーハン二つお持ちしました♪（裏声）」

突然誰かに声を掛けられ、私達は声がする方向に目を向ける。
そこにはメイド服を着た店員……いや、恭介！？
なんでここに！？しかもなんでメイド服を着ているの……？

「なんだ？あんたは？」

「チャーハンなんて頼んでいないぞ？」

不良たちが恭介に聞くと、恭介は笑顔で答えた。

「こちらは私からのサービスです♪どうぞ……召し上がれこの野郎！！」

恭介は持っていた二つのチャーハンを不良の二人の顔にぶつけた。
二人の不良はそのまま倒れてしまった。

「おい！？大丈夫か！？」

「こいつ！！なにしやがる！！」

「危ない！！恭介！！」

不良が恭介に殴りかかったので、私は叫んで恭介に呼び掛けるが

「お客様、デザートの冷凍チャーハンを……お持ちしました！！！」

「「ぶべぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」」

横から桂（メイド服を着た）が冷凍チャーハン（カチコチに凍っている）を投げて不良の二人の顔にぶつけた！

いきなりの奇襲攻撃に不良は対応できなかったみたいだ。

不良はそのまま倒れてしまい、残るは紫の制服の男だけだ。

「お、お前！？あの時の！？」

男は恭介の顔を見てビックリしている。

どうやら恭介のことを知っているみたいだ。

「よう！久しぶりだな、お前も相変わらず最低な野郎だな……」

「くそ！覚えてやがれ！！」

男が店の外へ出て、逃げようとしたが、恭介は走って男を捕まえた。

「な、なんだよ！？」

「お客様？お支払いがまだです♪」

恭介はにっこりと笑顔だ。

「お前ら変人に払うお金なんてない！！」

「いや、お金は結構です♪ただ……」

「お前の顔に一発打ち込んだら結構です♪」

そう言って恭介は男の顔面を思いっきりぶん殴った。
殴られた男は、地面に倒れてしまい、顔は醜くなっており、鼻から鼻血が出ていた。

「て、てめぇ……こんなことをしていいと思っているのか！？俺は帝英学園の生徒だぞ！！」

「……だからどうした？」

男の発言に対し、恭介は冷たく言い放った。
恭介の声に怒りが混ざっているのを感じた。
恭介は怒っているんだ……。

私の為に……？

そして恭介は男を無理やり立たせ怒りの形相で言った。

「二度とティアナに近づくな……！！」

紫の制服の男にそう言った恭介は少し怖かった。

だけど嬉しかった。

恭介が私を助けたんだ…！

恭介は男を離した。

「く、くそ！覚えてやがれぇぇぇぇーーーー！！！！」

そして男は仲間の不良共と共に逃げるようにその場から去った。

恭介は私に近づいて、手を差し伸べてくれた。

「立てるか？ティアナ」

私はその手を掴んで立った。

その時の恭介はカッコ良かった！

……メイド服を着ていなければもっとカッコ良かったのに…。

「あのさ、恭介？一つ聞いていい？なんでメイド服を着ているの？」

「え……？あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！！！！しまったぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！！」

え！？いきなりなんなの！？

《恭介視点》

しまったぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！
ティアナを助けたいが一心で、正体を隠すのを忘れていたぁぁぁぁぁぁーーー！！！！！
これでは俺が女装趣味があるのではないかと疑われる！
なんとかしなければ！！
こうなったら最終手段！！

「何のことですか？私は恭子で～す♪（裏声）」

「恭介でしょ？」

え……？
馬鹿な……ばれてる！？
いやいや！そんなわけない！！
頑張れ天堂恭介！！ばれないようにするんだ！！
俺は天才だ！天才なんだ！！

「だ・か・ら♪私は恭…」

「恭介でしょ……？」

「いや…」

「恭介だよね？」

スバルまでもが言ってきただと！？
馬鹿な！！スバルにもばれているだと！！？

「やっぱり恭介か……」

不動までも！？

「お前そんな趣味があったのか？」

岩沢まで！？

まさかみんなにもうバレていたのか！？

全員

『…ていうか、ばれていないと思っていたのか…？』

……

「うわあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！！！！！！！」

俺は大声で叫んでしまった！

恥ずかしい！！

今までばれていないと思っていたのに、実はバレていた！？

なんてことだ！！

つい自分のことを恭子ちゃんと言ってしまったじゃないか！！

なんだよ恭子ちゃんって！？

自分で言っておきながら、訳が分からないよ！！

恥ずかしいよぉ！！

誰か！穴を掘ってくれ！
穴に入りたい！！
穴があったら入りたいよ！！

その後、ティアナ、スバル、不動、岩沢達に事情を説明した。
彼らの誤解を解くのに３０分かかってしまった。

そして、店の手伝いについては、その後問題なく終わった。
乱闘を起こしたことについてお登勢さんに怒られるかもしれないと思っていたが、

『乱闘？あんなことを気にするんじゃないよ。若い内はあんな無茶なことをするもんさ。それに厄介なお客を追っ払ってくれたんだ。むしろありがたいことだよ』

…と言った。
お登勢さんも帝英学園の連中を追っ払って、満足したみたいだ。

さて、問題のバイクについてだが、結論から言うと無事に買えた。
仕事が終わって由美に連絡してみると、

『あ！恭介♪お仕事終わった？バイク買ったよ♪明日ティアナちゃんに届く予定だから♪』

と言っていた。
しかも詳しく話を聞くと、そのバイクはかなり高級なバイクらしい。
よくそんな金があったなと、由美に聞いてみたら、

『お金？大丈夫だよ！銀八先生の給料を半分カットしておいたから、問題なし♪』

……銀八先生の犠牲でなんとか買えたみたいだな……。
銀八先生可哀そうだが……まあいっか♪
無事ティアナのプレゼントが買えたんだ。
良しとしよう！

《学生寮・恭介視点》

仕事が終わり、くたくたになって帰ってきた。
今日は色々疲れた……。
いきなりメイド服を着ないといけなくなったり、帝英学園の連中とは乱闘になるし、本当に疲れた……。
このまま部屋に戻ってベットへダイブしたい。
そしてそのまま寝たい。
疲れた体を無理やり動かし、自分の部屋に向かって行く。
すると俺の部屋の前で誰かが立っていた。

ティアナだった。ティアナが俺の部屋の前で立っていた。

ティアナは俺を見つけると、いきなり近づいてきて頭を下げた。

「恭介！昨日はごめん！！」

へ……？

いきなりティアナはなにを言っているんだろうと思った。

ティアナは頭を下げながら言う。

「昼間の時は色々あって言えなかったけど……昨日あんなことを言ってごめん！恭介のことを変態だとか、死刑だとか、変質者とか思ってないから、だから……私のこと嫌いにならないで！！」

「ちょ、ちょっと待て！！と、とにかく頭を上げろ！」

ティアナは俺の言葉に従い、頭を上げた。
しかもティアナはもじもじしながら俺の反応をうかがっている。
いったい何なんだ？
とにかく俺はティアナに言った。

「……私のことを嫌いにならないでって、別に嫌ってないよ。むしろお前が俺を嫌っているんじゃないかと…」

「そ、そんなことない！！むしろ私は恭介が……／／／／／／／」

「ん？俺が？」

「え……！？あ、あの……その……なんでもないです……／／／／／／／／／」

ティアナは顔を真っ赤にして俯いてしまった。
その後は無言である。
ティアナはなにも言わない。
仕方なく俺は口を開いた。

「あのさ……ティアナ…お前、バイクが欲しいって言っていたらしいな？」

「え!?なんで知っているの!?」

「えっと……それは……と、とにかく!お前と仲直りがしたくて、由美に頼んで買ってもらったんだ。明日届くから」

そう言ってやると、ティアナは驚いた。

「そ、そんな私なんかの為に……!?じゃあまさか……昼間のあれは…」

「まあ……買ってもらう為の条件みたいな?」

「そ、そうだったんだ……でも……なんか悪いよ……私なんかの為に……由美さんに伝えて!いずれバイク代はお返ししますって!」

「いや、たぶん大丈夫だろう。あの由美はお前みたいな真面目な生徒の為に買ってやったんだ。お前に請求なんてしないし、バイク代をお前が出しても受け取らないだろう」

実際被害を受けているのは銀八先生だけだしな。

「そうなんだ……でも……」

「いいからいいから、黙って受け取れよ」

「う、うん……!ありがとう……!／／／／／／／」

ティアナは笑顔でお礼を言った。

その時のティアナの笑顔は可愛かった。

やっぱり女の子は笑顔でいる方がいいな。

「あのさティアナ、こんな俺だけどお前とはこれからも仲良くやっていきたいんだ。いいかな？」

そうティアナに言った。

隣の席であり、二年Ｚ組の仲間であるティアナとは仲良くしていきたい。

その思いで言った。

そしてティアナは笑顔で言った。

「もちろんよ！これからもよろしくね！」

「ああ、よろしくな！」

俺とティアナはニッコリと笑顔で言い合った。

この日俺は初めてティアナと本当の友達になれたような気がした。

仕事を頑張った甲斐があったってもんだ。

今日はとてもいい日だなと本日の天堂恭介は思いました。

《翌日・二年Ｚ組》

昨日ティアナと仲直りができたので本日の俺のテンションは最高潮であります！

朝から気分がいいのである。

するとティアナが教室に入ってきた。

ティアナは俺を見つけると笑顔で挨拶をした。

「おはよう恭介！」

「ああ、おはようティアナ！あれ？髪を下ろしたのか？」

今日のティアナはいつものツインテールではなく、髪を下ろした髪型だった。

「ま、まあ、イメチェンかな？」

「そうか、とてもよく似合っているよ。可愛いよティアナ」

俺は思ったことをそのまま口に出した。

するとティアナの顔がみるみる真っ赤になっていくのである。

「か、かかかか可愛い……！？／／／／／／／／／／」

「ああ、とっても可愛いよ♪」

「……きゅう～～～／／／／／／／／」

いきなりティアナは机に伏せてしまった。

まるで俺に顔を見られないようにしている。

あれ……？もしかして…俺…また変なことを言った……？

朝から二年Z組の教室にてそんな出来事がありました。

《学園長室》

余談ですが……銀八先生は由美に用があって来ました。

「あの……？学園長……？俺の給料が半分カットされているような気がするんですけど……」

「気のせいだよ♪」

笑顔で由美は言う。

「いや、気のせいじゃないと思います！」

「気のせい♪」

「半分カットしたでしょう！！？」

「気のせい♪」

「俺の今月の生活がやばいんですけど！！！」

「ご愁傷様♪」

こんな出来事もありました。

第二十話　主人公って鈍感が多いよな……（後書き）

天城
「今回はよくやったぞ！恭子ちゃん！」
恭子
「ああ、ありが…って、ちょっと待て！！？恭子ちゃんってなに！！？しかも名前が変えられているし！！」
由美
「見直したわよ！！恭子ちゃん！！」
恭子
「由美まで言うな！！ていうか名前変えろ！！（怒）」
ティアナ
「だ、大丈夫だよ！今回のメイド服似合っていたよ！！もう一回着てみようよ！！恭子ちゃん？」
恭子
「ティアナまで言うし！！もう嫌ぁぁぁぁぁぁーーー！！！！」
ティアナ
「やりすぎたんじゃない……？」
天城
「大丈夫♪さて、今回の次回予告はティアナにやってもらいましょう！はい、台本」
ティアナ
「はい！では次回予告です！！次回は由美さんのお兄さんが登場する予定らしいです！！お兄さんの登場で由美さんに変化が！？いったいどうなってしまうんだろう！？次回もお楽しみに！！見てくれなきゃ、風穴を空けるわよ！！」
天城
「それアリアのセリフじゃないか！？」
由美

「まあいいじゃない♪ではまたお会いしましょう！！」

第二十一話　ブラコン？それの何が悪い？（前書き）

千堂由美の独り言

ブラコンのなにがいけないの？法律でいけないと定められているの？ブラコンだったら罰金とか支払わないといけないの？

第二十一話　ブラコン？それの何が悪い？

《学園長室》

『土下座』

スル地面にひざまずいて礼をすること。

「～して許しを請う」

ｏｒｚ↑現在の俺

どうも！天堂恭介です！

上に書いてあるように、現在、俺は土下座をしております。

しかも由美の目の前で。

ちなみに由美はどんな状態かと言うと……。

現在、俺の目の前に立っており、しかも腕を組んで、顔は笑顔だった。

目は笑っていなかったけど……。

そして由美の周りからどす黒いオーラが放出していた。

そう、由美は笑顔だが、完全に怒っているのである。

そして怒りの原因は……俺である……。

だが一つだけ言っておく。

けして、けして！俺が変態行動をしたから由美が怒っているわけではないのだ。

あれは仕方がなかったんだ……。

わざとじゃないんだ……。

そう、由美が怒っている原因の出来事は今から３０分前のことだった。

《三十分前》

俺の携帯に由美からメールが来たのである。
そのメールにはこう書いていた。

“恭介！大至急学園長室に来て！！歴史的瞬間を見せてあげる！！”

歴史的瞬間？
何のことだ？
俺は気になって、学園長室に向かうことにした。

学園長室に到着し、ドアをノックして入る。
そしてその中では……。

「恭介！こっち来て！」

由美は床に座ってゲームをしていた。
しかもロールプレイングゲームである。
ていうか学園長室でゲームをするなよ……。
俺は由美に近づき、俺を呼んだ理由を聞いた。
すると由美はふふふｗｗと笑いながら、笑顔で言ったのである。

「このゲームの主人公のレベルが９９９８なのよ！あともう少しでレベル９９９９なのよ！レベル９９９９になる歴史的瞬間を恭介にも見せてあげるわ！！ありがたく思いなさい！！」

由美は胸を張って言った。
ていうかそんなことで呼び出すなよな……。
確かにレベル９９９８まで上げたのはすごいけど、そんなのやり込みゲーマーなら普通にやっていることだろう……。
歴史的瞬間とは言えないんじゃないのか…？
しかし本人がここまで喜んでいるのだから批判するわけにはいかないよな。
俺は仕方なくその歴的瞬間を目撃する為に由美の隣に座って、見物をすることにした。
ゲームではラスボスのダンジョンや隠しダンジョンを行ったり来たりを繰り返し、敵と遭遇しては、戦って経験値を上げていくという作業を何度も繰り返していく。

だいぶ敵を倒したみたいで、そろそろレベル９９９９になるんじゃないかなと思っていた時。
由美の机の上に置いてあった、電話が鳴った。
由美はゲームを一時中断し、電話に出た。

「は～い♪もしもし？由美ちゃんで～す♪……はい……わかりました」

電話を終えた由美は、申し訳ないと言った表情で俺に言った。

「ごめん恭介、ちょっと用事が出来て、私、これから行かないといけないの。待っている間ゲームをしてもいいからね♪」

そう言って由美は学園長室から出て行った。
仕方なく、由美を待つ俺であったが、はっきり言って暇だ。
退屈だから由美がやっていたゲームをやることにした。
ゲームをしてもいいって言っていたからな。

俺はゲームの電源を入れた。するとゲームが始まって、メニュー画面へと移った。
由美のデータを勝手にやるわけにはいかないので、『始めから』を選択した。
ゲームの内容は、とある村に平和に住んでいた主人公に対し、村長は突然、『実はお前は勇者なのじゃ。というわけで、どこかにいる魔王を倒して、さらわれた姫を助けに行ってくるのじゃ！なに？魔王の居場所じゃと？そんなの知るか！！適当にダンジョンを攻略すれば分かるじゃろう！主人公補正というやつに頼ればよい！もしそれでも分からないなら、攻略本が出るのを待て！それかネットの攻略情報を見ろ！！とにかく行ってこい！！！』とわけのわからないことを言われるところから始まる。
はっきり言って、物語の最初からツッコミ満載なところが多い。
感動も楽しさもワクワク感もまったく感じられない。
由美はなんでこのゲームにハマっているんだろう？
まあとにかく、先を進めよう。
最初のダンジョンについた。
ダンジョンの中にいるモンスターを倒して行きながら、レベルアップしていく。
レベル５くらいになったところで、セーブポイントを見つけた。
そろそろ由美が戻ってくる頃合いかなっと思い、セーブポイントでセーブをしようとした。
俺のセーブデータがあったところで、あいつは文句は言わないだろうと思っていた。

しかし、ここで事件が起きた。

皆さんはこんな経験があるだろうか……？

間違えて……

他人のセーブデータを上書きしてしまったという経験が……。

そう……由美のデータを上書きしてしまった！！

『セーブしますか？』というメッセージに対し、『ＯＫ』という選択をした。

気づいた時には、もう遅く。

由美のセーブデータは消え、レベル９９９８が、レベル５に変わってしまったのである！

「ど、どうしよう……（汗）」

マズイ……！！

由美のレベル９９９８が消えたことを由美が知ったら……。

殺される！！！

「と、とにかく、逃げないと……！」

俺は学園長室から逃げようと、扉を開けようとするが、

「あれ？恭介？どこに行くの？」

由美と鉢合わせになった。

「ゆ、由美！？よ、用事は終わったのか……？」

「うん、終わったよ♪お菓子持ってきたから一緒に食べよう♪」

由美の手にはお菓子が大量にある。
おそらく俺が退屈しないように持ってきたんだろう。
だが、その優しさが、セーブデータを見た瞬間、怒りに変わってしまう。
その前に逃げねば……！

「恭介はどこに行こうとしていたの？」

由美は俺にそう言いながら、ゲームの電源を入れた。
マズイ……！早く逃げないと……！！

「えっと…ト、トイレに……」

「ふ～ん……あっそ……」

俺はそのまま扉を開け、外に出ようとした。
このまま、走って逃げれば、助かる……！
そう安心した俺であったが……

ガシッ！

後ろから、誰かが俺の肩を掴んできた。
まさか……と思いながら、ゆっくり振り向くと……。

由美が笑顔で俺の肩を掴んでいた。

しかも肩を掴んでいる手に力が入り、俺を逃がさないようにしている。
マズイ……マズイですよ……（汗）

「恭介……」

「な、なんだい……？」

「このゲームおかしいの……」

「ど、どこが……？」

「さっきまで、レベルが９９９８だったのに、いきなりレベルが５になっているんだよ……」

ゲームの画面を見てみると、セーブ画面が写ってあった。
そこには、先程までレベル９９９８だったセーブデータが、レベル５になっていた。
犯人はもちろん俺なんだけど……。

「た、たぶん！バグだよ、バグ！いや、残念だな！あともうちょっとでレベル９９９９だったのにさ！まあ気にせず、これからも頑張れよ！！」

俺は適当なこと言って誤魔化したが、由美は笑顔で言った。

「……そうか、バグか……でも、それでも説明がつかないことがあるんだ……」

「な、なんだい……？」

「そのセーブデータ……主人公の名前が……『テンドウキョウスケ』って名前なんだけど……」

「へ……？」

し、しまったあああああぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！
つい主人公の名前を自分の名前にしてしまった！！
これでは俺が犯人決定じゃないか！！
俺のバカバカバカ！！！！

「恭介……？どういうことか……説明してもらおうかしら……？」

由美は俺の手を掴み、学園長室の中に引きずり込もうとした。
しかも力が強い！？逃げられない！！！

「い、嫌だ！！離せ！！！誰か助け…」

バタン！！

学園長室の扉が閉まると同時に、

『いやあああああああぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！
！』

俺の悲鳴が外まで響いた……。

《回想終了》

というわけで、由美に粛正された俺が、必死に土下座で謝っているのである。
しかし由美は許してくれない。

むしろ怒りが増しているような気がする。

「由美、ごめん……。悪かったよ……。俺だってわざとやったわけじゃないんだ……。だから…許してくれ……！」

「……」

由美はなにも言わない。

それほどまでに俺のことが許せないのか……。

すると、由美はいきなり戸棚からなにかを探し始めた。

「ゆ、由美……？」

「ねえ…？恭介……？本当に反省している……？」

「え！？も、もちろんだよ！！本当に悪かったよ」

「じゃあ恭介……」

由美は戸棚から、

チェーンソーを取り出した。

「手と足、どっちにする……？」

「へ……？」

質問の意味が分からなかった。

「許してほしかったら、体の一部を私に献上しなさい」

「ま、待ってください……。それ、冗談だよね……？」

俺は冷や汗をかきながら、笑顔で言ったが、

ブォン！！ブォン！！

由美の持っているチェーンソーから嫌な音が聞こえてきた。

そして、由美は笑顔で近づいてくる。

どうやら、冗談じゃないみたいだ……。

「恭介……死ねえええええええええええーーーー！！！！！」

「うわあああぁぁぁぁぁーー！！！！！」

由美はいきなりチェーンソーを俺に向かって振り下ろしてきた。

俺は反射的に避けたが、チェーンソーは床に刺さってしまった。

「お、おい！落ち着けよ！！」

「うるさい！！くたばれぇぇぇぇーーー！！！」

床に突き刺さったチェーンソーを引き抜いて、また俺に襲いかかってきた！

マジで俺を殺そうとしている！？

セーブデータを上書きされた怒りは大きいのか！？

「死ね死ね死ね死ねえええええぇぇぇぇぇーーーーーーー！！！！！」

由美はチェーンソーをブンブン振り回してくる。
俺はそれをぎりぎりでかわすが、由美のチェーンソーによって学園長室に置いてあるソファーや本棚などに傷がついてしまう。

「おい！いい加減にしろよ！！いくらなんでもやりすぎだ！！！」

「レベル９９９８の仇だぁぁぁぁぁーーーー！！！！」

ダメだ、こいつ！！
俺の話を聞く気が無い！！
そして俺はとうとう壁に追い込まれてしまった。

「死ねぇぇぇぇぇぇーーーー！！！！」

もう駄目だ！と思ったその時。

由美の机にある電話が鳴った。
そして由美は振り下ろそうとしたチェーンソーをピタリと止めた。
由美は俺に対する攻撃をやめ、電話に出た。

「はい、もしもし……？……え…？マジ！？え、えっと…ちょ、ちょっと待ってもらえるようにして！！」

なんだ？由美がかなり慌てている……？
そして由美は持っていたチェーンソーを戸棚に片付け、いきなり髪を整え始めた。

「おい……、由美……？」

気になって話しかけるが……。

「恭介！！服装を正して！！！」

「へ？」

「早く！！」

まったく訳が分からなかったが、俺は由美に言われるまま、服装を正した。

ボタンをちゃんととめたり、曲がっているネクタイを直したりした。

由美は部屋に置いてあるマンガや雑誌、ゲームソフトなどを片付けていく。

いったいなんなんだ？

そう思っていた時

コンコン

『学園長、お客さんですよ』

扉をノックしたのは、声からして銀八先生だ。

どうやらお客さんを連れて来たみたいだ。

「どうぞ」

由美はそう言った後、ふう……と深呼吸をした。

由美の異変の原因は、銀八先生が連れて来た来客が原因みたいだ。
いったい誰なんだろう？

そして入り口の扉が開き、そこには銀八先生と一人の男が立っていた。
アッシュブロンドのざんばら頭に漆黒のクールな瞳、よく引き締まった体格で顔立ちはややクール系な男だ。

「やあ、由美！久しぶりだね♪」

男は由美に対し、笑顔で挨拶をする。
由美との関係について聞こうと思ったが、由美がいきなり

「お久しぶりです！」

由美は男に抱きついたのである。

「本当に久しぶりだね。元気にしていたかい？」

「はい！このとおり元気ですよ！」

男は由美を笑顔で見つめ、由美の頭を撫でてやった。
男の撫でた手が気持ち良かったのか、由美はとても嬉しいそうだ。
ただ、俺にとってはあまり面白くない光景だった。
なんかちょっとムカついた……。

ん……？
俺……嫉妬しているのか！？

いやいやいやいやいやいやいや！！！！そ、そんなわ

けない！！
なんで俺が嫉妬しているんだ！？
由美が誰と仲良くしたところで関係ないじゃないか！！
そうだ！俺は嫉妬なんかしてないぞ！！
そう思っていた時、男が俺に気づき、由美に聞いてきた。

「由美、彼は？」

すると由美は俺に近づいて、笑顔で説明した。

「彼は、私のパートナーの天堂恭介さんです♪」

俺は信じらんない言葉を聞いた。
天堂恭介……さん！？
日頃は呼び捨てするのに、なんで今回はさん付けするんだ！？

「恭介さん、紹介しますね♪こちらの方は、私のお兄様です♪」

「へ……？お兄様！？」

驚きの声を上げている俺に対し、由美のお兄さんは頭を下げた。

「どうも、千堂　勇真（ユウマ）です♪よろしく♪」

由美のお兄さん、千堂勇真さんは爽やかな笑顔で挨拶をした。

「お兄様は私の前の学園長なんですよ♪今は世界中のいろいろなところを旅をしているんです♪」

由美の前の学園長か……兄弟で同じ学園長の仕事をしていたのか。

「お兄様、立っているのもなんですし、ソファーに座りませんか？」

「あぁ、そうだね」

勇真さんは部屋にあるソファーに座った。

そして由美は勇真さんに甘えたいのか、勇真さんの隣に座った。

「お兄様！今回の旅のお話について、お聞かせください！」

「あぁ、分かったよ。それにしても由美は相変わらず甘えん坊だな♪」

「えへへ…♪」

勇真さんが由美の頭を撫でてやると、由美はすごい満足な表情をしている。

なるほど……。

由美のことが少し分かった。

こいつ……ブラコンだ！！

きっと、『お兄ちゃん、大好き♪もっと頭を撫でて♪』と心の中では思っているに違いない。

その証拠に、由美はまるで天国にいるような心地よい表情をしている。

「天堂さんも立っていると疲れますよ？あなたも座ってください♪」

聞いた？
天堂さんだってさ。
日頃だったら絶対言わない言葉なのに、兄の前じゃあキャラを変えるんだな。
俺は由美の言われるまま、ソファーに座った。
そして由美は銀八先生に対し、

「銀八先生？お茶を入れてくれませんか？」

と、笑顔で言った。
しかし、頼む相手を間違えている。

「めんどくさいから、嫌で～す」

本当にめんどくさそうに言った。
この発言に対し、由美から『ブチ』となにかが切れる音がした。
そして由美は立ち上がり、銀八先生に近づいて、腕を引っ張った。

「そんなことを言わないでくださいよ、銀八先生♪」

「いや、ほんまめんどくさいんで」

「だったら一緒に行きましょう？ね♪」

「あの…学園長……？服を引っ張らないでください……。ていうか気のせいか、引っ張る力が強いんですけど……？あの……学園長…？」

そのまま銀八先生は由美に連れられ、一緒にお茶を取りに向かった。

さて、俺はこれからどうすればいいんだ？
部屋には俺と勇真さん、二人だけである。
とりあえずなにか話さないといけないのかな……？
そう思っていた時、勇真さんの口が開いた。

「えっと……天堂恭介君だったね……？」

「あ、はい。恭介でいいですよ」

「そうか、では恭介君。君に聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「聞きたいこと？」

いったいなんだろう？
こんな俺に聞くことなんてあるんだろうか？
俺がそんなことを考えていた時、勇真さんは言った。

「君は由美のことを好きかい？」

「へ……？えええええぇぇぇぇぇーーーー！！！！！！」

あまりにも衝撃的な質問だったので、俺はつい大声で叫んでしまった。
いきなりなんてことを聞いてくるんだこの人は！
由美のことが好きかって、言われてもどう答えればいいんだ！？
好きってあれのこと！？恋愛的な意味なのか！？

「あ、あの……その……好きか？って言われましても…」

「ん？君は由美の彼氏じゃないのか？」

「いや、彼氏じゃなくて…」

「キスはもうしたのか？」

「はぁ！？」

「まさか……もうベットで……」

「ち、違いますよ！！俺はあいつのパートナーであって、彼氏じゃありません！！」

「本当か？実は陰で付き合っているんじゃないのか？」

「違いますよ！！誰があんな奴と付き合うか！！」

「ふ～ん……あんな奴ね……」

あ、しまった……。
こんなことを言ったから機嫌を損ねてしまったかな？
妹のことを悪く言って、何とも思わない兄なんていないからな。
もしかして、怒っている？

「……あ、あの…？」

「じゃあ君に聞くけど。由美がまったく可愛くないと言うのかね？」

「え！？……いや……」

可愛くないわけがない。
由美は笑顔が可愛いし、スタイルも悪くない。
外見は完ぺきだ。
しかし問題はあいつの中身だ。
あのサディスト精神がなければ、まったく問題がない。
彼女にしたいと思うだろう。

「由美は可愛いだろう？」

「まあ……中身さえ問題なければ……完璧なんですが……」

「……あぁ……やっぱりそうか……」

どうやらこの人は、由美の本性を知っているみたいだ。
猫かぶりしている意味がないじゃないか由美。

「じゃあ……質問を変えるよ？由美は嫌いかい？」

「え？」

嫌い？

俺は……由美のことは……

「嫌いじゃないです……」

俺は率直な意見を言った。

「確かに……あいつは無茶苦茶な奴です。何度も殺されかけたこと

か……。しかも俺をこき使うし、すぐに怒るし、色々大変です……。ですが……あいつが大嫌いだと思ったことはありません。むしろ……あいつが時々、頼もしく見えるときがあるんです。生徒の為に、生徒の幸せの為に頑張ることがあるんです。あいつは学園長の仕事が本当に似合っていると思うんです。だから、俺も嫌だ嫌だと言っておきながら、あいつの仕事を手伝っちゃうんですよね……」

「なるほど……」

勇真さんは納得したというような表情で頷いた。
そして、しばらく考えて、勇真さんは言った。

「つまり、恭介君は由美のことが好きだということだね」

「ええ、まあそういうことで……ってちょっと待って!!なんでそういう方向に話を持って行くんですか!?」

「だって学園長が似合っているんだろう?つまり由美のことが好きなんだろう?」

「いやいや!!確かにあいつは学園長が似合っていますけど、好きとか、恋愛感情なんてありませんよ!!!」

「由美とキスはしたくないの?エッチなことをしたくないのかね?」

「え!?……いや……その……」

「好きなんだろう?」

「うっ……」

この人苦手だ……。
なんで話している内容が由美が好きだとか、そういう話になるわけ!?

「クッ…ハハハハハハハハ!!」

するといきなり勇真さんは笑いだした。
なんで笑っているの?と言ってやりたかった。

「すまないｗｗ別に君を苛めたくて言っているわけじゃないんだ。由美のパートナーはどんな人かなって思ってね」

「はぁ……」

「しかし、話を聞いて安心したよ」

「へ?」

勇真さんはさわやかな笑顔のまま言った。

「君のような優しい人なら由美を任せられる。由美はああ見えて寂しがり屋な所があるし、一人でなんとかしようとするところがあるから、君のような人間が必要なんだ」

そう言った勇真さんは突然立ち上がり、俺に頭を下げた。
いきなりのことで困った。

「え!?あの…」

「これからも由美のことを頼む。性格上いろいろ思うことがあると思うが、見捨てないでほしい」

「勇真さん……」

由美はブラコン、この人はシスコンかもしれない。
こんなにも妹を、由美の心配をするんだからな。
勇真さんが頭を下げているんだから、ここで『嫌です、見捨てます』とは言えない。
いや、見捨てることなんてできない。
由美と俺は共に学園を盛り上げようという契約を結んだ。
だから、契約を裏切るわけにはいかない。

「あの…顔を上げてください。俺は由美を見捨てないし、これからも由美と一緒にこの無限学園を盛り上げようと思っています。この学園は気に入っているんで…」

そう言うと勇真さんは顔を上げ、笑顔で俺の手を握った。

「そうか！ありがとう！！由美をよろしく頼むな！」

勇真さんはとても嬉しそうだ。

「そうだ！いいことを思いついた！」

「ん？」

勇真さんが何かを思いついたみたいだ。
そして勇真さんは俺に対し、笑顔で言った。

「恭介君！これからは僕のことを『お義兄さん』と呼びなさい」

「へ……？はあぁ！？」

この人はいきなり何を言っているんだ！？
ていうかお義兄さんってオイ！
そんなことを言えるか！！
また変な誤解を生むよ！！

「いや！あの…勇真さん」

「いや、そこはお義兄さんだよ！」

「あの！だから…」

「さて、式は何処で挙げるかな？」

話が飛びすぎだぁぁぁぁぁ！！！！
さすが兄弟、人の話を聞かないところがそっくりだ！！
ダメだ、ここに居たらどんどん話が変な方向に行ってしまう！
脱出しなければ！！

「えっと……そう言えば、由美遅いですね！？」

「え？ああ、そう言えば」

「俺、見てきますね！」

そう言って、学園長室から脱出した。
まったく……由美と同じで厄介な人だ……。

それにしても、由美の奴いつまでかかっているんだ？
お茶を取りに行くくらいでこんなに時間がかかるのかな？
俺は気になって由美と銀八先生を探しに行くことにしたのだが……。

ボガッ！バキッ！ドゴッ！

廊下の曲がり角の付近でなんか物音がする。
なんか殴られているような音だ……。
そーっと覗いてみると……。
由美と銀八先生を発見した。
しかも……由美が銀八先生をボコボコにしている。

『この天パー！！！お兄様の前でめんどくさいって言ってんじゃねーよ！！！てめぇは黙ってお茶を用意すればよかったのに、なにがめんどくさいだコラァァァァァァーーーー！！！！！てめぇ、それでも無限学園の教師かコラァァァァァァーーーー！！！！！』

ボガッ！バキッ！！ドガッ！！！

『ぎゃあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーー！！！！！！！』

とんでもない光景を見てしまった……。
由美による銀八先生の粛清タイムである。
先程の銀八先生の発言が由美の逆鱗に触れたんだろう……。
哀れだ、銀八先生……。
最近あの人酷い目に遭ってばかりだな……。
とりあえず俺は、銀八先生に向かって合掌し、部屋へと戻った。

「どうだった？」

戻ってきた俺に勇真さんは聞いてきた。
それに対し俺は、

「まだ時間がかかると思うんで、もう少しお待ちください」

と言った。
由美は銀八先生に粛清していますとばらせば、今度は俺が粛清されてしまうからな。

その後由美はお茶を持ってきた。
ちなみにその時、勇真さんは

「あれ？銀八先生は？」

と由美に聞いた。
それに対して由美は笑顔で答えた。

「なんか、『糖分が足りなくてこのままでは死んでしまう！糖分…糖分…！糖分！！！！！うわあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！』…と叫びながら、三階の窓から転落して病院に送られました♪」

絶対嘘だ……。
由美の粛清によって重傷したから病院に送られたんだ……。
間違いない……！
だが、勇真さんは

「そうか♪」

と納得した……。

そしてその後は、俺と由美と勇真さんの三人でお菓子とお茶を食べながら、楽しい会話をした。

この時の時間はとても楽しく、由美も先程までのセーブデータを消された怒りは忘れていた。

まあ、たまにはこんな時間も悪くないな。

「ところで、恭介君。いつになったらお義兄さんって呼んでくれるのかね？」

「お義兄さん……？」

「いや！いい加減にしてください！！由美も関係ないから！！」

「？？？？」

……やっぱりこの人苦手だ……。

第二十一話　ブラコン？それの何が悪い？（後書き）

天城
「今回登場した千堂勇真は月光閃火さんが考えてくれたオリキャラです！」
由美
「お兄様～～♪」
勇真
「なんだい？」
由美
「えへ♪呼んだだけです～～♪」
恭介
「……なにこれ…」
天城
「由美はブラコンだったということだ。まあとにかく勇真さんもこれからよろしく…」
由美
「気安くお兄様に話しかけるなこのクズ」
天城
「……すいません…ｏｒｚ」
恭介
「作者弱っ！？」
勇真
「なんだい？由美？」
由美
「いえ！こちらの話です♪さて、じゃあ今回の次回予告を……お兄様にお願いします♪」
勇真
「わかった！次回予告だ！次回はもオリキャラが登場するらしい！

しかもそのオリキャラのせいで恭介が大ピンチになるみたいだ。どうなってしまうんだろうな!?というわけで、次回もよろしく!!」

由美
「きゃあああああああぁぁぁぁーーーーー!!!!!さすがお兄様!!見事な次回予告でしたわ!!ねえ?そうでしょ!?」

天城
「いや、普通だと…」

由美
「コロスゾクソブタヤロウ」

天城
「素晴らしかったです!!!」

恭介
「……で、ではまた次回……」

※お知らせ
オリキャラ、アニメキャラが多くなってきたので、キャラをまとめた表を作りたいと思います!

第二十二話　恋のライバルはヤンデレ美女!?（前書き）

C，C，の独り言

ルルーシュはシスコンだ!!気持ち悪い!!

ルルーシュ
「C，C，!!!!!貴様なにを言っているんだ!!?俺はシスコンじゃない!!俺はただナナリーを愛しているだけだ!!!!!」

第二十二話　恋のライバルはヤンデレ美女!?

《学生寮・恭介の部屋》

本日は休日の日曜日である。
日曜日の朝は、起きるのが辛い。
どうせ休みなんだから、お昼まで寝ててもいいんじゃないかなと思う。
というわけでお昼まで寝よう。おやすみ～♪（－．－）ｚｚＺ
…と眠りに入ろうとしたときだった……。

ピンポーン♪

チャイムが鳴った。
誰か来たみたいだ。
こんな休みの日に俺に会いに来るとは……よほどの暇人なのか、それとも単純に俺と遊びたいのか、どちらか一つなんだろう。
だが、今日は休みなんだ、日頃由美に酷い目にあっている俺としては貴重な休みなんだ。
というわけで、来訪者が来ているのだが、俺は無視した。
しばらくしたらいないと判断して諦めて帰るだろう。

ピンポーン♪

またチャイムを鳴らすが、当然無視する。

ピンポーン♪

無視無視。

ピンポーン♪

ドンドン！

『開けろこの変態クソ犬』

ドアを叩いてまでも、呼び出そうとしている声に聞き覚えがある。
C，C，だ。
ていうか変態クソ犬って久々に聞いたな。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポーン♪

ドンドンドンドン！

何度もチャイムを鳴らすなよ……。近所迷惑だ。

『貴様は完全に包囲されている。おとなしく出て来い』

俺は立てこもり犯か？
とてもうるさいので、俺は仕方なくドアを開けた。

「はいはい…なんでしょう……何をしているC，C，……？」

俺がドアを開けると、目の前のC，C，はロケットランチャーを構えていた。

「いや……おはようバズーカーを発射しようと…」

「明らかにドアを破壊して突入しようとしていただろう！？」

「そんな破壊者みたいな真似を、このC，C，様がするわけないだろう？」

この女だったら絶対やりかねない。
ていうかなんでこの女はいつも上から目線なんだ？

「なんだぁ……？うるせえぞ……」

「あれ？恭介とC，C，？なにしているの？」

俺達の話し声がうるさかったのか、明久、雄二がやってきた。
よく見ると、雄二はとても眠そうだ。
寝ている時、俺達の話し声で起きてしまったみたいだ。

「なんだぁ…？恭介、C，C，にまで手を出そうとしているのか？言っておくが、C，C，は魔女（熟女）だぞ」

「そうだよ恭介。C，C，は美人だけど、千年以上生きている魔女（熟女）なんだよｗｗ」

「おいおい雄二、明久。いくら俺でも、熟女に手を出すわけ無いだろうｗｗ」

「お前ら歯を喰いしばれ」

俺達が笑いながら話をしている最中、C，C，がいきなり殴りかかって来た。
俺達はC，C，の右ストレートを余裕で回避した。
まったく、いきなり暴力を振るうなんて、酷い女だ。

「ていうかC，C，？いったい何しに来たのさ？」

C，C，がここに来た理由について聞いてみた。
するとC，C，はなにかを思い出したように、手でポンと叩いた。

「そうだ。お前のせいで忘れるところだった。お前に手紙と荷物が届いているぞ」

「手紙と荷物って……うわぁ……」

俺は目の前にある荷物を見て驚いた。
人一人が入れそうなほど、大きなダンボールが置いてあったのである。
いったい中に何が入っているんだ？

「ほれ、手紙だ」

C，C，は俺に手紙を渡した。
差し出し人を確認すると、俺の知っている人物からだ。

「親父……？」

世界一周旅行中の親父からだ。
あのダメ親父が俺になんで手紙を送ってきたんだ？
俺は手紙を開き、内容を確認した。
手紙にはこう書いていた。

『恭介へ
よう！恭介！元気にしているか？由美さんとはうまくいっているか

？もしかして……もうベット上であんなことや、こんなことをしているのか？恭介は変態だからすぐ手が出てしまうんだろうなｗｗ若いっていいなｗｗ子供は作れそうか？』

これほど親父に殺意を抱いたのは初めてだ。

『まあ子供ができたら連絡をくれｗｗさて、話の本題に移ろう。由美さんとラブラブモード中な所で申し訳ないが、お前に許嫁ができた』

許嫁……？……許嫁だとおおおおおぉぉぉぉぉぉぉーーーー！！！！？

『ビックリするのも無理はないだろう。どういうことかというと、世界一周旅行でアメリカに行っていた時の話だ。とある町のカジノで遊んでいたんだが、なんと！！遊びすぎて金が無くなってしまったんだ。まったく災難だなｗｗあっはっはっはっはっはｗｗｗ』

なんで親父は金が無くなったという緊急事態を前に笑っているんだ？相変わらずこの人の神経が分からん。

『金が無くなって困っている時だった、とある男が私に金を貸してくれたんだ！おかげで一文無しにならずにすんだよ！世の中あんな優しい人がいるんだな♪で、その人はどうやらどこぞの学園の学園長だったんだ。由美さんと同じだなｗｗその人には娘が居るんだが、なかなか婚約者が見つからないらしい。なんでもその娘さんの性格が問題なんだとさ。私は困っているその人の悩みを解決しようと考えた。だって金を貸してもらって何もお返しをしないなんて失礼だろう？私は考えて考えて考えた。そして、いい案を思いついた。私はその人に言った。

「だったら私の息子を婚約者にすればいい！あの息子のことだ彼女が出来なくて困っているだろ（笑）」

その人は大変喜んでいたよ！いやあ…良いことをしたもんだな♪というわけで、そちらに婚約者が行くと思うから、仲良くやってくれよ♪

追伸

由美さんにもよろしく伝えておいてくれ♪あと、私は恭介に二人嫁が居てもＯＫだからな♪それと孫は女の子がいいな♪』

「あんの……クソ親父がああああああぁぁぁぁぁぁぁぁーーーー！！！！！！（怒）」

怒りのあまり持っていた手紙を破り捨てた。

これほど親父を殺してやりたいと思ったのは初めてだ！

あのクソ親父！なに勝手に俺の婚約者を決めているんだ！？それと由美とは親父が思っているような関係じゃねーよ！

なんだよ！？ベッド上であんなことやこんなことって！？

「恭介……」

突然雄二が俺の肩に手を置いて、同情の眼差しで俺を見ていた。

「お前も、家族関係のトラブルで大変だな……。分かるぜその気持ち。変な親を持つと、子供は大変だよな……」

「なんでお前が同情するんだ？それと明久、いったい誰にメールを送ろうとしているんだ？」

明久は密かに、携帯でメールを送ろうとしていたみたいだ。
明久から携帯を取り上げ、メール内容を確認した。

『恭介に許嫁が出来た！異端審問会、全員集合せよ！』

「明久、歯を喰いしばれ」

「恭介！暴力をするならフェイトさんに報告するぞ！」

「ぐっ……！明久、卑怯だぞ！！フェイトさんを使うなんて……！！」

「恭介だって卑怯だよ！！なんで君だけ許嫁とか恋愛イベントに遭遇する確率が多いんだよ！！」

「仕方ないだろう！俺は主人公なんだ！恋愛イベントに遭遇してなにが悪い！？」

「だったら作者に、恭介を主人公からモブキャラに降格するように直談判する！！」

「なっ！？だったら後書きで明久の悪口を書いてやる！！」

「おいお前ら、メタ発言自重しろ」

俺と明久の口喧嘩の最中にC，C，が割り込んできた。

「それよりも恭介、このダンボールをなんとかしろ。お前のダメ親父から送られてきたものだろう？このままここに置いていたら他の

人の迷惑になる」

「ああ、そうだな」

C，C，の言うとうりだ。こんな大きなダンボールをここに放置したらみんなの迷惑になる。
あのダメ親父がいったい何を送りつけたのかは知らないが、とりあえず部屋の中に入れよう。

「明久、雄二、C，C，、手伝ってくれ」

「嫌だ」

「頑張れ」

「一人でやれ変態」

「お前らには協調性が無いのか！？」

こいつらは全然協力してくれないみたいだ。なんで？主人公を助けようと思わないのか？
仕方ない、俺一人で運ぶか……。
重いダンボールを背負って、部屋の中へと持って行った。

「よっこいしょ！あー重かった……。よく頑張ったぞ俺！」

部屋の中にダンボールを置いて、俺は自分自身に褒めたのである。
なんで自分自身を褒めるだって？だって誰も俺を褒めてくれないも

ん。

あ、そうだ！読者の皆さん！誰でもいいから俺を褒めてくれ！

俺は人一人分入れそうな大きなダンボールを一人で運んだんだぞ！

感想で『恭介よく頑張った！』と書いてくれ！

「変なことを読者に頼むんじゃないぞ」

サーセン……。

「それにしてもなにが入っているんだろうね？」

明久はこの大きなダンボールの中身が気になるみたいだ。

いったい中に何が入っているんだろうか？まさか人間が入っているとか……？いや、まさかな。

「開けてみたらどうだ？」

「そうだな」

俺は雄二の意見に賛成して、ダンボールに付いているガムテープを剥がし、ダンボールを開けた。

「さて、中に何が……」

すると、ダンボールの中から……。

人が出てきた……。

その人は女性で、髪は長い緑色の髪、傘を持ち、いかにもお嬢様という感じの美女であった。

そして美女は笑顔で俺を見つめ、一礼した。

「初めまして、天童さん。私は風間…」

バタン！

とっさにダンボールを閉じた。

それにしても……俺の予想が当たった……。人間が入っていたよ……。しかも美女。

美女と出会うイベントが多いのは嬉しいが今回はどうなんだ？

ダンボールから美女が登場？

なんだよそれ……？空から美少女が降りてくるという展開は見たことあるが、ダンボールから美女が出てくる展開なんて聞いたこと無いぞ。それともこれは新しい出会いのイベントなのか？

「ねえ？中に人がいたけど……」

「明久……やっぱりあれは人なのか……？怪物でも妖精でもなく、ちゃんとした人なんだよな？」

「うん……」

一応明久に確認したが、やはり明久から見ても、ちゃんとした美女らしい。

ていうかなんでダンボールに入っているんだ？

「おい、とりあえず開けたらどうだ？」

雄二がそう言うが、俺は正直に言うとこのダンボールを開けたくなかった。

なぜかって？俺の直感がこう告げている。

このダンボールの中にいる女性は、新たなトラブルの火種ではないか……と。

だからこのダンボールはこのまま開けてもいいのか迷っているのである。

どうする……？このまま開けるべきか……？それとも……。

A　開ける
B　開けずに封印
C　由美に押し付ける
D　捨てる

よし！俺の選択肢は決まった！

「Dの捨てるで！」

「「「捨てるんかい！？」」」

雄二と明久とC，C，がツッコミを入れてきた。まあ冗談だけどね。

だがその時

『捨てるですって……？』

ダンボールから突然、声が聞こえてきた。おそらく先程の美女の声だと思う。若干、怒りがこもっている声だ。

バン！

「私を捨てるとはどういうことですか……？」

ダンボールが開き、中から先程の美女が出てきた。しかもかなりご立腹みたいだ……。

「いや…あの……じょ、冗談ですよ！冗談！ア、アハハハハ……」

笑いながら弁明するも、彼女の機嫌は直らない。逆に怒りが増しているみたいだ。

「私は冗談が嫌いですわ。天堂さん？少し頭を冷やしましょうか…？」

何故だろう……。『少し頭を冷やしましょうか……？』というセリフが、処刑宣言に聞こえてしまう。

とっさに部屋から逃げようとしたが、彼女は素早い動きで俺を捕まえた。

「逃がしませんよ」

この子、顔が怖い！先程まで美女だったのに、今では魔王でさえ裸足で逃げ出してしまいそうなくらい、怖い顔をしている。

こうなったら仲間達に助けを…

「「「じゃあな、恭介♪」」」

「オイコラァァァーーー！！！（怒）それでも友達か！？助けろよ！！俺ピンチなんだよ！？」

俺の悲痛な叫びは三人には聞こえていないのか、さっさと部屋から

出て行った。
あいつら絶対許さない！！いつか復讐してやる！！
「さあ、天堂さん？お仕置きですよ……」
「ちょ！待って……」
いやあああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！！
《１０分後》
「初めまして天童さん。風間愛淫（かざまあいいん）といいます。手紙に書いていた許嫁は私のことなんですよ。不束物ですが、なにとぞよろしくお願いします」
風間愛淫は紅茶を飲みながら、説明した。
紅茶を飲んでいる時の彼女はとても優雅で、どこぞの貴族のお嬢様という感じだった。
「…君が俺の許嫁……？」
「はい」
しかし、未だに信じらんない。
この俺に許嫁が出来るなんて……。恋愛経験はないし、告られたこともない、この俺に許嫁が出来るなんて……！重要なんで二回言いました。

だけど……話がいきなりすぎて、正直戸惑っている。
いきなり許嫁だと言われても、俺は彼女のことをまったく知らないから、いったいどうすればいいか分からない。

「あの、天堂さん？」

「え！？あ、はい……」

「どうかしましたか？」

「い、いえ！なんでも……」

「…もしかして……嫌ですか……？」

「え？」

愛淫さんは持っていた紅茶のカップを置き、俯きながら言った。
俯いているので、今彼女がどんな表情をしているのかは、分からないが、声はあまり元気がなかった。

「そうですよね……いきなりのことで困惑しているんですよね……ですが！」

彼女は俺の手を握り、強い意志が籠もった瞳で見つめていた。

「大丈夫です……！あなたなら…」

少しドキドキしてきた。こんな美女に見つめられて、手を握られていたら、どんな男でもときめいてしまうだろう。
そして愛淫は言った。

「あなたなら……セーラー服が絶対似合います…！」

はい？

ちょっと待て、何故そこでセーラー服が出てくるんだ？
しかも似合うってどういうこと？

「あ、あのさ…セーラー服ってどういうこと……？」

「え？手紙に書いていませんでしたか？天堂さんは私の許嫁だから私の学園、乙女百合ヶ丘（おとめゆりがおか）学園に転校するんですよ」

「ああ！なるほどね♪……って、えええええええええええぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーーー！！！！！」

て、転校だって！？
ちょ、ちょちょちょちょちょちょっと待て！！なんでだ！？なんでこんなことになるんだ！？
彼女は何を言っているんだ！？

「ま、待ってくれ！いきなり転校とか言われても困るんだ！！第一、そういう転校の話は学園長の由美に話を…」

「天堂さん。こちらが乙女百合ヶ丘学園の制服ですよ。天堂さんにお似合いだと思いますよ。さあ、着てみてください」

あぁ……この子もか……この子も人の話を聞かないのか……。
なんで俺が知り合う女の子は人の話を聞かない人が多いんだ……？

「と、とにかく！俺はそんな服は着ないし、他の学園へ転校なんてしないぞ！！」

「拒否するつもりですか……？」

また愛淫はヤンデレのような目つきになった。はっきり言って怖い……。
だがここで言わないといけない。俺はこの学園が気に入っているから、今更他の学園に行きたくない。この学園には友達もいるし、フェイトさんだっているんだ。
絶対に他の学園に行くもんか！！

「ハァ……仕方ありませんね……」

愛淫は溜息をつきながらやれやれと首を振った。

「あなたの言いたいことはよくわかりました。では、この選択肢の中から選んでください」

選択肢？

A　今すぐ結婚して乙女百合ヶ丘学園に転校する。
B　今すぐ結婚する。
C　今すぐ結婚してお仕置き（バイオ兵器の実験台）をする。
D　今すぐ結婚してイビルジョー百頭と素手で戦ってもらう。
E　今すぐ結婚してピーーーー（自己規制）をする。

「さあ、この選択肢の中から選んでください」

「どれを選んでも結婚するの！！？なんて最悪な選択肢だ！！」

「文句が多いですわね……では、一つ追加です」

F　今すぐ別れて一族郎党皆殺し（天堂恭介に関わった者も一族郎党皆殺し）

「これでいいですわね？」

「良いわけあるかぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！！！！さっきより酷くなっているじゃないか！！！！！」

「うるさいですわね……では……」

愛淫はいきなり俺を押し倒してきた。
そして俺の服を脱がそうとする。

「お、おい！！い、いきなり何を…」

「天童さんが全然決めてくれないから、私の脳内会議の結果、選択Eを選ぶことにしました。天童さん……私と一緒に大人の階段を上りましょう……」

「や、やめろーーーー！！！！！この小説をR18指定にするつもりか！！！！？」

「この小説は基本なんでもありなんですよ？だ・か・ら、こんな展

開になっておかしくありません♪では天童さん服を脱いでください。
私も……」

「だ、だれか助けて！！！！」

助けを呼ぶが、誰も答えてくれない。
マズイ……！このままでは……！！
小説が……18禁になってしまうーーー！！！

「天堂さん……」

「くっ……これまでか……！」

もはやどうすることもできず、諦めかけたその時

ピンポーン♪

『恭介～♪居る～？』

チャイムが鳴り、扉のむこうから、元気な声が聞こえてきた。
この声の主は知っている。

由美だ……！

由美がやって来たんだ！

由美は扉を開け中に入ってきた。しかもかなり上機嫌だ。

「恭介♪お腹空いたからご飯食べに行こうよ♪私、ウナ丼が食べたいな♪恭介はなに……が……」

部屋に入ってきた由美は俺達の姿を見て、言葉を失った。
無理もない。現在俺は上半身裸で、俺の上に愛淫が薄着で馬乗りになっている状態である。
何も知らない人が見たら、百パーセント誤解を招きそうだ。

「きょ、恭介……？だ、誰……？この女……？」

由美はワナワナ震えながら、俺に聞いてきた。
すると愛淫は余裕の表情で立ち上がり、由美を見下すように言った。

「初めまして、私は風間愛淫。天堂さんの許嫁です」

「い、いいいいいいいい許嫁！！！？」

由美はすごく驚いていた。あんなに驚いている由美を見るのは初めてだ。
しばらく驚愕の表情でいた由美であったが、急に怒りの表情になって俺を見つめた。

嫌な予感……。

「きょ～う～す～け～！！！！（怒）」

「お、おい……！ま、待て！俺に怒りを向けても困るんだけど！！俺のせいじゃないぞ！！全ては親父が…」

しかし由美はまったく話を聞いてくれず、サバイバルナイフを取り

出した。

「ま、待ってくれ！！そんな物をどっから取り出した！！？ていうか頼むから俺の話を……」

「天誅ううううううう！！！！！！」

『いやあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！』

その日、学生寮に恭介の悲鳴が響いたが、いつものことなのでほとんどの生徒はまったく気にしていなかった。

愛淫と由美、この二人の出会いによって恭介の学園生活がさらに波乱になっていくことを、当の本人の天堂恭介は、まだ分かっていなかったのである。

第二十二話　恋のライバルはヤンデレ美女！？（後書き）

愛淫
「初めまして、アルベルナさんが考えてくれたオリキャラ兼メインヒロイン、風間愛淫と申します」
由美
「なに言っているの？この作品のヒロインは私よ♪新参者は黙ってちょうだい」
愛淫
「あらあら、もしかして嫉妬ですか？醜いですわよ」
由美
「あなたの顔の方がもっと醜いよ♪」
愛淫
「……どうやら死にたいようですね？」
由美
「アハハハハハ♪私があなたみたいな人に負けるとでも？」
愛淫
「ふふふふふ……」
由美
「えへへへへへ……」

恭介
「作者！！あの二人怖いんだけど！！なんとかしてよ！！」
天城
「さて、今回の次回予告は誰にやってもらおうか……」
恭介
「聞いているの！？」
天城
「よし！あの人にやってもらおう！というわけでお願いします！」

C，C，

「いいだろう。この美女C，C，様が次回予告を担当してやる！では次回予告だ！次回は愛淫と由美が恭介を巡って激突する。果たして勝つのはどっちだ？そして恭介は愛淫と由美どっちを選ぶのか！？まあどちらを選んでも恭介は死ぬだろうなｗｗｗ次回をお楽しみ！！そして読者諸君、感想で私を褒めるがいい！！」

天城

「なにを言っているの……」

恭介

「ていうか俺どうなるの！？」

第二十三話　女の争いは醜いものだ……（前書き）

風間愛淫の独り言

天堂さん……？もし浮気なんてしたら……一族郎党皆殺しです……。

第二十三話　女の争いは醜いものだ……

《学生寮・食堂》

無限学園のお昼の食堂は結構混んでいることが多い。
生徒の殆どがこの食堂を利用しているから仕方がない。それ故に、座る席は殆ど無いのが普通なのだ、だが……

今日は違った。

今日は席が空いていたのだ。しかも俺の周り席が空いているのである。
だというのに、誰も座ろうとしない。席が無くて困っている生徒がいたが、その生徒さえも座ろうとしないのである。
だが原因は分かっている。俺の目の前に座っている二人組のせいだ。
この学園の学園長、千堂由美と乙女百合ヶ丘学園の学園長の娘兼俺の許嫁、風間愛淫だ。
この二人は現在機嫌が悪い。その証拠に、素人でも分かるほどの殺気を放っている。
だから誰も彼女達の周りに座ろうとしない。ていうか目線を合わせようともしない。
なんで殺気を放っている女の子と一緒にご飯を食べているんだ俺……。
そして先程まで無言だった愛淫は口を開いた。

「由美さん、そこのソースを取ってくれますか？」

愛淫はとんかつ定食を食べていたので、ソースが必要になったみたいだ。

ソースの近くにいる由美に頼んだ。すると由美は笑顔でソースを…
…いや、マヨネーズを取った。

「はい♪どうぞ♪」

「……由美さん、それマヨネーズ…」

「こっちの方が美味しいですよ♪」

そう言って由美は、愛淫のとんかつに大量のマヨネーズをかけた。
マヨネーズでとんかつが見えなくなるくらいかけたのである。
由美は満足な笑顔だった。

すると愛淫も笑顔になった。そして笑顔の表情のまま、七味唐辛子
を取り出した。

「では由美さんのうな丼も、美味しくして差し上げます」

そう言って愛淫は由美のうな丼に大量の七味唐辛子をかけた。
あの量だと辛くて食べられそうにない……。

「……」

「あら?もしかして甘いものじゃないといけなかったかしら?ごめ
んなさい。でしたら……」

愛淫は立ち上がり、銀八先生が座っている席に向かった。
そして銀八先生が食べていたパフェを取り上げた。

「あの……俺のパフェ……」

銀八先生がそんなことを言ったが、愛淫は全く気にしていない。
そしてそのパフェを

ベチャ

由美のうな丼に入れたのだ。

「俺のパフェがあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！」

銀八先生が悲痛な叫びを上げている。だが愛淫はまったく詫びを入れない。
由美のうな丼は、辛くて甘いうな丼に変化したのだ。

「これで甘くて美味しいうな丼が食べられますよ。ヨカッタデスネユミサン」

「……」

愛淫は笑顔だったが、目は完全に由美を見下した目だ。
由美は黙っていたが、恐らく彼女に対しての怒りが溜まっているだろう……。
このままでは由美の怒りが大爆発してしまう。止めようと思った時だった、由美が笑顔で立ち上がり

「ありがとう、愛淫さん♪私も…オカエシシナイトネ」

そう言って、甘くて辛いうな丼を持った。なにをするのかと思っていたら、由美は持っていたうな丼を

べちゃ！

愛淫の顔にぶつけたのである。愛淫の顔にはうなぎとパフェのアイスが付いており、時間と共に床にボトボト落ちていく。

そして由美はそんな愛淫の顔を見て大笑いした。

「あはははははははははははははははは！！！！とても似合っているわよ愛淫さん！！うなぎとアイスがマッチしているわ！！あはははははははははははははははは！！！！」

「……」

愛淫は黙っている。しかし俺には分かる。彼女の殺気がどんどん大きくなっていくのである。

周りにいた生徒達はこの光景を見て、食堂から出て行こうとしている。

彼らの判断は正しい。俺もさっさと逃げるとしよう……。

「由美さん……やってくれましたわね…？こんなことをして、ただで済むと思っているのかしら……？」

「はい？なんのこと？愛淫さんの言っている言葉なんてわかんな～い♪」

バシャ！

ふざけたことを言った由美に対し、愛淫は傍に置いていたお茶を由美の顔にぶっかけた。

由美の顔はびっしょりだ……。だが愛淫は更に由美の頭に醤油をか

けた。
由美の綺麗な髪は醤油で汚れたのである。

「……なに……これ……？」

「ごめんなさい由美さん♪手が滑ってしまってお茶と醤油がかかってしまいましたわ。醤油臭いのであっちに行ってくださる？臭いがこっちに移りそうですわ……。ていうかもう私の視界に入らないで、うざいから」

鼻を摘みながら、見下した目つきで由美を見ていた。

ブチ

そして由美の方からなにか切れる音が聞こえてきた……。
マズい……。

「えへへへへへ……♪」

「うふふふふふ……♪」

二人はとびっきりの笑顔で笑っている……。
これが何を意味するかと言うと……。

開戦の合図である。

「「うがあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！」」

二人が取っ組み合いを始めた。服を引っ張ったり、髪を引っ張った

りして争っている。
傍から見るとなんと醜いことか……。

「なんなのこのバカ女！！！醤油臭いってなに！！？あんたがかけた醤油でこうなったのよ！！！謝りなさいこのヤンデレ女！！！！」

「貴方に言われたくありませんわ！！ていうかキャラがかぶって迷惑していますのよ！！キャラを変えなさい！！小さい男の子を見てハァハァ言っているキモイショタコンキャラに変えなさい！！！」

「変えるかボケェェェェェーーーー！！！お前こそ、ドSキャラからドMキャラに変更しやがれこのバカ女！！！」

「バカバカうるさいですわ！！！！」

「バーーカ！！バーーカ！！！」

「この……！！胸が大してないくせに……！！！」

「なっ…！！言ってはいけないことを……！！！許さない！！！ぶっ殺す！！！！」

「よろしいですわ！！ならば戦争です！！貴方を地獄の底に叩き落してくれますわ！！！」

由美はチェーンソーとナイフを取り出し、愛淫は拳銃とマシンガンを取りだした！
このままでは殺し合いになる！これは止めに入るべきだ！！

「おいお前らいい加減にしろ！！」

「「だってこいつが…」」

「とにかく武器を下ろせ！！」

二人は俺の言葉に従い、渋々武器をしまった。

「なんでお前らは仲が悪いんだ……」

そう言うと愛淫は不満な顔で由美に指を指した。

「私、この人が嫌いですわ！なんだか知らないけど、顔を見るだけで殺してやりたいと思ってしまいます。この人を死刑にすることで、世界平和に近づけると私は思います」

なんで由美が死ぬことで世界平和に繋がるんだ……？

「ていうか、態度も性格も嫌いです。なんでも、嫌がる天堂さんを無理やりこの学園に転校させたと言うではないですか。天堂さんの嫌がることを平気でやる女なんて、ジンオウガに喰われて死んでしまえ！」

「恭介は嫌がってないもん！恭介はドMだから私のお仕置きを喜んでいるんだよ！こんな風に…」

『ハァ…ハァ…ハァ……由美…いいよ…！最高だよ！もっと俺に痛みを！！由美、もっと俺を苛めてぇぇぇぇぇぇぇーーーー！！！！』

「…てな感じに…」

「違うわぁぁぁぁーーーー！！！！（怒）俺はドMじゃねぇよ！！！なんだよ俺をもっと苛めてって！！変態じゃないか！！！！…ていうかみんな！そんな変質者を見るような目はやめて！！！由美の話は嘘なんだよ！！そして愛淫！その手に持っている鞭をしまいなさい！！！！」

もう最悪だ……。由美の嘘のせいで、みんなは俺をドMの変質者を見るような目つきで見ているし、愛淫はなにを勘違いしたのか鞭を用意するし、なんで俺は最近こんな不幸な目に遭ってばっかりなの……！？

「とにかく、あなたのような滅茶苦茶な学園長がいるこの学園に、天堂さんを置いておくわけにはいきません。我が乙女百合ヶ丘学園に転校させます！」

「ちょ、ちょっと待てよ！いきなりそんな話…」

「フッ…無理よ」

由美はいきなり勝ち誇った表情になり、愛淫に言った。

「確か、乙女百合ヶ丘学園は女子高よね？女子しか通えない学園に、男である恭介を通わすなんてできないわ！」

なんだと！？乙女百合ヶ丘学園は女子高なのか！？ぜひ行き…いや、行けるわけないじゃなか！

「乙女百合ヶ丘学園に転校なんてしたら、恭介は女の子全員に襲いかかるわよ？なんせ変態だからｗｗ」

「何度言ったら分かる！？俺は変態じゃない！！例え乙女百合ヶ丘学園に転校しても女子に対してやらしい行為など絶対にしない！！」

「本当？」

「本当だ！」

俺が嘘を言うわけないじゃないか！俺は変態行動はしない！

「じゃあ次のキーワードを聞いて連想する言葉を言って。女子更衣室…」

「覗き！」

「女子の脱ぎたて体操服…」

「クンカクンカ…」

「スクール水着の梓ちゃん…」

「お持ち帰り！」

「もしもし？警察ですか？変質者がいます」

しまった！！魅力的なキーワードのせいで本音が出てしまった！

由美やめて！警察のお世話だけは嫌だ！！

「ねえ？こんな変態が乙女百合ヶ丘学園に行ったら大変なことになるわよ。だからあきらめ…」

「ノープロブレムですわ！天堂さんには女装してもらいますから」

「なるほど！それはいいアイディ…えええええええぇぇぇぇぇぇーーーー！！！！！」

俺が女装だと！？ふざけるな！！！そんなの死んでもお断りだ！！

「断るなら黒魔術で殺しますよ」

マジで！？黒魔術が使えるのか！？やばい！これは断れないよ！！

俺は…乙女百合ヶ丘学園に転校するしかないのか……！？

「ふざけないでっ！！！！」

食堂に大声が響いた。

由美だ。由美が大声で叫んだのだ。

「恭介はここの生徒なの！！無限学園の生徒なの！！どこにも転校させないし、誰にも渡さない！！恭介はここに居ないといけないの！！！どうしても恭介を奪うというのなら……乙女百合ヶ丘学園のぶっ壊して、二度とこんなことをさせないようにしてやる……！！」

「あなた…私を脅すつもり……！？」

「これが脅しに見える……！？私は奪われるのは嫌なの……！恭介を……私の生徒を奪うやつは絶対に許さない！！！」

この時の由美の目を見て、俺は驚いた。
由美の目は、時々見せる冗談の目ではない。
本気の目だ。もし俺が乙女百合ヶ丘学園に転校した場合、本気で乙女百合ヶ丘学園をぶっ壊そうとするかもしれない……。

「気に入りませんわ……！私を脅そうとするその行為、万死に値しますわ！！」

「文句があるならかかってきなさいよ……。ぶちのめしてあげるから……」

場は一触即発は空気だ……。このままでは由美と愛淫はまた死闘をするんじゃないかと思っていた時、食堂に居た生徒に変化があることに気付いた。
生徒達が由美と愛淫を怖がっている。無理もない、あんなに恐ろしい表情をしている由美なんてあまり見ないからな。
だがこれではだめだ。このままではいけない……！

駄目だ……！由美……！

お前は……そんな顔をしてはいけない……こんなことをするんじゃない……！！

「由美……やめるんだ」

「恭介！？」

俺は由美の前に立ち、由美を諌める。

「周りを見ろ。みんな怖がっているぞ……」

「あっ……！」

由美はやっと気付いた。自分が恐ろしい顔をしていたこと、そして自分の顔を見た生徒が怖がっていることに。

「ごめん……」

由美は素直に謝った。俺とこの場に居た生徒に対して、頭を下げた。そして俺は愛淫に向き直り、彼女に言った。

「愛淫……」

「天堂さん。一緒に乙女百合ヶ丘学園に行きましょう」

「……悪いけど…それはできない……」

俺は自分の答えを言った。その答えを聞いた愛淫は信じられないといった表情になった。

「な、なぜですか！？」

「俺は……この学園が気に入っているからだ……最初はとんでもない学園で生徒もおかしな奴が多いと思ったよ……。でも、分かったんだ。こんな学園でもいいところがあった。おかしな奴らがいるけど、みんないい奴だって。それにここには友達が……唯や明久、ゆりっぺ、ティアナ、ハヤテ、新八…二年Z組のみんな、他にもいっぱいいるんだ。そして…由美もいるんだ」

「恭介……」

「だから、ここが気に入っているんだ。他の学園には行きたくない……」

「……」

愛淫は黙って俺の話を聞いている。
無表情なので俺の答えを聞いて怒っているのか、ショックを受けているのかは分からない。
すると愛淫は溜め息をつき、やれやれと首を振って言った。

「……仕方ないですわね……。分かりましたわ……。天堂さんを乙女百合ヶ丘学園に転校させるのは諦めますわ……」

「愛淫……」

「ですが由美さん、覚えておいてくださいよ。あなたがどう言おうと、私と恭介さんは許嫁であることに変わりはありませんから」

愛淫は由美に強い口調で言った。
そして俺に一礼した。

「それでは天堂さん、ごきげんよう♪」

そう言って、愛淫は食堂から出て行った。
それにしても、とんでもない許嫁が出来たもんだ……。これからの生活が更に波乱になってしまいそうだ……。

「恭介……」

由美が俺の手を引っ張って、尋ねた。

「どこにも行かないよね……？私の前から居なくならないよね……？」

由美の声は若干震えていた。まるで俺が居なくなることを恐れているみたいだった。

俺は由美に落ち着かせるように言った。

「どこにも行かないよ……」

俺の言葉を聞いて安心したのか、由美はホッと胸を撫で下ろした。

由美は一安心したみたいだ。

食堂も、先程までの緊迫な空気は消え、生徒達の喋り声でうるさくなり、いつもの食堂に戻ったのであった。

《翌日・二年Z組教室》

「へえ……そんなことがあったんだね……」

「ああ、大変だったよ……」

教室に居たみんなに昨日の出来事を伝えると、唯が俺の苦労を理解してくれた。

「で、許嫁さんは結局どうしたの？」

「さあ？乙女百合ヶ丘学園に帰ったんじゃないかな？」

あの出来事の後、愛淫を見かけていない。由美に聞いてみたが、『死んだんじゃない？』と言っていた。ていうか勝手に殺すな。

「もしかして、その出来事のせいで恭介君に愛想が尽きたんじゃない？」

「そうネ！変態野郎と一緒になりたくないと思って逃げたアル！」

俺の話を聞いていたゆりっぺと神楽は俺にそう言った。つか神楽、何度も言わせるな。俺は変態野郎じゃない。

「まあいいじゃねぇか。厄介払いができたんだし」

隣の席に居た日向が笑いながら言った。まあ確かに厄介な奴だったけど……。

「お～～～い！！てめぇら！さっさと座れコノヤロー！！」

教室の入口から大声が聞こえてきた。銀八先生だ。

銀八先生の一声で二年Z組の生徒のみんなは自分の席についた。

そして教卓に出席簿を置いて、全員に聞こえるように言った。

「おいてめぇら、めんどいから出席確認は無しだ。そして喜べ野郎共、転校生が来たぞコノヤロー！」

銀八先生の報告を聞いたみんなは急にテンションが上がった。

「転校生!?」

「マジか!?」

「キョウ君に続いて二人目の転校生だね!」

「いったいどんな奴なんだ?」

「可愛い女の子だったらいいな♪」

「明久君……?可愛い女の子だったら、ドウスルツモリデスカ……?」

「アキ!あんた、恭介の変態が移ったんじゃないでしょうね!?」

「いやだなぁ♪恭介の変態が移っていなし、可愛い女の子だったら仲良くするだけだよ♪やましいことなんて考えてないからね♪だから姫路さん、美波、その手に持っている凶器を今すぐしまって!!」

「もう!アキがこんなスケベになったのは恭介のせいよ!!」

「そうです!恭介君が変態さんだから、明久君がスケベになってしまったんじゃないですか!!」

「俺のせいか!?明久がスケベなのは元からじゃねぇか!!それから俺は変態じゃねぇ!!!」

転校生の話題（一部違う話題の話をしている奴がいたが）でクラスが盛り上がっていたが、銀八先生がイライラしていた。

「うるせぇぇーーー！！お前らなんですか！？転校生が来てキャアキャア騒ぐ高校生かお前らは！？とにかく静かにしろ！！転校生が入れねぇだろうが！！そして恭介！変態を自重しろ！！」

「いや！俺は変態じゃないし！！ていうか今はその話題は関係ない…」

「はい、恭介の戯れ言は置いといて」

置いとくな！俺の話を少しは聞けよ！このダメ教師！！

「さあ、お待ちかねの転校生登場だ！おめぇら、拍手で迎えてやれ！」

クラスのみんなは、銀八先生の言うとおりに拍手をし、転校生を歓迎する。

扉が開き、転校生が入ってきた。

転校生は女性で、しかもかなり美人だった。緑色の長い髪にお嬢様のような服を着て……ってあれ……？

なんか愛淫に似ているような……？まさか愛淫……！？

いやいや待て待て！まさかそんなわけないよな！？

愛淫がこの無限学園に転校するわけ…

「初めまして♪乙女百合ヶ丘学園から転校して来ました。風間愛淫です。天堂さんとは許嫁という関係です。皆さん、これからよろしくお願いします」

…マジかよ……。

愛淫だ……風間愛淫が転校して来やがった！！

「い、許嫁！？きょ、恭介の許嫁なんですか！？」

いきなりティアナが驚いた表情で、愛淫に聞いてきた。
愛淫は笑顔でティアナの質問に答えた。

「はい、そうですよ♪私達は将来を誓い合った仲です」

「親父が勝手に決めたことだがな……」

「い、許嫁……。グバァ！！」

愛淫の答えを聞いたティアナはどうしたことか、吐血して倒れた。

「ティア！！大丈夫！？すいません先生！！ティアが吐血して倒れました！！」

「すぐに保健室に運べ。ワクチンとして、恭介の盗撮写真をティアナに見せるんだ」

「なんで俺の盗撮写真がワクチンになるんだ！？」

「はい！分かりました！恭介の盗撮写真は私が持っているので、大丈夫です！！」

「スバルゥゥゥゥーーーー！！！！！なんでお前が俺の盗撮写真を持っているんだ！！！！？」

「ティアの治療薬として常に持っていたんだよ！」

「だからおかしいだろ！？なんで俺の盗撮写真が治療薬になるんだ！？」

ティアナの身体はどうなっているんだ！？なんで俺の盗撮写真が治療薬になるんだよ！？

「まあティアナはスバルに任せとくとして、愛淫の席は……」

銀八先生が愛淫の席を探している最中、愛淫が突然歩き出し、俺の隣に居る日向の前に立った。

「すいません。この席を譲ってくれませんか？」

こいつ……！俺の隣に座ろうとしているのか！？

冗談じゃない！こいつが俺の隣に座ったら面倒なことになる！！

日向！断るんだ！

「……あの……ここは俺の席だから……空いてる席に行ってくれないかな？」

ナイス日向！よくぞ断ってくれた！！お前こそが心の友だ！！！

「どかないなら、あなたの恥ずかしい過去をばらしますよ？例えば……あなたはユイさんと……」

「どうぞお座りください！！！ｏｒｚ」

日向ぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！！！

この役立たず！！！異端審問会に粛正されろ！このバカ！！！

「ではあなたは隅っこの席に座ってください」

「え！？いや……その……他にも席があるから……別に隅っこの席じゃなくても…」

「ではダンボールを机代わりにして、床で授業を受けなさい」

「ダンボールを机代わり！？床で授業しろってか！？ちょ、ちょっと待てよ！いくらなんでも…」

「あなたは数日前、ユイさんと一緒にデー…」

「はい！！そのとおりにします！！」

日向はダンボールを取り出し、それを机代わりにして、床に座った。
もはや日向は愛淫の奴隷と化していた……。弱みを握られ、命令に従わなければいけない、哀れな奴隷に……。
愛淫は俺の隣の席に座り、笑顔で俺に話しかけてきた。

「これからよろしくお願いします。天堂さん♪」

「……あ、ああ……よろしくな……」

俺の学園生活はただでさえ波乱だというのに、愛淫の転校で学園生活がさらに激しくなるんじゃないかと、俺は予感していた……。

「ハァ……」

もう俺には溜息をするしかない……。

いつになったら俺はまともな学園生活を送れるんだろう……？

第二十三話　女の争いは醜いものだ……（後書き）

恭介
「愛淫が無限学園に転校か……」
天城
「これから大変になるなｗｗ」
恭介
「でもさ、意外にもこれがきっかけで、由美と愛淫が仲良く…」
由美
「なんで私の学園に転校してくるの！！？」
愛淫
「私は正式な手続きをしてこの学園に転校してきましたのよ？なにか文句でも？」
由美
「来るな！！帰れ！！このバカ女！！」
愛淫
「あなた……少しお仕置きが必要ですね……」
由美
「ぶっ殺す！！」
恭介
「作者！！あの二人、全然仲良くする気が無いんだけど！！なんとかして！！！」
天城
「……」
恭介
「聞いてる！？作者！！？」
天城
「突然ですが！！ここでキャラクターまとめ表を表示したいと思います！！」

恭介
「ちょっと！！？作者！！？」
天城
「二十一話の後書きでキャラクターのまとめ表を作るって言っていたじゃないか！ちなみにまとめ表には二十三話までに登場、もしくは名前が出てきたキャラのみです！ではどうぞ！」

読み方
『原作』
名前《クラス・職業》

無限学園登場キャラクターまとめ表（二十三話まで）
『オリジナル』
天堂恭介《高等部二年Ｚ組》
千堂由美《学園長》
千堂勇真《世界を渡り歩くなんでも屋》
不動永人《高等部二年Ａ組》
風間愛淫《高等部二年Ｚ組》

『魔法少女リリカルなのはシリーズ』
高町なのは《高等部三年Ａ組》
フェイト・Ｔ・ハラウン《高等部三年Ａ組》
八神はやて《高等部三年Ａ組》
ヴィータ《高等部三年Ｂ組》
シグナム《高等部三年Ｂ組》
シャマル《保健室の先生》
スバル・ナカジマ《高等部二年Ｚ組》
ティアナ・ランスター《高等部二年Ｚ組》
エリオ・モンディアル《初等部五年Ｂ組》
キャロ・ル・ルシエ《初等部五年Ｂ組》

『けいおん！』

平沢唯《高等部二年Ｚ組》

秋山澪《高等部二年Ｚ組》

田井中律《高等部二年Ｚ組》

琴吹紬《高等部二年Ｚ組》

中野梓《高等部一年Ｚ組》

山中さわ子《高等部二年Ｂ組担任》

『銀魂』

坂田銀時（銀八）《高等部二年Ｚ組担任》

志村新八《高等部二年Ｚ組》

神楽《高等部二年Ｚ組》

志村妙《高等部三年Ｃ組》

お登勢《喫茶店の店長》

キャサリン《喫茶店の店員》

近藤勲《高等部三年Ｄ組》

土方十四郎《高等部二年Ｂ組》

沖田総悟《高等部二年Ｂ組》

桂小太郎《高等部二年Ｚ組》

エリザベス《桂のペット》

『涼宮ハルヒの憂鬱』

涼宮ハルヒ《高等部一年Ｚ組》

キョン《高等部一年Ｚ組》

長門有希《高等部一年Ｚ組》

朝比奈みくる《高等部二年Ｂ組》

古泉一樹《高等部一年Ｚ組》

『ＡｎｊｅｌＢｅａｔｓ！』

音無結弦《高等部二年Ｚ組》
仲村ゆり《高等部二年Ｚ組》
立華奏《高等部二年Ｚ組》
日向秀樹《高等部二年Ｚ組》
ユイ《高等部一年Ｚ組》
野田《高等部二年Ｚ組》
岩沢《高等部二年Ｂ組》
ひさ子《高等部二年Ｂ組》
関根《高等部一年Ｚ組》
入江《高等部一年Ｚ組》
高松《高等部二年Ｂ組》
藤巻《高等部二年Ｂ組》
松下《高等部二年Ｂ組》
大山《高等部二年Ｂ組》
ＴＫ《高等部二年Ｂ組》
竹山（クライスト）《高等部二年Ｂ組》
椎名《高等部二年Ｂ組》
遊佐《高等部二年Ｂ組》

『とある魔術の禁書目録・とある科学の超電磁砲』
上条当麻《高等部一年Ｚ組》
インデックス《学生寮に居候》
御坂美琴《中等部二年Ａ組》
月詠小萌《高等部一年Ｚ組担任》
木山春生《中等部二年Ａ組担任》

『ハヤテのごとく！』
綾崎ハヤテ《高等部二年Ｚ組》
三千院ナギ《高等部二年Ｚ組》
桂ヒナギク《高等部二年Ｚ組》

タマ《ナギのペット》

『バカとテストと召喚獣』
吉井明久《高等部二年Ｚ組》
姫路瑞希《高等部二年Ｚ組》
島田美波《高等部二年Ｚ組》
木下秀吉《高等部二年Ｚ組》
坂本雄二《高等部二年Ｚ組》
土屋康太（ムッツリーニ）《高等部二年Ｚ組》
霧島翔子《高等部二年Ａ組》
西村教諭（鉄人）《補習室担当》

『コードギアス反逆のルルーシュ』
ルルーシュ・ランペルージ《高等部二年Ａ組》
Ｃ，Ｃ，《学生寮に居候》

『そらのおとしもの』
桜井智樹《中等部二年Ａ組》
イカロス《中等部二年Ａ組》
見月そはら《中等部二年Ａ組》

『魔法少女まどか☆マギカ』
鹿目まどか《中等部二年Ａ組》
暁美ほむら《中等部二年Ａ組》

『リトルバスターズ！』
真人《高等部二年Ａ組》

『インフィニット・ストラトス』
織斑一夏《高等部一年Ａ組》

篠ノ之箒《高等部一年Ａ組》
セシリア・オルコット《高等部一年Ａ組》
凰　鈴音《高等部一年Ａ組》
シャルロット・デュノア　《高等部一年Ａ組》
ラウラ・ボーデヴィッヒ　《高等部一年Ａ組》

天城
「簡単に作りましたがどうでしたでしょうか？分かりにくかったらすいません……。では今回の次回予告は……」
愛淫
「はい♪この私、風間愛淫が務めます！次回予告！次回はシスコン寮長ルルーシュさんが主役のお話です！彼の一日を見るらしいですよ。そして次回も新キャラが登場！手乗りタイガーとかいう奴が出たり、筋肉馬鹿が出たり、迷子の霊能力者が出たりするらしいですよ。なんだか面白い話になりそうですね！次回もお楽しみに！！」
由美
「へたくそな次回予告……。お兄様の方が素晴らしかったわ！」
愛淫
「ブラコンは黙りなさい」
由美
「殺してやるーーーーー！！！！！」
恭介
「やめろお前ら！！！おい作者！なんとか…」
天城
「次回またお会いしましょう！！」
恭介
「勝手に終わるなーーーーー！！！！！」

第二十四話　とあるシスコン寮長の生活（前書き）

ルルーシュ・ランペルージの独り言

ナナリーは最高の妹だ！！ナナリーに勝る妹なんぞ存在しない！！！可愛さ、優しさ、頭の良さ、なにもかも素晴らしいの一言だよ！！ナナリー最高！！ナナリーは素晴らしい！！ナナリー！！！ナナリィィィィィィィィィィーーーーーーーーーーー！！！！！！

恭介

「うるせーよ！！！！（怒）」

第二十四話　とあるシスコン寮長の生活

《学生寮・ルルーシュの部屋》

『お兄様、朝ですよ♪お兄様、朝ですよ♪』

「うっ…朝か……」

時計を見れば朝の6時、もうそろそろ起きないとな。
ナナリーの声が録音されている目覚まし時計のスイッチを切って起き上がった。
それにしてもこの目覚まし時計はやはり最高だ。爽やかな朝を迎えられる。

おっと！自己紹介が遅れたな。
俺の名前はルルーシュ・ランペルージ。この無限学園の学生寮の寮長である。
なに？今回は天堂恭介視点じゃないのかって？
いつもあの変態じゃあ飽きるだろう？だから今回は俺視点だ。

さて、まずはナナリーの朝ご飯を作るとしよう。今日はパンと目玉焼きと…

むにゅ

ん？なにか柔らかい物の触る感触がする。俺はすぐさま触っている物がなんなのか確認してみると……。
緑の髪の女性の胸を触っていた。

「うわぁ！！」

俺は驚いて、ベットからすぐに離れた。
そしてその女性をよく確認してみると、C，C，だった。

「なんだC，C，か…」

ビックリした。一瞬泥棒かと思ったじゃないか。
ていうかなんで俺のベットで寝ているんだ？
まさか……寝ぼけて俺のベットで侵入してきたというのか……？

「ん……？なんだ朝か…？」

C，C，が目を覚ました。彼女はキョロキョロあたりを見渡し俺のベットで寝ていることに気付いた。

「……おはよう…シスコン童貞寮長」

「シスコンだけでなく、童貞と呼ぶようになったか……」

「私の寝ている最中に何かしたのではないか？この童貞」

「安心しろ。それは有り得ないから」

お前を襲う物好きがいるのか？そんな奴がいるならぜひ会わせてほしいもんだ。

「貴様……こんな美女がいるのになにもしないのか？」

「黙れ魔女。とにかく俺はこれからナナリーの朝ご飯を作るから、

お前はこの部屋を片付けておけ」

部屋はいつものように散らかっている。昨日C，C，が散らかしてそのままの状態みたいだ。C，C，が責任もって片付けるべきだと思い、C，C，にそう命じた。

するとC，C，は再びベットに横になり、

「めんどくさい。嫌だ」

拒否しやがった。

こいつ……！俺の命令に逆らうとはいい度胸しているじゃないか……！

俺に逆らうとどうなるか思い知らせてくれる！

「C，C，……言うことが聞かないのなら、今後ピザの注文は…」

「…しないと言うのだろう？ふふふ…残念だったなルルーシュ！」

C，C，が意地の悪い笑顔を浮かべながら、部屋に置いてあった冷蔵庫の前に立った。

なんだ……？何がおかしい……？

「これを見るがいい！！」

冷蔵庫を開くと、その中には大量の冷凍ピザが置いてあった。

「お前の脅しに何度も屈服する私と思ったか！？お前がそんなことを言うと思い、大量の冷凍ピザを買い込んだのだ！どうだ！？これならしばらくはピザに困ることはあるまい！！」

「いや待て!!お前、こんなにピザを買うお金なんてあったのか!!?」

こいつは金を持っていないはずだ。（俺が管理しているから）だというのになぜこいつがピザを買うお金を持っている……？

まさか……こいつ……。

「お金？ああ…お前の貯金から下ろさせてもらった」

「ああ！やはりそうか♪……って…オイコラァァァァァ！!!!（怒）」

俺はすぐさま、戸棚の引き出しを開き、貯金通帳を確認すると……。

やはり……下ろされていた……。

せっかく……貯め込んでいたのに……。貯めて……ナナリーにプレゼントでも買おうと思っていたのに……。

この……!!腐れピザ魔女め……!!!!（怒）

「なんだ？文句でもあるのか？」

「大有りだ!!!（怒）C，C，！貴様……よくもナナリーのプレゼントを奪ったな……!!!!」

「いや……奪ったのはお前の金だが……？」

「黙れ!!!この腐れピザ魔女め!!」

「なっ!!?貴様……！腐れはないだろう!!このシスコン童貞男

が！！！」

「童貞はやめろ！！！こうなったらお前を教育してやる！！！二度と変な真似をさせないためにな！！！」

「やる気か！？ふん……！いいだろう！かかって来い！！逆に私の奴隷にしてやる！！！」

俺はC，C，に飛びかかったが、C，C，は余裕でこれを回避した。ニヤニヤしながら笑うC，C，に腹を立てた俺は、C，C，の足を引っ張った。

するとC，C，バランスが崩れてしまい、ベッドへ倒れた。

チャンスだ！C，C，が立ち上がる前に動きを押さえようと、C，C，に跨り馬乗りにした。

「フハハハハハ！！！チェックメイトだC，C，！！観念しろ！！」

俺の勝利は確定！もはやC，C，にはなにもできない！今までの恨みを晴らせる！

しかし、C，C，は笑顔だった。こんな不利な状況なのになぜ笑える？

疑問が浮かんでいた時、C，C，は笑いながら口を開いた。

「ふふふ……かかったなルルー シュ」

「なんだと？」

C，C，の言っている言葉が分からない。どういうことだ？

「そろそろ時間だな……」

ガチャ！

部屋のドアが開く音が聞こえてきた。誰かが入ってきたのか？

「お兄様、おはようございます♪いつまで寝ているんですか？」

玄関から聞こえてくる声に聞き覚えがある。

ナナリーだ。我が愛しい妹のナナリーの声だ。

「お兄様？もうこんな時間ですよ？早く仕度をしないと、遅刻しま…」

足が不自由な為車椅子を使用して入ってきたナナリーは、もう制服に着替えていた。さすがナナリー、準備が早いじゃないか。そして制服が良く似合う。ああ……愛しい愛しい（重要なんで二回言いました）可愛い妹ナナリーよ！お前の可愛さあまり、抱きしめて、チュッチュッをしてやりたいよ！！

それにしてもナナリー？なぜお前はケダモノを見るような目つきで兄を見ているんだい？

「お兄様は不潔です！！」

いきなりそんなことを言ったナナリーは部屋を飛び出して行った。

いったいどうしたんだ？

そう疑問に思っていた時、俺は今更になってあることに気付いた。

俺は今、ベットの上で、C，C，に跨っている。この状況は……。

あまり妹に見せるべきものではない……。

「ナナリー待ってくれ！！これには訳があるんだ！！！頼むからお兄ちゃんの話を聞いてくれ！！！戻ってきてくれぇぇぇぇぇぇぇーーーーー！！！！！」

大声でナナリーを呼ぶも、もうナナリーには聞こえなかった。
最悪だ……。ナナリーにあんな姿を見せてしまうなんて……。

「ルル…シスコン童貞寮長……」

C，C，が頬を染めながら、色っぽい声で言った。

「子供は……何人欲しい……？……ぷぷｗｗ」

「この……バカ魔女ぉぉぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーーー！！！！！！（怒）」

《無限学園・校舎》

「ハァ……」

あの後、ナナリーに説明してなんとか誤解を解いた。時間がかかってしまい、結局朝ご飯を食べていない。あのクソ魔女め……！！いつかギャフンと言わせてやる！！
とりあえず教室まで行こうか……。
靴箱に靴を入れ、上履きに履き替えて教室へ行こうと思っていた時、

廊下でウロウロしている和服の女の子を見つけた。あいつは……。

「おろおろ……おろおろ……」

伊澄だ……俺のクラスメイトの鷺ノ宮伊澄（さぎのみやいすみ）じゃないか。

長い黒髪に、いつも和服を着ている。俺よりも年下なのだが頭の良さで飛び級で進学した女の子である。

なぜ彼女がこのような場所でウロウロしているのかと、普通の人なら考えるだろう。だが俺には分かる。なんせあいつのクラスメイトだからな。おそらく彼女“特有の体質”のせいだろう。

「おい伊澄？なにをしている？」

俺が声をかけると、伊澄は俺に振り向き、明るい表情になった。

「ルルーシュさんおはようございます。実は……教室が分からなくなってしまったんです……。いったいここはどこですか……？」

やはりそうか……。伊澄は頭は良いが、迷子になりやすいという特徴がある。

かつて伊澄は二年Z組の教室に居る、三千院ナギのところへ向かった際、迷ってニューヨークまで行ってしまったという武勇伝がある。

とにかく迷子になりやすいから、先生方も伊澄の行動には注意して見ているらしい。

まあ、迷子になりやすいというのも、無限の可能性の一つなんじゃないかな……？

「伊澄……教室はこっちだ。俺と一緒に来い」

「はい、ありがとうございます」

伊澄は俺に一礼をして、トコトコついてきた。同じクラスメイトだからな、放っておくわけにもいかない。俺と伊澄はそのまま二年Ａ組の教室へ向かうことになった。

《二年Ａ組の教室》

「ほら伊澄、着いたぞ。ちゃんと覚え……ん？伊澄？」

一緒についてきたはずの伊澄がいない。まさか……また迷子になったのか……？

「仕方ない奴だ……」

一応風紀委員に連絡し、伊澄の捜索を依頼した。これで大丈夫だ……外国に行っていなければの話だが……。あいつの迷子能力はある意味ギネスに載るぐらいだからな……。

そんなことを思いつつ、溜息をしていた時。

「あ、おはようルルーシュ！」

「おっす！」

挨拶をする声が聞こえてきた。振り向くと、四人の男女が立っていた。

「おはよう、理樹、真人、謙吾、鈴」

俺は四人に挨拶をした。こいつらは俺のクラスメイトである。一応紹介しておく。

一人目の男が直枝理樹（なおえりき）。温厚な性格で、クラスメイトに対し親しく接している。余談だが、なぜか男に好かれるらしい。

二人目の男は井ノ原真人（いのはらまさと）。クラス一のバカであり、筋肉バカでもある。理樹とは仲が良く、一緒に行動していることが多い。ただナイーブな部分があって、理樹に相手にされなかった時にはすごい落ち込んでいることもある。

三人目の男は宮沢謙吾（みやざわけんご）。実家が剣道場を開いている影響のせいかは知らないが、常に剣道着を着ている。理由について聞いてみると、『制服を着ると、その手の人と勘違いされる……』と言っていた。真人とは喧嘩仲間でもある。

そして四人目の女子は棗鈴（なつめりん）。茶髪のポニーテイルが特徴で、外見は可愛いから、男子の人気は高いのだが、人見知りが激しいので、あまり他のクラスの生徒とは話をしない。ちなみに大のネコ好きで、よく休み時間に野良ネコとじゃれ合っていることがある。

以上で紹介終了！あぁ……疲れた……。

「ルルーシュ、今日はいつもより遅いね？何かあったの？」

俺がいつもより遅く来たことに対し、理樹が疑問に思って聞いてきた。

もちろんちゃんとした理由がある。だが……。

☆ルルーシュがいつもより遅く来た理由

C，C，に跨っているところをナナリーに見られ、変な誤解を生み、その誤解と解く為に遅くなった。

あまり言いたくない……。

「きょ、今日は寝坊してしまってな……」

「ほう……お前でも寝坊することがあるのか？」

珍しいと言わんばかりの表情で謙吾が言った。

「なんだよ……筋肉を鍛えて遅れたんじゃねぇのかよ……。つまんねぇな……」

「そんな理由で遅れるかっ！！」

「そうだよ、真人じゃないんだから……」

「ん？いや待てよ……。理樹、遅刻した時に『筋肉を鍛えていて遅れました！』と言えば先生は許してくれるかもしれないぞ！」

それは絶対あり得ない。筋肉を鍛えていたという理由で遅刻を許せる訳が無い。相変わらずこいつは筋肉バカだ。一回こいつの脳をスキャンした方がいいんじゃないか？

「おい！いい加減に教室に入るぞ！！話が長いんじゃボケェ！！」

いきなり鈴が叫んだのでビックリした。まあ鈴の言うとうりいつまでもここに居るわけにもいかないから、さっさと教室に入るとしよう。

「わかったよ……。ほら真人！さっさと入るぞ！」

「なんで俺に言うんだ？」

真人の言っていることは無視して、俺は二年Ａ組の教室の扉を開けた。

「みんなおは…」

ようと言おうと思ったが、目の前の光景を見て、俺は固まってしまった。

二年Ｚ組の坂本雄二が両手両足を縛られ、目と口を塞がれて座っていたのである。

そして坂本の前には長い黒髪の美女がスタンガンを持って立っていた。

「……雄二……？浮気は許さない……！」

「ふぉうふぉ！ふぉふぁいふぁ！ふぉふぇはふぁひふぉ……（翔子！誤解だ！俺はなにも……）」

「……えい…♪」

ビリビリビリビリビリ！！！

「ぎゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーー！！！！」

またやっているのか……。一応紹介しておく……。

この女性は霧島翔子（きりしましょうこ）。俺達のクラスの学級委員長である。

ちなみに、坂本雄二とは恋人の関係である。（坂本は否定しているが）今回は浮気がばれて霧島にお仕置き（処刑）されているみたいだな。

「……おはよう…霧島」

「……おはようルルーシュ」

俺が挨拶をすると、霧島はこっちを向いて礼儀正しく挨拶をした。

変な奴だが、こいつはこれでも成績優秀で人望もあり、由美学園長からも気に入られている。

「朝から忙しいな……」

「……うん…雄二が浮気するから」

「浮気？誰に浮気したの？」

理樹が霧島に聞くと、霧島は坂本の携帯を取り出し、俺達に見せた。

「……着信……メール回数が多いのは……吉井明久……浮気相手は……吉井明久…」

「「「「「吉井明久！！？」」」」」

霧島の口から出てきた名前を聞いて、俺達は驚いた！
吉井明久！？真人同様の大バカだと噂になっているあの吉井明久！
！？確かにあいつは坂本と一緒に居ることが多いが……まさか……
！そう言う関係だったのか……！？だとしたら……。

「坂本と吉井は……ゲイ！？」

「気持ち悪いなお前！！」

鈴が汚物を見るような目つきで坂本を見つめていた。確かに気持ち悪い……。

「ふぉふぁいふぁ！！！（誤解だ！！！）」

「……雄二は黙って…」

ビリビリビリビリビリビリビリ！！！

「ぎゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！」

哀れな奴だ……。霧島という可愛い彼女がいるのに、他の女…あ、違った。他の男に手を出すとは……同情の余地が無いな……。

「ふぁから！ふぃふぁ…（だから！ちが…）」

ビリビリビリビリビリビリビリ！！！

「ぎゃあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーー

ーーー！！！！！！！」

「……雄二にはもう少し教育が必要……」

まあこの二人に関してはもう放っておこう。熱いカップルの恋路を邪魔するつもりはないから。

「ふぃあ！ふぁふふぇ…（いや！助け…）」

ビリビリビリビリビリビリビリビリビリ！！！

「いやあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！！！！」

「霧島……。ほどほどにしておきなよ……」

「……うん。あと二十分したらやめるから」

あと少しで授業が始まるんだが……。まあいっか。

さて、俺も席に座って次の授業の準備をしなければな。

そう思って、自分の席に向かおうとしていた時だった、突然真人が声をかけてきた。

「おいルルーシュ！頼みがある！」

「なんだ真人……？くだらない話ならギアスをかけて、死ねと命じるぞ」

「お前クラスメイトに対してギアスで死ねと命じるのか！？」

「当たり前だろ？俺達は友達なんだから♪友達にギアスをかけてなにが悪いｗｗ」

「悪いわ！！とにかくくだらない話じゃないから、とりあえず聞け！」

「……仕方ない…とりあえず言ってみろ」

「すまねぇが、お前の辞書と筋肉を貸してくれ！」

「ルルーシュ・ランペルージの名において命じる。真人、死…」

「はいストップ！！！！！真人にギアスをかけるのは止めようね！！！！」

せっかく真人にギアスをかけてやろうとしていたのに……理樹に邪魔されてしまった……。おのれ理樹め！！邪魔しやがって！！！

「ちなみに、真人にどんな命令をするつもりだったんだ？」

鈴が無邪気に聞いてきた。聞かれた以上、答えなければな。

「こら鈴！そんなことを聞かなくても…」

「喉を掻き毟って死ぬか、へそを噛んで死んでしまえという命令を…」

「そんなことを命令しようとしていたの！？ていうかへそを噛んで死ぬってどういう死に方だよ！！？」

さすが理樹だ。ツッコミも完璧じゃないか。伊達に『二年Ａ組のツッコミ係』という称号を持っているだけのことはある。

さて、くだらん話はここまでにして、話を戻すか。

「真人。自分の辞書を持っていないのか？」

「ああ、昨日大河に貸してやったんだ！貸してくれと頼まれたからな」

ほう……。真人にしては優しいじゃないか。しかもあの大河に……。……ん？待てよ……。昨日出た宿題って、辞書が無いと解けないやつじゃなかったけ……？

ということは……。

「真人、一つ聞くが……宿題は……？」

「おう！忘れたぜ！！」

やっていないの間違いじゃないか……？

「だからルルーシュ！辞書と宿題と筋肉を貸してくれ！！」

「喉を掻き毟って死ぬか、へそを噛んで死ぬか、校舎の屋上からひも無しバンジージャンプをするか、魔王の一撃（なのはのスターライトブレイカー）をくらって死ぬか選べ」

「ルルーシュ、死に方が増えてない……？」

いちいちうるさいな理樹は！なぜこの男にギアスをかけるのを邪魔

するんだ！？
こうなったら、理樹を先に黙らせて、それから真人を殺るか……。

『真人ぉぉぉぉぉぉーーーー！！！！！どこだぁぁぁぁぁーーー！！！！！？』

『大河！落ち着け！』

真人暗殺計画を考えている最中に、廊下の方から大声で怒鳴る女の声と、その女を落ち着かせようとする男の声が聞こえてきた。
この二人の声の主は知っている。俺のクラスメイトの声だ。

「真人はどこ！？真人を差し出せ！！」

教室の扉が開き、そこから現れたのは、背の低い茶髪の女の子だ。
左手に辞書を持っており、右手には木刀を持っていた。
女の子は教室をキョロキョロ見回し、誰かを探している。おそらく真人を探しているんだろう。
女の子は俺達と一緒に居る真人を発見すると、狩人の目つきになって。

「見つけた……このキモ筋肉バカ男！！！！」

大声で叫びながら、真人の後頭部にドロップキックを喰らわせた。
真人は吹っ飛び黒板に激突した。

「真人ぉぉぉぉぉぉーーーー！！！！」

理樹は叫びながら、真人のもとへ駆けつけに行く。鈴も駆けつけに

行くかと思いきや。

「ナイスキック♪」

ドロップキックをした女の子を褒めていた。まあ確かにナイスなキックだったな。

「真人大丈夫!?」

「ああ……大丈夫だ理樹……」

理樹に支えられて、真人が立ち上がった。真人の制服は先程の衝撃で、少々汚れていた。
そして真人はキックした女の子を睨みつけて怒鳴った。

「おい!いきなりなにしやがる!?大河!!」

キックをした女子の名前は逢坂大河(あいさかたいが)。クラスでは手乗りタイガーと恐れられている女の子だ。常に木刀を装備しており、気に入らない奴がいたらその木刀でボコボコにするらしい。

大河は左手に持っていた辞書を真人に見せて言った。

「よくも……こんなトラップ付き辞書を私に渡したわね……!!狙ってやったの!?だったら絶対に許さない!!!!」

トラップ付き辞書?なんのことだ?見た限り普通の辞書だが……?
そう疑問に思っていた時、教室に目つきの悪い男が入ってきた。

「おい!大河!落ち着け……手遅れか……」

目つきの悪い男は大河と真人の姿を見つけ、やれやれと首を振って溜息をついた。

男の名前は高須竜児（たかすりゅうじ）。大河からは親友……というかペットとして見られている。外見だけを見ると、目つきの悪いヤクザみたいな男にしか見えないが、意外にも料理、洗濯、掃除といった家事全般を完璧にこなす優秀な奴だ。そしていい奴でもある。人間、外見だけで判断しちゃ駄目だよな……。ちなみに噂だが、大河と付き合っているらしい……。

「大河、いったいこれはなんの騒ぎなんだ？」

とりあえず、なぜ大河が怒っているのか、本人に聞いてみるとしよう。

「トラップ辞書を私に渡してはめようとしたのよ！！！」

「そのトラップ辞書ってなんだ？」

「真人の辞書よ！！」

「そのトラップの内容は？」

「真人のトラップよ！私をはめようとしたトラップなのよ！！」

「何のトラップだ！？」

「最悪なトラップよ！」

ダメだ……怒りのせいで話にならない……。大河に聞いても時間の無駄だ。
こうなったら竜児に聞いた方が早いな。

「竜児、これはいったいなんだ？」

竜児は大河が持っている辞書を取り上げ、なにも言わず俺に渡した。
何なんだ？

「……辞書を開いてみろ。理由はすぐに分かる……」

いったいどういうことか分からなかった。この真人の辞書を開けば分かるだって？見た限り、普通の辞書だけど……何なんだ？
まあ開ければ分かるか。竜児の言うとうりに、辞書を開いた。

「これのなにが…」

辞書を開けた瞬間、悲劇が起きた。

辞書から悪臭…いや！死臭がした！！！

とにかく……臭い！！！！

「「「「「ぎゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！」」」」」

あまりの臭さにその場に居た俺、理樹、鈴、謙吾は教室に響く程の悲鳴を上げた！だって臭いんだもん！！
そしてその臭いは教室に充満した！

『きゃあああぁぁぁぁーーーー！！！なにこの匂い！！？』

『臭い！！！臭いよ！！！』

『誰か！！生徒の一人が倒れたわ！！シャマル先生を呼んで！！』

『新型の科学兵器か！！？』

『ふぉうこ！！ふぁんだふぉのふぃお……（翔子！！なんだこのにお……）』

バタン！

『……雄二が倒れた……ていうか臭い……』

教室がパニックだ！！なんとかしないと！！

「謙吾！この辞書を外へ投げるんだ！！」

「わかった！」

謙吾は鼻を摘まみながら、辞書を窓の外へ投げた。

「理樹！鈴！窓を開けろ！！」

「分かったよ！」

「お前が命令するな！」

やかましい！今はそんなことを言っている場合じゃないだろう！！

理樹と鈴は窓を開けた。これで安心だ……。

さてと……。

「真人……」

「ん？なんだ？」

「ルルーシュ・ランペルージが命じる……。死…」

「だからギアスはダメだって！！」

「止めるな理樹！！この化学兵器を作った愚か者を排除しなければ！！！」

「ルルーシュ！そいつは私が殺すのよ！！」

いいだろう！この際大河でもいい、早く真人を…

「だからダメだって！！」

「……もうこいつらバカだな」

鈴が呆れた表情で言ったが、こいつらってことは……俺もバカの一人なのか……？こんな奴らとは一緒にされたくない……。

その後大河による真人のお仕置き（処刑）が終了し、俺達はいつものように授業を受けるのであった。

まったく……なんで毎回こんなに騒がしい一日になってしまうんだ

……。

まあこれが無限学園の日常ってことかな。

ん？そういえば……何か忘れているような……？

まあいっか。

《一方伊澄は……》

「おろおろ……おろおろ……。こ、ここはどこなんでしょう……？ルルーシュさんはどこに行ってしまったんでしょうか……？あ、あのすいません……！二年Ａ組の教室はどこなんでしょうか？」

「オーウ！ワタシニホンゴワカリマセン！ホカノヒトニキイテクダサイ！」

「そ、そんな……。ルルーシュさ～ん！どこに居るんですか～！？」

伊澄はまだ迷子中であった……。

第二十四話　とあるシスコン寮長の生活（後書き）

恭介
「今回は俺視点じゃないのかよ……。ていうか俺の出番がないぞ！！」
天城
「たまには良いじゃないか……。今回はルルーシュの視点で二年Ａ組の様子が見れたんだからいいだろう？」
恭介
「でも俺の出番が…」
天城
「はい無視」
恭介
「無視すんな！！」
ルルーシュ
「おい！そこの二人！いつまでくだらん話をしているんだ！！ゲストを待たすとはどういうことだ！？」
天城
「はい？ゲスト？」
ルルーシュ
「そうだ！今回俺が主役だから俺がゲストなんだろう？」
天城
「いや、違うけど」
ルルーシュ
「なに！？」
天城
「今回のゲスト兼次回予告担当は伊澄ですけど」
ルルーシュ
「なんだと！！」

伊澄
「ど、どうも……」
ルルーシュ
「なんで俺じゃないんだ!!?」
天城
「うるさいぞシスコン」
ルルーシュ
「黙れ!!俺はシスコンじゃない!!俺はただナナリーを…」
天城
「無視無視!あいつは放っておいて、伊澄さんお願いします!」
伊澄
「では次回予告です。次回は夏だということで恭介さん達はプールに行かれるらしいです。……お終いです……」
天城
「終わり!!?も、もうちょっとなんかコメントを…」
恭介
「やったーーーー!!!!!プールだ!プールだ!!プーーーーールだぁぁぁぁぁぁぁーーーーー!!!!!プールと言えば……水着!!水着祭りだ!!!ハッ!もしかして……フェイトさんの水着姿が拝めるチャンスか……!!?……ふふふふふふふ……ははははははははははwww次回が楽しみだよ……。おっと、鼻血が出てしまったか……フェイトさんの……水着……ふへへへへへへへwwww」
伊澄
「なんかこの人怖いです……」
ルルーシュ
「変態だな……。気持ち悪い……」
天城
「とりあえず警察に連絡しよう……。では次回また会いましょう!!!」

第二十五話　分かっているとは思いますが、盗撮は犯罪です（前書き）

フェイト・T・ハラオウンの独り言

恭介君？優しいし、いい人だと思うよ♪変態って言われているけど、
あれは嘘だよね？恭介君がそんなことをする訳ないよね？
なのはもそう思うよね？……あれ？……なんでなにも言わないの、
なのは……？
う、嘘だよね……あの恭介君が変態な訳ないよね……？ねえなのは
！なんか言って！！

なのは
「フェイトちゃんは知らなくていいんだよ……」

第二十五話　分かっているとは思いますが、盗撮は犯罪です

《学生寮・恭介の部屋》

「今なんと言った……？」

現在俺の部屋には四人の男がくつろいでいる。明久、雄二、音無、日向の四人だ。

俺はこの四人と一緒にゲームをしていたんだが、ゲームの最中、日向の口から出た魅力的言葉を聞いた。その言葉は聞き違いじゃないのかと思い、もう一度聞き直そうとしていた。

「いや、だから明日みんなでプールに行こうと思っているんだが、お前も行くか？」

何を言っているんだ日向君？プールという魅力的言葉が出たんだ。もちろん俺の答えは……。

「行く！行きたい！！マジで行きたいです！！！私をプールに連れてって！！！！」

「お、おう……。テ、テンション高いなお前……」

現在俺のテンションゲージはＭａｘ状態だぜ！

そう！プールには……水着を着た女の子がいるじゃないか！！！

水着……それは人類最大の発明品！あの水着を着た女の子達はエロエロすぎて鼻血が止まらない程の刺激を与えてくれる！

そんな水着を着た女の子達が居るプールに行かない訳がない！

「ていうかプールってどこのプールに行くんだ？」

「この学園のプールさ。結構広いプールだから、学園の生徒が全員入っても大丈夫なんだぜ」

雄二がプールについて説明してくれた。

なるほど……この学園にはプールがあるのか。まあこんだけ広いからプールがあってもおかしくないよな。

「ん……？待てよ……。学園の生徒が使うプールなんだよな……？」

「ああ、そうだが」

「てことは……フェイトさんも来るかもしれないってことか！？」

「……たぶんな」

よっしゃぁぁぁぁーー！！！

フェイトさんが来るかもしれない！ということは、フェイトさんの水着が見れる！

いや！もしかすると、フェイトさんルートの恋愛イベントも発生するかもしれない……！

恭介（バカ）

『フェイトさん！それ！』

バシャ！

フェイト

『きゃあ！冷たい！やったね恭介君！お返し！』

バシャ！

恭介（アホ）
『わあ！やりましたねフェイトさん！』

フェイト
『ふふふ♪ここまでおいで♪』

恭介（変態）
『待ってくださいよ！フェイトさん！』

フェイト
『私に追いついたらご褒美をあげるよ♪』

恭介（性犯罪者）
『分かりました！絶対に追いついてみせます！』

フェイト
『もう♪恭介君ってば♪ウフフフフフ♪』

恭介（変態クソゴミ犬）
『アハハハハハハハハハハ♪』

（※これは変態恭介の脳内妄想です）

「我が世の春がキタァァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

「意味がわからん……」

「もう夏だけど……？」

「明久、放っておけ……。今のうちに夢でも見させてやろうぜ」

やはり俺とフェイトさんは結ばれる運命だったんだな！！フェイトさん、あなたの水着姿を拝みに今参ります！

いざ行かん！魅惑とフェイトさんエンディングが待っているプールへ！！

「今からじゃないぞ。明日だ」

《翌日・無限学園学生プール》

天気は晴れ！海パンの準備よし！カメラの準備ＯＫ！え？なぜカメラが必要だって？フェイトさんの水着姿を撮影する為だよ！フェイトさんの水着姿が拝めるんだぞ！カメラに収めるべきものだろう！！？

それにしてもみんな遅いな……。９時に集合と言っていたが、早く来てしまったのかな？

「よう、恭介！早いな」

最初に来たのは、日向、音無、ゆりっぺ、奏、野田だった。

「やあ、日向、音無……なんで野田もいるんだ？」

「居たら悪いのか？」

「別に悪いとは言っていないが……」

「どうしても行きたいと言ってきたのよ」

なるほど……ゆりっぺが居るから一緒に行きたいと。相変わらずゆりっぺが大好きなんだな。

「ところで恭介君？そのカメラはなにを写す為に用意したの？」

ゆりっぺは俺が持っているカメラを見て言った。

さて……どう言い訳をするか……。素直に女性の水着姿を撮影（盗撮）する為に持ってきたと言えば怒るだろうな……。最悪な場合、由美に通報する可能性がある。そうなったら……殺される！

「えっと……そう！夏の思い出として、みんなが遊んでいる姿を撮ろうとしていたんだよ！」

「本音を言いなさい」

「え……？ゆりっぺなんのこと……？」

「本当は女の子の水着姿をそのカメラで撮ろうしていたんでしょ？」

なぜゆりっぺはこうも勘が鋭いんだ！？俺の考えがお見通しじゃないか！？

「そ、そんな訳ないだろう！俺が変態みたいなことをするわけ……」

「由美さんにばらすわよ。たぶん盗撮したってばれたら……生きて学生寮には戻れないわ」

「すいません！ｏｒｚ　盗撮はしませんから！由美にばらさないでください！！」

くそ！俺の盗撮計画がゆりっぺによって邪魔されるなんて！！

「あ、そうだ！奏ちゃん」

「ガードスキル・ハンドソニック」

奏ちゃんの能力が発動し、腕から刃が出てきた。そしてその刃で俺のカメラを切った。

「あああああああああああぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！俺のカメラがぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！」

せっかく高い金を出して買ったのに！！なんてこった……これじゃあフェイトさんの水着姿が撮れないじゃないか……（涙）弁償しろコノヤロー！！！

「あら、他のみんなも来たみたいね」

無視ですか！？

「ヤッホー♪みんなお待たせ！」

やって来たのは、吉井明久、坂本雄二、木下秀吉、ムッツリーニの

四人であった。

「あれ？姫路さん達はまだ来ていないの？」

「いや、まだ来てないぞ」

姫路も来るのか……あいつはスタイルがいいからな……特に胸が…
水着姿が楽しみだぜ！！

「恭介、何を考えているかだいたい分かるが、とりあえず涎を拭け」

雄二に言われて気づいた。俺……口から涎が垂れていたのか……。
いかんいかん！

「……水着姿を想像しただけで涎が出るって、お前…どんだけ変態なんだよ……」

「雄二！変なことを言うな！何度も言うが、俺は変態じゃない！！
真面目な学生だよ！だからゆりっぺ、奏ちゃん！俺から離れないでよ！！」

ゆりっぺと奏ちゃんは、俺から5メートル以上も離れており、軽蔑な眼差しで見ていた。
その視線が痛いから…お願い！そんな目でこっちを見ないで！！

「水着といえば、わしは今回、新しい水着を新調しておいたぞ」

「え！？そうなの！？どんなのどんなの！！？」

秀吉の水着の話に明久が食い付いた。ムッツリーニも興味津々だ。

俺も気になるから聞こう。

「では秀吉！どんな水着を買ったのか、発表をお願いします！」

「トランクスタイプじゃ！」

「「うわあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！！！！」」

秀吉の発表を聞いて明久とムッツリーニはこの世の終わりみたいな表情になり、天に向かって叫んでいた。

「な、なんじゃ……二人とも……？」

「秀吉の裏切り者！！！トランクスタイプって男の水着じゃないか！！！！」

「……信じていたのに……！！！！」

「わしは男なのじゃから、男の水着を用意するのは当たり前ではないか？」

「そこは僕とムッツリーニと読者の為に女の子の水着を用意すべきだろう！！！！」

「なにを言っておるのじゃお主は！！？」

明久の奴、相当秀吉の水着姿が見たかったようだな。でも秀吉の水着姿か……。

俺は想像してみた。あの可愛い顔、すらっと伸びた綺麗な手足、と

ても男の子と言えない秀吉が女の子の水着を着たら……うん！なかなか良いじゃないか！！

「恭介！お主は何を想像しておる！！」

おっといかんいかん！しっかりせねば！！

「皆さん！お待たせしました！！」

後ろから声が掛かり振り向くと、姫路瑞希、島田美波と茶色のツインテールの女の子がやってきた。ツインテールの女の子は身長からして、小学生くらいのだと思われる。とても可愛い女の子だ。でもなぜだろう、目のあたりが島田に似ている。
そして女の子は走って明久のもとへ向かい。

「バカのお兄ちゃ～ん♪」

いきなり抱きついた。ロリコンからしたら、羨ましい光景だろうな……言っておくが、俺は変態ではないし、ロリコンじゃないぞ！

「あ、葉月ちゃんじゃないか！」

「そうです♪葉月も一緒に来ちゃいました♪」

明久は女の子のことを知っているみたいだ。知り合いかな？

「この子も一緒に行きたいと言ってきたのよ。留守番していなさいって言ったのに聞かないから、連れて来ちゃったのよ。それで遅れてしまって……」

美波は今回遅れてきた理由を説明した。
女の子は明久に抱きつきながら俺を見ていた。

「バカのお兄ちゃん、あの人は誰ですか？」

俺とは初対面だからな、知らないのも無理はない。

「そういえば、恭介とは初めてよね？ほら葉月、あのお兄ちゃんに挨拶して」

「はいです♪」

美波に言われて、葉月と呼ばれた少女は俺の前まで出て、自己紹介を始めた。

「初めまして！バカのお兄ちゃんのお嫁さんの島田葉月です！よろしくお願いします！！」

ペコっと頭を下げた。自己紹介もできるとはなんて良い子なんだ。

「あれ？苗字が島田ってことは……」

「そう、ウチの妹」

美波の妹なのか、確かに美波とは顔つきが少し似ているな。

ん……？お嫁さん……？

「明久のお嫁さん……？」

「はいです♪バカのお兄ちゃんは葉月のお婿さんです♪」

「えーっと……異端審問会会長、須川の電話番号は……」

「ちょっと恭介!!なに須川に連絡しようとしているの!!?」

「触るなロリコン!!!!お前がこんな可愛い女の子に手を出すなんて最低な野郎だな!!!」

お前がそんな奴とは思わなかった!まさかロリコンだったなんて!!

「ソウデスヨアキヒサクン……♪ハヅキチャンニテヲダスナンテサイテイデスネ……♪」

そう言って姫路はバックから釘バットを取り出した。ていうかなんでそんな物を持っているんだ……?

「……アキ?全身の骨を折っていいかな?」

「いいわけないじゃん!!!それと姫路さん、その手に持っている凶器を片付けようね!!プールにそんな物を持ってくるもんじゃないよ!!!」

さて、明久の粛清は姫路達に任せて、俺も自己紹介をしないといけないな。

「葉月ちゃん初めまして。俺は天堂恭介。よろしくね」

「恭介さん……?あ!お兄ちゃんのことはお姉ちゃんから聞いてい

ます！」

「そうか、美波から聞いていたか」

そして葉月ちゃんは可愛い笑顔で言った。

「はい♪よろしくお願いします！変態お兄ちゃん♪」

「美波ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！（怒）てめぇこの純粋な子にいったい俺の何を教えた！！？」

「ありのままだけど？」

ありのままに教えて、なんで俺のことを変態お兄ちゃんと呼ぶ！？明久はバカだから、バカのお兄ちゃんと呼ばれるのは分かるけど、俺は変態お兄ちゃんってどういうこと！？これじゃあ俺は変態ってことじゃないか！！

「俺は変態じゃないぞ！！」

「あんたさ……いい加減自分が変態って認めたら……？」

「認めるか！！」

「……しかし行動が変態……」

「ムッツリーニに言われた！？お前だって盗撮とかしているだろうが変態め！！」

そう言ってやると、ムッツリーニはなぜかしゅん…と凹んでしまっ

た。

「……お前と一緒にするな」

「そうだよ！ムッツリーニと恭介を一緒にしないでよ！！」

明久……お前はムッツリーニの味方になる気か！？

「そうです！土屋君に謝ってください！！」

「土屋君が可哀そう……」

「今のは恭介が悪い」

「変態お兄ちゃん……今のは酷いと思います……」

「土屋に謝りなさいよ！！」

「恭介君、死になさい」

上から姫路、奏ちゃん、雄二、葉月ちゃん、美波、ゆりっぺが言った。

ていうか誰も俺の味方になろうとしないよ！！そしてゆりっぺ！死になさいは酷いよ！！

「ていうかなんで俺が謝らないといけ…」

全員

『謝れ！！！』

「……ｏｒｚ　なんでこんなことになるんだ……」

俺が悪いのか……？俺がいけないのか……！！？

寂しい気持ちになっていたが、日向はそんな俺を無視して、みんなに声をかけた。

「さてみんな！プールに行くぞ！！」

『おーーー！！』

……俺は最悪なテンションでプールの更衣室へ向かうことにした。

《更衣室》

俺達は更衣室の前まで来ている。そこには当然、男子更衣室と女子更衣室に分かれていた。

本当だったら女子更衣室に入りたかった……と、つい俺は思ってしまった。だがこんな気持ちになるのは俺以外にもいるはずだ。例えば明久とか、雄二とか、ムッツリーニとか。

「「「お前と一緒にするな！！」」」

「はいはい、分かったからさっさと行くわよ」

時間がないのでさっさと着替えようと更衣室へと向かう。

そんな時、男子更衣室に入ろうとしている人たちの中に葉月ちゃんと秀吉の姿があった。

まったく……間違えちゃダメだろ……。

「こら葉月ちゃん、秀吉、そこは男子更衣室だから入っちゃダメだろ。この学園にはロリコンもいるから気をつけないと襲われちゃうよ」

「てへ♪ごめんなさいです♪」

「恭介……わしは男なのじゃが……」

「はあ？何言っているの秀吉？秀吉が男子更衣室で着替えたら、変態共に襲われちゃうじゃないか？」

わざわざ野獣が居る場所に飛び込もうというのかい秀吉？

「恭介……お主まで……！！いいか！この際じゃから言っておくがわしは男なのじゃ！！」

「それにしても秀吉はどこで着替えたらいいのかな？」

「聞くのじゃ！！わしは男子更衣室で…」

「大丈夫だ秀吉。ほら」

雄二が指差す方向を見てみると、そこには一つの部屋があった。部屋の名は……。

『秀吉専用更衣室』

……専用なんだ……。

「なぜわしはこんな扱いなのじゃ……」

秀吉はブツブツ文句を言いながら秀吉専用更衣室に入って行った。

さて……俺達も着替えるか。

男子一同は男子更衣室に入るのであった。

男子更衣室ではすでに何人かの学生が水着に着替えていた。夏だからプールに行こうと考えているのは俺達だけではなかったみたいだな。

「おい恭介。早く着替えないと時間がないぞ」

「ああ、そうだな」

日向に急かされ、水着に着替えようとした時だった。

「うひょひょひょひょひょ♪」

「グへへへへへへへへへへへ♪」

どこからか気持ち悪い笑い声が聞こえてきた。まるで変態みたいな声だ。

「なんだ？」

「奥から聞こえてくるぞ？」

俺達は気になって笑い声がする方向に行ってみると、更衣室の奥の部屋で男達が集まっていた。

どいつもこいつも変態みたいな顔している。ハァ…ハァ…と興奮している奴も居れば、『あずにゃんペロペロ……』と言っている奴もいる。
そして男達（変態共）の後ろでは、二人の男性が慌てながら言っていた。

「あの……やっぱりやめましょうよ……」

「見つかったら殺されるぞ……」

男の一人は坂井悠二、もう一人の男は……えっと……だれだっけ…？
まあとにかく二人に近づいて、この集団のことについて説明してもらおう。

「おい！悠二」

「あ、恭介先輩！こんにちは」

「お久しぶり！それで……そちらはどなた様でしたっけ？」

もう一人の男にそう聞いたら、男はハァ…と溜め息をついて、やれやれと首を振った。

「俺のことを覚えていないんですか……？不幸に愛された男、上条当麻ですよ……」

「上条当麻……」

えっと……確か……。

「思い出したか？」

「……あ！転校初日に出会った！」

「そうそう！」

「御坂美琴と一緒にいて……」

「そうそう！！」

「その御坂美琴という彼女がいながら、インデックスと同じ屋根の下で暮らしている、最低最悪二股鈍感ロリコン不幸男の上条当麻か！」

「そうそ……ってちょっと待てよ！！いつ御坂が俺の彼女になった！？ていうか最低最悪二股不幸ロリコン男ってなんだよ！ロリコンじゃねぇよ俺は！」

まあ上条の戯れ言は放っといて、話を戻そう。

「おい！無視するな！」

うるさい、黙れ、リア充爆発しろ。

「悠二、いったいなんの騒ぎだ……？」

悠二に聞いてみると、悠二は集団の方に指差し、説明した。

「恭介先輩からも言ってあげてください！中等部二年の桜井智樹が

今から女子更衣室の中を盗撮するって言うんですよ！」

なんですと……？

女子更衣室の中を盗撮するだって……？

女子更衣室……盗撮……だと……！？

「こんなことを学園長が知ったら、殺されますよ……！恭介先輩、なんとか説得して…」

「桜井智樹！！俺にも見させろ！！！！」

俺は集団を掻き分け、奥にいる桜井智樹に会いに行こうとしていた。
それも全速力で。

「ちょっと！？恭介先輩！」

悪いな悠二、俺は男なんだ。男である以上、女子更衣室を盗撮できるという魅力的な言葉を聞いたら、見てみたいじゃないか……。
悠二……お前にもいずれ俺の気持ちが分かる時が来るはずだ……。

そして俺は集団の奥に居た桜井智樹を発見した。
桜井智樹の目の前にはテレビが置いてあり、智樹はそれを見ながら、

『うひょひょひょひょ……♪』と気持ち悪い声で笑っている。しかもよく見ると……。

「グへへへへへへ……♪お妙さ～ん♪」

同じく、気持ち悪い声で笑っている近藤……あ、違ったゴリラストーカーが居た。

「誰だ!?気持ち悪いとかゴリラストーカーとか言った奴は!!?」

ゴリラストーカーについてはみんな思っていると思うよ。

「おい桜井智樹、女子更衣室を盗撮できるというのは本当か?」

「おやおや、恭介の旦那ではありませんか?」

桜井智樹はニヤニヤと笑っている。

「誰が旦那だ。それよりも…」

「分かっていますって♪」

桜井智樹は目の前に置いてあった、薄型テレビを指差した。

「こちらのテレビを見てくだせぇ♪」

俺は智樹の言われたとうりにテレビを見てみると……そこには……。

「こ、これは……!!」

そのテレビに写されていたのは……！！

『わあ♪その水着可愛いね！』

『そうでしょ！昨日買ってきたのよ！』

『あー！また胸が大きくなってない！？』

『そんな訳ないでしょう！！』

なんと！女子更衣室の映像だった！テレビの映像には女子達が楽しい会話をしながら水着に着替えているところだった！

ある女子は水着を着ており、ある女子は制服を脱ぎかけで下着が丸見えな人もいた。

まさしく……天国（パラダイス）の映像じゃないか！！

「智樹！これはどうやって……！？あの女子更衣室は監視カメラも付いていて、盗撮用カメラを設置することもできない鉄壁の砦のような場所だぞ！この映像はどうやって！！？」

「フフフフフ……♪知りたいですかな？」

ぜひ教えて！！

智樹はテレビの傍に置いてあるマイクを持って話しかけた。

「こちら桜井智樹、イカロス聞こえるか？」

智樹がマイクに向かってそう言うと、別のスピーカーから声が聞こ

えた。

『こちらイカロス、マスター聞こえていますよ』

「カメラに問題はないか？」

『はい問題ありません』

「ならば良し！そのまま続けてくれ！」

『了解』

俺は彼らの会話を聞いて今回の盗撮のカラクリが分かった。
イカロスに隠しカメラを持たせて、女子更衣室に侵入させているんだな。イカロスはマスターである智樹の命令には逆らえないから、智樹の盗撮に協力しているんだ。
イカロス今回はいい仕事をしているじゃないか♪

「智樹……俺はお前と知り合えて本当に良かったと思っているぞ！」

「俺もです恭介の旦那！ここにも同士が居たとは！」

俺達は友情の握手をした。やはり持つべきは同じ同類の友だな！

「あの……だから……止めといた方が……」

「悠二！！お前は女子更衣室の映像を見たくないのか！？シャナちゃんの着替えている光景を見たくないのか！？」

俺が悠二にそう言うと、悠二は少し考えた。そして顔が真っ赤にな

り、首をブンブン振って叫んだ。

「や、やっぱり駄目ですよ!!シャ、シャナの裸を見るなんていけませんよ!!／／／／／／／／／／」

「お前、シャナの裸を想像しただろ？」

「し、してません!!!!シャナの裸なんて想像してません!!!!」

絶対に想像したな。このスケベ悠二め♪

さて、悠二いじりはここまでにして、女子更衣室の盗撮映像を見ますか。

うん♪良い映像だ♪そう思っていた時。

『フェイトちゃん……また大きくなりよったな……♪』

『は、はやて……どこを見ているの……？』

今の声は!!聞き違いじゃない!!あの声は愛しい女神、フェイトさんの声だ!!

ということは……今、フェイトさんは……お着替え中!?

俺は智樹が持っているマイクを取り上げ、イカロスに指示をした。

「イカロス!カメラをフェイトさんに向けろ!!」

『了解』

イカロスが盗撮カメラを右に向けた。そして……。

きたぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！
画面にフェイトさんが写りましたよ！！相変わらず美しく、そして可愛い！！！
待ってましたよフェイトさん！！ヤッホーーーーイ！！！！！あ、やべ、鼻血が出てきた。

「恭介……テンション高いな……」

日向がそんなことを言ったが仕方がないじゃないか！！だってフェイトさんが写ったんだぞ！！テンションがＭＡＸになるのは当然じゃないか！！

『さてフェイトちゃん！今日の下着はどんな色なのかな……？』

『ちょっとやめてよはやて！』

『ええやんええやん♪女の子同士やから大丈夫や♪』

はやてさんがフェイトさんのシャツのボタンを外そうとしている！よしいけ！そのままシャツのボタンを外すんだ！！フェイトさんの下着姿が拝める！！頑張れ！はやてさん！！

『あれ？なかなか外れんなこのボタン……？』

はやてさんはどうやらフェイトさんのシャツのボタンを外すのに苦戦している。

「なにしているんだあのタヌキ女！！！もっとしっかりしろよ！！！」

「おい恭介……今の発言で全国のはやてさんファンを敵に回したぞ……」

そんなことを気にしてられるか！！今の俺はフェイトさんのことで頭がいっぱいなんだ！！

さあ、はやてさん！早く……早く！！フェイトさんの服のボタンを外してくれ！！

そして……フェイトさんの下着の色を…

「もうフェイトはいいだろう？イカロス！次はお妙さんだ！」

『了解』

ゴリラストーカーの命令でカメラがお妙さんに向けられた。

「お～～～！！！お妙さ～～～～ん！！！！！！」

「このゴリラストーカー！！！！邪魔すんじゃねぇよ！！！！せっかくいいところだったのに！！！！あのダークマター職人なんて興味ねぇよ！！」

俺の発言を聞いてゴリラストーカーの怒りが爆発した。

「なんだとこの変態野郎！！お妙さんはフェイトの何倍も魅力的なんだ！！あんな胸がでかい女とお妙さんを一緒にするんじゃねぇ！！！」

「てめぇぶっ殺すぞ！！！今の発言は俺とフェイトさんファンに対する宣戦布告だな！！！よろしい、ならば戦争だ！！！」

ゴリラストーカーに殴りかかろうとした時、事件が起きた。

『あら～？イカロスちゃん、何を持っているの～？』

ん？声が聞こえるぞ？いったい誰だ？
イカロスはカメラを声の主に向けたので、テレビ画面にその女性が写った。
写った女性は美人で、髪型は紫の長髪、スタイルもかなり良かった。
イカロスと知り合いなのか？と思っていた時、智樹の様子が変わった。

「やばい……会長だ……（汗）」

「会長？」

「無限学園中等部生徒会長……五月田根美香子（さつきたねみかこ）会長ですよ……」

智樹はガクガクと体が震えていた。まるでなにかに怯えているみたいな感じだった。
そしてその女性はイカロスの持っている隠しカメラを取り上げた。

『あら～～？これは……“盗撮用”カメラじゃない♪』

盗撮用という言葉を強調して言いやがったよこの人……。
そしてその場にいた女子達は盗撮用カメラを見て叫んだ。

『きゃあああああぁぁぁぁぁーー！！！！！』

『盗撮ですって!?』

『嫌だわ!』

『誰がこんなことを!!?』

「おいおい……マズいんじゃないか……?」

俺は不安になってきた……。

そんな時、テレビ画面に美香子会長の顔が映った。カメラを覗き込んでいるみたいだ。

そして美香子会長は笑顔で言った。

『もしかして~~桜井君が~男子更衣室でこのカメラに映った映像を見ているのかしら~~?』

「おい……智樹……バレているぞ……」

「……」

智樹はなにも言わず、冷や汗をダラダラ流し続けていた。

『男子更衣室……?ということは……他の男子も共犯者……!?』

え!?なぜだろう!?事態がヤバい方向に行っているような……?

『じゃあ……恭介君も見ているわけね……。ふっふふふふふ……』

カチャ！

マズい……ゆりっぺの怒りの声と共に、銃を用意する音が聞こえた……。

『ガードスキル・ハンドソニック』

奏ちゃんもお怒りみたいです……。

『アキヒサクンモミテイタンデスカ？フフフ……イケマセンネ……アキヒサクン……！！』

姫路がヤンデレモードに切り換えた。あの状態になった姫路はもう誰にも止められない。

『お妙先輩！薙刀をあと十本貸してください！それだけあればアキを息の根を止められるから！！』

『はいどうぞ♪まだまだあるからどうぞ使って♪』

なんで女子更衣室に薙刀があるんだ！！？ていうかお妙さんもお怒り状態だよ！！

そして美波、人間は薙刀の一本でも刺された致命傷なんだよ！！

「おいおい……みんなお怒りだぞ……」

「ていうかどうしてくれるのさ恭介！！恭介のせいで僕の命が風前の灯だよ！！」

明久が俺に詰めかかってきたが、知ったことじゃない！お前の命が風前の灯なのはいつものことだろう！
ていうか俺のせいじゃないぞ！！元々は智樹が盗撮をしようとしたからこうなったんだ！！

「全部智樹が悪いんだ！！盗撮なんてするから！！」

「なっ……！！俺のせいにするのかよ！！？お前らだって見たいって言っていたじゃないか！！」

智樹が反論したが、その反論を聞いて二人の男が発言した。

「お前らって俺も一緒にするんじゃねぇ！！」

「そうだよ！僕はやめようって言ったんだ！」

上条と悠二だ。そういえば確かこの二人は盗撮に反対していたんだったな。
二人は智樹に反論して部屋から出て行こうとしていたが……。

『あのバカも見ていたのね……お仕置きせねば……（怒）』

『と～～う～～ま～～～！！！！（怒）』

『悠二いいいいいいいいーーーー！！！！！！（怒）』

お前達の彼女もお怒りだ……良かったな……♪

これでお前達の道連れだ！！！

「「理不尽だあああああぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！！」」

『……雄二の盗撮……許すまじ……』

「ゲッ！翔子も居たのか！！」

『盗撮とは……許されんな……』

『少し……頭、冷やそうか……』

ていうか、お怒りの女子が多くない！？　なんでこんなに居るの！？

そして次の瞬間

バキッ！！

大きな音が聞こえた瞬間、盗撮映像が消えた。どうやら盗撮カメラ壊れた……いや……破壊したみたいだ。

さて……これからどんな展開になるのか考えてみよう……。

盗撮カメラが見つかってしまい、犯人は智樹であるが、女性達は男子更衣室に居る男子達も共犯者と思っている。

そして女性達の怒りは爆発してしまった。こうなってしまった以上、彼女達が起こす行動といえば……一つしかない。

俺達男子を粛正しようとする。

ならば……やるべきことは一つ……。

男子全員

『逃げろおおおおおぉぉぉぉぉぉーーーーー！！！！！！』

俺達は男子更衣室から出て逃亡を開始した。

全員全速力で逃げている。それだけ女子が恐ろしいのだ。

ていうかこの学園ではなぜか女子の方が強い。だから逆らえない。

「このまま脱出だ！出口まで走れ！！」

もうすぐ出口に辿り着ける。そこからバラバラで逃げればなんとか逃げ切れる！！

そう思っていたが……なんでだろう……？

神様は俺に死んでくれと願っているのか……？

出口の前に二人のの女性が立っていた……。

俺の許嫁の風間愛淫と……。

最低最悪極悪無敵超人であり、この学園の学園長、千堂由美が立っていた。

二人とも笑顔だ……目は笑っていなかったが……。

「テンドウサン……？トウサツヲシタノハホントウデスカ……？」

「もう恭介ってば♪そんなに私のお仕置きを受けたいならそう言えばいいのに♪」

そして二人は出口の扉を封鎖した。

「ゆ、由美！！そこを開けて！！！」

「お願いします！！学園長！！！」

「このままじゃあ俺達死んでしまいます！！！」

みんなが由美に対し土下座で頼み込んでいる。

だがみんな……忘れていないかい……？

由美は……。

「盗撮する奴なんて死んでしまえばいいんだよ♪」

悪魔なんだよ！！！

そんな時、後方から怒号が聞こえてきた。

女性全員

『死ねぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーーー！！！！！！！！』

女子達だ……追いついてきたみたいだな……。

ここが……俺達の墓場か……。

「恭介♪実はね、新しく買った刀があるの♪試し斬りしてもいいよね？」

「嫌です」

「分かった♪斬るね♪」

俺……拒否しましたよ……？

「じゃあ……死ねこの変態クソ犬ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅーーーーーーーー！！！！！！！！！」

みなさんさようなら……。

男子達（変態共）
『ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーー！！！！！！！』

その日、学園のプールにて沢山の男達が犠牲になったのである……。

第二十五話　分かっているとは思いますが、盗撮は犯罪です（後書き）

こなた
「こなたの後書きコーナー♪」
かがみ
「なんであんたが後書きコーナーをやっているの……？」
こなた
「だって作者に頼まれたの。ほら、これ手紙」
かがみ
「なになに？」

天城
『仕事で疲れた……。こなた、あとは任せる！　ＰＳ：今回の次回予告はかがみでお願い♪』

かがみ
「押し付けやがった！？」
こなた
「といわけで今回は私が主役なのだ！！」
かがみ
「あっそ……それしても私達久々の登場ね」
こなた
「そだね～。第七話に登場してそれ以降から全然登場していなかったよね～」
かがみ
「そんで久々の登場が後書きコーナーって……」
こなた
「いちいち気にしていたらダメだよかがみん♪登場しただけでもいいじゃない♪」

かがみ
「あんたはのんきなのね……」
こなた
「まあね♪さて、そろそろ時間ですな」
かがみ
「はあ？なにが？」
こなた
「じ・か・い・よ・こ・く♪」
かがみ
「ああ……そうか……そうだったわね……」
こなた
「ではかがみん！お願いしやす！」

かがみ
「はいはい……。次回の学園戦記　無限学園！！は、いろいろあったけどようやく恭介君はプールに入れるみたいね。また恭介君が暴走するかもしれないわ……。水着の女性を見て抱きついたり、セクハラしたりすかも…もういい加減自重してほしいわ……。そして恭介君にとって衝撃の真実！フェイトさんに子供がいた！？恭介君とフェイトさんの恋の行方はどうなってしまうのか……！ていうかこの作品のヒロインって由美さんよね？ここでフェイトさんとくっついていいのかしら？」

こなた
「大丈夫♪恭介くんとフェイトさんが付き合うのはありえないから♪」
かがみ
「……はっきり言うわね……」
こなた
「まあね～♪じゃあ次回また会いましょう！！」

かがみ
「次回もやるの！？」

第二十六話　水着を見て鼻血が出る方は、輸血パックを持参してください。（前編）

無限学園のとある報告書

本日、学生プールにて、盗撮事件がありました。主犯は桜井智樹と近ど……ゴリラストーカーだということが判明。学園長の指示によりこの二人を『由美ちゃんの拷問室』に連行することになりました。なお、先生方には以下のような指示を出しますので、よろしくお願いします。

・シャマル先生：桜井智樹とゴリラストーカー、二名の入院準備と、いざという時の為の緊急手術の準備をお願いします。

・西村先生（鉄人）：盗撮に関わった男子生徒全員を補習室送りにしますので、補習室の準備をお願いします。

・さわ子先生：学園長の仕事を代わりにお願いします。（言っておきますが、押しつけではありませんよ）

・銀八先生：天堂恭介君が関わっていました。連帯責任として、来月のボーナスを半分にしますので、文句を言わないでください。

第二十六話　水着を見て鼻血が出る方は、輸血パックを持参してください。

《学生プール》

学生プールはかなり広かった。テーマパークにある大型プールぐらいはある。そこではいろんな生徒達が遊んでいた。泳ぎの競争をしている者もいれば、浮輪に乗ってのんびり流されている奴もいた。

え？俺はなにをしているかって？他の男子達と一緒に体育座りをしていたのだ。女子達はまだ着替えているので、待っているのだ。

「明久……今回はどこまで行った……？」

「三途の川まで行ったよ……。死んだ爺ちゃんに出会ったんだ。相変わらず元気そうだったよ……」

「死んでいるのに元気なんかい……」

「恭介は？」

「……俺も三途の川に行ったよ……。危うく川を渡るところだった……」

「それは危なかったね……」

「ああ、危なかったぜ……」

「ていうかお前ら、三途の川に行ったとか、通常の会話では絶対出て来ない言葉だぞ……」

「なに言っているの音無？　三途の川とかよく行く場所じゃん？俺、この学園に来て４回は行ってきたぞ」

「フッ……甘いな恭介。僕なんて１０回は行ってきたよ……」

「チッ！　負けたか！」

「お前らおかしいよ！！　普通の人はそんなところには行かないぞ！！」

黙れリア充め！奏ちゃんとラブラブしている奴には俺たちの気持ちは分からないんだよ！

さて、先程の明久と話したことは、実を言うと本当だ。俺達はよく三途の川などに行っている。ついさっきも行ってきた。

桜井智樹と一緒に女子更衣室を盗撮しようと思っていたが、女子にばれてしまい、逃げようと思ったら、由美と愛淫もやってきて逃げられず、由美と愛淫のお仕置きを受けてしまった為、三途の川まで行ってきたのである。あのお仕置きは恐ろしかった……。

まあその後はみんなが土下座で謝って、桜井智樹と近ど…ゴリラストーカーが主犯だと説明した。おかげで命だけは助かったよ。智樹とゴリラストーカーはその後どうなったかは知らないけど……。

「それにしても……みんな遅いな……？」

待つこと１０分、未だに女子達は来ない。水着に着替えるってこんなに時間がかかるのか？

「まあ気長に待とうか。ところでムッツリーニ、その大荷物はなんだ？」

ムッツリーニは大きなリュックを抱えていた。とても大きい物が入っているんだろうか、中身が気になる。

「……カメラが入っている」

「ああ……なるほど……」

こっそり盗撮をするんですね。そしてその盗撮写真を売りさばくと……。今後、ムッツリーニの出す商品はこまめにチェックしよう。

「……あと……いざという時の為に」

カメラのほかに、リュックから取り出したのは、輸血パックであった。なんで輸血パックがいるんだ？ていうかいざという時って……？

そう思っていた時。

「バカのお兄ちゃ～ん♪」

向こうから葉月ちゃんがやってきた。可愛らしいスクール水着を着て。

ん？待てよ……。

「おい明久！　大変だぞ！」

「なに？」

「葉月ちゃんがスクール水着を着てきたぞ！　このままあの娘と遊んだら、俺達全国のロリコン達に殺されるかもしれない！」

「しまった！　どうしよう！！」

「お前ら落ち着け……」

音無が俺達を落ち着かせようと声を掛ける。ていうか本当に大丈夫だよな……？全国のロリコン達が襲ってこないよな……？俺はそれだけが心配だ……。

「こら葉月！走っちゃだめでしょ！」

続いてやってきたのは美波とゆりっぺと奏ちゃん達だ。みんな可愛い水着を着ているじゃないか。ムッツリーニもさっそくカメラで撮影をしている。さすがムッツリーニ！あとでその写真をくれ！

それにしても、美波と奏ちゃんにはなんか共通点があるような……？

あ！わかった！

「二人とも見事に胸がないな♪」

「コロス……」

「ガードスキル・ハンドソニック」

「すいません！！　調子に乗ってすいません！！！　ｏｒｚ」

一瞬で二人の目が、狩人の目に変わってビックリした……。俺は土下座で謝るしかなかった。

女の子に土下座をするとは情けないと思っている方もいると思う

が、それだけこの人達は怖かったんだ……。
　俺が土下座をした後、奏ちゃんは音無に近づいて、頬を赤く染めながら言った。
「結弦、どう？変じゃないかな……？」
　奏ちゃんは着ている水着の感想を音無に聞いてみた。すると音無は少し照れながら言った。
「……い、いいんじゃないか……／／／／／／　か、可愛いよ……／／／／／／」
「あ、ありがとう……／／／／／／」
　二人はラブラブだな〜♪本当に腹が立つほどラブラブだよ〜♪異端審問会のメンバーを呼んで、音無を八つ裂きにしてやりたい気分だよ♪
　だけど奏ちゃんがいるからできないんだよな……。返り討ちにされそうだよ……。
「ア、アキ！　あたしはどうかな……？　正直に言ってもいいんだけど……」
　今度は美波が明久に水着の感想を聞いてきた。すると明久は正直に答えた。
「美波、胸が小さいね」
　明久は笑顔で言った。優しい笑顔で。
　そして美波はいきなり携帯電話を取り出した。誰かに連絡するみ

たいだ。

「……もしもし由美さん？　すいません、拷問道具一つ貸してくれませんかね？」

「美波、綺麗だよ！！　その水着似合っているよ！！　本当に可愛いな美波は！！！」

明久は土下座をしながら、美波を褒めている。よほど美波が恐ろしいのだろう。しかも拷問道具を使おうとしているからな。

美波は携帯電話を切って、明久に近づいた。

「アキ……」

「美波……？」

美波は笑顔で言った。

「由美さんが一番いい拷問道具を用意するって♪」

「恭介助けて！！！！　このままじゃ殺される！！！」

明久が俺に泣きついてきた。そんな明久に対し、俺は優しい笑顔で言った。

「明久……」

「恭介……？」

「今まで楽しかったぞ……。安心して逝け♪」

「いやだあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！！！！」

学生プールにいる生徒全員に聞こえるくらいの悲鳴をあげた明久であった。

「ねえ恭介君？私の水着はどう？」

今度はゆりっぺが着ている水着の感想を俺に聞いてきた。ていうかなんで俺に聞くんだ？

「正直に言ってもいいか？」

「ええ、いいわよ♪」

「その胸は…」

「3秒以内に神の祈りを済ましなさい」

ゆりっぺは拳銃を取り出し、俺の頭に狙い定めた。ゆりっぺに胸の話は禁句だな……。

「とても可愛いよ」

「本当に？」

「ああ、とても可愛いよ♪」

「……そ、そう……？か、可愛いかしら……？／／／／／／／」

ゆりっぺは照れているようだ。顔が赤くなっている。なんだか照れているゆりっぺというのも可愛いもんだ。

「本当に可愛いよ♪」

「そうだゆりっぺは魅力的なんだ！！　美しくそして、エロスなんだ！！！」

野田がゆりっぺを褒め称えている。さすがゆりっぺ大好きっ子だ。しかしこの時野田は鼻血を垂らしていた。ゆりっぺの水着に見惚れているみたいだ。

とりあえず野田、鼻血を拭け。

「ていうか野田君には聞いてないんだけど」

ゆりっぺ、さすがにその言い方はないだろう……。ほらみろ、野田が落ち込んでいるぞ。あんなに落ち込んでいる野田は初めて見た。

そんな時であった。

「ぐばあああああぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！！」

「ムッツリーニ！？」

いきなりムッツリーニが大量の鼻血を出して倒れた！いったいどうしたんだ！？

「ムッツリーニ大丈夫か！？」

「……あ、あれは……生物兵器……？」

はい？ムッツリーニはなにを言っているんだ？大量の鼻血を流しているムッツリーニはカメラを俺に渡した。そして満足した笑顔で俺に言った。

「……恭介……女子更衣室を覗いた勇者に……このカメラを託す……！　……あとは……任せた……ぞ……」

ガクっとムッツリーニは力尽きた。

「「ムッツリーニィィィィィィィィィィィィィィィィ！！！！！！」」

安心しろムッツリーニ！お前の意思は俺が受け継ぐ！それにしても誰だ！？ムッツリーニをこんな目に遭わせた奴は！！そう思っていた時。

「ぐばあぁ！！」

突然明久がムッツリーニと同じように、大量の鼻血を出して倒れてしまった。

「明久！？」

「……あれは……なのはさんのスターライトブレイカー並の破壊力だよ……恭介……すまない……あとは任せ……」

そのまま明久は気を失った。

「明久ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！！　おのれ！

誰がこんなことを！！？」

明久とムッツリーニを戦闘不能にさせた奴はどこかに居るはず！
あたりを見渡し探してみると、その生物兵器がやってきた。

「すいませんみなさん！　遅れてしまって！」

やってきたのは姫路だった。姫路は走っており、そのせいで姫路の自慢の兵器（大きな胸）が激しく揺れていた！
なんてこった……！！そんな兵器（胸）は反則だろう！！

「変態のお兄ちゃん？　大丈夫ですか？　鼻血が出ていますよ？」

しまった！俺もあの生物兵器のせいで鼻血が出てしまった！！いかんいかん！このままでは出血多量で死んでしまう！

「だ、大丈夫だよ葉月ちゃん！　これくらいどうってことないよ！」

「そうですか？」

俺はとりあえず鼻血が出ている鼻の穴にティッシュを詰め込んで、鼻血を抑えることにした。
よし！これで大丈夫だ！

そう思っていたけど……。

「待たせたのう！」

秀吉が笑顔でやってきたのだ。しかし秀吉の着ている水着を見た瞬間。

「ぐばあぁ！！」

……鼻血が出てしまった。

秀吉はトランクスタイプの水着を着ていたが、上半身は裸だった！

「木下！　なんであんたは胸を隠していないの！？」

「そうよ木下君！　早く胸を隠しなさい！　ここには男達がいるのよ！！」

「みんなは何を言っているのじゃ！？　わしは男じゃから胸を隠す必要なんて無かろう！」

いやいやいやいや！！秀吉、よく考えてみろ！どこに上半身裸でプールにくる女が居るんだ！？秀吉には胸を隠すという常識がないのか！？お父さんとお母さんがこんな秀吉をみたら悲しむぞ！！

「恭介！　わしは男だということをみんなに説明してほしいのじゃ！！」

「や、やめろ秀吉！　こっちに来るんじゃない！！　取り敢えず胸を隠せ！！」

秀吉が胸を隠さないから、鼻血が止まらない！！このままでは出血多量で死んでしまう！！

あ……やばい……視界が悪くなってきた……。

「恭介君！？」

「木下！　早く胸を隠して！！」

「い、嫌じゃ！！　今日こそはみんなに、わしは男だということ教えてやるのじゃ！！」

「仕方ない……！　奏ちゃん、手伝って！」

「わかった」

ゆりっぺと奏ちゃんは秀吉の両脇を抱え、女子更衣室に連行しようとした。秀吉は暴れて抵抗している。

「仲村、立華、離すのじゃ！！」

「ちょっと暴れないでよ！」

「そこは女子更衣室ではないか！　わしは男じゃぞ！　男子更衣室に連れて行くのが正しいのではないか！？」

「なに言っているの！？　獣のような男達に襲われたいの！？」

「とにかく離せ！　離すのじゃあああぁぁぁぁぁぁぁーーー！！！！！！！！！」

秀吉は女子更衣室に連行された。今度から胸を隠して来てもらいたいものだ。

とにかくこれで助かった……。次に大量の鼻血が出たら、たぶん死んでしまう……。しばらく休もうかな……？

だが、俺の事情も知らずに、第三の刺客がやってきた……。

「恭介君！　こんなところに居たんだ♪」

こ、この声は……！恐る恐る振り返ると、そこには……！

水着姿のフェイトさんが居た！

しかも……黒ビキニだ！！

こ、これは……！！

「エロすぎるだろぉぉぉぉぉぉぉーーーーー！！！！」

俺は大量の鼻血を噴出し、地面に倒れてしまった。やばいな……。

これだけの量の鼻血を出したら、命が危うい……。

「きょ、恭介君！？　どうしたの！？　大丈夫！！？」

フェイトさんはパニック状態になっていた。まあいきなり鼻血を噴出したら誰でも驚くよな。

「だ、大丈夫ですよ……フェイトさん……」

「全然大丈夫そうじゃないよ！　こんだけ鼻血を出して……」

フェイトさんは俺のことを心配してくれるのか……？やっぱりフ

ェイトさんは優しい！！まさしく女神だ！！まったく由美もこれだけの優しさがあれば可愛いのに……。

「恭介君、少し寝た方がいいんじゃない？」

「ありがとうございますフェイトさん……。でも本当に大丈夫ですから……」

フェイトさんの水着姿をじっくり見たいが、これだけの鼻血を出したとなれば危険だ。確か人間は体の血液が半分以上無くなると死んでしまうらしい。ここはいったん退却して、態勢を立て直そう。

「ちょっと向こうで休憩してきますね……」

「うん……。恭介君、本当に大丈夫だよね……？」

「はい大丈夫です……」

その場から離れ、別の場所で休もうと思っていた時。向こうから可愛い女の子が走ってきた。

小学生くらい女の子で、髪の色は金髪。左右の瞳の色が異なっている、右目が緑で、左目が赤色だ。虹彩異色というやつかな。

女の子は走ってフェイトさんに方へ向かった。

「あ、ヴィヴィオ。もう着替え終わったの？」

どうやらフェイトさんの知り合いみたいだな。あんな可愛い女の子好かれるとはさすが女神様だ！

さて、俺は行くとしよう。さっさと休憩したい。

再び歩きだしたとき、後ろの方から女の子の声が聞こえた。

「うん♪どう？　似合うかなフェイトママ？」

……今なんて言った……？

「良く似合っているよヴィヴィオ♪」

「えへへ♪ありがとうフェイトママ♪」

……フェイト…ママ……？フェイトママ……？……フェイトママ……？……ママ……お母さん……フェイト……ママ……？……フェイトママ……。

フェイトママだと！！？

俺は全力疾走で女の子の方に向かい、女の子の両肩をつかんだ。

「君！！　今何て言った！！？」

「ふえ！？」

女の子は状況が読めていないのか、困惑の表情を浮かべている。

「恭介君！？　あの……ヴィヴィオがどうか…」

「ヴィヴィオちゃんだっけ！？　フェイトさんのことをなんて言った！！？」
「え！？　えっと……フェイトママって……」
「ママ！？　ママだと！！？　そんな馬鹿な！！！」
「ほ、本当だよ！だって……フェイトママは私のママだもん！」
　う、嘘だ……！フェイトさんに子供なんて……！！
「ぐばあああああぁぁぁぁーーーー！！！！」
　俺はあまりのショックで吐血した。口から血がボタボタと落ちて行く。
「うわぁ！　フェイトママ！」
「恭介君！？　大丈夫！！？」
　嘘だあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！！！！！！
　フェイトさんに子供なんているわけない！！！！！
「どうしました？　なにか…って恭介君！？　どうしました！？」

「ちょっと恭介！　大丈夫！？」

二人の女の子がやってきた。島田美波と姫路瑞希だ。二人は俺の姿を見て驚いている。

そうだ……！この二人に聞いてみよう！きっと俺の期待どうりの答えを言うはずだ！

「美波、姫路……聞きたいことがあるんだが……」

「いや！　そんなことよりあんた自身が大変なことになっているけど！！」

「ヴィヴィオという女の子は……フェイトさんの子……なのか……？」

「「へ？」」

二人はきょとんとしている。

頼む！俺の期待どうりの答えを……！

「「そうだけど（ですよ）」」

そんなぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！ヴィヴィオがフェイトさんの子供というのは本当なのかよ！？

いや！待てよ！！

「美波、姫路！　俺を騙そうとしているんだろ？」

「「はい？」」

「惚けても無駄だ！　お前達は俺を陥れようとしているんだろ！？
その手には乗らんぞ！！」

「恭介君は何を言っているんですか？」

「暑さと出血多量でおかしくなったんじゃない？」

俺は至って正常だ！おかしいことを言っているのはそっちだ！フェイトさんに子供がいるなんてありえない！！

「よう、恭介。なにやっているんだ？」

雄二が話しかけてきた。
そうだ！雄二に聞いてみよう！雄二なら俺の期待通りの答えを言ってくれるはずだ！

「雄二！　貴様に聞きたいことがある！」

「なんだよ……？」

「フェイトさんにヴィヴィオちゃんという子供は居るのか！？」

頼む！俺の期待通りの答えを言ってくれ……！お前だけが頼りだ！

「そうだぞ」

「雄二の裏切り者め！！　俺の期待を裏切りやがって！！」

「なにを期待していたんだ……？」

くそ！みんなに聞いても帰ってくる答えが同じじゃないか！！

ヴィヴィオちゃんはフェイトさんの子供、これはどうやら嘘じゃないみたいだ。

「くそ！　フェイトさんに子供が居たとは……。ということは……もう結婚しているというのか！？」

「恭介、たぶんお前は勘違いしているかもしれないから、取り敢えず俺の話を……」

「これじゃあ……俺の夢が叶わないじゃないか！！」

「……全然話を聞いてねぇし……。ていうか夢って？」

俺の夢……それはフェイトさんを一目見たときから決めていたことだ……！

「家に帰ってきたら裸エプロンの状態になっているフェイトさんが居てな、そのフェイトさんはこう言うんだ、『あなた、お帰りなさい♪　お風呂にする？　ご飯にする？　それとも……わ・た・し？』って、言ってもらう！つまり、フェイトさんとの幸せゴールインだ！！」

「……とんでもない野望を抱いていたんだな……」

野望？違う！これは俺の夢なんだ！！裸エプロンのフェイトさん……想像するだけで……ハァ、ハァ……（；´Д`）興奮するじゃないか！！

だけど、まさかフェイトさんに子供がいたなんて、しかも可愛い女の子……。

待てよ……！子供がいるということは……。この子の父親は、フェイトさんの夫ということになるのか！？

「恭介君、どうかしたのかな？　さっきから黙っているけど……？」

「フェイトさんは気にしなくてもいいと思いますよ。どうせまた変な妄想を考えているんじゃないですか……？」

フェイトさんの夫……つまり彼氏……彼氏が居た……その彼氏は俺のフェイトさんを奪った……。

なるほど……その男は八つ裂き……いや、死刑だ！！

「ヴィヴィオちゃん！」

「ふえ！？」

俺は再びヴィヴィオちゃんの両肩を掴み、怒りの眼差しでヴィヴィオちゃんを見つめて言った。

「ヴィヴィオちゃんのパパは誰だ！？　フェイトさんを奪ったクソ野郎の名前を言うんだ！！」

「え！？　えっと……あの……」

「さあ早く！！」

「恭介君、落ち着いて！！」

「フェイトさん、俺は十分落ち着いていますよ！！」

「全然落ち着いていないよ！！？」

「さあヴィヴィオちゃん！　君のパパは誰だ！？　どこのクソ野郎だ！！」

ヴィヴィオちゃんの両肩をガクガク揺らしながら問いただすが、ヴィヴィオちゃんは一向に喋らない。ていうかヴィヴィオちゃんが涙目になっているみたいだけど、俺の気のせいか？

「あう～～！　わ、私にパパはいませんよ～～！」

「嘘をつけ！！　フェイトママがいるということは、パパが必ず居るはずだ！！さあ吐け！　吐くんだ！！」

ヴィヴィオちゃんのパパを聞き出すまで諦めないぞ！！フェイトさんの夫を見つけ出して、公開処刑にしてやる！！

さらに追究しようと、ヴィヴィオちゃんを問い詰めようとした時。

「ヴィヴィオと恭介君？　二人ともなにしているの？」

いきなりなのはさんが声をかけてきた。この時のなのはさんの服装はもちろん水着。なかなか可愛い水着姿だ♪

しかし今はなのはさんに構っている時間はない。ヴィヴィオちゃんから、パパ（フェイトさんの夫）を聞き出さないといけないから！

そんな時、ヴィヴィオちゃんがいきなり、なのはさんに抱きつ

いた。

「なのはママ！　あのお兄さん怖い！」

「え？　ヴィヴィオ、なにを言っているの？　恭介君は優しくていい人だよ。そんなことを言ったら失礼だよ」

なのはさんはヴィヴィオちゃんの頭を撫でながら言った。

ん？ていうか……今、あの子はなのはさんのことを、なのはママって言ったよな？どういうことだ……？ママはフェイトさんだよな？でも、なのはさんもママ……？え！？ママが二人！？いやいやいや！落ち着け天堂恭介！いくらなんでもママが二人いるなんてことはあるわけ……いや、ここは無限学園。無限可能性を秘めた生徒達が居る場所。ママが二人いる子供が居てもおかしくない。しかしそんな結論でいいのか……？少し調べた方が良さそうだな。

「あの……なのはさん？　ヴィヴィオちゃんが言った、なのはママって……？」

「そういえば恭介君には紹介していなかったよね？　ヴィヴィオ、ちゃんとご挨拶しなきゃ」

「でもなのはママ、あのお兄さん怖い……」

え！？俺って怖いのか！？さっきだって優しく接してあげたのに……。いったい俺のどこが怖いんだろう？

「なあ雄二、俺って怖いのか？　さっき優しく接してあげたのに、怖いと言われているんだけど」

「あれのどこが優しく接しているんだ？　俺から見たら、少女の両肩を掴んでセクハラ行為をしようとしていたロリコン犯罪者にしか見えなかったぞ。良かったなこの学園内で、町中であんなことをやっていたら、警察沙汰になるところだったぞ」

「恭介君……ロリコンなの……？」

「え！？　ちょっとなのはさん！？」

マズい……俺に対するなのはさんの評価が変わってしまった。その証拠に、なのはさんはヴィヴィオちゃんを連れて、俺から５メートル以上も離れてしまった。

このままでは、ロリコンという称号を与えられてしまう。ただでさえ変態と呼ばれているのに、そんな称号をつけられたらおしまいだ！

「あの、なのはさん！　違うんです！　今のは雄二の冗談ですよ！　俺はロリコンじゃありませんよ！　俺は……その……ただの子供好きなんです！」

……ってしまった！そんなことを言いたいんじゃない！ていうか焦って間違えてしまった！！なんだよ、ただの子供好きって！？思いっきりロリコン発言じゃねぇか！！

ヤバイ……。なのはさんとヴィヴィオちゃんの距離がさらに１０メートル伸びてしまった……。もう終わりだ……。ロリコン確定だ……。

「……まあなのはさん、落ち着いてください」

俺が落ち込んでいる時、雄二がなのはさんに話しかけた。

もしかして雄二はフォローしてくれるのか!?だったらありがたい!!なのはさんの誤解を解いてくれ雄二!

「こいつは元々変態なんですから、ロリコンだとしても仕方ないじゃないですか。まあ安心してください。こいつがヴィヴィオちゃんにセクハラ行為をしたら、由美学園長に差し出しますんで。これだったら安心でしょ?」

「オイ、コラァァァーーー!!!!!(怒)　お前なんか信じた俺がバカだった!!　俺は変態じゃないし、ロリコンでもない!　ていうかヴィヴィオちゃんに対してセクハラ行為なんてしねーよ!!!!　しかもやったら由美に差し出すって、そんなことをしたら俺が殺されるわ!!　お前がそんなことをする奴なんて思いもしなかったよ!!!!　てっきりフォローしてくれるかと思ったじゃないか!!」

「はあ?　なんで俺がお前のフォローをしないといけないんだ?」

「マジありえないって言いたそうな顔で言うな!!!」

「そっか。それなら安心だねヴィヴィオ♪」

「うん♪　そうだね♪」

「そこのお二人さん!　なんで今の雄二の話を聞いて安心しているんですか!?　俺は絶対セクハラ行為はしませんからね!!!」

俺から離れていた、なのはさんとヴィヴィオちゃんは、やっと戻ってきた。今の話を聞いて安心したということはなんか複雑な気分だけど……。

「さて、ヴィヴィオ。ちゃんと恭介君に挨拶をして」

「うん」

ヴィヴィオちゃんは俺の前で一礼をして、挨拶をした。

「初めまして、高町ヴィヴィオです。よろしくお願いします」

「はい♪　良くできました♪」

なのはさんは、挨拶ができたヴィヴィオちゃんの頭を撫でている。

こうして見ると、親子みたいだな……ってそうだ！この子との関係について聞かなければいけないんだった！

「あの、なのはさん？　ヴィヴィオちゃんとはどのような関係で？」

「え？　それは……」

「なのはママは、私のママだよ！」

俺の質問をヴィヴィオちゃんが代わりに答えた。しかしその答えでは一つの疑問が残ってしまう。

本来であれば。

男＋女＝子供

なのが普通。しかし、ヴィヴィオちゃんの場合。

なのはさん＋フェイトさん＝ヴィヴィオちゃん

女＋女＝子供

これっておかしくない？ていうか百合じゃん！！女同士で子供って産めるのか！？いや！いくらなんでも、女同士で子供を産むというのはさすがに無理がある！ということは……どういうことだ？

ますます分からなくなってしまった。ここは考えをまとめてみよう。

ヴィヴィオちゃんはフェイトさんの子供。つまりフェイトさんには夫がいるわけだ。（見つけ出して殺してやる！）ヴィヴィオちゃんはフェイトさんとなのはさんのことママと呼ぶ。でもなのはさんは女だから、フェイトさんの夫ではない……ん？待てよ！？もしかして！？

なんてこった……。俺はとんでもない真実に辿り着いた！

謎は……全て解けたぜ！！

「なのはさん……」

「ん？　なに？」

俺は真剣な眼差しでなのはさんを見つめた。

そして辿り着いた真実をなのはさんに告げる。

「なのはさん……あなたは……男だったんですね！！？」

これこそが俺が辿り着いた真実！なのはさんは実は男だったとい

うことであれば、すべてのつじつまが合う！

なのはさん＋フェイトさん＝ヴィヴィオちゃん

男＋女＝子供

これが真実である！！

「……」

「はっ！　もしかして、その大きな胸は偽物だったんですか！？よくも俺をだましてくれましたね！！」

「……恭介君？　少し、頭冷やそうか……？」

え？なのはさん？いったい何を言っているんですか？ていうかなんで杖を持っているんですか？あの……しかも、その杖をなんで俺に向けるんですか……？あの……危ないですよ？人に向けたら危ないですよ……？や、やだな、なのはさんってば……ハッハハハハハ……なんでそんな怖い顔をしているんですか！！？

「ブラスター３……」

「ちょっとみんな！！　なんだか知らないけど、なのはさんがすごく怒っているんだけど！！？　なんとかしてよ！！」

みんなに助けを求めようとしたが、なぜか全員、俺に向かって合掌をしていた。

なんで合掌！？諦めて死ねってか！？ていうかよく見たらフェイトさんとヴィヴィオちゃんも合掌をしているじゃないか！？

「ディバイン……」

「ま、待ってなのはさん！！　ここは落ち着いて俺の話を……」

「バスタァァァァァーーーーー！！！！！」

「ぎゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！！！！！」

本日、二回目の三途の川行きです……。

《１０分後》

「よ、養子……？」

「そう。ヴィヴィオは私の子供だけど、血はつながっていないんだよ」

「では……なのはさんは男でないと？」

「……恭介君？　もう一度三途の川に行く？」

「……すいませんでした　ｏｒｚ」

なのはさんの一撃を受けたものの、なんとか奇跡的に一命を取り留めた俺は、なのはさんに土下座で謝った。

その後、手当てを受けながら、なのはさん、フェイトさん、ヴィヴィオちゃんの関係について詳しい話を聞けた。

ヴィヴィオちゃんは、なのはさんとフェイトさんの養子であり、二人の間で生まれた子供ではない。とある事情で養子に迎えられたのだが、かつて学園内では大きな問題になったらしい。

“なのはとフェイトの子だと!?”

“女同士で子供ができるのか!?”

“なのはさんが攻めで、フェイトさんが受けではないのか!?”

“いや! ここはあえて逆の考えで、フェイトさんが攻めで、なのはさんが受けじゃないか!?”

“フェイトさんの子供が欲しかった……”

“ていうかあのヴィヴィオちゃん可愛くね?”

“ヴィヴィオちゃん可愛い……ハァ…ハァ……”

……といった噂や気持ち悪い話が出てきており、当時のなのはさんとフェイトさんは大変な思いをしたらしい。ちなみに余談だが、その気持ち悪いことを言った奴は数日後、由美に粛清されたらしい。

「でも、よく由美が許可を出しましたね。子供と一緒に学園に通えるなんて」

「由美さんが、『ここは無限学園だから、子供がいる学生が居てもおかしくないよ♪』と言って、特別に許可を出してくれたんだよ。由美さんって優しいよね♪」

なのはさん、由美の本性をあまりに見ていないからそんなこと言えるんですよ。あいつの本性は慈悲も無い悪魔ですよ？

「それよりも恭介君大丈夫？　なのはのディバインバスターをまともに受けたんだから、少し休んだ方がいいと思うよ？」

フェイトさんが俺のことを心配してくれる……！？ああ……やっぱりあなたは最高の女神だ……！！

「一応手加減はしたつもりだよ？」

なのはさん……あれで手加減したつもりなんですか……？体がバラバラになりそうになったんですが……？手加減についてもう少し勉強してください。

「じゃあ俺……向こうで休んできます。フェイトさん達は遊んできてください」

俺はそう言って、みんなのもとから離れることになったが、正直に言うと水着姿のフェイトさんと遊びたかったよ……。

残念だ……。

第二十六話　水着を見て鼻血が出る方は、輸血パックを持参してください。（後

こなた
「第2回、こなたの後書きコーナー！　どうも～♪　みんなのアイドル泉こなたで～す♪」
天城
「作者の天城にございます！！」
かがみ
「かがみで～す……」
こなた
「ちょっとかがみん！　全然元気がないじゃん！？」
かがみ
「だって、またこのコーナーをやるんでしょ？正直めんどくさい……」
こなた
「もう頑張ってよ！　みんなのツンデレガール、かがみんなんだから、もうちょっと元気よく……」
かがみ
「ちょっと待って！　みんなのツンデレガールってなに！？　私、アイドルみたいな設定なわけ！？」
天城
「ある意味アイドルだ！」
かがみ
「意味が分からんわ！！！」
こなた
「まあまあかがみん。そんなに怒らないの♪　さて、今回はヴィヴィオちゃんが初登場したね♪　あの子は本当に可愛いよ！」
かがみ
「まあ確かにあの子は可愛いわよね。さすが、なのはさんとフェイ

トさんの子供よ」
こなた
「でもさ、よく考えてみたんだけどさ。高校生のなのはさんとフェイトさんの子供がさ、小学生っていうのはちょっと無理があるんじゃない？」
かがみ
「……まあそれはそうね……でも無限学園の生徒なんだから、『高校生なのに、子持ち』という可能性がある人がいてもおかしくないわよ」
こなた
「もしかしたら、実は『二十代の高校生』ということもあるんじゃないｗｗ」
かがみ
「なのはさんとフェイトさんが……二十代……」
天城
「それは面白いねｗｗ　ていうか事実だったら、二十代なのに、高校生の制服を着るなんてやばいよｗｗ　歳を考え――」

しばらくお待ちください。

なのは
「はい♪　それでは次回予告に移ります♪　今回はフェイトちゃんにやってもらいましょう！」
フェイト
「うん！　頑張るよ！」
かがみ
「いつの間に！？」
こなた
「あの……作者は……？　ていうかその返り血は……？」
なのは
「気にしないで♪　作者さんは気分が悪くなって病院に行ったよ♪」
フェイト
「仕事の疲れが出たんだね♪」
こなた・かがみ
「「そうですか……（汗）」」

フェイト
「では次回予告です！　休憩しようとしていた恭介君でしたが、そこに由美さんがやってくるというお話です。しかも由美さんの姿を見て、恭介君に変化が！？　次回はラブラブな展開になってしまうかもしれません！　どんな結末になってしまうのか！？」
なのは
「では次回もお楽しみに！！」
フェイト
「またお会いしましょう！！」
こなた・かがみ
「「バ、バイバイ……」」

第二十七話　開幕！ドキドキワクワクエロエロの水中騎馬戦！！（前書き）

島田葉月の独り言

バカのお兄ちゃんも変態のお兄ちゃんも大好きです！二人とも葉月のお婿さんにしてあげるです♪

須川
「おい、吉井明久と天堂恭介を連れてこい！　裏切り者には死刑だ！！」

第二十七話　開幕！ドキドキワクワクエロエロの水中騎馬戦！！

《学生プール》

大量の鼻血を出したり、なのはさんのディバインバスターを受けたりしたせいで、俺の体はボロボロだ……。これはしばらく休んだ方がいいな。

みんなから離れた場所で休憩している俺であったが、はっきり言って暇だ。みんなが遊んでいる姿を見てもつまらない。

……いや、訂正しよう。楽しい！楽しすぎる！！とっても素晴らしい！！ここから見えるとある光景を見たらとても楽しくなったよ！！

俺が楽しいと思える光景、それは……。

フェイトさんの胸である！！（≧∇≦）

ヴィヴィオちゃん、なのはさんと一緒に遊んでいるフェイトさんであるが、激しく動くたびに胸が揺れているのである！

ああ……やっぱりフェイトさんは最高だよ！！優しいし、綺麗だし、女神だし、胸も大きい！！あんな人を彼女にした奴は最高な気分になるだろうな！

まあ……フェイトさんを彼女にした奴は八つ裂きにしてやるけどな。

「それにしてもフェイトさんは綺麗だな……」

「誰が綺麗なの？」

「それはもちろん、フェイトさ……」

え……？この声は……まさか！？
ゆ、由美だ……！この声は間違いなく由美だ！！や、やばい！！
由美にフェイトさんの水着を見ていたなんて言ったら、間違いなく殺される！！

「ち、違うんだ由美！　お、俺は別にフェイトさんの水着を見ているわけじゃ……」

振り返り、由美の姿を見た瞬間、俺は言葉を失ってしまった。
由美はピンク色の可愛い水着を着ていたのだ。とても似合っており、フェイトさんとは違う魅力を放っていた。フェイトさんの水着姿は綺麗でセクシーであったが、由美の場合、ただ純粋に可愛いかったのである。
そういえばこいつは性格は最悪だが、とても可愛いんだよな。水着がよく似合っても不思議じゃないな。
しばらく由美の水着姿を見ていると、由美が言った。

「恭介、どうかしたの？　私の顔になにかついている？」

「え……？　あ、いや……その……なんでもない……／／／／／」

「そう？　ふふ、変な恭介♪」

由美は俺の顔を見ながら笑った。
……ていうか、今の由美の笑顔……。

めちゃくちゃ可愛いぃぃぃぃーーーーー！！！！！

なにあの由美の笑顔！？可愛い！！いつもの三倍は可愛いよ！！

！水着を着るだけであんなに変わるのか！？まったく……水着は恐ろしいぜチクショー！そして……水着万歳！！　＼（≧≦）／

「恭介はプールで遊ばないの？」

「あ、ああ、ちょっと疲れたから休憩を……」

「よし！　恭介、遊びに行こう！！」

「……いや、俺は休憩を……」

……いやだから、俺は休憩をしたいんだ。頼むから話を聞けよ……。

だが由美は、俺の腕を掴み、無理やりプールに連れて行こうとする。

「ほら恭介、さっさと行こうよ！」

ていうか今、俺は由美と手をつないでいる……。な、なぜだろう……なんかドキドキする……。

女の子の手を握るなんてめったに無いことだからかな……？

「どうしたの恭介？　なんか顔が赤いよ？」

「え！？　あ、その……な、なんでもない……／／／／／／」

「そう？　ならいいけど♪」

再び由美は笑顔になって微笑んだ。その笑顔も可愛かった。

ていうかなんか今日の由美はいつもより……とても……可愛い…

…／／／／／

「さっさと行こうよ！　今日は仕事をさわ子先生に押しつけたんだから、ゆっくり遊べるよ♪」

「また押しつけたんかい！？」

さわ子先生……可哀想に……。

結局俺は由美に連れられて、再びみんなが居るプールへと向かうのであった。

「恭介、休憩しなくて大丈夫なのか？」

「ああ……なんとか大丈夫だ……」

音無が心配して聞いてみた。ていうか本音を言うと、休憩はしたかったが、由美に無理やり連れてこられたので仕方ない。

「さて、どんな遊びをしようか？」

由美はみんなに聞いてみた。ていうか考えてなかったのかよ……。

「はい！　葉月に考えがあります！」

葉月ちゃんは手を挙げて言った。葉月ちゃんは小学生だから、小学生らしい遊びを提案するんだろうなと思っていた。

「葉月は水中鬼がやりたいです♪」

水中鬼？プールでやる鬼ごっこということなのかな？

「水中鬼って？」

由美も気になって、葉月ちゃんに説明を求めた。すると葉月ちゃんはみんなに説明した。

「えっとですね……まず、じゃんけんで鬼を決めるんです！」

うんうん。

「そして鬼は、逃げる人を捕まえるんです！」

なるほど、やっぱりプールでやる鬼ごっこというわけだな。

「で、捕まえた人を水中に沈めて、溺れさせたら鬼の勝ちです♪」

鬼ごっこの『ごっこ』を付けないのはこれが理由か！！やることが鬼そのものではないか！！最近の小学生はこんな危険な遊びをしているの！？溺れさせるって……捕まったら死じゃねぇか！？冗談じゃない！！葉月ちゃんには悪いが、この遊びは却下しよう。

「あの葉月ちゃん、その遊びは危険だからやめよう」

「え？　なんでですか？」

そうだな……。首をかしげている葉月ちゃんにどう説明しよう？水中鬼ごっこの危険が分かっていない女の子に、分かりやすく説明しないといけないよな。

「葉月ちゃん、だったら実際にやってみる？」

いきなりそう提案したのは明久だった。実際にやってみるって…

…あの危険な遊びを誰がやるんだ？

「霧島さ～ん！！」

明久は大声で、誰かの名前を呼んだ。

すると、水中から髪の長い女の子がいきなり現れた。

「……なに？」

「水中から現れた！？　ていうか誰！？」

「雄二の彼女の霧島さん」

「……よろしく」

あの雄二にこんな綺麗な彼女がいるだと……！？あのクソ野郎！

！恋愛に興味ないという素振りを見せておきながら、ちゃっかり彼

女が居るなんて……！！後で須川に連絡しよう！！

「霧島さん、水中鬼をやってみてよ」

「……水中鬼？」

水中鬼の内容を知らない霧島さんに対し、明久は分かりやすく説

明をしようとする。

「簡単な遊びだよ。鬼（霧島さん）が逃げる人（雄二＝生贄）を捕まえて、水中に沈めて溺れさせて、人工呼吸（キス）をしたら勝ち（結婚）だよ。ね、簡単でしょ？」

「……／／／／／／」

霧島さんは黙って、水中に姿を消した。そして明久は遠くの方に居る雄二を呼んだ。

「雄二！　こっちに来てよ！！」

「なんだ明久？」

雄二（生贄）はなんの警戒もせずにやってきた。それが罠だとは知らずに……。

すると雄二の後ろから黒い影がやってきた。もう言うまでもない、霧島さんだ。雄二は背後からやってくる霧島さんに気付いていない。

そして、次の瞬間。

「ん？　なんか足に……？　のわぁぁぁ！！！！？　なんだ！！？　し、沈む！！！　誰かが俺の足を引っ張っているだと！！？　お、おい明久！！　恭介！！！！　どういうことだ！！？」

すまない雄二。葉月ちゃんにこの遊びの危険を教える為に、生贄となってくれ♪

「明久ぁぁぁぁーーー！！！！！　恭介ぇぇぇぇぇーーーーー！！！！　てめぇらころ……ぶがぁ！！　ぶげぇ！！」

「……雄二、大人しく溺れて。大丈夫、人工呼吸は私がやるから／

／／／／／」

さすが霧島さんだ。暴れる雄二を力技で抑えている。

雄二はそのまま沈んでいく。プールの水面にブクブクと泡が出ていたが、次第に出てくる泡の数が減っていく。

そしてとうとう……。

ブク……。

プールの水面は静かになった。俺と明久はとりあえず、プール（雄二が沈んだところ）に向かって合掌をした。

「葉月ちゃんこれで分かったかな？」

「……水中鬼ごっこはやめるです……」

うん。分かってくれればいいよ。雄二の犠牲で葉月ちゃんは新しい知識、水中鬼ごっこは危ないということ覚えてくれたみたいだ。

「さて、じゃあ他の遊びをするか」

「どんな遊びをするの？」

う～ん……何して遊ぼうか？

「はい！　私に提案があります！」

由美が手を上げて言った。なんか嫌な予感がするが、とりあえず意見を聞いてみよう。

「なんだよ……？」

「水中騎馬戦をしようよ♪」

水中騎馬戦か……。由美にしてはまともな意見を……いや、待てよ。一応ルールを聞いておこう。変なルールになっていたら大変だからな。

「なあ由美。一応聞くけど、水中騎馬戦のルールは……？」

「恭介……高校生のくせに水中騎馬戦を知らないの……？」

いやもちろん知っているよ。でもお前の考えた水中騎馬戦は危ないルールになっているかもしれないからな。

「仕方ないな、頭の悪い恭介の為に教えてあげるわ。四人でチームを組んで、三人が馬になる、そして大将がその馬に乗って戦うの」

ここまでは普通だな……。

「それで、相手の大将をボコボコニにして水中に落とし、溺れさせたあと、大将の頭に巻いてある鉢巻を取れば勝ち♪　どう？　簡単でしょう？」

「さっきの水中鬼と一緒じゃねーか！！！　なんでそんな恐ろしい遊びを思いつくの！！？」

「違うよ恭介。さっきの水中鬼は溺れさせればいいけど、この水中騎馬戦は溺れさせて鉢巻を取ったら……」

「溺れさせるという点では一緒じゃねぇか！！！！！　そんな遊び誰がやるか！！！」

まったく！由美はロクなことしか思いつかないな！水中騎馬戦をやって死人が出たらどうするつもりなんだ！？

そう思っていたけど、ふと由美を見てみると、なんだか泣きそうな表情になっていた。

「水中騎馬戦、やらないの……？　私が考えた遊び……やらないの……？」

「や、やらないよ……」

「……うぅぅ……酷いよ恭介……そんなに否定しなくてもいいじゃん……」

由美はそのまま地面に座ったが、顔が良く見えない。

え？もしかして……泣いているの……？

「ゆ、由美……？」

「……もういいもん……恭介なんて知らないもん……」

あれ？ちょっと……？由美さん……？も、もしかして……俺のせい……？俺のせいで泣いているの……？

「あ～あ、泣かしちゃった」

「変態のお兄ちゃん！　由美お姉ちゃんを泣かしちゃだめですよ！！」

「え！？　俺のせい！！？」

「あんたのせいに決まっているでしょ！！」

美波までそんなことを言うの！？俺の味方は存在しないのか！？

「……わ、分かったよ！　ただし、溺れさせるのは禁止だからな！鉢巻きを取るだけだからな！！」

「は～い♪」

こいつ……やっぱり嘘泣きだったんだな……。

こうして俺達は由美発案の水中騎馬戦をやることになったのだ。

由美はさっそく水中騎馬戦のルールをみんなに説明した。ルールはこんな感じだ。二チームで戦うことになり、チームから四人が出場。三人が協力して騎馬になり、残った一人が大将になる。プール内で騎馬戦を行い、相手の大将の頭に巻いてある鉢巻を取ったら勝ちである。勝負は三回戦、二回勝利したチームの優勝である。

「じゃあくじ引きでチームを分けるよ！」

いつの間に用意したのか知らないが、由美がくじ引きを取り出し、みんなはくじを引いてチームを決める。

チームについてはこうなった。

Aチーム

・千堂由美

・高町なのは

・仲村ゆり
・音無
・立華奏
・坂本雄二
・姫路瑞希
・野田

Bチーム
・天堂恭介
・吉井明久
・土屋康太（ムッツリーニ）
・フェイト・T・ハラウン
・日向
・島田美波
・木下秀吉
・霧島翔子

こういう感じになった。相手チームに由美となのはさんが居るのは不安だが、こちらにはフェイトさんが居るんだ！これなら勝てる！！！

「恭介君、頑張ろうね！」

「は、はい！　フェイトさん！」

幸せだ……！フェイトさんと一緒に居られるなんて……！今日は最高の日だぜイエーイ！！（≧≦▽≦≧）

そう思っていた時、ふと由美の方を見てみると、由美は頬を膨らまして、なんか不満そうな顔をしていた。

「む〜〜〜〜！！！！（、ε´）」

なんなんだあいつは……？なんであんなにご機嫌斜めなんだ……？

由美がご機嫌斜めについてはとりあえず置いておき、いよいよ、水中騎馬戦が始まろうとしていた。

周りで遊んでいた生徒達も野次馬として集まってきた。

そしてプール中央では、なぜか八神はやてさんがマイクを持って立っていたのである。

『さあさあ、お集まりの皆様！　お待たせしました！　これより第一回チキチキあいつの鉢巻きを奪い取れ！　間違って水着を取っちゃってポロリになっちゃうかも！？　ドキドキワクワクエロエロの水上騎馬戦を開始するでぇぇぇぇぇーーーーーー！！！！！！』

野次馬

『うおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーーーー！！！！！！　ドキドキワクワクエロエロ！！！！　そして……ポロリィィィィィィーーーーーーーー！！！！！』

「……なんかはやてさんテンション高いな……」

「元々、こういうお祭り騒ぎが好きなんだよね、はやては……」

「ていうかタイトルが長くない……？　そんで不吉な単語が出てきたんだけど……」

「そうか？　ポロリという魅力的な単語が出てきて俺のテンションが上がっているんだが」

「変態黙れ」

『それでは一回戦から始めるで！　各チームの選手はプールに入って準備をするんや！！』

まずは一回戦からだ。俺のチームからは誰を出そうか？

「じゃあまずは私から行くね」

立候補したのはフェイトさんだった。自分みずから先陣をきろうとはさすがフェイトさんだ！だとしたら……。

「フェイトさんには大将をお願いしてもいいですか？」

「いいよ♪」

「じゃあ大将はフェイトさん。騎馬は美波、霧島さん、そして俺で行こう」

「それは駄目よ！」

いきなり美波が反対しやがった！なんで反対するの！？

「おい美波！！　なんで反対なんだ！？」

「あんた騎馬をやるとか言いながら、大将のフェイトさんの体を触ろうとしてんじゃないの！！？」

「え？　そうか、フェイトさんの肌に触れるチャンス……！」

全員
『……』

「……噂どうりの変態……」

しまった……霧島さんにもいらぬ誤解を植え付けてしまった！！
そんな時、フェイトさんが悲しみの表情で俺に言った。

「恭介君……まさかそんな目的で……？」

「フェ、フェイトさん！！　そ、そんな訳ないじゃないですか！！
き、騎馬は美波と霧島さんと秀吉でお願い！！」

「ならば良し」

「……了解」

「任せるのじゃ！」

くそ……！フェイトさんの肌に触れる機会を逃すなんて……！！
フェイトさん、霧島さん、美波、秀吉はプールに入り、騎馬戦の準備をする。霧島さん、美波、秀吉が騎馬となり、その上にフェイトさんが乗った。

「大丈夫みんな？　重くない？」

「……大丈夫」

「ワシも大丈夫じゃぞ」

みんながそう言った時、はやてさんがニヤっと笑い、マイクを使って言った。

『重さについて気になるとは、さてはフェイトちゃん♪　太ったんか？』

「フェイトさんは美しき女神なんだ！　太っているわけないだろが！！　ちゃんとよく見ろタヌキ女！！」

『コラァァァーーー！！！！（怒）　誰や！？　今、タヌキ女って言った奴はどこのどいつや！！？　見つけだしてしばきまわしたる！！！』

「はやて落ち着いて……！」

『落ち着いていられるか！！！　どこのどいつや、出て来んかい！！！（怒）』

はやてさんの怒りが爆発している。タヌキと呼ばれるのが相当嫌いみたいだ。

ちょっと言い過ぎたみたいだ。俺が言ったということがバレないように、しばらく隠れておこう……。

『もうええ……。後で探そう……。え～ごほん……それでは一回戦の参加する選手を紹介しましょう。まずはＢチームから、霧島さん、島田さん、木下君、そして大将はフェイトちゃんや！！』

俺達のチームの紹介をすると、周りの野次馬共が騒ぎだした。

『うおおおおおおおおおぉぉぉぉぉーーーーーーーーー！！！！！！　フェイトさんだ！！！！！！』

『頑張れフェイトさん！！！！』

『霧島先輩も頑張ってください！！！』

『木下さん！！　頑張って！！！』

『島田は……どうでもいいや』

「今、どうでもいいって言った奴は誰！！？　出てきなさいよ！！！」

美波がプール内で騒いでいる。まったく……周りの戯言ごときであんなに騒ぐなんて情けないな……。

『フェイトさん！！！　こっち向いてぇぇぇぇーーーー！！！！』

『フェイトさぁぁぁぁーーーーーん！！！！』

『フェイトさんは俺の嫁ぇぇぇぇーーーー！！！！』

今の発言は聞き捨てならないぞ！

「オイコラァァーーー！！！！（怒）　フェイトさんは俺の嫁って言った奴は誰だ！！！！　勝手にフェイトさんを嫁にするんじゃねぇ！！　ぶっ殺すぞ！！！」

それからフェイトさんはいずれ俺の嫁になるんだ！勝手に取るんじゃねぇ！

『おーい……恭介君、少し落ち着こうや。じゃあ次はAチームの出場選手の紹介や。Aチームからは、騎馬がゆりさん、雄二君、音無君。大将はなのはちゃんや！』

相手チームの大将はなのはさんだ。これは苦戦するかもしれない。フェイトさんで大丈夫だろうか……？

「フェイトさん！　相手はなのはさんですが大丈夫ですか！？」

心配になった俺はフェイトさんに声をかける。するとフェイトさんは笑顔で言った。

「大丈夫♪　なのはの相手は慣れているから♪」

大丈夫ならいいが……。ていうか、慣れているって？

「フェイトちゃんと戦うなんて久しぶりだね♪」

なのはさんは笑顔でフェイトさんに言った。

「あ、フェイトちゃん、分かっているよね？」

「うん、分かっているよ♪」

分かっている？どういう意味だ？

『じゃあ準備が出来たということで、さっそく一回戦を始めるで！
よ～い……スタート！！』

はやてさんの掛け声と共に、水中騎馬戦、一回戦が始まった。
なのはさんとフェイトさんの戦いということで、もしかしてポロリという展開もあるかもしれない。なんか色々な意味で楽しみな勝負だ。

「じゃあ行くよフェイトちゃん！」

「うん！　行くよ！」

「「全力全開で！！！」」

ぜ、全力全開……？水中騎馬戦なんだから、遊び気分でやればいいのに。
そう思っていた俺であったが、なのはさんとフェイトさんがとある物を取りだしたことによって、彼女達が言った全力全開の意味が分かった。
なのはさんは愛用の杖（確か前に聞いたけど、レイジングハートって言う名前だったな）を取り出し、フェイトさんは斧のような杖（こっちはバルディッシュっていう名前だったな）を取りだした。
二人は取り出した杖を構えて、戦闘態勢になった。

「行くよ、フェイトちゃん」

「うん」

俺の脳内不幸センサーが反応している。嫌な予感１００％だ。

「あの……フェイトさん……なのはさん……？これは騎馬戦ですよ……？　けして魔法勝負じゃないですよ……」

「「分かっているよ？　水中騎馬戦でしょ？」」

二人は同時に言ったが、たぶん分かっていないと思う。分かっているのなら、武器を納めるはずだ。

そんな時、なのはさんが先に動いた。

「先手必勝！　ディバイン……」

なのはさんはレイジングハートをフェイトさんに向け、ディバインバスターを発射しようとしていた。遊びだというのに容赦がない。

「う、嘘！？」

「……まずい」

「に、逃げるのじゃ！」

自分達の危機を感じた美波、霧島さん、秀吉は水中に潜って逃げようとした。

それと同時に、

「バスターーーー！！！」

なのはさんのディバインバスターが発射した。

フェイトさん達が居た場所に命中し、水上で爆発する。

「ちょ、ちょっと！！　いくらなんでもやりすぎじゃねぇか！？

フェイトさん!?　みんな大丈夫か!?」

みんなの安否を確認する為、プール内を見てみると、美波、霧島さん、秀吉が居た。どうやら当たる直前で水中に潜って回避した為、無事だったみたいだ。

しかしフェイトさんの姿が見えない。いったいどこに?

「上だ!」

日向が上を指差した。そこには空中で飛んでいるフェイトさんの姿があった。ディバインバスターが当たる瞬間、上空に飛んだみたいだ。

「行くよ、バルディッシュ!」

フェイトさんのバルディッシュが鎌に変形した。フェイトさんはバルディッシュを構え、

「ハーケンセイバー!!」

鎌の刃が回転しながら、なのはさんの方に飛んでいく。

「アクセルシュート!!」

なのはさんは複数の魔砲弾で鎌の刃を撃ち落とした。するとフェイトさんは素早い動きでなのはさんに接近する。

「もらった!!」

フェイトさんはなのはさんの鉢巻きを取ろうとする。だがなのは

さんは空中に飛び、フェイトさんの攻撃を避ける。

「甘いよフェイトちゃん！」

なのはさんはレイジングハートを再びフェイトさんに向け、収束砲を撃とうとしていた。

「エクセリオンバスター！！」

「当たらないよ！」

フェイトさんは砲撃を回避し、素早い動きでなのはさんの背後に移動した。それにしてもフェイトさんはとても速いな。

「今度こそ！」

なのはさんの鉢巻きを取ろうと手を伸ばすフェイトさん。だが、なのはさんはその行動を予測していたのか、フェイトさんの手を振り払い、逆にフェイトさんの鉢巻きを取ろうとする。

「勝った！」

「まだだよなのは！」

フェイトさんは素早く後ろに下がり、鉢巻きを守った。

「行くよ、バルディッシュ！」

フェイトさんがそう言うと、バルディッシュは鎌から大剣に変形した。

フェイトさんは重そうな大剣を抱えて、なのはさんに突撃した。

「はあああああ！！！」

ガキン！

フェイトさんの大剣、バルディッシュを振り下ろしたが、なのはさんは魔法のシールドで身を守った。

「やるね、フェイトちゃん♪」

「なのはこそ、また腕が上がったね♪」

なんだか、二人とも楽しそうだ。どういう理由で楽しいのかはよく分からないが、まあフェイトさんとなのはさん楽しそうだからいいとしよう。

「はあああああああ！！」

「隙あり！」

「なんの！」

「そこだ！！」

「甘いよ！！」

「トライデントスマッシャー！！」

「スターライトブレイカー！！」

ガキン！

ドカーーン！！

ドオーーーーン！！！！！

空中で激しいバトルが繰り広げていた。なのはさんが攻めたらフェイトさんは避け、フェイトさんが攻めたらなのはさんは守るといった、一進一退の攻防戦が続いた。

こんな映画やアニメや漫画に出てきそうな魔法バトルを間近で見られるなんて思いもしなかったよ。なんかとてもすごいな！

……ていうかちょっと待てよ……。

「これ水中騎馬戦じゃねぇよ！！　もうルールが変わっているじゃねーか！！！　おい由美！　こんな展開になっていいのか！？」

「……仕方ないよ恭介。あんな状態になった二人を止めるなんて、セ○バーとギルガ○ッシュの戦いに丸裸で乱入するくらい無謀なことなんだよ」

「……例えがよく分からん……」

結局俺達ではどうすることもできず、二人の戦いが終わるまで待つことなった。

《３０分後》

「やったー♪　勝ったー♪」

「なのはママすごい！」

長い戦いがようやく終わり、勝利を収めたのは、なのはさんだった。なのはさんとヴィヴィオちゃんは一緒に喜んでいた。

「ごめんね恭介君……。なのはに勝てなかった……」

「謝らなくてもいいですよ！　フェイトさんはよく頑張ってくれましたよ！　それに戦っているフェイトさんは格好良かったですよ！」

「そう？　ありがとう♪」

笑っているフェイトさん……とてもいい！

負けたとはいえ、こんな素敵な笑顔の女性を責めるなんてことは絶対にしない！

ていうか責めようとした奴がいたら殺してやる。

『一回戦はなのはちゃんの勝利や！　さすがなのはちゃん♪　伊達に魔王と呼ば…』

「はやてちゃん……♪　魔王って……ダレノコト……？」

『い、一回戦はなのはちゃんの勝利や！　さすがなのはちゃん！　伊達にエースオブエースと呼ばれることはあるで！！』

さっきなのはさんから殺気を感じた……。あれは恐ろしい……。

こうして一回戦は負けたが、二回戦では絶対に勝つ！！

第二十七話　開幕！ドキドキワクワクエロエロの水中騎馬戦！！（後書き）

こなた
「こなたの後書きコーナー♪　どうもこなたで～す♪」
かがみ
「かがみでーす……ていうかこのコーナーいつまで続くの？」
こなた
「作者が飽きるまで」
かがみ
「飽きるまでやるの！？」
こなた
「うん♪」
かがみ
「まったく……ていうか今回もまた更新が遅くなったわね」
こなた
「それについては作者から一言」
天城
「はい……どうも、天城です。今回も遅くなってしまいました、すいません……。実は今回の話でプール編を終わらせようと思っていたんですが、かなり長く書いてしまい、気がついた時には１５００字オーバーしてしまいました。ていうか１５０００字書いてもまだ完成しておらず、まだまだ長くなりそうなんです。というわけで二話に分けることにしました。次回でプール編は完結です。本当に遅くなってすいませんｍ（＿＿）ｍ」
こなた
「というわけで更新を待っていた皆さん本当にごめんなさい。私に免じて許して♪」
かがみ
「おい！」

こなた
「冗談だよ……。それにしても今回は由美ちゃんの水着姿で登場だけど、恭介君メロメロだったねｗｗ」
かがみ
「確かにメロメロだったわね。ていうかもうフェイトさんより由美さんを嫁にした方がいいんじゃない？」
こなた
「かがみんが嫁という言葉を使っているｗｗ」
かがみ
「な、なによ！？　悪い！？」
こなた
「いや、別に♪　さて、それでは次回予告だ！」
かがみ
「今回は誰がやるの？」

こなた
「今回は私がやるよ♪　それでは次回予告だ♪　次回でプール編は完結だよ。水中騎馬戦、二回戦、三回戦では恭介君達は勝利出来るのか！？　そして思わぬトラブル発生！？　なんと由美ちゃんが……！！　なにが起こるのかは次回のお楽しみ♪　それでは次回また会いましょう！」

こなた
「で、次回はどうするの？」
かがみ
「あのさ……いい加減もうやめない……？　正直言って疲れ…」
天城
「じゃあ次回の後書きコーナーはゲストを呼んでみようか。というわけで次回もよろしく！」
こなた

「ＯＫ♪」

かがみ

「次回もやるの！？　もう嫌！！」

第二十八話　ラッキースケベな展開が多いのが主人公の特徴である（前書き）

ティアナ・ランスターの独り言

恭介がプールに行っているですって！？日向の野郎！！なんで私を誘わなかったの！！せっかく勝負水着を用意したのに！！！

第二十八話　ラッキースケベな展開が多いのが主人公の特徴である

《学生プール》

前回のあらすじ！
いろいろあって水中騎馬戦をやることになりました。一回戦ではなのはさんとフェイトさんが騎馬戦とまったく関係ない魔法合戦を行いました。結果はなのはさんの勝ち。俺達のチームはピンチです！以上！

『さて次の試合に移ろうか！　出場選手はプールに入って！』

今のところこちらが負けている。次の戦いで勝利しないと勝てないな。
さて……誰を出そう？出場選手について悩んでいた時だった。

『まずはＡチームからや！　騎馬は音無君、奏さん、野田君。そして大将は坂本雄二君や！！』

雄二は大将をやるみたいだな。だとしたらこちらからは……。

「雄二は大将をやるの？」

「ああ！　ていうか明久、恭介！　さっきはよくもやってくれたな！　おかげで死にかけたんだぞ！！」

死にかけた？ああ、さっきの水中鬼のことか。

「明久、恭介！　てめぇらのどちらか大将をやれ！　徹底的に叩き

潰してやる！！」

「そうか……でも、大将と騎馬は決まったんだ」

「なに！？」

「ていうか雄二、リタイヤした方がいいかもしれないぞ」

「はあ！？」

俺がリタイヤを勧める理由、それは俺が選んだメンバーの中に問題があったからだ。

対戦表
Ａチーム
大将：坂本雄二
騎馬：音無、奏、野田

Ｂチーム
大将：霧島翔子
騎馬：島田美波、フェイト、日向

対雄二戦の切り札、霧島翔子さんが大将である。

「リタイヤ！！」

雄二はプールから脱出し、逃走図ろうとしたが、由美が素早い動きで雄二を捕まえた。由美は笑顔で雄二の頭を掴んでいる。

「は、離してくれ学園長！！　見逃してくれ！！」

「坂本君、敵前逃亡は死罪だよ♪」

よく生徒に対し平気で死罪と言えるな……。

雄二が暴れている最中に霧島さんは一枚の紙を取り出した。あれは……婚姻届!?

「……雄二、もし私が勝ったら……この婚姻届にサインをしてもらう……／／／／／」

「学園長！　あいつをなんとかしてくれよ!!　結婚とか問題な発言を言っているんだぞ!!」

「結婚か……私も……いつか……」

「あれ!?　学園長!?　聞いてます!?」

ん?由美はなんかブツブツ言っているが何を言っているんだ?

『雄二君、いいからさっさと準備してよ』

「は、はやてさんまで!?　ち、ちくしょー……!　こうなったらやけくそだぁぁぁぁーー!!!」

やけくそになった雄二は、そのまま霧島さんに突撃した。

《１０秒後》

『勝負あり！　霧島ちゃんの勝利や！』

「早っ！」

あっけなく霧島さんが勝利してしまった。

試合の状況についてだが、霧島さんは突撃した雄二にアイアンクローをかまし、動けなくなった雄二の鉢巻きを取ったのだ。

霧島さんはとても嬉しそうな表情で婚姻届を出した。

「……雄二♪　サインを早く。　この婚姻届にサイン♪」

「い、嫌だ！　そ、そんな物にサインなんかするもんか！！」

「……雄二……約束を破るの……？」

霧島さんの喜びの表情は消え、怒りの形相で雄二を睨んでいた。

なんか怖い……。

「お、おい！　誰か助けて！！」

『さてと、ピンチな雄二君は放っておいて、三回戦目をやるで！！！』

『おおおおおおおぉぉぉぉぉぉーーーーー！！！！！』

はやてさんは雄二を無視して、試合を進めようとしていた。

「無視かよ！？」

「……雄二、式はどこにする？」

「や、やめろ！　離せ、離すんだ翔子！！　誰か！　助けてくれ！！　助けてぇぇぇぇーーーー！！！！！！！！」

雄二は霧島さんに連れて行かれた。おそらく婚姻届にサインして、無理やり結婚するんだろうな。

お二人とも、お幸せに♪

あ、でも１８歳ではないから結婚は無理か。

『さあ最後の戦いや！　この勝負に勝つのはどっちか！？　まずはＡチームからや！　騎馬はゆりさん、なのはちゃん、姫路さん、そして大将は……やっぱりこの人だ！！　最強無敵の学園長、千堂由美さんやぁぁぁぁぁーーーー！！！！！』

『由美さんだ！！』

『由美さん頑張って！！！』

『学園長！！　学園長！！！』

『由美様愛してるぅぅぅーーーー！！！』

『由美様！！　俺を罵って！　鞭で叩いて！　俺を踏んでくれぇぇぇーーー！！！！』

大将が由美か……よりにもよってあいつかよ……。

あいつに対抗できそうな奴といえば……。

「ここは恭介が大将をやるべきだね」

「うん、そうだな……って、おい！」

突然言い出した明久の意見に対し、俺は反論した。

「なんで俺！？　嫌だよ！　あいつと戦うなんて命がいくつあっても足らねぇよ！！」

「でも恭介と由美さんって相性がいいし……」

「絶対にやらない！！！」

戦わないと言い続ける俺に対し、明久は少し考え、突然フェイトさんを呼んだ。

「フェイトさん、ちょっと」

「ん？　なに？」

明久はフェイトさんの耳元でなにかを囁いている。

あの野郎、フェイトさんに何を言っているんだ……？

すると突然フェイトさんが俺に言った。

「恭介君！　私の為に勝って！　もし勝ったら、ご褒美をあげるから！」

なに……！？ご、ご褒美だと！！？

そんなことを言われたら……やらない訳にはいかないじゃないか！！

「わ、分かりましたよフェイトさん！　俺は、あなたの為に勝ちます！！」

勝つ！絶対に勝つ！！フェイトさんの為に絶対に勝ってやる！！

そして……ご褒美を貰うんだ！！

『これでいいの？　明久君？』

『はい、ありがとうございますフェイトさん♪』

『案外恭介君って扱いやすいよね』

『ところでアキ、ご褒美って？』

『え？　そこら辺で貰ったポケットティッシュ』

『あんたって最悪ね……』

後ろの方で変な会話が聞こえたような気がしたが、気のせいだろう。今は騎馬戦に集中しないと。

『さあ、Ｂチームからも選手が来たで！　Ｂチームは明久君、日向君、土屋君が騎馬で、大将が……天堂恭介や！！　みんな拍手！！』

プール内で明久、日向、ムッツリーニが騎馬になり、俺はその上に乗った。そして準備が整った時、野次馬共が言った。

『天堂恭介！？　あの噂の変態か！！』

『帰れ帰れ！！』

『こっち見ないでキモイ！！』

なに……？みんなの反応……いくらなんでも酷くない……？

あれ……？なんでだろう……？目から水が……？これは……涙……？

「恭介……しっかりして……」

「きっといつかいいことがあるさ……」

明久と日向に慰められている。惨め気分だ……。

「恭介、決着をつける時が来たね」

「なんの決着……？」

「そこは気にしなくていいよ♪　それより恭介、罰ゲームを決めようよ」

このバカ女はいきなり何を言っているんだ？罰ゲームって……なんか嫌な予感がするんだけど……。

「負けたら勝った人の言うことをなんでも聞くのよ♪」

冗談じゃない！こいつは絶対無理難題を言ってくるに決まっている！

「恭介、分かった？」

「嫌、分からない。ていうかそんな罰ゲームは嫌だ」

「OKね♪　じゃあ始めようか♪」

おい！俺はOKなんて言ってねぇぞ！そして勝手に始めようとするな！

『じゃあ二人とも準備がええから始めようか。それでは始め！！』

はやてさんの掛け声と同時に、水中騎馬戦、三回戦が開始された。

さっそく行動したのは由美だった。

「ゆりちゃん、前進よ！　恭介に突撃！！」

「了解！」

由美達は前進して、こちらに突撃してくる。おそらく俺に攻撃を仕掛けて、その隙に鉢巻きを取るつもりなんだろう。

「恭介、どうする！？」

日向が俺の指示を待っている。

とりあえず、ここは相手の攻撃を防御して、様子を見よう。なにか突破口が見つかるかもしれない。

「ここは防御だ！　相手の出方を見る！」

日向達にそう指示し、俺達は防御の態勢を整えた。さあ！来るなら来い！どんな攻撃でも防いでやる！

だが由美はニヤリと笑い、突然とある方角に指差して言った。

「あ！　フェイトさんの水着が謎の液体にかかって溶けている！　フェイトさんは丸裸だよ！」

男達（バカ共）
『なんだって！？』

男達は全員、フェイトさんを見た。もちろん俺も見たよ。だってフェイトさんの裸を見てみたいもん！！
だが、フェイトさんは丸裸ではなかったし、水着は溶けていなかった。
なんだよ……嘘かよ……。しかし、なんで由美は嘘を……？
そう思った時、突然由美が動いた。

「恭介隙あり！　必殺目潰し！！」

由美の二本の指、人差し指と中指が俺の二つの目に攻撃した。

「ぎゃあああああああぁぁぁぁーーーー！！！！！！　め、目がぁぁぁぁーーーー！！！！」

あまりの痛さに、目が開けられない！これでは応戦できないぞ！

「由美！！　目潰しなんて卑怯だぞ！！」

くそ！あのバカ女！勝つためにこんなことを平気でやるのかよ！

「恭介大丈夫！？」

「くそ！　一時撤退だ！」

負傷した俺に代わり、日向が指示をとることにしたみたいだ。
由美から離れようと試みるが、由美達はしつこく追ってくる。

「恭介！　待ちなさい！！」

「駄目だ追いつかれるよ！」

勝利の執念なのか、由美達の動きはとても速く、このままでは追いつかれるのは時間の問題だ。
ここでなんとかしないと、負けたら罰ゲームだ。由美からどんな命令を言われるか……想像するだけで恐ろしい！！

「恭介、どうする！？」

日向が俺に指示を求めている。
迫る由美に対し、俺は未だに目が開けられない。この状況ではこちらがかなり不利だ。だが諦める訳にはいかない！考えろ……！この状況を打開する策が必ずあるはずだ！！

考えろ！考えろ！考えろ！！

……そうだ！

これだ！これしか方法がない！

「日向、明久、ムッツリーニ！　この状況を打開する秘策を思いついたぞ！！」

「「「なに！？」」」

三人とも、驚きの声で言った。

「恭介、それはいったい！？」

「心の目で鉢巻を取るんだ！！」

「「「え～～～～～……」」」

なにその反応！？もうこれしかないじゃん！！俺まだ目が開けられないんだぞ！こんな状況で逆転するには心の目で由美の鉢巻を取るしかないじゃん！！大丈夫だ！主人公補正でなんとかなる……はずだ……。

「と、とにかく！　俺は心の目で由美の鉢巻きを取るから、お前らちゃんとサポートをしろよ！！」

「そんな無茶な！！」

「恭介！　来るぞ！！」

「恭介！！　覚悟！！」

目が見えなくても気配と声で分かる。あの由美が近づいてくる。

ここで逆転しなければ、俺は負ける。そうなってたまるか！絶対

に勝つ！！
俺の集中力と勘と無限の可能性に全て賭けるぜ！！
どこだ……どこに鉢巻が……！！
心の目で鉢巻の位置を特定しなければ……！！

……見えた！！

「そこだぁぁぁぁぁぁーーーーー！！！！」
俺は由美の鉢巻きがあるかもしれない位置を掴んだ。
未だに目が見えないから鉢巻を掴んだかどうかわからないが、おそらくこれが鉢巻だ！（たぶん……）
あとは掴んだ物を握って取れば……。

むにゅ

あり？

なんだ？鉢巻きにしてはとても柔らかいような……？

むにゅ　むにゅ

やっぱり柔らかい。これはいったい……？

「恭介！！　なにを掴んでいるのか分かっているの！？」

はい？

「あーあ……やっちゃった……」

え？なになに？

『あかん……死亡フラグや……』

はやてさんまで何を言っているんだ？

そう思っていた時、目の痛みがようやく引いてきた。俺は目をゴシゴシ擦り、目を開けた。うん、ちゃんと見える。

そして俺が掴んでいる物を確認した。

するととんでもない事実を知ってしまった。

俺が掴んでいたのは……。

由美の胸だった……！！

どうりで柔らかったわけだ！

「きょ、きょきょきょきょきょきょきょ、きょ～う～す～け～！！！！」

由美は顔が真っ赤で、口をパクパクしながら、ワナワナと震えていた……！！

ま、マズイ……！！お、お怒りだ……！！！

「ゆ、由美……ち、違うんだ！！　これはわざとじゃないんだ！！　鉢巻があると思っていた場所にたまたま由美の胸が……！！　て、ていうかお前の胸なんて触ろうと思っていなかったぞ！！　お、お前の胸なんてそんなに価値がない……」

「価値がない……ですって……！！？」

あ、しまった……！俺は何て事を言ってしまったんだ……！！　由美の顔が怒りの形相に変わっていく。ダメだ……もう許してくれそうにない……。

「恭介の……変態バカ野郎ぉぉぉぉぉぉーーーーーーーーー！！！！！」

「ぎゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！！！！」

由美におもいっきりぶん殴られた俺は、吹っ飛ばされてしまった。そして壁に激突しズルズルと倒れた。

「ふん！！」

由美は倒れている俺の鉢巻きを取った。

『しょ、勝負あり！！　勝者は由美さんや！　二対一でＡチームの勝ちやで！！』

『おおおおおぉぉぉぉぉーーーー！！！！！　さすが由美さんだ！！！』

こうして突如始まった水中騎馬戦はAチームの勝利で幕を閉じたのであった。

《夕方》

「ハァ……」

ゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシ

なに？ゴシゴシうるさい？仕方ないじゃないか……。俺は今、プール掃除をしているんだぜ……。

なぜプール掃除をしているかというと、水中騎馬戦三回戦で由美の胸を鷲掴みした為、罰としてプール掃除を命じられたのだ。

広いプールをブラシでゴシゴシ擦っているんだが、由美はこれを一日でやれというのだ。こんな広いプールなのに一日でできるかよ……。

まったく……あのバカ女め……。

「恭介！　ちゃんと仕事しているの！？　このままじゃ、夜になっちゃうよ！！」

由美が俺の傍で怒鳴っている。逃げないよう俺を監視しているようだが、さっきからうるさいことしかい言わない。

「あのさ……こんな広いプールを一日で綺麗できるわけ……」

「うっさい！！　いいから手を動かす！！」

なっ！このアホ女！！水着姿の時は可愛いと思っていたのに……！！やっぱり無茶苦茶な女だ！！

だいたい、胸を触った事件は元々由美が目潰しなんていう卑怯なことをしたからあんなことになったんじゃないか！だというのにこの女はグチグチ文句を言いやがって……！！

「ねえちょっと！？　聞いてる！？」

「はいはい聞こえていますよ！」

俺が適当な返事をすると、由美の機嫌が更に悪くなった。

「なによその態度！　恭介のくせに生意気だよ！！」

「生意気結構！」

「もういい！　変態にプール掃除なんてさせるんじゃなかったわ！！」

「なっ！　俺は変態じゃないって何回も言っているだろう！！」

「うっさい変態！　このバカ！　アホ！　変態クソ犬！　変態バカ！！」

「何度も何度も変態言うなこのバカ女！！」

「バカ女ってなによ！！？」

「お前のことだよ！！」

「うるさいうるさいうるさい！！　このアホバカ変態クソ恭介！！」

しばらく俺達の口喧嘩は続いた。俺がバカ女と言えば、由美は変態クソ恭介と言う。俺がアホ女と言えば、変態クソ犬と言う。どんなことを言っても変態という言葉は変わらなかった。

確かに今回は由美の胸を触った俺が悪かった。しかし何度謝っても許してくれないどころか、何度も変態呼ばわりしている由美に腹を立ててしまったんだ。

「バカ変態恭介！！　どうせフェイトさんの水着姿を見てエッチな妄想をしていたんでしょ！？　言ってみなさいよ！　私はフェイトさんの水着姿を見て興奮してエッチな想像をしていましたって言ってみなさいよ！　この変態クソ犬恭介め！！」

「なっ……！　お前……！！　そんな妄想なんてしてねぇよ！！」

そう言ってやると、由美は不機嫌な顔でそっぽを向いてしまった。

「どうだか！　どうせ私の水着姿を見て同じように……エ、エッチなことを考えていたんでしょ！　言いなさいよ！　言ってみなさいよこの変態クソ恭介！！」

カチンときた！このバカ女！イライラするようなことを言って……！！

「お前を見てエッチな妄想なんてしてねぇよ！！」

「嘘よ！！」

「嘘じゃねぇよ！！　俺はただお前の水着姿が可愛いと思っただけだよ！！！」

「そんなことを言って……え！？　か、可愛い……！？」

あ……俺はまた余計なことを言ってしまった……。

本人の前で、しかもこの暴力バカ女の前で水着姿が可愛いかったと言ってしまった……。

最悪だ……。なんか自分で言っておきながら恥ずかしい……！！

由美はどんな反応なんだろうと思い、チラッと由美を見てみると、由美の顔は真っ赤だった。

「……／／／／／／」

「ゆ、由美……？」

「ふえ！？　あ……えっと……」

由美も恥ずかしいのか、後ろに振り向き照れながら言った。

「きょ、恭介……か、帰ろうか……／／／／／」

「え！？　でもプール掃除がまだ……」

「も、もういい！！　いいから帰ろう！！」

由美の奴、いったいどうしたんだろう？いきなり帰ろうだなんて言い出して……。

まあとりあえず、更衣室に行って着替えるとしよう。

更衣室で水着から普段着に着替えた俺は、更衣室前で待っていた由美と合流した。

「……じゃあ……行こうか……」

「……うん……」

学生寮までは由美と一緒に帰ることになったが、帰りの際、俺と由美の間にまったく会話がない。なんか気まずい空気になってきたから話をしようと思ったが……なにも思いつかない……。

「ねえ……？　恭介……？」

「え……？　なに……？」

唐突に由美が話しかけてきた。その時の由美の顔は少し赤面だった。

「私の水着は……その……可愛かったの……？」

「……あ、ああ……か、可愛かったぞ……」

そう言ってやると、由美は可愛い笑顔で、少し照れながら言った。

「そう、よかった♪　昨日買ってきたばかりの水着だったから、

おかしかったらどうしようと思っていたの。でも恭介が可愛いって言ってくれたから安心したわ♪」

「そうか」

「あ、そうだ！」

由美はなにかを思い出したのか、ポンと手を叩いて、俺に言った。

「罰ゲームを決めないとね」

「ああ、そうだ……って罰ゲーム！？　さっきのプール掃除が罰ゲームじゃなかったのか！？」

「あ、あれは私の胸を触った罰だよ！　まだ水中騎馬戦の罰ゲームが残っているよ！」

まじかよ……。確か水中騎馬戦で勝った方の言うことを聞くという話だったけ？

いったいこいつはどんな命令をするんだ？

頼むからまともな命令にしてくれよ……。

「えっとね……もうすぐテストがあってね。そのテストが終わったら夏休みになるんだ。で、その夏休みの時……わ、私と遊ぼ！」

はい……？

意外だった。てっきり『今後は恭介のおごりだからね』とか『新しいお仕置きの実験台になって』とか『恭介、グランドを百万周してきなさい♪』とか言ってくるんじゃないかと思っていたが、由美

は夏休みに一緒に遊ぼと言ってきたのだ。
もしかしてなにか裏があるじゃないかと思ったが、由美はもじもじしながら俺の様子を伺っている。なにかを企んでいるような様子がない。

「遊ぶってどういうこと？　まさか俺を含めた無限学園の生徒を全員集めて『今日はみなさんに殺し合いをしてもらいます』とか言うんじゃあ……」

「どこのバトルロワイヤルよ……。夏休みの定番である海や祭りとか行って遊ぶの！　もう！　恭介は鈍感なんだから！」

鈍感なのか俺？なんかよく朴念仁とか言われるけど、あまり自覚がない。

「とにかく！　勝者である私の命令で、恭介は夏休みのときに私と遊ぶ！　これは決定事項なんだからね！　分かった！？」

「あ、ああ……分かったよ……。夏休みに遊べばいいんだな」

由美の勢いに負けてしまい、つい承諾してしまった。まあ夏休みに一緒に遊ぶくらいならいいだろう。

「よし決定！　じゃあ約束の指きりげんまをしよう！」

子供かお前は……と言いたいが、どうせ由美は言ってもやめないから、仕方なしに指きりげんまをやることにした。
俺と由美、お互いの小指を絡まし、指きりげんまの準備ができた。
そして由美は小指を絡ました手を上下に揺らしながら、歌を歌った。

「指きりげんま♪　嘘ついたら……全ての爪を剥いで、全身の骨を折って、目を潰し、死んだ方がましだったと思うくらいの激痛を与え、○□△☆※●をして、針千本飲ま～す♪　指切った♪」

大変だ……。俺、約束を破ったら殺されてしまう……。

と、とにかく夏休みのときに由美と遊べばいいんだ！うん！大丈夫！約束を破らないように覚えておけば大丈夫だ！！命がかかっているんだからちゃんと覚えないとな！！

「じゃあ恭介、夏休み楽しみにしているからね♪　今日は楽しかったよ♪　また明日ね♪」

「ああ、じゃあな」

由美は俺に手を振りながら走り去った。

それにしても夏休みに由美と一緒に海に行ったり、祭りに行ったり、花火を見に行く約束をしちゃったな。これは楽しい夏休みに……。

あれ？待てよ……？

女の子と一緒に海に行ったり、祭りに行ったり、花火見たりって……。

これって……。

デートじゃないか！？

「い、いや……まさかな……」

あの由美が俺をデートに誘うなんてありえないよな……。

「なんか今日は色々な意味で疲れたな……。早く寮の部屋に戻って休もう……体中が痛いし……」

疲れた体を無理やり動かし、俺は寮に戻った。

そして部屋のベッドへダイブしてそのまま眠った。

《一方その頃の由美は……》

「よっしゃーー！！！　これで夏休みは恭介を一人占めできる！！

愛淫に邪魔されることなく夏休みをエンジョイできるぞ！！！

楽しみだな♪　海に行って、スイカ割りもして、祭りに行って、花火を一緒に見て、それから……それから……エヘヘヘヘ♪　早く夏休みにならないかな♪　待ち遠しいな♪　もういっそのこと明日から夏休みにしちゃおうかな♪」

由美は学園長室できゃあきゃあ騒ぎながら喜んでいた。

《翌日・二年Z組教室》

「なんだとぉぉぉぉぉぉーーーーーーー！！！！！」

朝の教室に俺の大声が響き渡った。

なぜこんな大声で叫んでいるかというと、昨日のプールでムッツリーニが撮った写真を今日販売することになった。俺は教室に来てすぐさまムッツリーニのところに向かったのだ。目的はもちろんフェイトさんの水着写真。どんな高値だろうと買ってやると思っていたのだが、なんともう売り切れていたのだ。あまりの衝撃に俺は大声で叫んだということである。

「誰だ！　俺のフェイトさんの水着写真を買った愚か者は！！　見つけだしてフルボコにしてやるから名前を教えろムッツリーニ！！」

「……お客のプライバシーに関わる為、教えられない」

「ちくしょーーーー！！！！！」

これが今日の唯一の楽しみだったのに！！なんてこった！！

「……次からは早めに来ることをおススメする」

「……ああ、分かったよ……。で、他の写真は？」

ムッツリーニは鞄から一枚の写真を取り出した。ピンク色の水着を着た、茶髪の女の子の写真で、笑顔が可愛く写っている。……って由美の写真じゃないか！？

「……一枚一万円」

「一万!?　高くね!?」

「……苦労して撮った。買わないのか？」

「え……あ……その……か、買う……」

「……まいど」

一万円をムッツリーニに渡し、由美の写真を手に入れた。

由美はわがままで無茶苦茶で無理難題を押しかけている迷惑な女だ。

だけど……。

「やっぱり可愛いなあいつ……」

笑顔が可愛い由美の写真を見ていた俺はそんな感想を呟いたのであった。

第二十八話　ラッキースケベな展開が多いのが主人公の特徴である（後書き）

セイバー
「セイバーの後書きコーナー♪　ヤッホー！　セイバーだよ♪」
かがみ
「おい、ちょ……」
セイバー
「プール編はこれで完結！　次回も楽しみだね♪」
かがみ
「ちょっと待てぇぇぇぇぇーーーー！！！！！　お前誰だよ！！！？」
セイバー
「セイバーだよ♪」
かがみ
「まさかＦａｔｅ／Ｚｅｒｏのセイバー！！？」
セイバー
「正解だよ♪」
かがみ
「嘘つけ！！　セイバーはこんな感じのキャラじゃないはずよ！！！」
セイバー
「なんなの！　私の邪魔しないでよ！！　プンプン！！」
かがみ
「おかしい！　おかしいから！！　読者から『セイバーってこんなキャラでしたっけ？』っていう苦情が来るだろうが！！！」
セイバー
「……おかしいですね？　作者に聞いたところゲストはこのキャラ設定で登場するのがルールって聞いたんですが……」
かがみ

「騙されている！！　作者に騙されているってそれは！！　おい！　作者出てこい！！」
天城
「なんだよかがみん……今は後書きコーナーで……」
かがみ
「とりあえず言わせろ！　人を騙すな！！　ていうかこなたは！？　なんでセイバーがここに居るの！？」
天城
「こなたは急用で来れなくなった。そしてセイバーはゲストだ」
セイバー
「よろしくお願いします。あ、それとアニメＦａｔｅ／Ｚｅｒｏ好評放送中です」
かがみ
「そう言えば前回ゲストを呼ぶって話があったわね……」
天城
「そうそう。そんで今回はセイバーをゲストとして呼びました！」
セイバー
「で、作者よ私はなにをすればいいのでしょうか？」
天城
「あ、そうそう！　今回はこんなコーナーを考えてみたんで一緒にやりましょう！」
かがみ・セイバー
「「はい？」」
天城
「名付けて！　アニメキャラのお悩み相談コーナー！！　はい拍手！！」
かがみ
「……で、なにするの？」
天城
「拍手してくれよ！！　まあいいや、これは由美や恭介の代わりに

俺達がいろんな人たちの悩みを解決するってコーナーだ！！」
セイバー
「面白そうですね。やりましょう」
かがみ
「やるんかい……」
天城
「では最初の相談を見てみましょう！　セイバーお願いします！」
セイバー
「分かりました。では最初の相談は……」

名前：ギルガメッシュ
相談：セイバーよ！！我が嫁となるがいい！！

セイバー
「では次回予告です」
天城・かがみ
「「相談は！！？」」
セイバー
「くだらない悩みは放っておきましょう」
かがみ
「くだらない悩み！！？」
天城
「ちょっと待て！　勝手に終わろうとするな！！」

セイバー
「次回予告です。次回は恭介さんとＳＯＳ団が無限学園に住んでいる不思議な生物たちを調べるらしいです。なんでもとても大きい犬に出会ったり、変な契約をしようとする小動物に出会ったりするらしいです。それと次回オリキャラが登場するみたいです。なんだか楽しみな展開になりそうですね。では次回をお楽しみに！！」

ギルガメッシュ
「貴様、雑種の分際で我が相談を無視したらしいな！！！」
天城
「ち、違います！！　俺ではありません！！　おいセイバー！　かがみん！　なんとか言って……っていない！！？」
ギルガメッシュ
「貴様の行い……万死に値する！！！」
天城
「ちょ、ま……ぎゃあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5824q/

学園戦記　無限学園！！

2011年10月31日17時16分発行